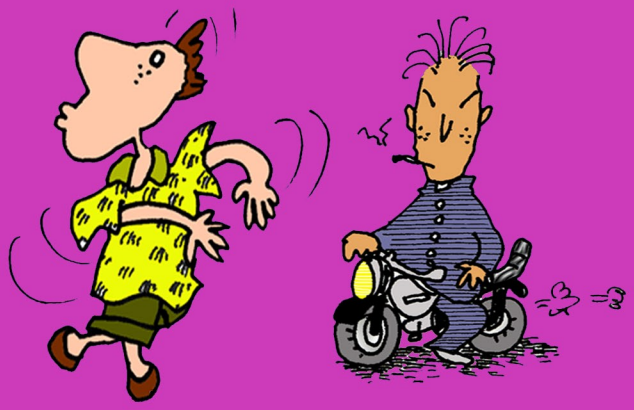
連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 13 No.4

第52号

March 2023

対人援助学会

No.52　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-017
付け加えることができる価値は何か？	千葉　晃央	018-022
臨床社会学の方法（40）	中村　正	023-033
団遊の脱線的経営言論	団　遊	034-036
解放の心理学へ（1）	藤　信子	037-039
カウンセリングのお作法（34）	中島　弘美	040-042
晩年D・A・N通信	団　士郎	043-056
幼稚園の現場から（52）	鶴谷　主一	057-060
福祉系対人援助職養成の現場から（52）	西川　友理	061-066
ああ、相談業務（12）	河岸　由里子	067-071
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	072-074
ドラマセラピーの実践・研究・手法（11）	尾上　明代	075-079
きもちは言葉をさがしている（49）	水野　スウ	080-084
路上生活者の個人史（7）	竹中　尚文	085-086
男は痛い！（46）	國友　万裕	087-093
役場の対人援助論（44）	岡崎　正明	094-098
臨床のきれはし（20）	浅田　英輔	099-100
発達検査と対人援助学（11）	大谷　多加志	101-104
対人援助点描（30）	小林　茂	105-107
講演会＆ライブな日々（34）	古川　秀明	108-110
立場が変わると何かが見える（4）	坂口　伊都	111-115
周辺からの記憶　－東日本大震災家族応援プロジェクト－（38）	村本　邦子	116-145
精神科医の思うこと（28）	松村　奈奈子	146-148
馬渡の眼	馬渡　徳子	149
東成区の昭和　やぶにらみ日記	柳　たかを	150-157
心理コーディネーターになるために	山下　桂永子	158-160
そうだ、猫に聞いてみよう（29）	小池　英梨子	161-168
先人の知恵から（39）	河岸　由里子	169-173
ああ結婚（25）	黒田　長宏	174-175
PBLの風と土（24）	山口　洋典	176-181
接骨院に心理学を入れてみた（23）	寺田　弘志	182-186
現代社会を『関係性』という観点から考える（23）	三浦　恵子	187-192

保育と社会福祉を漫画で学ぶ（19）	迫　共	193-196
「余地」―相談業務を楽しむ方法―（22）	杉江　太朗	197-200
統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡　園子	201-203
こころ日記『ぼちぼち』partⅢ	脇野　千恵	204-205
フリースクールでの SW 実践を考える（6）	高名　祐美	206-208
原田牧場 Note（12）	原田　希	209-211
かけだ詩（12）最終回	川畑　隆	212-216
応援、母ちゃん（12）	玉村　文	217-220
HITOKOMART（12）	篠原ユキオ	221-224
フランスのソーシャルワーク（7）	安發　明子	225-232
川下の風景（9）	米津　達也	239-240
一語一絵（9）	畑中　美穂	241-243
福祉教育への挑戦（9）	高井　裕二	244-245
対人援助をリブートするこの一冊（13）	神山　努　他	246-249
対人援助をリブートするこの一冊（14）	渡辺　修宏　他	250-253
中国のセクシャルマイノリティ支援	劉 強	254-256
島根の中山間地から Work as Life（8）	野中　浩一	257-265
かぞくのはなし（5）	きむらあきこ	266-268
ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（4）	高木　久美子	269-273
先生のための 16 のことば（3）	原田　孝	274
こかげのにちじょう（3）	鳴海　明敏	275-276
私はここにいる　-現象学としての書道-	櫻井　育子	277-278
社会教育の周縁（2）	山本　竜司	279-280
コソダテノシンリ（2）	中谷　陽輔	281-285
新連載　教室の窓から	來須　真紀	286-288
新連載　社会科の授業を対人援助学の視点から	内田　一樹	289-291
特別連載 家族面接の実践から里親家族支援を考える その②	大谷多加志　他	292-302
対人援助学マガジントークライブ告知	編集部	303
編集後記	編集長＆編集員	304-305

ハチドリの器 35

見野 大介

Mino Daisuke

左上：蒼天釉酒器
右上：花菱皿とゴブレット
右上：鳥ノ子釉勾玉鉢

第５２号

執筆者@短信

内田　一樹　新連載

右も左も分からぬまま、現勤務校である自由の森学園で働くために埼玉県に来て４年の月日が流れました。初めての担任クラスが今度の４月で高校3年生になります。

１巡目も終わる節目の年ですが、新しくこのマガジンで執筆を始めました。この間社会科の授業実践者として対人援助学と社会科教育をつなげていきたいという野心のもと様々な実践を試みてきました。社会科として振り返る場はたくさんありましたが、対人援助学という視点から振り返る場はありませんでした。このマガジンを通して、まずはこの野心をもっときちんとした言葉で表現できるようになりたいなと思っています。

社会科の授業を
対人援助学の視点から
P289～

來須（らいす）真紀　新連載

新連載です。できるかな？できるのか？私？できるでしょう？やってみようかな？よし、やってみよう。と、飛び込ませていただきました。なるべく長く続ければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

私は広島市で小学校の教員をしています。今は算数の専科をしていて3～6年の算数を担当して研修部の部長もさせてもらっています。担当しているといっても、実は私、算数や授業研究の分野がとても苦手なんです。高校の数学では、赤点の連続…。大学の統計学では不可に次ぐ不可という苦手ぶりです。

しかし、私の強みはこの苦手ということでして、苦手だからこそ、子どもたちのつまずきそうなところも感覚的になんとなく分かるし分からないときの気持ちも想像しやすく思います。子どもたちにもこのことはカミングアウトしており、「先生の計算ほどあてにならないものはないからねえ。」なんて言いながら授業しております。(数学研究室出身の若い同僚に「僕の弱点は、数学が得意すぎて数学が苦手な人の気持ちが分からないことなんですようねぇ。」なんて言われて、本気で落ち込んだりするのですが)「弱みは最大の武器になる」ここ数年で見つかった私の中の一つの成果です。

本音は生徒指導や教育相談をずっとやりたくて自分なりに勉強をしてきました。校内人事は、そんなことはお構いなし。算数担当や教科研究、近年に至っては研究主任の担当ばかり任命されてきました。ここ最近は、若い人を担任にするから若い人育成とサポートに回ってほしいと言われ、(単学級、学年各１クラスの学校の宿命ですかね…)担任ももたせてもらえず毎年4月の校内人事はがっかりでした。

今となっては、ありがたい修行をさせてもらえたのだと感謝しています。長―い目で私を育ててくださった皆様。本当にありがとうございます。おかげで私は、ここに辿り着くことができました。そして、みなさん、どうぞよろしくお願いいたします。

教室の窓から
P286

山本　竜司　連載二回目

１月、全国的に大雪に襲われた時期に、山陰地方にフィールドワーク（調査研究）に行ってきました。大雪の合間を縫って、奇跡的に現地入り・帰還できました。交通機関がストップした一面の雪景色の中、土地勘のない地域をひとり徒歩移動。人見知り（自称）の私ですが、２日間で7人の社会教育主事にインタビュー調査を行いました。新たな知は、対話から生まれるものだとあらためて実感した旅でした。心を動かすのは、かならずしも客観的な知ではなくて、主観的な知なのかもしれません。

社会教育の周縁
P279

中谷　陽輔　連載二回目

連載 2 回目、無事に原稿を書き終えました。自分が普段考えていることを、事実ベースで出来るだけわかりやすく書き起こそうと思っているのですが、考えているだけのことと実際に行動する（この場合は書いて文字化することですが）ことは、やはり違うなぁと感じています。

「知行合一」じゃないですが、そのギャップを埋められることを、自分の 2023 年のテーマにしていこうと思います。

なお、連載初回の対人援助学マガジン第 51 号では、拙稿（pp316-318）に続いて、「特別連載 家族面接の実践から里親家族支援を考える その 1 ジェノグラムフリートーク」（pp319-325）のコメンテーターとして、ダブル出演させていただきました。貴重な機会をいただいたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

ちなみに前回の拙稿末に、プロフィールとして何の気なしにこれまでゆるゆる書いていた Blog のリンクを載せたら、月間で数回あるかどうかだった PV（Page View）が、数百回ほどに爆増していました。間違いなく、対人援助学マガジンの影響力かと存じます。

そんな影響力と器の大きな対人援助学マガジンに寄稿させていただけることに感謝しつつ、そしてつい先週、息子が初めてのインフルエンザになって家庭内パンデミックに戦々恐々としていた自身の器の小さ

さに負けず（今日、1 週間ぶりに保育園に行きました・・！）、引き続き励んでいきたいと思います。よろしくお願いいたします。

コソダテノシンリ
P２８１

櫻井　育子

最近、馬に乗った。馬は優しい、とよく言われるが本当にそうだった。おとなしい。あんなに大きいので、蹴られたら大怪我どころで済まなそうなのだが、馬と人の関わりの歴史は本当に長く、人と共に生きることがDNAに組み込まれているのだという。一方で人間はいまだに傷付け合い、戦争を繰り返している。

今回訪れた南相馬市の「野馬追」の行事は、まさに戦争に勝つための軍事練習から始まったお祭りである。人間の都合でたくさんの馬がなくなったことも彼らの歴史の中には刻まれているにもかかわらず、彼らはとても穏やかである。同時にその穏やかさはある種の諦めなのかもしれない、とも感じた。わたしたちはなにかを諦め、なにかを手放す。でも諦めないもの、手放さなかったものだけが、自分の形を作っているのかもしれないな、と馬の背中で気がついたことがあった。

わたしはここにいる
P277～

鳴海　明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設（現在は、児童心理治療施設）の園長を引き受けてから、13年目に入っています。

学園の各部屋には、それぞれ愛称がつけられています。職員室は「ほしぞら」、事務室は「あさひ」、医務室は「はるかぜ」、相談室は「こなゆき」という具合です。二階の子どもたちの居室には、オリオン、シリウス、タイタンなどの名前がついています。

この施設の開設を決意し建物を建て、私を園長に呼んでくれた当時の理事長の、夢や希望が込められているような気がしています。

園長室には「こかげ」という名前がつけられています。ということで、サブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。紹介する子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

毎月1回10人くらいの仲間と、土曜日の午後3時間くらいフォーカシングを練習する集まりを続けている。2月の集まりが190回目だった。

以前は、誰かが希望してフォーカサーになり、そのフォーカサーが指名した相手と15分程度のセッションをし、それをギャラリーが観察して、終わったら皆でシェアリングをするという流れだったが、最近は、3～4人のグループに分かれて、それぞれインタラクティブフォーカシングをすることが多くなった。

オーソドックスなフォーカサーとしてフォーカシングを体験するよりも、インタラクティブフォーカシングの話し手の方が、皆さん取り組みやすいようだ。（了）

ここ数年朝はパン食なのだが、最近「豆苗」に目覚め、毎食サラダを食べている。

児童心理治療施設の園長室から
～こかげのにちじょう～
P275～

高木　久美子

東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」でのヨミトリ君体験プログラムが順調に拡大中です。ご参加者の熱意で盛り上がっていてとても嬉しいです。意思伝達装置ヨミトリ君だけでなく、ご家族や支援者の中で現在 5 名の方が書字介助ヨミトリ（指談）にも挑戦していて成果をあげています。当事者の方々の喜びの笑顔が何よりの励みです！

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！
P269～

きむら　あきこ

昨年の10月に放送大学に入学しました。生涯学習のつもりです。11 月には中間テストのような存在の課題があり、今年の 1 月には、単位認定試験がありました。前期目標としていた 15 単位、無事合格することができました。

放送大学は、インターネットでも視聴することができ、様々な学習科目を学ぶことができます。社会人経験があるからこそ、理解がスムーズになる科目も多々あります。知識が広がることをとても楽しく感じています。今年はもう一つ、挑戦したいことがあります。挑戦できたら、また近況報告したいです。

かぞくのはなし
P266～

原田　希

3 月末まで 1 年間、前年生産量から 5%ダウンさせる生産抑制がんばりました。抑制をがんばるって変だけど、農協や買取先の乳業メーカーが言うとおりにやりました。牛を減らすための努力というのは本当に不毛です。気分までも抑制される生活があと5年も続くのか…離農も増えそう…と深いため息。ただ、焦点を牛の健康に合わせて動いた甲斐はあって、いま残っている牛はみんなツヤツヤでビュッとしています。どんな時も牛には励まされるなぁ。牛も家族も元気ならいっか！4 月からの新期にも立ち向かいます。

原田牧場Note
P209～

野中　浩一

1 か月前の大雪。島根も例年よりも長らく冷え込み、除雪されている大通りを車で 1 つ曲がると積雪 4～50 センチの小道が続く。車の足をとられて身動きがとれず、家まで 1 分くらいの距離で何度も下車して雪をかき、また数メートル進むと動けなくなり雪をかき。

そんなマイナス 5℃の灰色世界の中、夕方の病院の駐車場でバッテリー上がり。いつもオート点灯にしているライトが 1 段階切り替わっていたことに気付かなかった痛恨の失敗。灰色の空と真っ白に凍りついた地面、天候は吹雪。普段は人の行き来が多い病院の駐車場も人一人通っておらず、広々とした駐車場に動いているものは自分のみ。寂寞を感じながらロードサービスを待つ。

ロードサービスが到着。1 時間ぶりに見

る動く車と動く人。ほっとして車から吹雪の世界に踏み出したときに携帯が鳴った。東京 03 局番からの着信。反射的に出ると「〇〇広告っすけど、今どんな広告を使ってますか。」と若い男性の声。「すいません。今出先で、吹雪でゆっくり話せないのでまたにさせてください。」と伝えると、「え、まだ雪降ってるんすか？」と一言。瞬間、男性の配慮のなさと軽薄な言葉遣いにイラっとした感覚がこみ上げるとともに、私が 20 代前半に池袋でテレフォンオペレーターをしていた頃のオフィスが脳裏に浮かび、「今東京は雪降ってないのか、まあそうかもな」という隔世の感も去来。

安部公房「獣たちは故郷を目指す」の満州の果てしない雪原ではなく、ロードサービスが駆けつけてくれる島根の凍り付いた駐車場で良かったと思えた瞬間でした。

「島根の中山間地から Work as Life」
P257～

畑中　美穂

娘と出かけたお寺で写経をした。過去に一度経験はあるが特に印象には残っていない。日ごろから毛筆に馴染みはなく、小学生の頃の習字教室は友だちが通っていたからという理由で習っていてモチベーションは低かった。先生の家の前にある某大学の古い洋館が好きで、美しい造形をながめたり敷地で遊んだりしたことを思い出す。

さて今回はお寺に納経した後、なぜかハマってしまい細々と続けている。一時に全文が書けない時もあるが、数行でもすっと高い集中状態に入り込み、心が平らかに感じられる。何度も書くうちに部分的に諳んじられるようにもなっているが、宗教心や字の上達といったところとは無関係に、“続ける”ということさえ目標にせず、赴くままに楽しむのもいいかなと思う。そういえば芸術大学の書道の先生のワークショップで、筆を手作りして文字を書いたことがあった。蒼い絵の具で「波」と描いた時、「うわぁ！」と思わず声が出て感動した。“あそぶ”なかで文字を書く贅沢を、いっとき、味わってみたいと思う。

一語一絵
P241～

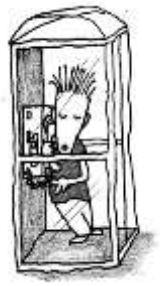
渡辺　修宏

自身や家族がちょっと体調不良になると、・・・・コロナか！？と、びびりまくっていた季節が、まもなく過ぎようとしています。最近は、自身や家族がちょっと体調不良になると、・・・ま、また、奴が来たのか？と、花粉症の季節を感じるようになりました。

対人援助実践をリブートする
この一冊
P246～

米津　達也

この春、学校を卒業する娘が東京に出ることになった。都会やひとり暮らしの憧れは痛いほどわかるが、送り出す親の立場としては複雑極まりない。言いたい小言や忠告も沢山あるが、それを堪えて消化不良を起こしそうになる。そんなもやもやの夜には、団先生の「家族の練習問題9」を手にしている。何度も繰りながら、親子の気持ちを消化している。



川下の風景
P239～

高井　裕二

非常勤先の高等専修学校の卒業式と勤務する大学の会議が重なってしまい、調整に難儀しています。高等専修学校の生徒からは「先生、卒業式に来ないとか・・・嘘やろ。待ってるで」とプレッシャーをかけられてます・・・。この号が発刊される頃には答えは出ていますが、この 2 週間は頭を抱えていると思います。

福祉教育への挑戦
P244～

本間　毅　退院支援研究会

本マガジン第 51 号で「新潟水俣病問題」に区切りをつけ、第 52 号と 53 号は「多職種協働におけるナラティブの意味」について述べるつもりで準備を始めていた。しかし、12 月も末になってから、心理・ナラティブ関連の出版社「遠見書房」から、本年 3 月に開催される「第 11 回ナラティブコロキウム」で、「チーム医療とナラティブ」というテーマのワークショップをコーディネートするよう依頼があった。まさに「共時性」と呼ぶべきか。

錚々たるメンバーの中、ナラティブの専門家ではない私が担当を仰せつかり驚いた。でも考えてみれば私のワークショップが 3 月 10 日で、無料で閲覧可能な本マガジン第 52 号の発刊が 3 月 15 日、有料の「ナラティブコロキウム」全体の見逃し配信は 3 月 19 日までという微妙なスケジュール。マガジンの読者が研究会に参加する可能性も考えると、私自身がネタ晴らしをするわけにはいかないだろう。

第 52 号は休載し、ワークショップでの質疑応答などを盛り込み、53 号から連載を再開する我儘を皆様にお許しいただきたい。

私は 20 年以上前から退院支援の研究を続けている。その成果（アウトカムよりプロセスやメソッドに近い）を整形外科やリハビリテーション医療の学会で公表するには、意に反する修正を余儀なくされることがあった。2015 年の第 7 回大会（京都）での口頭発表と、『対人援助学研究』誌への投稿で対人援助学会にデビュー、2017 年に「退院支援研究会」を発足してから、大げさに聞こえるかも知れないが、心の命じるままに研究を続けている。それだけ消耗も激しいが、考えていた以上に得ることや会える人が増え本当に幸せである。

休載

土元　哲平

今号は、休載とさせていただきますが、この 3 ヶ月、TEA 国際集会に海外出張にと、これまでお会いできなかった多くの方と語り合える機会がありました。3 月 3 日からは発達心理学会＠立命館大学！多くの方と改めて対面でお話できること、楽しみにしています。

キャリアと文化の心理学
休載

玉村　文

11 月に対人援助学マガジンの読書会に参加させていただきました。テーマは子育てしながら働く母親たち。それなのになぜか夫婦関係の話題がたくさんでました。

夫への不満や父親としての役割期待なども語られていました。夫婦関係と母父関係って似ているけど違う。どんな風にパートナーを認識しているのか、そしてそれをどのように他者に伝えるのかを考えさせられる時間でした。そして、おもちゃ会社ピープルの社員さんもおっしゃっていましたが、「これからは父親の時代」。子育てや母親をテーマにすると、父親にも必然的にスポットライトが当たる時代になっているのだなと感じました。

応援　母ちゃん！
P217～

川畑　隆

「かけだ詩⑫ファイナル」

「かけだ詩①から⑫まで」で一区切りすることにしました。3 年間の連載でしたが、ホントに時の流れは速いものです。

この 3 年間、所属先から離れ、ちょっと休んでまた新しい所属ができて、そしてそこからも「かけだ詩」と同時に離れます。これからの所属は「そだちと臨床研究会」だけですが、「それって何だったっけ？」と言い出してしまうまで、これは続くだろうと思います。

「こんなふうに書けるんだ！」と気づいて「かけだ詩」を書き始め、その面白さで連載の辛さもまったく感じずに 3 年間を楽しく走ってきたのですが、ストックがちょっと底をついてきたし、だから書かなくちゃと気持ちが高まっても、気がついたら他のことをしてるし…ということでファイナルです。「こんなふうにできるんだ！」と思えることが新しく出てきたら、また載せてもらうことにします。それがいつになるのかはわかりませんが、その時までさようならです。ありがとうございました。

かけだ詩
P212～

高名　祐美

勤務先で出会ったデイサービスの利用者 H さん、女性67歳。脳性麻痺のために車いすで生活し、言葉を発しづらい。そんな H さんがこれまで書き溜めた詩を一冊の本にしようと取り組んだ。作成途中、何度も H さんからは「詩集ができることが今の楽しみ」という言葉を聴いた。一方で「H さんの詩集を仕上げる」と自分のデスクに付箋メモを貼ったが、なかなか仕上げられない。そうだ、期限をきめよう。そう思い、完成予定を H さんの誕生日にと決めた。H さんの了解がえられ、担当のケアマネさんにも手伝ってもらってようやく誕生日を1日前にして詩集が完成した。1冊の本となった詩集を前に、H さんは「感謝・感激で胸がいっぱい」と涙をこぼした。詩集完成は H さんへの素敵な誕生日プレゼントとなった。

フリースクールでのSW実践を考える
P206

松岡　園子

先月、母に洗濯乾燥機を買いました。母の足腰が弱くなってきたため、これまで自分でしていた洗濯物干しを負担に感じるようでしたが、自分でしたいという気持ちが強いようでした。使ってみて自分でできるところが良かったようで、快適そうです。

何より、私の気持ちが楽です。

毎日、今ある環境で生活することが当たり前になってしまうことが多いのですが、何かをきっかけに新しいものを取り入れ、自分や家族を楽にしていくことが大切だと改めて感じました。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども
P201～

杉江　太朗

児童家庭の領域で働く杉江です。最近、ニュースなどで、「～が値上がり」と良く聞きます。とはいっても、スーパーなどでは、値上がりをしていることを知った状況で買い物をするため、値段を見て驚くこともなく、必要だから仕方がないと思って支払いをしています。しかし、買い物をしたときに値上がりをしており驚いた場面があります。それは、神社でお守りを購入した際です。毎年、担当している子どもに受験生がいると、決まった神社で御守りを購入して渡しています。今回、御守りが、500円から700円に値上がりしていました。ニュースで、「御守りが値上がりした」とは聞いたことがありません。確かに神社にとっては、お賽銭を値上げするようにいう訳にはいかず、収入源であるお賽銭の額も減っているのかもしれません。もさらに御守り自体の運搬料や制作料なども様々な値上げの影響で上がっているとすれば、御守りそのものの仕入れ値も上がっていると思われます。そう考えると、売値を上げるしかありません。そんなことより御利益も増えているのでしょうか。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-
P197～

浅田　英輔

クルマの運転が好きです。毎朝、1時間半ほどかけて通勤しています。冬のひどいときは2時間を超えることもあります。2021 年の冬は、1 時間半かけて半分しか行けず、その先は通行止めになってしまったのでもう 1 時間半かけて帰った、ということもありました。でも、たくさん降ったあとの次の日の道路は逆に走りやすかったりもします。そういう早朝にドライブ（という名の通勤）をするのも楽しかったりします。南国の人は、きれいな雪煙などみたことがないのかもしれません。寒ければ寒いほど、細かな雪が舞い上がり視界を遮るのです。雪はいやだけど、消えてしまうのもさみしかったりします。乾燥路面もサイコー！

臨床のきれはし
P99～

三浦　恵子

役所からの帰路、少し気になる高齢者に出会いました。とても寒い日でしたが、彼女はひょいと自室から出てきたような軽装でした。私はとっさに徘徊を疑い、まず彼女の足元を確認しました。しっかりしたスニーカーを履いておられました。これが「つっかけ」ならすぐに声をかけたでしょうが、まずはこの時点では一定の距離をとって様子を見ることにしました。歩行は速度は杖歩行の私に比べしっかりとされていたので、一見すると健康のためのウオーキングのようにも見えます。ただ、手にはバックなども持っておられず、途中で摘んだと思われる野花が握られていました。交差点に差し掛かるたびに、何かを探しているような御様子でもあり、この時点で、

徘徊の可能性を半ば確信しました。

ただ、生憎私は怪我の治療中であり、声をかけた瞬間にふっとしゃがみこまれるなどの状態となった場合、支え切れる自信がありませんでした。まず安全第一を考え、彼女から目を離さないようにして最寄りの交番に立ち寄り、中にいた職員の方に頼んで、一緒に声をかけることになりました。やはり帰り道が分からなくなっていた方だった。

彼女は暖かな交番で椅子を勧められたとたんどっと疲れが出た様子でした。御住所もわからず電話番号などの手掛かりもありません。ちょうど私の官舎の近くの交番だったので、私はいったん自分の部屋に戻り、羽織る暖かな衣類や汗を拭くタオル、衛生用品を用意持参し、住所地番はなかなかいえないけれど「小学校の近くの～」という言葉が出てこられるようになり、地図などを広げきいてみたりした後、警察官に引き継ぎました。

結果的に、姿が見えなくなった彼女を探している御家族がおられるという情報が警察に入り、無事彼女はパトカーで家路につき、警察からは用意した衣類やタオルの返却がありました。

この日、私はとても疲れていて、この方を拝見した時も、一瞬「正常バイアス」（大丈夫じゃないか？）が働きそうになりました。ただ、この時、かつて 10 年以上実母の在宅介護をしていた時代、夕暮れ時になると私を探して家を出た母を、近所の方々が探してくださったことを思い出しました。もしこの方が植え込みなどに転倒されれば、着用されている服の色合いなどもあって人目につきにくく、気温は下がる一方という状況であり、私は亡き母に背中を押されるような気持ちで声をかけルに至りました。

警察の方が「無事家族のもとに帰られましたよ」という報告とともに預けた衣類を受け取った後、自身の介護が地域に支えられていたことなどを色々と思い出し、少しの気付きや違和感といったものを大切にしていきたいと改めて感じました。

更生保護護官署職員

（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という観点から考える

P222～

迫　共

年明け、道後温泉に行きました。広島からは高速船で 1 時間ちょっと。海を隔てた隣県へ。松山城にリフトで上がり、徒歩で下山。二の丸庭園を散策して愛媛県美術館へ。「発見された日本の風景」展を見ることができました。江戸から明治にかけて近代化されていく日本の様子を垣間見られる絵が大量に展示されており、モースやビゴーら外国人が見た当時の日本に想像がふくらみました。道後温泉本館は改装中でしたが、何度もお湯につかって英気を養いました。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P193～

黒田　長宏

YouTube のアップで録画が2ファイル分になっていたのが気になりだして、1ファイルにしようと思ったがために苦労することになった。なんだか欧米の関税の関係で、ビデオカメラとデジカメを区別するための措置でファイル分割があるとか、SDカードをSDXCカードにすべきだとか、なんだかなんだかとファイルが分割されてしまう理由が錯綜しているらしい。結局、録画装置を変え、（中古で買ったとも言う）追究をやめて、結合ソフトを採用した。ここに書くと煩わしくなりすぎる経過は省略せざるを得ないが、YouTube の登録者1000人突破を本気で目指さないと結婚難も婚期が大事であり、YouTube も新たな設定を試みようなどとするとだんだん面倒くさくなる。2ファイルから1ファイルにしようと思ってしまったのも苦労の原因だが、人々の欲望がドローンを飛ばすことによって頭上に落下しないことを祈るばかりだ。

（2023年2月11日）

ロシアのウクライナ侵攻による原油などの影響での電気代値上げの話でも書いて出そうと思って開くと、既に短信を書いていたが、全く忘れてしまっていた。しかしながら、それにかこつけて電気代を値上げしてしまう電力会社たちの既得権益と原発利権というのには、大部分の人々が騙されているとしか思えない。私は2011年には福島で反原発運動のデモの先頭で行進した人間である。

10年ちょっとで利権のほうが勝ってしまう日本という国にいたら、本文の婚活どころか、やる気がなくなるね。政治家どころか、庶民側だってろくでもない事件ばかりだ。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚

P174～

尾上　明代

母親がお世話になっていた理学療法士の A さんが、勤務先の都合で異動になった。これまで何人もの PT さんにお世話になって、何回目かの交代である。A さんは、本当にテイラーメイド的な対応で、その時間を有効に、また母に合うようにいろいろな工夫をして下さったことに感謝している。母がお花が好きと聞くと、スマホに花の名前を当てるアプリを入れてきて、一緒に当てるゲームをするなど、PT さんのお仕事イメージとは違うことも取り入れてくれる。その対応力の高さの秘密を知りたいと、話を聞くうちに、謎が解けた。

彼の前職は、ホテルのコンシェルジュだったのだ。もう本当に無理難題をお願いしてくるお客さんたちの要望に応えてきたのだという。寝坊して自分の乗る飛行機に、明らかに間に合わない時間になっている人の「何が何でも〇〇行の××便に乗れるようにしてくれ！」というリクエストにも対応したとのこと。また、〇〇のチケットをとってほしい等、依頼内容は普通でも、ホテルをチェックアウトしたあとに、お願いの電話をかけてくる人もいるらしい。「それが、一カ月前に泊まっただけの人もいたんですよ！」と。ホテルのコンシェルジュをそのように利用しようとする人の気が知れないが、よほど彼が頼り甲斐のある人と思ったのだろう。その点は、同意する。

しかし、なぜその職業を辞めて PT になったのか聞くと、ご家族が皆、医療従事者で、転職を強く勧められたからとのこと。「病院の廊下をお年寄りと歩くだけの仕事」と聞かされ、コンシェルジュより楽だと思ったのに、勉強も大変だったし、なかなかハードな仕事だった、と苦笑していた。

彼の仕事に対する姿勢は、職業がどんなに変わっても同じなんだなとわかった。

ドラマセラピーの実践・研究・手法
P80～

松村　奈奈子

行動制限のない冬は久しぶり。どーしても見たかった流氷を求めて、2月初旬に網走に。まだ流氷は少なめで、ゴリゴリという感じでは無かったのですが「おー、これが流氷か！」と感動しました。

京都も外国人でごった返してますが、流氷観光船も外国人でごった返してました。みんな、流氷をみたいのよねー

精神科医の思うこと
P146～

柳　たかを

松本零士先生死去の報と思い出

2023 年 2 月 21 日(火)の某朝刊一面に「松本零士さん死去・銀河鉄道 999・宇宙戦艦ヤマト」という見出し記事が掲載された。

私は縁あって 2005 年春から宝塚造形芸術大学(現・宝塚大学)メディアデザイン学科マンガ・アニメコースの教員として働いていました。働き出してまもなく我がマンガ・アニメコースに特任教授としてある大物マンガ家が来られると聞かされました。名前を聞いてビックリ、「“松本零士”ホントかなー」と。

1989 年に巨匠・大天才、あの手塚治虫先生が亡くなられて以来、自分はマンガの太陽が沈んだような寂しさを感じていました。手塚先生の作品群だけでなく、先生が関西在住の頃、10 代から 20 代の手塚先生がマンガに注いだ情熱と数々のエピソードに魅了され(勝手に)親しみを感じてきたので、その後に派手に活躍したマンガ家に対して、実のところ少し覚めた見方をしていたと思います。

大変失礼なのですが、私は超有名な松本先生の招聘が成功したのは学部としてはよろこばしいけれど、むろんその作品群の連載は当時拝見していたし魅了され素晴らしいと思うけれど実際のご本人がどういう方なのか、自分のイメージが先行して実際にお迎えするのが不安で緊張しました。

2 月の冬休み、大学のラグビー場グラウンドで「松本零士が芸大学生と巨大地上絵を描く」イベントが企画され、完成した地上絵をテレビが空撮してニュースとしても流れました。

松本先生が長い棒でグラウンドに線を引きながら歩いて行くあとを学生たちが白い石灰で線を埋めていく方法で土のグラウンドに銀河鉄道 999 のキャラクター・メーテルの横顔を描いていったのでした。絵は大きすぎて地上に立つ人間には何が何だか分からないのですが、空撮で見るとちゃんと“メーテル”のステキな横顔なのです。これには驚きました。事前練習もなくぶっつけ本番でしたから。

先生は、必要なこと以外はベラベラと喋られることはなく、誰に対しても節度のある穏やかさで話してくださいました。

その後の大学ご訪問時の新大阪駅～大学の送迎は、毎回私が喜んでさせていただいたのですが、最初の時に私の態度が少し先生には疑問に感じられたのか、ボソッと「私は(戦えば)強いんだ！」とつぶやかれたのです。おそらくその時の私の態度に違和感を覚えられたのかと思います。

いやはや今も思い出すと冷や汗が出ます。

ただそれ以後、大学講堂での合同授業や大学主催のマンガ大賞などではいつも気持ちよくご協力頂きただただ感謝しかありません。もっと他にも思い出すエピソードがあるのですが、長くなるのでこの辺で、

松本先生、安らかに、いつか時の輪が巡り会うところで、またお会い出来ることを願っております。

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P150～

団　遊

世の中のムード的に「コロナがあけたのかな」と感じるのは、自身が猛烈に忙しくなってきたからです。アソブロックの社長を辞めてから撒いていた種が、芽を出し始めているということもあるでしょう。一方で、メンバーに思わぬアクシデントが起こり、リスクヘッジが不十分だったことから、出番が増え過ぎてしまっている事案もあります。何事も一寸先は闇なのですが、闇に対する準備が、少々コロナボケしていたのかもしれません。

そんなわけで、今回も連載はお休みだな、と思ってファイルを確認していたら、なんと、昨年のうちに大筋を書いていた原稿が出てきました。備えあれば患いなし。完全に忘れていたので、飛び上がって喜び、数カ月前の自分を褒めてあげたくなりました。

今号から「団遊の脱線的経営言論」と称して、「給料とは何か」「採用とは何か」「売上にはどう向き合うべきか」など、自分が実践の中で積み上げてきたものを単元化してまとめていこうと思います。

団遊の脱線的経営言論
P34～

村本　邦子

今年度、後半よりにわかに忙しくなり、次々とやるべき課題に追われている。せっせせっせと仕事を片付けても、次から次へとまた降ってくる。それもこれも、調子に乗って、あちこち出張を入れているからなので自業自得とも言える。今、婦人相談員のインタビューを重ね、女性支援の物語を聞いて回っているのだが、これがとても面白く考えさせられることが多い。ただし、どのようにまとめるかはいまだ悩み中。いろいろなことを好きでやっているわけだが、年齢を考えて、自分で自分の首を絞めないよう用心しないと。

周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクト―
P116～

國友　万裕

京都での生活がいよいよ 40 年になります。僕は最初は受験の直前まで東京に行く予定でした。それがひょんなことから京

都に来てしまい、考えてみると数奇な運命だったのですが、今はすっかり京都での生活ができあがってきました。中京区で暮らし始めて、はや 36 年。京都の中心地で暮らしているので極めて便利です。

ただ、僕は漬物が食べれないし、そばにあるのも無理なくらいの漬物嫌いなんです。その僕が、京都で暮らすというのは考えてみれば変な話ですよね笑。

（悪戯です！　編集長）

僕は生まれは九州ですが、九州男児のイメージじゃないとはいつだって言われますし、自分でも思います。九州男児的じゃないのに九州に生まれ、漬物が嫌いなのに京都で暮らす笑。ステレオタイプから外れているけど、人間ってステレオティピカルにはいかないです。だからこそ多様性の時代。

60 年近くも生きていると、人間なんて、一歩踏み込めばみんな変なのだということはわかってきます。これまで多様性を認めなかった社会のほうが未成熟だったんでしょう。

もっと遅れて生まれてきたかった！

男は痛い！
P87～

西川　友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

今回の記事に書いてある「不適切である」ことと「不適切と言われる」ことに関連して、「そうである」ことと「そうだと言われる（思われている）」の違いってちょっと意識してしまいます。

「出来てない」のと「出来てないと思われる」では前者はシンプルに落ち込むけど、後者の方が不利益が多そうで怖い。「出来ている」のと「出来ていると思われている」では前者は特に何もないですが後者は何か焦る。「出来ている」のに「出来ていないと思われている」のは「理不尽」だと感じる。実際どうか、ということと他者からどう見られているか、ということのギャップには名状し難い味わい深さがあります。

「どんな風に思われても構わない　私は私のやり方ですすむんだ」というのはなんだかヒーローっぽくてカッコいいですが、「そうは思いきれない自分がいる」というダサい現実についても受け入れて、そんなわたしも面白いよね、と大事にしてやりたいなぁと思っています。（多分それは、よく言えば社会性があるっていうことですよね、うん。そうだそうだ。そういうことにしておきましょう。）

福祉系対人援助職養成の
現場から
P61～

坂口　伊都

立命館大学主催のフォスタリング・ソーシャルワーク専門講座で、里親家庭の体験を話す機会をいただきました。里父、里母、里姉それぞれの立場で感じたことを話しました。

里姉である娘とは、何回か一緒に話をする機会がありましたが、今回は、里父も初参加する形となりました。皆の前で話しながら、夫が言葉を詰まらせる場面がありました。

「自分の子どもにしてやったことを里子にもしてやりたかった。それが、里子にとっては過剰な刺激になっていたのかも知れない」と、声を詰まらせ涙ぐんでいました。

夫なりに良かれと思ってしていたことが、今となって思えば、裏目に出てしまったようだと悔やんでいるようでした。皆の前で話す機会がなければ、夫の気持ちをいつまでも知らないまま過ごしていたでしょう。娘と二人で話す時とは違う展開になり、家族がお互いの気持ちを知る時間となり、不思議で貴重な体験となりました。貴重な時間をありがとうございました。

立場が変わると何が見える
P111～

河岸　由里子

【障がい者枠】発達障がいの困り感は中々一般の人にわかってもらえない。見てわかるわけでもないし、人それぞれ困り感も違う。それでも発達障害者支援法、障害者差別解消法等ができて、少しは認知が上がったのかと思いきや、全くダメ。

ある青年は、自閉症スペクトラム障害を持っていて、不安が強く、強迫的になりやすい。そういう人には声掛けが大事である。障害者枠で、障害を開示して就労したところ、一人で放っておかれることや、指示があいまいで何をすればよいのかわからない中、他の職員から「使えない」「早くしろ」などと罵声を浴びせられるなどがあって、どんどん状態が悪化していく。採用担当者からはいつでも相談してと言われていても、その人が居なかったり、連絡を取っても返事が来なかったりという状況ではどうにもならない。

同じく自閉症スペクトラム障害と ADHD を重ね持つ母子のケースも、母親の方は、仕事ができるが対人面が苦手で敏感なので、気配りは必要。最初は良かったものの、だんだんぞんざいな扱いになってきて、彼女自身辛くなり、自殺願望が出てきてしまった。子どもの方も同じところで働いているが、注意されることが多いからか、どんどん体重が減っていって、食べてはいるが太れず、不安定な状況。

日本の障がい者理解は、まだまだと言わざるを得ない。障がい者枠で障がい者を受け入れるなら、その人の特性をしっかり理解し、その人が困らないように、きめ細かな支援が必要である。その覚悟、用意がないなら、受け入れるべきではない。助成金があり賃金も安く雇えるからと安易に受け入れられた障がい者は、精神状態を悪化させ、結局仕事を辞めざるを得なくなるだろう。これは本人にとっての失敗経験となってしまう。安い給料でひどい扱いを受けるのであれば、障がい者枠で働くことは本人の精神状態に対し、この上なく危険である。理解もないまま受け入れるのは、障がい者に対するハラスメントだし、補助金を受け取る詐欺と言えるのではないか？障害者雇用をするなら、しっかりと障害者雇用促進法の合理的配慮を読んでほしい。合理的配慮は法的義務である。

ハローワークを通じて就労しているため、ハローワークと労働基準監督署にも、話をしに行かねばならないが、精神的ダメージを受けてしまった彼らにはそれすらもこの上なく負担だったりする。障碍者雇用促進法が出来て60年（合理的配慮の文言が入って2年）、発達障害者支援法ができ

ておよそ20年、障害者差別解消法が出来て約10年、これだけ経っても、社会ではまだまだ十分理解されているとは言えないし、ハラスメントもなくなっていない。昨今 LGBT-Q についての法案が挙がっているが、発達障害については20年もたっているのに理解されていないのだから、LGBT-Q が理解されるには何十年かかるやら・・・。

公認心理師・臨床心理士・北海道かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

ああ、相談業務
P67～
先人の知恵から
P169～

岡崎　正明

先日テレビを観ていたら、平野レミが生放送で料理をするという、挑戦的な番組をしていた。

すごかった。自由な進行。大雑把…いや、ダイナミックな作業と、唐突な会話。NHK のルールも、世間の空気も完全無視。そしてとにかく本人が心から楽しそうで。予定調和とか、相手にどう思われるとか、そんなのカンケーねえ感じ。

そうだよ。フライパンからこぼれた食材を手で拾って戻したり、焦げた料理を下に隠したり。それが我々がリアルで接する「料理」ってもんだよ。面白すぎるぞ。平野レミ。まだまだテレビには底力があるじゃないか。これならラジオ同様に生き残るんじゃないか。

そんな風に思って観ていたら、さらに驚かされた。平野レミの番組が終わると、次はなんと伝説の家政婦、タサン志麻の料理番組が始まったのだ！落ち着いた雰囲気と、素朴でオシャレで、かといって肩ひじ張らないタサン志麻の生き方と料理の数々。ひと口に料理家といっても、これほどの振れ幅があるとは。多様性に圧巻だ。この番組編成は、明らかに「料理家のオープンダイアローグ」狙い。ハーモニーではなく、ポリフォニーを見せつけるものではないか！（考えすぎ？）

やるじゃねえか NHK。心の中でそうつぶやいた。

役場の対人援助論
P94～

大谷　多加志

Twitter で流れてきて、目にとまったニュースが「秋田県の 1 年間の出生数が 4 千人を割り込んだ」というもの（2023 年 2 月の月報による推計値でしたが）。秋田県の人口は約 90 万人。毎年 1 万人以上人口が減少している県であるとはいえ、ひとつの県の年間出生数が4千人に届かないとは…と衝撃を受けました。大規模な大学では、年間入学者数が 7-8 千人に及ぶこともあります。もちろん、現在の 18 歳人口と出生数には年代の開きがあることは承知ですが、数字で示されることで人口減少のすさまじさを改めて実感しました。

一方、現在住んでいる京都市は昨年、人口減少日本一を記録しました。背景にあるのは住宅価格の急騰で、ウクライナ侵攻なども影響して建築資材が高騰する中、市内より地価の安い周辺の市町村に人口が流出しているようです。経済は人の手でコントロールできるものではないとはいえ、経済に人の暮らしが振り回されているように見えるのは、何とも辛く感じます。

とは言え、まずは自分の手の届く範囲からできることを重ねるしかありません。以前、就職について少しだけサポートした修了生が、無事来年から正規採用になると報告に来てくれました。またご縁があって実習先で就職することになった学生もいました。今の所属になって 2 年。力不足を感じる場面ばかりですが、何か少しでもご縁をつなげたかなと感じる出来事があるのは本当にうれしい限りです。

発達検査と対人援助学
P101～

馬渡　徳子

昨年 9 月末、無事に大学院を卒業できた。この経験は何にもかえがたいものとなった。

指導教官やゼミ生の仲間から、自分自身の文章の特徴を、厳しくご指摘頂いたことは、手話通訳養成課程時にも「一文が長い」と同じことを言われていたなあと、ふりかえることとなった。

現在は、次年度の関連学会において、内容を絞っての研究発表と学会誌への論文投稿を目指して研究を継続している。

コロナ禍において、研究対象が自己免疫疾患患者さんであることから、研究デザインを何度も変更せざるを得なくなったが、快く研究協力を下さった患者さん方に報いるためにも、患者会の全国理事としても、やり遂げたいと思う。

馬渡の眼
P149

団　士郎

やると決めたからしている事なのだが、それにしても、やり慣れない準備は苦労だ。先ほど(2/27)は、ホノルル展に出すマンガ掛軸を発送する国際郵便 EMS の伝票を書くのに長時間かかってしまった。なのに現在、遅れが出ているので、到着の予定日は明言できないと言われた。NY の時は三日で着きますと言われてその通りだったのに。**（結果的には 3 月 5 日には到着）**

英語版「木陰の物語」の掛軸が活動するのは久々。2015 年にはじめてNYのギャラリーで、その後、上海、台北、多賀城でも展示した英語版。ソウルでは一作、ハングル版を。蘇州では中国語版四作品が展示される機会があった。

「木陰の物語」を描き始めた 2000 年頃、こんな未来になるなんて思いもしなかった。

振り返ってみると、こうなりたいと思って為したことは私の人生にはごく僅かな気がする。面白そうだと思うことを続けていたらこうなっただけで、たいていのことの今の結果を目指した記憶はない。もっとも世間は、こんな選択は少数派で、誰もが目標に向かって・・・みたいにいう。そしてそうでないものは怠け者のように言う。

でもそれって世の中に蔓延する欲望に洗脳されているだけな気がする。私が怠け者なわけはないだろうから、異なる動機づけが存在することに近年、思い至った。分かりやす過ぎる目標は、達成すると、すぐに次の目標を探さなければならなくなる。ゆっくりと自分は何がしたいのだろうと思

案したり、まさかこんな幸運に遭遇するとは・・・なんて時間が持てるのが長寿社会の利点だ。

晩年 D･A･N 通信③
P43～

鶴谷　主一

対人援助学マガジンに記事が蓄えられてきて、ほんとに時々ではありますが、「対人援助マガジンの〇〇の記事を見たけど、ちょっと聞きたい・・・」というお電話をいただくことがあります。ずいぶん前に書いた記事だと今は変化していることもあり、その都度お伝えしたりしています。

幼児教育現場の方や、関連のある方が、読んで頂いてなにかしらヒントにして頂けるのはありがたいなあ、と感じますし、園内の資料としても活用できています。

継続していくって“力”が溜まるんだな、ということを実感するこの頃です。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P57～

水野　スウ

今年はここ北陸も、雪が多く寒さ厳しい冬だったけど、雪がとけ、土が見えてきた庭ではリュウキンカが早くも金色の花を咲かせています。

「紅茶の時間」は 40 年目にはいりました。コロナの時期からさらにはやらず、静かな紅茶がもう当たり前。それでも今年の冬から春にかけてはなぜか遠方からの、お初に見えるひとが多いです。今号に登場するのは神奈川県のひと。その翌週は九州からのひと。その翌週、3 月最初の水曜日には、大阪からはじめてのひとをお迎えします。

いついつの紅茶、あいてますか、誰が行ってもいいんですか、などと連絡もらった時は、毎週あいてます、どうぞどうぞ、きっと貸切よ、といつもお伝えする。だけどふたを開けると、たいてい途中から誰かはいってきて、遠くからのひと、来慣れているひと、私たち夫婦、一期一会の共演者による、シナリオなしのドラマがそこに展開していきます。遠くからきた人には、貸切紅茶とまぜこぜ紅茶、一度に2種類味わえて、それもまたこの空間のおもしろいところかな。

初対面同士の紅茶。語りあう中で思いがけないシンクロ発見！って、しょっちゅうあるある。マガジン今号では、外からもたらされた「消費」「期待」「対話」といったワードから、あらためて紅茶を見つめ直して気づいたこと、綴ってみました。

きもちは言葉をさがしている
P80～

脇野　千恵

最近「性教育」への関心が高まっている。思春期保健相談士として中学校への出前性教育に出向いたり、大人向けの研修に招かれることが多くなった。学校現場での「性教育」は遅々と進んでいない状況がある。なぜ？と問われることがある。もともと日本の教育での「性教育」というと、とても狭く捉えられがちで、保健体育の授業での「二次性徴」だけと思う人も多い。今、人権を基盤とした人との関係性の学びである「包括的性教育」という言葉を広めている。心理の人達も「性の多様性」の悩み相談をうけることが多いらしく、「包括的性教育を子どもたちに！」という声をあげている。福祉分野の人達なども。今まであっただろう「性と生」の課題を、オープンに語れる社会になってきたということだろうか。20年程前の性教育バッシングから、ようやくの感がある。これが一時のブームに終わらないでほしい。さて様々なところでの声をどう繋げていくのか？道は長いが、包括的性教育がどの学校でも実践されるように、もう少し頑張ろうと思う。

こころ日記「ぽちぽち」
P204～

中村　正

4回生たちの卒業旅行に出かけた。といっても旅行というのではなく、社会人直前教育と位置づけ、スタディーツアーとした。京都から伊勢志摩へでかけた。大学院の後期課程に三重ダルクの責任者が所属している。「志摩ラボ（賢島）」という素敵な研修と保養のための施設だ。

ここは私の出身地でもある。卒業研究では社会病理と自分の関係付けを重視したので、社会の課題と個人の課題を統合するようにみんな素晴らしい研究をしてくれた。そのセルフ･アファーメーションの意味もあり、ダルクのメンバーと交流させていただいた。アディクションについての理解を深めることはこれから社会人としていろんなところで活躍していく際に必要だし、偏見と差別をなくしていくためにも大切だと思ったのでお世話になった。社会人としての入り口に立つことへのエールもいただいた。なんといってもパワースポットが多いところだ。自然のなかで育った私の故郷体験と重ねて楽しめた二日間だった。こうした流れに身を任せる。2 年前とは異なる大人になっている若い人たちとの関わりからエナジーをもらう。また 4 月には新しい若人がやってくる。

臨床社会学の方法
P23～

千葉　晃央

次回の対人援助学会第 15 回大会は広島大会。その打ち合わせのために、広島の学会員で大会を支えてくださる方々に会いに広島へ。

まずは行きたかった広島の宇品に。「うじな」は読んでいた『暁の宇品－陸軍船舶司令官たちのヒロシマ』堀川恵子（講談社）、この本の舞台。私の祖父は満州で行軍中に溺れそうなくらい深い沼を渡るときに、肺に不衛生な水が浸入。それ以来、肺病のような症状が治まらず結核という話もあった。そうして満州で傷つき、満州から広島の宇品港に移送。広島陸軍病院で療養し、その後秋田陸軍病院に送られた。もし、そのままいたら 1945 年 8 月 6 日。もし傷つかず従軍していたら、その後陸軍歩兵十七連隊は満州からフィリピン、ルソン島にいき、大変な局面に遭遇していた。結果的にはいかず。祖父がいた広島陸軍病院はどのあたりなのか？昔から知りた

かった。広島駅から広島電鉄で宇品二丁目で下車、広島市郷土資料館できいた。あの日、陸軍病院はすっかり吹き飛ばされたことを知る。スタッフの方が本を出して教えてくれた。凄まじい。そして、学会、広島大会をするためには 8 月 6 日以外の広島も知りたかった。この資料館は元陸軍缶詰工場を改築している被爆建物。爆風で歪んだ屋根の骨組みもそのまま残し、今に伝えている。カルビーも、アヲハタも、筆も、干潟も、イカフライがなぜ名産なのか？など、広島の様々な側面を知ることができた。

マガジン執筆の仲間の岡崎さんと合流し、人と人、人と社会、広島と世界をつなげるソーシャルブックカフェハチドリ舎さんを訪問。さまざまな社会問題もテーマに活動されている姿が熱い。その後、被爆建物の保存で揺れた元陸軍の倉庫なども見ながら呉へ。潜水艦桟橋には 7 艇の潜水艦。これも日本の姿。伺った潜水艦に乗艇する自衛官の家族の暮らしも興味深い。とびしま海道ではミカン畑とレモン畑の段々畑と島と島をつなぐ橋の景色、その橋と島が繋がる横に連絡船の景色が素晴らしい。「よみがえる新日本紀行」で見た段々畑の暮らし、連絡船のある暮らし、山田洋次監督作品『故郷』に描かれた景色も思い出された。そして映画「ももへの手紙」の舞台となった汐待の港、御手洗では素晴らしい街並みに圧倒された。

翌日は広島大会のみなさんと打ち合わせ。その後、平和の軸線と呼ばれる、映画「ドライブ・マイ・カー」にも描かれた原爆ドームと原爆戦没者慰霊碑、広島平和記念資料館を結ぶ南北の線へ。広島サミットを控えその線を取り入れた様々な都市計画が進んでいるそう。これも「ドライブ・マイ・カー」に登場した資源ごみ処理施設、中工場へ。ここは軸線が建物内を貫くことを思想的に意図している仕掛け。元環境局内福祉施設勤務の私にとって、資源の活かし方を考える、市民の安全を願う思いなどは同根。つなぐことに納得。日常の極みと非日常の極み。忌み嫌われる施設がロケ地で聖地でもあり、休日に各地から人々が訪れているのは意図がなせるわざ。そして会場として、お世話になるマガジン執筆仲間の迫さんの案内で比治山大学様へ。設備等を見せていただく。

みなさん、広島大会で会いましょう！足を運ぶ、時間を共有するからこそ、経験、体験、学習できることがあります！お楽しみに！

家族支援と対人援助　**ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
P18～

篠原　ユキオ

創り手の想い

若い頃から映画を見るのが好きだった。封切られた話題作はいち早く観に行き自分なりに感想を書いていた。近年は劇場に出かける事はなくなったが今でも年間に 100 本以上の映画 DVD を観る。主に邦画である。古いものは戦後間もない頃のものから最近のものまで、時代劇、現代劇取り混ぜて監督や役者の顔ぶれを見ながらチョイスする。基本的にホラーとバイオレンスは観ない。この歳になると不快感が残るものは避けるようになった。絵についても同じで自分が描く作品も含めて不快なものは避ける。お金を払ってわざわざ嫌な気分になりたくはないからである。

そんな中、最近はなかなか『当たり！』と思える映画に出会わない。

見始めて 10 分ほどで見るのをやめてしまうものも多くなった。設定に対する違和感、役者の下手さ、セリフの不自然さなど色々突っ込みどころが重なると耐えられなくなるのだ。

そんなつまらない作品を作っている時、作り手はどういう風に感じているのだろうとよく思う。映画は沢山の有能なスタッフが集まって作り上げる総合芸術だが、演者もスタッフも制作の途中で明らかにつまらないと思われる映画に携わっている事へのジレンマはどう昇華されていくのだろうと思う。その点、絵描きは自由である。つまらないと思ったらすぐに破り捨てれば良い。残念な事に映画も建築も途中でやめてしまう事はできない。そしてその恥ずかしい作品はずっと残る。

そんなことを考えると常に自分の描く物には誠実に向き合わなければと思う。

HITOKOMART
P221～

山下　桂永子

3 年前の今頃は、教育現場は突然の臨時休業に大混乱の日々でした。災害時以外につくことのない職場のテレビで、臨時休業を伝える首相会見を呆然と見たことが昨日のことのようによみがえります。

3 年前は、対話がこれほど難しく、対話がこれほど大切なものなのだとは思いもしなかったなと感じます。コミュニケーションは言葉のやりとりではなく、気持ちのやりとりなのだと気づかされた 3 年間でした。やりとりですから、気持ちを受け取るだけではなく、伝えることも重要なのだなと最近思うようになりましたが、これがとても難しい。最小限の言葉と最大限の工夫で、伝えることがもっと上手になりたいな、伝えることがもっと楽しくなればいいのになと思うこの頃です。まだまだ未熟な表現力ですが読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P158～

小林　茂

2022年度より勤務先の学科長兼教務員長となった。これが意外とやることが多く、毎日時間に追われる日々となった。任期はあと1年。もう1年はがんばらないといけないのだが、自分を取り巻く世界が

何かシンクロしているのか、会議や締め切りが集中している。

今回も、何を書くか頭の中を整理する間もなく、つらつらと書く始末。じっくりと構想を練って、調べて物書きをしたい心境です。

対人支援点描
P105～

中島　弘美

12 月と 2 月に開催された対人援助学会の研究会に zoom 参加した。第 28 回大谷先生『検査と対人援助学』を楽しみにしていたところ、当日の夜インターネットが不安定で、とぎれとぎれにしか聞き取れず、大変残念だった。悲しい。第 29 回中鹿先生の『実践と研究を交差させる！実践現場を科学する！』は、ネット状況は安定していた。ほっとする。日頃の実践場面では、研究という視点から遠く離れている。しかし、今回、話をうかがうと、「実践を報告し、発信し、さらなる発展を求めることが義務である」という。素敵な刺激をプレゼントしていただいたと思う。

カウンセリングのお作法
P40～

藤　信子

週に 3 日ほど、妙心寺へ散歩に出かける。我が家から妙心寺の北門→参道→南門、そしてわが家へという道筋が 30 分かかるので、丁度良いコースになっている。いつもはあまり観光客を見かけないけれど、このひと月くらいは、「京の冬の旅」に、塔頭の2つが入っているらしく、それらしいパンフレットを持った人を見かける。この「冬の旅」は、日ごろは公開しないところを見せるらしい。「よその襖を見て何が面白いのだろう」とは言わないが、寄っているようでは、日課の散歩にならない。妙心寺は塔頭の並び方がすっきりと整っていて、静かな佇まいで歩くのにとても良い。ここを歩けるから転居はしたくないと思うくらい。

解放の心理学へ
P37

竹中　尚文

私は 12 月に PC をハッキングされました。気分の悪いことでした。修理をする間、一ヶ月近く、PC を使えませんでした。その情報を共有したいと思って、以下に記します。

ハッキングされていると気づいたときには手遅れでした。すぐにインターネット接続を切り、電源を切りました。またクレジットカードの会社に電話をして、クレジットカードを止めてもらいました。PC の専門業者に持ち込んで診断と修理をお願いしました。専門業者から PC を返還していただいて、データの流失はないだろうということでした。私はデータを PC には置かずに有料クラウドに保存していました。多くのファイルには PW をかけていましたので、情報が流出することはなかったようです。

参考までに私が遭遇したハッキングと専門業者から教えてもらったその対策を記しておきます。

＊

①いきなりPC画面に「ウィルスに感染しています」と警告が出ます。それはネットを閲覧している時や、メールの送受信をしているときだそうです。この警告表示は、ウェブサイトの画面やメールの画面とはまったく異なる緊急性を伺わせる画面でした。私の場合は緊急音声が出ませんでしたが、緊急音声と伴うことも多いそうです。この警告画面は、マイクロソフトやセキュリティソフトの業者名で表示されます。偽物の表示です。

②あわてて画面に表示された電話番号に電話をしてはいけません。私はマイクロソフトだと信じて電話をしてしまいました。そしてハッキングされました。

③画面にどんな警告がでようとも慌ててはいけません。その段階では PC はハッキングもされていませんし、ウィルス感染もしていません。だから警告画面を消してしまえばいいのです。

④警告画面の消し方は、右上の「×」印がありませんから、「Alt」キーと「F4」キーを同時に押します。何度警告を出されても、根気よく消すことです。

路上生活者の個人史
P85～

寺田　弘志

「酔っぱらって風呂の扉を壊してしまった。俺は DV をしているらしい」と息子から連絡があったのが、去年の12月。すぐに断酒会に入ることや、アンガーマネジメントを学ぶことを息子に勧めました。

断酒会はすぐ見つかったのですが、アンガーマネジメントはどこで学ぶのがいいかわからず、本誌に執筆を勧めてくださった中島弘美さんにどこか良い所をご存知ないですかとたずねてみました。

中島さんからは丁寧なお返事があり、アサーションもいいと思いますよと教えてくださいました。早速、本を2冊買って息子と読み始めたのですが、時すでに遅く、今は離婚調停の準備に追われています。

はじめは酒を飲んだ息子が悪いのだろうと、「子どももお金も相手にあげなさい」と叱ってしまいました。しかし、よくよく聞いてみると、息子は相手とその両親から相当なモラハラを受けてきた結果、酒を飲まざるを得ないような精神状態に追い込まれていたことがわかりました。

「風呂の扉を壊し、怖がらせたことは DV だ」と、子どもを連れ去られた状態で、こんこんと言われ続けて洗脳され、自分のしたことが DV でしたと自白してしまいました。

お酒に走るような人は、普段は大人しく優しいことがよくあるそうです。自分を抑え込んでストレスをためてしまい、お酒を飲んだりすると感情が抑えられなくなるようです。

息子はとても優しい子です。いじめは絶対にしたらいけないと厳しくしつけました。小学校で短文を作る授業があり「お父さんはいじめがきらいです」と書いていました。参観日に家内がそれを「お父さんはいじめるからきらいです」と聞き間違え、私も聞き間違いを信じてしまい、「父さんがどんないじめをした？」と問い詰めたことが

ありました。後で聞き間違いとわかり、息子に謝りました。

中学校で仲間の一人が空き地で物を燃やしてボヤになりました。息子が火をつけたわけではないのですが、友達をとめなかったことを叱り、息子と二人で空き地の近所に謝りに行きました。近所の方は許してくださったのですが、息子には空き地の草刈りをさせました。そんなことをしたのは我が家だけだったそうで、そこまでしなくてもと家内にたしなめられました。

その後火をつけた友達が自殺しました。原因が何かはわかりません。その友達の母親は、私の息子のせいでその子が自殺したと言いふらして回りました。それを知った妻と私は、その母親に抗議しようとしました。でも息子は「自分の息子が死んでつらいんや。俺の悪口を言って、気が少しでも晴れるなら、言わせてあげて」と私たちの抗議を止めました。

成人式には、その母親に友達の遺影を借りに行って、胸に抱いて参列しました。そんな優しい息子が DV などするわけがありません。

どうしてはじめから信じてやれなかったのか悔やまれます。相手の申立てへの抗議を親子で考えている間も、息子は相手をかばうようなことを言うので、親子げんかになることがしばしばありました。ようやく息子がポツリポツリと話してくれた相手側のモラハラを拾い集めて、反論する文書を作りました。明日それを弁護士の先生にお渡しして調停に臨んでいただきます。

2月22日は最悪の日でした。

相手側から申立書が届きました。子ども二人の親権、養育費、財産分与さらに慰謝料300万円を請求するとありました。怒りで一睡もできなくなりました。そして、翌日、とても悲しい知らせが届きました。

続きは本文に書きます。

接骨院に心理学を入れてみた

P182～

山口　洋典

コロナ禍もいよいよ収まりの兆しと見えて、徐々に対面での交流や関係づくりの場が増えてきました。1 月末の久留米大学での講演の他、2 月には東京都足立区の文教大学での対面での学会、その他にも滋賀県草津市の市民総合交流センターでの講演など、いくつかお役をいただいています。マスク越しであっても、生身の反応が得られると、語りかける上でのリズムやテンポが整う気がしています。今後、2023 年 5 月には感染症法での 5 類に位置づけを変えるとのことで、マスクを外しての対面が増えていくことでしょう。

そうした中、いよいよ海外への渡航の予定が入るようになりました。3 月にはアメリカ合衆国のインディアナポリスに、サービス・ラーニングに関するインタビュー調査などで訪問します。ちなみに、本誌での連載の名称を「PBL の風と土」としながらも、このところは PBL についての言及が少ないことが気がかりだったのですが、先日の 50 号を機に本誌での連載を終了されたサトウタツヤ先生が 3 月にデンマーク・オールボー大学に立命館大学総合心理学部の学生と共に訪問されるようで、その橋渡しのために久々に 2017 年度に現地でやりとりしたスタッフの皆さんとやりとりを重ね、新たな情報を得ることができました。次号以降、サトウ先生が現地で触れた PBL の風や土の内容も、何らかの形で紹介させていただければと願っています。

PBLの風と土

P176～

見野　大介

気付いたら、もう2月も終わろうとしている。怒涛の展示会ラッシュの幕開けとなる3月に入る前に、確定申告を済ますことが出来たことにより、物凄く気持ちが楽になっている。今までは期限ギリギリだったので、これからは2月中に余裕をもって確定申告を終わらせようと決意したものの、果たして来年も出来るかどうか…。

ハチドリの器

P4

荒木　晃子

昨春、科研プログラムが終了し、同時期、年金受給が始まった。計画通りである。研究期間中、研究実務者＆事務局として 3 年半務め、共著による研究成果物の出版も果たした。これもまた、計画通り。やっと自由な時間を取り戻した・・と思った矢先、コロナ感染が判明。薬剤アレルギーの体に、やむにやまれず、カロナールとロキソニンの服用を続けた結果、無事、陰性を確認。その後、服薬が原因の帯状疱疹を伴う体調不良に見舞われた。弱り目に祟り目とはこういうことを言うのだと、改めて感心。同時に、予想外の出来事を続けて経験し、何事も計画通りにはいかないものだと実感する。晴れて自分の時間を取り戻したら、あれもやりたい、ここに行きたいとウキウキしていた矢先の出来事だった。もしかすると、まだ休むな！ということなのかしら？ああ、わたしの人生ケセラセラだわ。

生殖医療と家族援助

P72～

工藤　芳幸

先日、第 25 回言語聴覚士国家試験が終わりました。概ねどこの大学でも国試形式の模擬試験を実施しています。その他諸々の国試対策を行うのが常ですが、私は個別指導を随分と請け負ってきました。私の場合は一緒に問題を解いたり知識を説明してもらったりするスタイルですが、そうしていると専門用語ではなく、基本的な語彙が不足している学生たちがいることに気づきます。ことばの意味について説明することもあれば、調べてもらうということもするのですが、調べることに慣れていない学生も少なくはないのです。ネット検索でも上手くいかない。まともに試験勉強というものをしたことがないという学生もいます。ST 養成課程は一般の大学に比べるとカリキュラムが目一杯。臨床実習は 480 時間。この量をこなせないとなかなか卒業や国試合格までには到達しない。読むものも覚えるものも大量にあります。理解できないままの試験勉強はただ書き写しているのと変わりありません。義務教育のプログラミングも大学で盛んに取り入れられているデータサイエンスも意味がないとは言いませんが・・・読んで理解すること、聞いて理解すること、言語でまとめ上げること、そのための基礎的な力を取りこぼしてしまって大学まで来て、大きな壁に当たっている。ここに至るさまざまな背景がありそうです。

みちくさ言語療法
休載

劉強

最近、以前より忙しくなっていました。大学院での研究活動をしながら、就職活動を行いました。幸い、就職できて 4 月から社会人として働きます。今後、研究課題に関する文章だけではなく、仕事で思ったことも書けたらいいな、と思っています。

中国のセクシャル　マイノリティ支援
P254～

原田　孝

教師は子どもたちへの対応がメインの仕事なのですが、子どもたちを健全に、しかも効果的に育つことを支援するためには、家庭の協力が必要となります。保護者さんとの連携・協力があれば子どもたちの抱える課題の解決に速やかに向かうことができます。保護者さんとの信頼関係を作る第一歩は、クラスで持たれる個人懇談会ではないでしょうか。初めてのこの面談で、保護者さんとの信頼を構築する一つの方法を今回は考えてみました。参考にしていただければ嬉しいです。

先生のための 16 のことば
P 274

小池　英梨子

執筆者短信を【飼い主さん募集中の保護猫さん紹介】にしてみました。
おぼん・こぼん兄弟。ちょっと人見知りですが、遊ぶのが大好きな可愛い兄弟です。関西圏内で里親さん募集中です～。
https://nekokaramesen.com/satooyabosyutyu/

そうだ、猫に聞いてみよう
P161～

古川　秀明

新しい講演会＆ライブの形を模索しています。いくつかの会場で試していますが、今のところ好評です。常に新しいものを生み出して行こうとする姿勢を忘れないようにしたいです。だけどそんなことができるのも、呼んでくださる皆さまがおられるからです。その有難さも忘れずに日々精進を重ねて参ります。今回も読んでいただき、ありがとうございました。

講演会＆ライブな日々
P138～

安發　明子

フランスの在宅教育支援ソーシャルワークについての漫画『ターラの夢に見た家族生活』の日本語版出版を目指しクラファンで関心のある方を集めている。
支援者と子どもと家族を漫画で見ることで、具体的な支援者の動き、言葉遣い、距離感を知ることができることが魅力だ。子どもたちのためにできることを議論する機会、当たり前を見直す機会になること、日本に生まれてよかったと全ての子どもに思ってもらえる社会になるよう議論が広がっていくことを願う。
前進するためにカルチャーショックもたまにはあっていいのではないだろうか、私は他のやり方を知ることで元気がでる。
ソーシャルワークについて描いたものが世の中に増え、ソーシャルワークが素敵な仕事だと広く認知されてほしい。
フランスでは現在 3 巻まで発売されているが、今回はまとめて 1 冊にして出版する。一晩では読みきれない分量と余韻になるはずだ。読みたい人が集まらないと出版できないため、支援をお願いいたします。

https://greenfunding.jp/thousandsofbooks/projects/6908

フランスのソーシャルワーク
P225～

中村　周平

編集長の団先生、皆様、自身の体調不良のため今回の投稿は休ませていただきます。

自律神経からくるめまいが頻繁し、思うように日常生活を送ることができませんでした。5 月の投稿はぜひチャレンジさせていただきます。休みが多く誠に申し訳ありません。

ノーサイド
休載
（お大事に。復活を祈ります！編集長）

付け加えることができる価値は何か？

～82000 キロ離れてみた経験から～

1

千葉　晃央

パスポート取得から

6 年前のニューヨーク以来、海外には行っていない。今回、お役目をいただいているフォスタリングソーシャルワーク専門職講座（日本財団助成　立命館大学人間科学研究所 臨床社会学プロジェクト）のスタディツアーでオーストラリアのメルボルンへ研究視察に行くことになった。受講生、講師陣と共に現地での先進的な取り組みから学ぶことを目的とし、日本のフォスタリングソーシャルワークの発展に寄与することを狙いとしている。

失効していたパスポートを申請し、取得したのが 2022 年 12 月。現地ではクレジットカードでの買い物が普通！と聞いて、あまり使わなかったカードを使えるように環境変更。空路を聞いたのが 2 月に入ってから。ビザ？発給はアプリという時代に。とにかく対応の準備を進めた。

機内持ち込み手荷物は１つ？！

荷物も前回はロストバゲージを防ぐためにも預けずに行った。今回もそうしたいので機内持ち込み可サイズのバックパックと手持ち袋にした（これが間違いであることに気づく）。意外と大きくなってしまったのはツアー携行品の運搬のためである。出発は 2 月 25 日（土）。雪がちらつく京都から、まずは羽田空港へ。ここに来るのは相当ぶり。久々の海外なので余裕をもって動くしかない（後でこれが効いてくる）。新幹線を乗れるタイミングで指定席をゲット。この

日はものすごい人出。京都駅も大混雑。結果、乗った新幹線はデッキでの立ったままの利用がある状況。指定席で良かった。体力温存のためにも。品川駅で降りて、京浜急行で羽田駅へ。昼食を日本食最安値にして、メルボルンの本購入。出発の京都駅新幹線売店で見つけた新書『物語 オーストラリアの歴史　新版-イギリス植民地から多民族国家への 200 年』(竹田いさみ，永野隆行　中公新書)も併せて読みながら過ごす。航空会社カウンター共用のため、出発近くなってからカンタス航空窓口がオープン。そこでその直前に近くに行くとエコノミーは持ち込み荷物一つと書いてある！事前にＨＰで確認したが実はそこはビジネス以上のところを見ていたことがわかる（日本語に翻訳しているからか表記があいまいだった、でも言い訳か)。そのビジネスクラス以上は 2 個オッケーと書いてあった。国内線の感覚と同じなのでそれでいいと思ってしまった！荷物のサイズも重さも確認したが、そもそも間違っていた！持ってきたバックパックには鍵がない。以前、京都の福祉施設職員を海外福祉施設に派遣交流する事業担当していた時などに、ロストバゲージの様子をしばしば見てきた。やはり、これはよくない…。なんといってもツアー携行品がある。そのため、急遽スーツケースを買うしかないと判断。到着していた羽田第 3 ターミナルには店が見つけられない（後で見つけた…)。電車一駅の羽田空港第 1、第 2 ターミナル駅へ。国内線のターミナルに移動。駅前のショップでスーツケースがあったため購入。鍵の取り扱いなど駅の椅子で広げて覚える。国際線ターミナルに戻り、荷物を入れて荷造り。バゲージバンドも、目印シールも買って仕上げた。やばかった。

ヘイヘイ…セルフォン！

同行するＵさんとは羽田で合流にしてもらった。カンタス航空カウンターで荷物を預けて、出国手続きへ。何もかもデジタル化。パスポートも。差し込んで、写真撮影、発券程度で進む。中に入ると羽田空港も広い。乗り込むとヘッドフォンが置いてあるが包み紙にお金が書いてありよくわからず。周囲を見てもブルートゥースで聞いている

人がほとんど？あとでお金表記はユニセフの寄付の広告ときく。音はなしで、絵だけを観ながら、そして寝ながら 9 時間移動。22 時発の夜行便。出発後にも機内食あり。9 時間、それにしても狭い。席も満席。2 時間時計をはやめて、オーストラリアにあわせる。寝たような、寝ていないような。そして起きたら朝食機内食。どっちも和風にした。まずくはない。ＣＡは年配の男性ばかり。シドニー到着。ここが経由地。次は国内線でのトランジット。カンタス航空は専用のバスとターミナルを保有。荷物もターンテーブルか

ら受け取り、再度メルボルン行きのために預けたけど、チケット確認も何もなかった。無事着くのか？と不安。ここで、椅子に荷物をおき、整理をしているとスマホを落としていた。「ヘイヘイ…セルフォン…！」異国の方に親切な方に声をかけていただく。

シドニー空港でコーヒーを。空港ターミナルのいい場所には「相撲サラダ」に、「巻きずしテリア」…。ここから買い物はクレジットカード。この国内線シドニーからメルボルンは世界で３本の指に入る繁忙路線らしい。機内は満席。オーストラリア

の移動は飛行機が基本ときく。「バスを乗るように乗る」と。ここでも昼食サンドイッチが出る。体調コントロールのために飲み物はアップルジュースで統一。メルボルン到着。寝不足である。一夜を機内で明かし、座りっぱなしで足腰に痛み。とはいえ、旅行会社さんが通路側に席を取ってくれていて助かる。この国内線もベテランＣＡのみ。メルボルン空港到着後、１時間前に着いていた受講生のＫさんが待ち伏せしてくれた。３人でスカイバスという空港バスに乗ってホテルへ。スカイバス終点サザンクロス駅まで乗車で分かりやすい。バスの車内の天井にＵＳＢポートがある。昨今の海外観光客にはスマホの充電が命。よくわかっている。駅到着後チェックイン。英語がはやくて聞き取れない。単語すら忘れているのも大きい。何とかＵさんのサポートでチェックイン。補償金を預ける方式。チェックアウトで返却。それにしても物価がとにかく高い。日本の約３倍。到着後、すぐに街へ出てみた。

学びを保証するという価値、

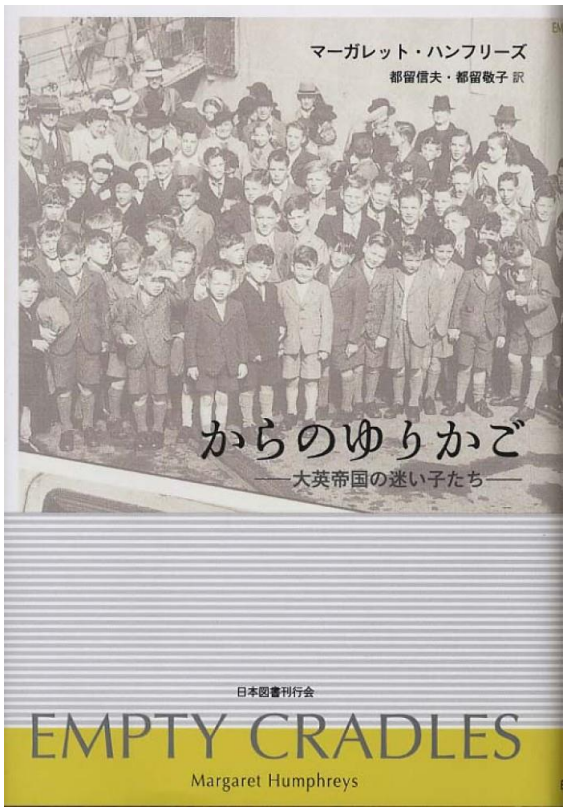
先住民を尊重する価値

ビクトリア州立図書館へ。めちゃくちゃ広い。正解で一番美しい図書館とも。あちこちで勉強している。若い人も上世代も。そして学習意欲が高まる美しさも雰囲気も作っ

ている。朝から夜 9 時まで無料で誰でも、私でも利用できる。図書館の数がとても多いのもメルボルンの特徴と教えてもらう。素晴らしい。

圧倒的に人々が若い。町で歩くのも若い人が多い。ルーツも豊か。出会わないルーツはないのではないかと思うぐらい。アジア人も多いけど、みんな微妙に会ったことがあるようでない雰囲気。オーストラリアは中学と高校で 6 年間日本語を学ぶことができる環境があると聞いた。これもオーストラリアの歴史を考えると頷ける。後でも考えることになるが、国として、存在の価値がある国（大国）として成長していく、新しい社会を模索する姿勢が感じられる。

小説「からのゆりかご」、映画「オレンジと太陽」に描かれたように、イギリスの社会的養護状況の児童をオーストラリアに強制移住させた「児童移民」を謝罪し、映画「裸足の 1500 マイル」に描かれた先住民を迫害した歴史にオーストラリア政府は謝罪をした。こういった姿勢は国際的にはもちろん、国民一人一人にも伝わるものがある。このツアーでセッションのはじめには必ず先住民への敬意を示す。ケビン・ラッド首相が、2008 年 2 月 13 日の議会で、先住民アボリジニに政府として初めて公式に謝罪。現在、こうしたセッションの始めにはこの土地の先住民への敬意を示す宣言を行うことが政府から推奨されている。実施に滞在中すべてのセッションのはじめにアボリジニの土地に住んでいること、そこを迫害してしまったこと、そしてその文化、儀式、価値を大切にし、過去と現在と未来の長老に対する敬意を払うことが宣言された。日本にも似た経緯を持つ経過もあるが…。私の生まれ、



東北もこうした過去も盛り込まれた歴史がある。

オーストラリアも日本も

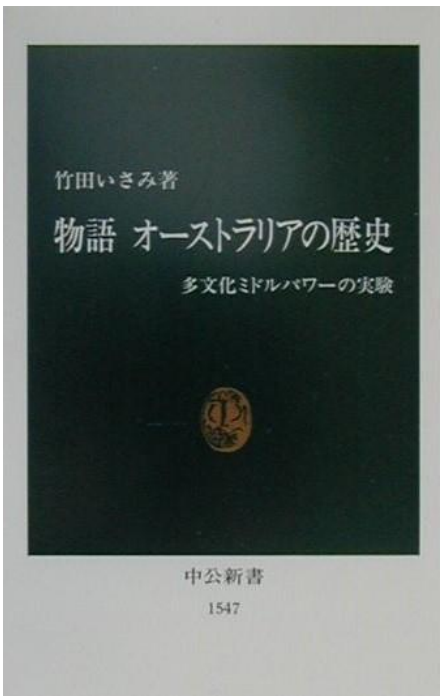
東太平洋、環太平洋地域の一員

オーストラリアにとって、日本は隣国の一つである。ビジネスの可能性、戦略的な可能性、協力の可能性…あらゆる関係が含まれている国同士である。第２次世界大戦でオーストラリアへ日本軍が行った空襲や特殊攻撃という史実も両国には横たわる。それらを乗り越える、許すなどを経ての未来を模索し続ける必要があるということである。

その後、ミーティングと夕食。Ｔさんの長期滞在用アパートメントで打ち合わせ。スーパーにもいく。この時点で、鼻炎がひどい。すでに機内から。メルボルンについて悪化。スーパーで探して買う。みるとインド製。調べると日本にも同じような薬有。一日１回。でも見た目が違いすぎる。錠剤が「水色の透明」なのである。ＳＦである。早速処方。それが意外と効いた。翌日には鼻水が出なくなった。即効性あり。

ホテルに戻り寝る。ラインで受講生、講師等グループをつくる。情報交換、事故防止のため。日本帰国時のコロナ関連証明の必要性が共有しきれていなくて、それぞれまちまち。Ｔさんの指導で、日本入国時に必要なＶＩＳＩＴＪＡＰＡＮの HP で作業開始。日本からワクチン接収証明写メをもらい、ＶＩＳＩＴＪＡＰＡＮに送ると検査不要の

青信号が点灯。翌日には税関申告もこれで済ませ、帰国のめどが立つ。ワクチン接種がない人、回数が少ない人はＰＣＲ検査で陰性証明を出して帰国に。参加の方々も何とか日本と連絡を取り、接収証明を補ったりして日本に帰国できそう。（続く）



臨床社会学の方法

（40）加害者プログラムの試み–京都方式の紹介

中村 正

1. 京都における加害者プログラム社会実装の取り組み

京都府では、「配偶者等からの暴力の防止及び被害者の保護・自立支援に関する計画（第 4 次）」に基づき、被害者支援の一環として、DV 加害者を対象としたカウンセリングを実施している。京都府の男性相談委託を立命館大学人間科学研究所臨床社会学プロジェクト（中村正が代表）が受けて実施する「DV 加害者カウンセリング・グループワーク」である。

この男性相談にはあらゆる職業の男性がやってくる。児童福祉の枠内で実施している虐待する父親むけの「男親塾」（大阪）とは異なり、参加者の広がりがある。子ども虐待の場合は、子連れ再婚組を含めたとしても子育て世代が中心となる。30 歳から 40 歳代が多数派である。DV 加害者は 20 歳代前半から 70 歳代までに広がる。

DV と虐待が事件化し、かなり報道されていることもあり、加害男性たちの意識改革はある程度は進んでいるといえる。最近来談する男性はモラルハラスメントではないかと自覚していることもあり、自らの非違行為を広く解釈するようになっている。暴力は身体的暴力だけではなく、精神的心理的暴力にまで拡大しているということは、相談にくることのできる DV 加害者たちなら知っている。この連載では、関係コントロール型暴力と定義してきたのでさらに拡張して理解して欲しいと考えている。

しかし、身体的暴力と心理的精神的暴力の対比は正確ではない。加害者に都合のよい定義になりかねないからだ。暴力の過小評価になるおそれがある。現行法では、心理的精神的暴力は保護命令の対象ではないから軽いと考えているようでもある。これは誤りである。

暴力認識の掘り下げのために相談を行う。カウンセリングを中心にした個人面談に加え、男性同士で経験を分かち合い、脱暴力をめざす取り組みのためのグループワークを組織している。この相談事業は 2019 年度にスタートした。コロナ禍で中断したこともあったが順調に相談が入っている。「男性問題相談室」と名付けた。

月に 2 回のグループワークを 8 回実施し、1 クールとしている。1 年間に 3 クール実施する（年に 24 回のグループワーク）。クールとクールの間に個人面談を行い、自己評価をはさむ。可能な場合は、女性へのパ

ートナーコンタクトも行う。ファシリテーターとコ・ファシリテーター（大学教員、臨床心理士・公認心理師)、記録係（産業カウンセラー、若者支援の NPO 運営者)、そして初期面接・連絡担当（開業する臨床心理士・公認心理師）の合計 4 名（現在は全員男性）で担っている。2023 年の第 3 クールの現在（2023 年 3 月段階)、2 グループ稼働している。一回 90 分としている。1 グループは常時参加者 4 名で行っている。両グループとも欠席の多い人は次クールもしくは個人面談に参加してもらうこととして、参加者はほぼ 100%の出席率で推移している。2 回目のクールからは 4000 円の参加費を徴収している。動機形成と問題整理のため、事前に 5 回の個人面談を実施する。継続した個人面談を希望する場合はグループワークと並行して利用可能で、有料となっている。長い人では 3 年間、参加している。

京都府と立命館大学人間科学研究所の HP の入り口には次のように記載してある。目的として、「DV 加害者が自らの行動に気づき、暴力に頼らない関係づくりを身につけることを目指します」と。対象者は、「20 歳以上の男性（京都府内に在住または在勤、在学している方)」とし、次のような参加者を想定している。①暴力を繰り返さない、更生意欲のある方、②自分を変えたいという積極的な意思のある方、③暴力に頼らないコミュニケーションをとりたい方、④男性として生きづらさを抱えている方、である。

男性問題相談室へようこそ!

2. 脱暴力の学校–京都方式ゼミナール

1）個人の課題に焦点づけたセミオーダーメイドの脱暴力ゼミナールが中軸

男性向けの相談は各自治体で取り組まれている。私たちの取り組む「男性問題相談室」は、「暴力と男性」を主訴とする男性を受け付けている。中心はゼミナール方式である。DV 防止法に根拠づけられた社会的制度としての加害者プログラムは日本にはない。あくまでも任意参加である。だからある程度の動機づけはある。その「自発性」を活用する。

体系的なカリキュラムとして構造化されたプログラムではなく、その男性のニーズに合わせて脱暴力が可能になるよう、自分の経験をもとにして暴力事件やその裏側にある課題を可視化していく。セミ・オーダーメイドとなるように、自らの暴力エピソードのケーススタディを展開している。会場の都合で 90 分しか確保できないこともあり、定員 4 人がゼミナールでは適切なである。

グループへのチェックインのあと、前回からの近況を語り、暴力をめぐるエピソードを毎回ホワイトボードに書き出す。自らの体験をもとにして、加害（性）と暴力（性）を言葉にしていく作業である。他の参加者からシェアするコメントをアサーションコミュニケーションとして聞く。「I メッセージ」を用いて出してもらう。この作業を繰り返す。グループワークそれ自体が新しいコミュニケーション様式の練習となる。参加者は、グループワーク専用のノートを持参し、熱心にメモをとっている。

意識しているのは、これまでの人生では

用いたことのない言葉の獲得である。自らの体験から立ち上がる暴力的なエピソードをとおして加害のナラティブを豊かにしていく。自らの行動が起こる必然の経過を自覚していく。自己の問題や加害を語る語彙として腑に落としていく。「ワードがワールドをつくる」という社会構成主義の言葉も紹介する。さらに自己理解と対になるようにして、被害者と被害の理解、他者の理解もめざす。それは妻や恋人、子どもの理解へといたる。これまでの人生で、それを暗黙に実践していたが意識化されていないような文脈を発掘するための言葉（概念）を紹介する。

それらをエピソードに重ねて書いていく。ホワイトボードに色を変えて言葉を強調していく。例えば、家父長制、ジェンダー、ガスライティング、男性性ジェンダー、女性依存、被害者支援、トラウマ、関係の非対称性、ミソジニー、女性嫌悪などのキーワードを紹介する。

これは長く加害者と対話して感じる、加害のナラティブの困難さに根ざしている。たとえば「I メッセージ」、アサーション、共感のコメント、エピソードに基づくロールプレイなど、グループワークでは定番のものを活用するが、やはり言葉がないことをどうするのが課題だと思ってきた。言葉がないと、現状を超えることができない。変革的ではないのだ。関係コントロール型暴力についても理解を深めていく。モラルハラスメントや心理的暴力という言葉を含んだ、関係性をコントロールしている自らのパワーに気づいていく。その変容を目指すことになる。

確かに、DV グループには、身体への暴力を振るう力という意味だけではなく、パワーのある人が多い。それは多様なパワーである。経済的、社会的、政治的、文化的な諸相でパワーを持つ彼がいる。それらは職業や履歴にも表れている。そしてそれを可能にするような恋人関係や家族関係を、身近な人間関係、つまり家族環境として構成している。

こうしたパワーの自覚は彼の責任である。パワーとコントロールが DV をはじめとした暴力的な人間関係だとすると、パワーとコントロールは彼の人生の生き方となっていることを理解していく。しかしそれが加害性や暴力性をもつものとして認識していない。身体への暴力は、被害が発生しているので認知するが、それを支えている関係コントロール型暴力の源にあるパワーとコントロールについては、十分には認知できていない。また、男性性ジェンダーという言葉も頭で理解している程度なので自らの行動や意識を理解するまでには至っていない。

パワーを持っている、あるいは行使できるということは、自らのこうした特性を無視しても生きていける力なので、自省的な思考の邪魔をする。男性性ジェンダー作用は下駄を履かせてもらって生きていける効果ともいえるので、厄介な作用を果たしている。だから理解が進まない。自らのパワーは誰かの支えによって可能となっていることに気づいていく工夫がグループワークである。その中軸がゼミナールである。こうしたパワーとコントロールは男性性ジェンダー作用として非対称な関係性を構成していく。それを掘り起こすことになる。

２）たとえば、非対称な関係性を体験した例をたくさんだしていく

非対称な関係性のわかりやすい事例を紹介したことがある。恋人同士のコミュニケーションに潜むラインでの会話である。恋人間暴力とまでは言えないが微妙な亀裂を生じさせるかもしれない会話だった(『対人援助学マガジン』第 12 巻第 2 号、通巻第 46 号、2021 年 9 月)。「臨床社会学の方法(34) 関係の非対称と権力の勾配 －『俺のとっている講義が休講になったのでこれから会いたい』とラインで言われた女子学生と考えたこと－」として書いた。

副題にあるようなメールを受けた女子学生が講義の後、相談にきたので、翌週までに考えたことをまとめた。当の女子学生はきちんと No と言えた。しかし相談はまた別のことであった。こうしたやり取りはジェンダーの意識に照らすとどんなことが言えるか、何かもやもやの残るやりとりだったのできちんと整理をしておきたいというのだ。彼女は逆のことがあっても同じようなことはしていないという。

この事例は「非対称な関係性」の好例である。そこでは、「①他者の時間を奪うことの無配慮、②感情労働をしている、③嫉妬なのか、④恋人間暴力の萌芽なのか、⑤性的同意について、⑥相手の意思決定を尊重すること、⑦ストーキングのはじまりなのか、⑧理由を説明することの負荷、⑨女性としてみるのか学生としてみるのか」という諸点について記述した。恋人である男子学生のメール（コミュニケーション）のもつ非対称な関係性について深く掘り下げてみた。つまり、2 行程度のラインメールから恋人同士の関係性を規定しているマクロな社会構造がみえてくる。加害性や暴力性へと展開してくリスクをもった「関係コントロール型暴力」のほう芽の典型のようだ。このように、ひとつのエピソードを掘り下げていくにはゼミナール方式がよい。エピソード想起は、事件としての身体的暴力については比較的語りやすいが、水面下の関係コントロールの多くは暗黙的な実践なので思い出すのに苦労する。エピソードの掘り起こし作業である。グループワークでやっていると想起の連鎖が起こり、たくさんの事例が語られる。それらのいくつかを紹介していこう。

３）反対の側から考えてみたらおかしな事態には差別が潜むことの理解

こんなことが話題になった。「夫の着るものを考えて購入し、用意する妻がいる。このことをどう考えるか」という内容だった。そこで逆を考えてみた。私の担当する男性相談事例に「監視」のようなことが含まれていた。妻の着る物を夫がアレンジしてお金もだす。妻に似合っているかどうかは自分流の判断だろう。妻の好みというよりも夫の好みをもとにしているカップルだ。これは善意か、愛情か、または束縛か。お金を出してくれる。いつも洋服を買う時にはついてくるらしい。これが続くことが奇妙だとその女性は感じていた。

妻が主語になることはよくあることだ。「家内には頭があがらない」と第三者によく語る男性がいる。「私が着るものは下着も含めて全部妻任せだ」といって笑っている男性もいる。監視のように感じる先の事例とはまったく非対称である。

ゼミナールでは、暴力の体験のなかに、暴

力以前のこうした特徴があることを視野に入れる。エピソードを語る対象を身体的な暴力だけではなく、それ以前の非対称関係性を指摘することになる。「全部家内任せ」と豪語することは、女性を家内役割に閉じ込めるが、相互に愛情だと考えている。逆に、夫が妻の着る物を買いにいく例では監視のようにもみえる。非対称なのだ。相互作用が対等ではない。現象の形態や意味づけが異なる。ゼミナールでダブルスタンダードの現実を洗い出していく。暴力性でも加害性でもなく存在している暴力前史（全史）と考える。自らのパワーに無自覚で無知で居られる暗黙の実践の領域である。

この領域を視野に入れる。だから脱暴力への過程はそう簡単ではない。これまでその前史＝全史も含んだ生き方の習慣があり、生態学的な、自己と他者を取り巻く環境を構成している。それが脱暴力の対象としても設定されるべきだろう。たとえば、解決を急ぐこと、問題解決について自分で決めてしまうこと、もう自分は大丈夫と思い込み相談に来なくなること、「離婚してやる」と言うこと、相手も悪いと述べるなどが男性問題相談では散見される。したがって、暴力の出来事それ自体というよりも、暴力性を含んで成立している彼の日常生活という生態学的な環境や行動のシステム、つまり関係性の組成の仕方自体を対象にして脱暴力を検討していく。

出来事としての身体的暴力は氷山の一角なので、その下に沈んでいる膨大な量の塊を溶かしていく。対話では，暴力を肯定する文脈を探る。「図」としての暴力事件だけではなく、「地」としての暴力や抑圧を無自覚に包含する彼のミクロ環境へと降り立っていく。そのためにも言葉が必要となる。氷山のたとえも理解しやすいだろう。水面下の方が大きく、暴力だけではなくそれを支えるすそ野にある文化、思考、感情をこそ問題にしていくのがゼミナールだ。

ポイントは二点。非対称な関係性があり、それは権力の勾配によってつくられていることの理解である。マジョリティとなる側（この場合は男性）がこれら諸点への意識的な理解を必要とする。本マガジン「社会臨床の視界」（第 12 号まで）でも紹介したが、非対称性は言葉がないことを考えると分かりやすい。たとえば、「看板娘」、「箱入り娘」はあるが、「看板息子」、「箱入り息子」はない。婿養子と嫁養子、ワーキングマザーとワーキングファーザーなどもすべて同じである。女性の社会進出と男性の家庭進出も同じだ。後者の言葉はなく、非対称だ。これらは家族を介したジェンダー秩序や家制度に根ざしている。そこには社会的な権力の編成の効果がある。

また、「肌色」と記されたバンドエイドを貼ってその表記のもつレイシズム的な意味を何も感じないことも同じだ。これらは日常のなかにある構造的問題の表出であり、暗黙理論となり、当たり前のようにして差別をはらんだ日常が再生産されていく。この点については「臨床社会学の方法(10) サイレンシング（沈黙化作用）−語られていないこと・語りえないものがあることへの配慮−」（『対人援助学マガジン』Vol.6 No.2、通巻第 22 号、2015 年 9 月）で詳述した。

4）生命の感受性の違いを指摘した妻からの手紙

こんな例もある。DV 相談に来た 40 歳の男性。彼女の手紙を持参していた。妻がカウンセリングに行くことを勧めたという。妻命令という。カウンセラーに読んで欲しいと渡された手紙に次のようなことが書いてあった。恋人同士だったころ、ドライブをしていた。夜、何かの小動物を轢いたような衝撃があり、助手席にいた彼女が車を止めて確認したいと言った。彼は無視して走り続けた。車の点検をしたり、もし何かの動物が死んでいたら保健所に連絡したり、路肩に寄せておいたりといろいろなことをすべきだと思った。このときの「違和感」がいつまでも残ったと語る。どうしてか。将来、結婚して子どもができたら大丈夫だろうかと思ったのだという。私は生命の感受性の異なりだと思った。暴力、加害−被害への感じ方の次元からの差異がある。その都度、確認しつつコミュニケーションができればいいのだが、会話さえできないとすると、「蟻の一穴」にならなければよいのだがと思ったエピソードだ。

男性加害者への相談では、合意がとれれば女性にも話を聞く機会（パートナーコンタクト）を設ける。被害者との対話の後の加害男性との相談は、質的に充実するからだ。暴力性・加害性−被害性の認識が異なることを理解できる。暴力そのものの意味づけも異なる。

ほかにもこうした違いはたくさん語られる。たとえば子どもの発達障害の受容のこと。父親がなかなか認めないことが多い。妻は発達相談に行かせたい。夫は、子どもは多動で元気な方がよく、いつかは成長とともに収まるといって取り合ってくれない。子どもが発達障害かどうかというよりも、子どもの行動の特性を案じる妻がいて、そのことを理解してほしいと思うだけなのに、いきなり決めつけることへの不満が溝をつくっていく。妻はせめて夫婦で話をしたいと思っているだけだがそんな時間はないので無理だというばかりだ（中村正「加害者の変容可能性をひきだすための対話」『精神科看護』2023 年 3 月号、50 巻 3 号）。

5）婿養子を家族システムとしてみていた

その頃は十分な言葉は持ち合わせていなかったが、幼い頃から非対称な関係性に気づいていた。それは私の家族の体験である。私の父は母の実家に入り、母の姓を名乗っていた。戦後なので、家制度はなくなった昭和 30 年代、地方では家制度が意識の上では残存していた。婿養子の規定は民法上、廃止された。しかし人々の意識のなかでは生きていた。父は「自分は婿養子だ」とよく語っていたことを覚えている。これは制度がないので奇妙な言い方だったし、子どもには理解できなかった。漫画・アニメ『サザエさん』の登場人物になぞらえ、妻の実家に同居している夫が「マスオさん」と言われていたので、漫画をとおしてそうした家

族もあるのかと納得できないが理解をしていた。マスオさんは妻サザエの父母の養子にはなっておらず、さらにマスオ・サザエ夫妻の姓は夫側の「フグ田」であるのだが、それでも婿養子と言われる。ますます理解不能だった。婿養子規定が削除された後も、妻の氏を婚姻氏とした娘の夫が俗に「婿養子」と呼ばれてきたし、私の父のように自らもそう自称していた。婚姻届で相手方の氏を選択しても、単に妻側の氏を名乗ることになるだけであり、それだけで妻の父母と養親子関係が発生するわけではない。「嫁養子」もありうるがそう呼称されないのは、この家制度の名残なのだろう。

呼称の非対称な関係性はこうした歴史の反映である。対応するワールドがすでにないのに、ワードだけがあるという逆転した事例である。

単に言葉だけが残っているというよりも、家族システムとしての関係性を規定する作用を果たしているように父母の関係性をみて感じていたことも覚えている。

６）「些細なことで」という言い訳こそをほりさげる

加害の男性は、必ず「些細なことで」と言い訳する。暴力を過小評価する言葉だと考えての形容だが、些細なことこそが掘り下げるに値する。些細なことからどうして殴るのか。暴力に至るのだから、それは決して些細なことではない。こうしたことを取り上げる。たとえば、妻が出ていった。別居が長くなり、荷物を取りに帰った後、空っぽになった妻の使っていた部屋をみて、改めて感じた参加男性がいる。「占拠していたスペースが違う。」と。生活空間の非対称性に気づいたという。また別の男性。夫は「今日は飲み会にいく」という。妻は「今日飲み会にいってもいい？」と聞くという。これは単に経済的な非対称性だけではなく心理的な関係性の非対称性だと思うと発言が続く。

互いにないものをもっているのであなたを好きになったと妻が恋愛中に言い、自分も共感したので一緒になったが、パワーとコントロールの関係が内包されていると、相手にはないようなリーダーシップを発揮しやすくなり、ついつい上下関係がでるような、つまり「相手にはないもの」が上昇してくる。グループワークで言葉を得て自己省察をしていた男性がいた。相互に補完し合うことさえもがパワーとコントロールの渦のなかにあるとコメントした。

こうしたことを集積していくゼミナール方式の脱暴力の学校はとても盛り上がる。メモをとることが自然と多くなる。

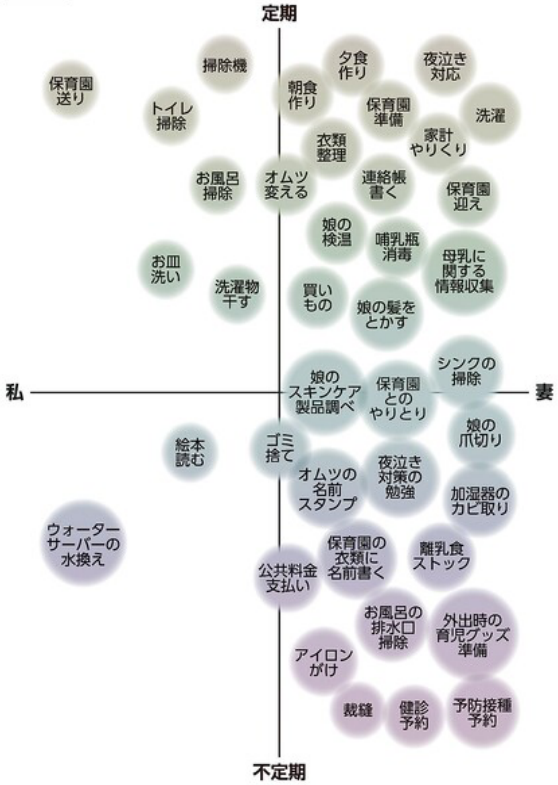
３　非対称な関係性の可視化（マッピング）の好例−家のなかのことやっているつもり！

NPO を運営している前田さんが家族進出の体験をまとめている（前田晃平『パパの家庭進出がニッポンを変えるのだ！』光文社、2021 年）。非対称な関係性という言葉こそ用いていないが、とても参考になることを書いていたので紹介しておきたい。これもよくある出来事だ。

これを田中さんは「俺だって頑張ってるんだ論争」と名付けたという。結果は、完敗だったそうだ。一目瞭然のマッピングだ。「男性育休を取ろうという人なら、程度の

差こそあれ、家事育児をそれなりに頑張ろうと決意していることでしょう。私だって、そのつもりでしたとも。でも、本人目線の頑張ってる度と、実際にやれている度は、残念ながら違います。我が家でも「俺だって頑張ってるんだ」論争が勃発しました。」と語る。「家事も育児も、もう少し分担してくれないと、私が復職したら立ち行かなくなる。こう宣言した妻に対し、『もう十分やってるでしょ！』と反論しました。だって、俺は頑張ってる！お皿だって洗ってるし、お風呂だって掃除してる！おむつだって替えてるぢゃないか!! 侃々諤々の議論の末、お互いが担当する家事育児をすべてリストアップすることになったのですが……。」と振り返り、マッピングをしたという。一目瞭然の違いだ。思い込みと事実は違う。細分化していく、日々の家族運営の事実を具体的に切り出している点がわかりやすい。マイクロな実践から立ち上がる違いは明確だ（「俺、家事やってる」「どこが？」夫が絶句…夫婦のかみ合わなさを示す"あるデータ"、2022 年 5 月 1 日、『プレジデントオンライン』）。

図表2 前田家の家事マッピング



夫婦の家事育児の偏り（前田家の場合）

筆者作成

４．被害と加害も非対称であることの理解 –身体的な暴力を支える暴力性･加害性があること

『どうして男はそうなんだろうか会議』（清田隆之、澁谷知美、筑摩書房、2021 年）という書物がある。議論をしながら男性性ジェンダー研究について五人が論じたものである。私は、「男性性と暴力–コミュニケーションに潜む加害と被害の両面から考える」と題して対話した。社会学者の澁谷知美さんと、市井の研究者、清田隆之さんをホストとし、他に五人の男性たち（西井開、中村正、平山亮、前川直哉、武田砂鉄）が招かれる形式で、「これからの男」のあるべき

姿を考えるための「会議」を行った記録である。澁谷さんは、現代が男性の「被害者性」（男の生きづらさなど）と「加害者性」（男性特権など）に関して、「同時に語られている時代」であると言う。「男はつらいよ型」の物語でもなく、「男はすべて狼だ」型の、男性をすべて加害予備軍扱いするような極端な一般化の物語を語るべきでないという。

重要なのは、男性性ジェンダーが作用して男性の社会的心理的容態を構築していることと、男性性のグラデーションがあり、そこに他の社会的諸属性が交差し、マッチョで、支配的な男性性から、不安定で脆弱な男性性、周縁化された男性性までの、とても幅広の連続体が横たわっていることの理解である。加害男性のナラティブをとおして、その連続体のある部分を埋めていくことを想定した書物である。

その連続体のなかには、男性同士の暴力、男性の性被害や暴力被害、周縁化された弱者男性の存在、反社会的集団に属する男性性の誇示などの幅がある。その男性性ジェンダー連続体を意識しながら、暴力性と加害性を表現する語彙と文脈を育んでいく。既製品の言葉で加害を語っても、加害者のナラティブは生成しない。逆に、「地」の部分に根差した、つまり、「関係の非対称性」を理解した上での気づきにもとづく語りが豊かになることをめざす。

男性たちには、そもそも、加害や被害について語るための語彙が少ないことを指摘してきた。その幅の中のどこかに置かれた、加害者となる男性が、かつて被ったことのある暴力の被害をきちんと直視できるだろうか。少年の頃に受けた虐待、体罰、いじめ、さらに心理的な屈辱、性暴力としてのからかいも含めた恥辱などは、男性性ジェンダーにより、沈黙へと抑圧されることがわかってきた。自らの被害のナラティブは弱いと思うことしばしばである。支配的な男性性ジェンダー作用は暴力の被害を黙らせる。これを沈黙化作用（サイレンシング）と名付けた。被害の語りを抑制するように機能する。被害を受けた男性もその支配的な男性性ジェンダー意識を内面化しているからである。被害は沈黙する。言葉が少ないと、自らの被害の理解は進まない。そうすると自らが与えた被害の理解も進まない。先に紹介した被害者が感じ取っているような心理的な不安や傷つきの理解も弱くなる。

「脱暴力のグループワークにくると脱力していくようだ」と語った男性がいた。「脱暴力は疲れる」ともいった。暴力性を取り除くと、男性としての存在意義がなくなるという。それに変わるものを構築しないと、脱暴力の取り組みは彼の視野に入らない。彼にとって暴力を支える男性性は、一種の資源として機能している。その資源は力（パワー）なので、それに代わるものを入れ替えていくことになる。自らの暴力被害の事実でさえも、男性性ジェンダーを介して、克己の対象となり、忘却し、沈黙のなかへと沈め、対抗して強くなる経験として期待されてしまう。自分のなかでも被害は過小化され、加害は高揚する。

こうして、暴力は認めるが加害は認めないという男性性ジェンダー作用がつくられる。つまり加害性の否認である。グループワークでは、「確かに殴ったが俺は悪くない。妻や子どもにも問題があった。」と話す男性が多い。加害性の認識の欠落に貢献するのはここで語られる他罰性である。こうした

ことを乗り越え、「加害者にきちんとなる」ことが重要となる。

５. 特権への気づき–マイクロアカウンタビリティ

ゼミナール方式の加害者プログラムは、「マイクロアカウンタビリティ」と位置づけている。第 48 号（2022 年３月)に「臨床社会学の方法（36）暴力の文化—Micro Action for Violence-Free プロジェクト構想—」として書いた。「プロジェクトは自己の再生に向かうための小さな一歩になるように体系化し、その総称として Micro Action for Violence-Free（脱暴力のための小さな一歩プロジェクト）と名付けた」と記した。「マイクロアクションとは、マイクロアグレッションやマイクロ・マチズモからの脱出という意味であり、まずは身近な親密な他者との関係において可能なことをするという意味でもある」とも。

これを男性問題相談室では、マイクロアカウンタビリティと位置づけている。脱暴力にむけて個人ができることをすべきだからである。マクロな男性性ジェンダー作用をもとにしつつも、個人の説明責任、暴力を振るったことの責任の果たし方という意味である。同じ男性性ジェンダーのなかを生きていても暴力を振るわない男性がいるからである。個人の脱暴力への責任を召喚するための臨床性も重視している言い方である。

では、誰への説明責任なのか。被害者となる他者である。身近で親密な関係にある人である。被害者理解は暴力と加害の臨床では難しい課題となる。ゼミナールでは加害のナラティブを掘り起こしているが、まずは、自己の加害性と暴力性の認識を獲得するために不可欠だからである。なんと言っても、脱暴力は自らの責任である。そして被害者との関わりがある。加害性の理解を進めるためにも被害性や被害者の理解が大切だが、1 年程度のプログラムでは難しい。なかなか届かないという感触である。特に、加害や暴力の定義を関係コントロールにまで拡張すると、その乗り越えは男性性ジェンダー作用や家族関係の変化も対象になってくるので、さらに工夫と時間がかかる。

こうした加害者対応の経験をもとにすると、とりわけ恋人間暴力のテーマの裾野にあるような、先のラインメール事例は数多いと推測できることもあり、予防のためのプログラムへと組んでいければよい。とはいえ、現在の当事者への対応が急務なので、被害者支援との関係がせり出してくる。これを「被害者支援の一環としての加害者対応」として位置付け、議論の合意を政策形成の場でも作ってきた。

こうした観点から、現在、内閣府で加害者対策の議論を行なっているところだ。被害者支援と加害者対応は、両輪というよりも、被害者支援が駆動してその一翼に加害者対応があるべきこととして表現したこともある。

このゼミナールでは、自己啓発にも役立つように、これまでは使ってこなかった語彙を自己の暴力エピソードをとおして理解し、他者と確認しあいながら腑に落としていくことで、脱暴力への課題を上昇させることにしている。

さらに社会構築主義的な観点から、エデ

ュケーショ education、ケア care、ジャスティス justice、ジェンダーgender の交差性（intersectionality）を統合した脱暴力の学校になることを念頭においている。加害の交差性（intersectionality）はあまり語られていないが、マジョリティ特権の効果としてのパワーであることは自覚すべきであろう。そうしたことを知らないということ、つまり無知であること自体にも責任がある。そのことをエピソード語りをとおして学ぶ。つくられた無知に上にあぐらをかいていることから特権を考える。マジョリティの特権についてはさらに別に詳細を論じていきたい。

立命館大学/社会病理学・臨床社会学
2023 年 2 月 28 日受理

団遊の脱線的経営言論
給与（報酬）編　1

社員同士はもちろん、社長同士でも話題にしにくい給与の話

新卒で就職をせずに、フラフラと夢を追っていた私が、アルバイト以外ではじめて報酬を得たのは、とある雑誌に原稿を書いた際の原稿料でした。大学を出て 1 年と少しが過ぎた頃だったと思います。その後、縁があって雑誌編集の仕事もするようになりました。

雑誌編集者の仕事のひとつに、外注スタッフへの「ギャラつけ」があります。ページ予算があり、一緒にページを作った誌面デザイナー、カメラマン、イラストレーター、ライター、スタイリスト等への支払額を決めていきます。

その配分は、媒体によってなんとなくの目安はあるものの、基本的に編集者が決めていきます。「良い感じに撮ってくれたから 5 万円にしよう」「この大御所ライターとは今後もつながりを強固にしていきたいから目安から 5 千円あげて 3 万 5 千円に」「初仕事で満額支払って調子にのられても良くないから、ここは 1 万円に」等、当時、新卒 2 年目相当だった私が、ほぼ全員が年上の外部スタッフの報酬を決めていきました。その過程で、報酬決定権者には、実力以上に気遣いが集まることも実感しました。

＊＊＊

自分で会社をはじめて、給与をいくらに設定するかを考えたときに、目安にしたのは新聞の求人欄やインターネットの求職サイトでした。同業を検索し、だいたいどれくらいの金額にしているか。「25 万円～30 万円くらいと設定すれば給与で大きく負けないな」と考えた記憶があります。新卒社員の場合も同様に、新卒に限った求職サイトを見て、給与が「いい意味でも悪い意味でも目立たない」金額に設定しました。

賞与は業績連動給と考えるのが通常ですから、求人票に半ば保証的に「3 カ月」や「4.5 カ月」と書いてある企業を見ては、利益を上げる仕組みがしっかり整っているのだなと感心しました。

そのような、大した根拠のない給与設定にも関わらず集まってきてくれたメンバーと会社をやりながら、私はいつも給与改訂時期が億劫でした。同じもつまらないだろうから、5,000 円くらい基本給を上げようか、などと考えるのですが、そこに大した根拠がありません。

同時に、自分の報酬を自分で決めるのも億劫でした。「社長なんだからもうちょっともらった方がいい」というようなアドバイスも、当時もらったりしましたが、「社長は給与が高い」というのも分かるようでいて、私には腑に落ちませんでした。働く意義において、給与はひとつの大きな要因なのに、全員で見て見ぬ振りをする。経営者を始めた当初は、そんな風に「給与」を扱っていた気がします。

＊＊＊

一方で、薄給を嘆く大学時代の友人にはこんなアドバイスをしていました。
「給与を上げたければ平均給与が高い業界に行くことだ。例えば平均年収が 400 万円の業界で 600 万円を目指すよりも、平均年収が 600 万円の業界で 600 万円を目指す方が、可能性は圧倒的に高い。前者の場合はクラス 2 割の優等生にならないといけないが、後者の場合は平均点を取ればいいからだ。加えて言えば、クラスメンバーのスキルレベルは、大差がない。平均年収の違いは、ビジネスモデルの違いが生むもので、働く個人のスキル差が生むものではないからだ」
このアドバイスには、当時、多くの人が納得していました（それを理由に業界またぎの転職をするかどうかは別の話ですが）。

自社内では「見て見ぬ振り」をしている給与なのに、外では偉そうに自説を述べている。それではいけないなと思い、自社の給与の在り方を改めて考え直すことにしました。

＊＊＊

給与希望額を聞いた時、多くの人が「もらえるに越したことはありません」と答えます。尋ねた方も「そりゃそうだな」と思うし、できればたくさんもらって貰いたいとも思います。しかし、給与は根拠なく分配するものでもありません。お金が青天井にあるわけでもありません。そのため、給与テーブル的なルール作りに勤しみます。

私はこの「ルール」というものが好きではありませんでした。ルールは設計者の意志や意図を反映するもので、決して公平なものではないと考えていたからです。加えて、ルールを作ると、ルールを守るための保守コストが莫大にかかると思っていたからです。

しばらく悩み続ける中で、当時のメンバーたちとも意見を交換し、ある時「自分で自分の給与を決めればいいのではないか」と思い立ちました。自分で決めれば、金額がどうあれ納得度は多少上がるのではないか。いきなり労働分配率や分配額を上げることができない中で、それでも「変わった」と実感してもらうには、額ではなく「決め方」にフォーカスすればどうか。

この思い付きは悪くないものに感じました。そこで、早速メンバーに声をかけ意見交換をしました。結果は、必ずしもポジティブな意見ばかりではありませんでした。「そもそも何を基準に決めればいいのか分からない」「もし 1,000 万円と言ったら本当にもらえるのか」「給与はいくらでもいいので、会社に決めてほしい」等々。

しかし「給与の自己決定」に可能性を感じた私は、メンバーと相談しながら、足かせとなるものをなるべく排除していこうと考えました。「自分で自分の報酬を決められる会社」へ舵を切り始めた瞬間でした。

＜２につづく＞

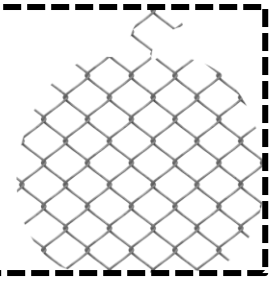
文／だん・あそぶ（団遊ヨノナカ編集舎　主宰）　https://www.danasobu.net/
「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な会社の経営に携わる一方で、贈与型社会の実現に向けたプロジェクトに取り組む。元は雑誌の編集者。21 年 9 月に第一線を退いたが、アソブロック株式会社で貫いた独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され、全国でワークショップや講演も行っている。
団遊の組織論；https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/
団遊の採用論；https://job.cinra.net/special/asoblock/
仕事を辞めたくなったときに；https://goo.gl/bFQdpC

解放の心理学へ

（1）

災害支援者支援

藤　信子



最近の閉塞感を思うと、感じること考えることを保証する場をどこに求めたらよいのかと思う。そういう場は、どうしたら作れるのだろうと考える時に、Martin-Baro の「解放の心理学」が浮かんだ。私は戦争を体験しているわけではないし、物質の面では今は特に悲惨な問題はない。しかし、どこか表現して考え切れていないような感じがする。そこで解放の心理学へアプローチしようと思うが、まず自分にとっての、身近な考える場の一つである災害支援者支援のグループについて、その特徴を見てみようと思う。

日本集団精神療法学会（JAGP）の相互支援委員会（私も委員の一人である）が、開催する「災害とメンタルヘルスに関する相互支援グループ」は、東日本大震災直後に始められ、「東日本大震災等の相互支援グループ」という名称で、2021 年 3 月まで各地で 56 回開催された。東日本大震災から 10 年後 2021 年 3 月に、災害とメンタルヘルスについて考えるという意味で、上記の名称に変更し、2021 年 6 月から 2022 年 10 月まで、5 回開催されている。委員会設立当初の目的は、東日本大震災の支援者支援を目的としていた。この地震と津波による広範な地域の被災に対して、支援に行く人が、公的支援、ヴォランティアも含め、増加するだろうということを考え、災害支援者支援を長期的に考えていこうとした。その後、原子力発電所の事故の甚大さが分かってくるに従って、これまで経験したことにない災害をどのように理解していくのかという問題も加わった（藤　2012）。

災害支援者支援という概念は、あまり一般的ではなかったのか、「被害者支援」と間違われたりして、日本では災害支援者のメンタルヘルスに関しては、阪神・淡路大震災から、なかなか進んでいなことを実感させられた。相互支援委員のメンバーとしては、阪神・淡路大震災の後、震災について語るグループを実施してきた経験から、災害支援者が、無力感、罪責感、孤立感を持ちやすいことを体験してきたことが、この委員会の設立に大きく影響している。このグループに関しては、この対人援助学マガジンで、少し触れている。また集団精神療法（グループ）という方法についても触れてきた。ここでは、このグループに参加したメンバーの体験について検討した研究（藤ら　2021）を見ることで、災害支援者支援を通して、安心して語れる場について考える。

2011年3月から2018年10月まで、「東日本大震災等の相互支援グループ」（以下、相互支援グループ）を49回開催した。そこでのグループの経過と機能は、以下のようであった。初期には、災害への不安、怒りなどの思い、支援に際しての困惑などの感情が表現され、グループはそれを受け止める場となっていた。3年を経過するころは、被災地は忘れられているのではないかという不安原発からの避難者への支援の難しさや無力感の表現が目立った。5年～6年経過する中では、　支援者の疲労と支援終了に関する思いも語られた。7年目になると、支援グループの必要性も語られながら、各地で起きる災害について語る場となり、支援の拡げ方も考えるようになった。

相互支援グループを継続する中で、参加メンバーが、グループの中で、どのような体験をしているのかを見るために、第1回から第49回までに参加したメンバー延べ797名のうち5回以上参加したメンバー9名にインタヴューを行い、質的研究の複線径路等至性モデル（TEM）を用いて分析し、次の3類型が得た。

相互支援グループの中で、感情・気持ちを表現できたという4名【類型1】。　ここに属するメンバーは、支援の当初は、被災者の複雑な状況を知り、無力感を感じた。また他のメンバーは、被災地の複雑な状況をグループの中でも伝えきれずに、もどかしさを感じてもいた。参加する中で経験のあるセラピストでも支援に悩んでいることを知り、無力感は自分だけの問題ではないことを知り、無力感を持ちながら、支援を続けることが出来た。

相互支援グループに参加することで、被災者の話を聞けるようになった3名【類型Ⅱ】。被災地に支援に行ったメンバーは、支援に行く前に追うご支援グループに参加していたため、被災地での経験を相互支援グループで話すことができ、心理的安定を得たと考えていた。この体験から、あるメンバーは自分が感情を扱う治療者になったと考えた。ここには、被災地支援に行かなかったメンバーもいたが、彼らは相互支援グループの中では、支援にいかない人も受け止められていると感じ参加し続けた。そしてグループの中で話されることを聞き、どのように悲惨な話を聞くかを学んだ。この類型のメンバーの特徴は、参加し続けることで、被災者の話を聞けるようになったことである。

【類型Ⅲ】被災地在住のメンバーで、被害を殆ど受けていないことに肩身の狭さを感じ、支援者の役に立ちたいと思い、グループに参加し続けるうちに、他の地域の災害のグループにも参加していく中で、様々な災害や被災地支援に関心を持つになった2名。

継続して参加したメンバーの体験過程を見ると、相互支援グループの次のような特徴が見えてきた。

①　感情の表現

メンバーは相互支援グループの中で、災害に対する不安、無力感そしてもどかしさを表現した。参加することで、自らの無力感、孤立感などを自分だけの体験ではないことを知り、耐えることが出来た。あるメンバーは災害の辛く悲惨な状況はすぐには理解できなかったが、継続して参加するうちに聞き取れるようになったと言った。メンバーが感情を表現できる場、そして受け止められる場という集団精神療法の特徴が災害支援者支援に活かされたと言える。

② 参加の契機

災害支援者は全国各地から被災地に行くことを予想し、会場の設定に各地の研究会の協力を得て、各地方で開催された。そこで各地の研究会に親和性を持っていた人たちが、相互支援グループに参加し、災害や支援について話した。

③ 支援者の心構え

災害の被災地に行くことはできないが、そこに近づきたいと思い、相互支援グループに参加し、その中で、受け止められていると感じ、続けて参加したことで、被災者の悲惨な話をどのように聞くかを学び、支援差としての心構えをえた。

④ 時間をかける

メンバーは、体験を話すには時間がかかることに気付いた。日ごろはつらい話を表に出さないため、グループで人の話を聞く中で、自分の感情に気が付く。これは集団精神療法の特徴がよく表れていると言える。

⑤ 様々な災害・被災地への関心

東日本大震災の被災地に住んでいるメンバーが、阪神・淡路大震災での相互支援グループに参加して、長い時間の経過の後も人々は災害のことを忘れないことに気が付いた。そして様々な災害に目を向けるようになった。

参加メンバーの体験から見ると、相互支援グループが、感情を表現できる安全な場として機能したことがわかる。そして、そのようなグループで自分の感情に気付くには、時間をかける必要があることも明らかになった。このグループの中で、メンバーは考え、新たな力を持つようになったのだと思われる。

―文献―

藤　信子、安部　康代、髙林　健示、長友　敦子、針生　江美、藤澤　美穂（2021）東日本大震災等の相互支援グループへの参加における体験過程-複線径路等至性モデル（TEM）による分析－．集団精神療法 37（1）、75－86.

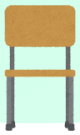
カウンセリングのお作法　第 34 回

CON

Counseling Office Nakajima

CON カウンセリングオフィス中島　中島(水鳥)弘美

～　面接の空間　(1)　～



前回は、初回面接での全体の時間管理について話しました。今回は面接がおこなわれる空間について取り上げます。

カウンセリングは、原則として話し合いをする場所にクライエントさんが来所していただきます。対面以外では電話による相談、最近ではオンラインを利用しての面接という方法もあります。また、何等かの事情により来所できない場合は、カウンセラーが自宅に出向いて面接をおこなう訪問カウンセリングもあります。このようにいくつかの面接スタイルがありますが、カウンセラーとクライエントが話し合いをするスペースやコミュニケーションの手段によって、相談のしやすさなどに影響する可能性もあると考えています。

対面での面接希望

コロナ禍での緊急事態宣言の発令時は、来所における対面のカウンセリングを取りやめました。予約をしていただいたクライエントさんに対面以外の面接方法等について希望をうかがったところ、半分以上の方は、来所を希望されたため、緊急事態宣言明けに予約が延期されました。電話や zoom 等での面接を希望された方とは、操作方法を確認しつつオンライン面接を行いました。すると、新しい手段にすぐ慣れる人もいましたが、パソコンの操作に気をとられて、これまでのように自由に話ができないという感想もいただきました。さらに、ご自身の自宅からであれば比較的話しやすいのではないかと考えたのですが、実際は、まわりの音などが気になり集中できないということでした。家では話しづらいため、わざわざショッピングモール等の駐車場に行き、車の中からの相談もありまし

た。その場合も、車外の動きが気になり、面接中にキョロキョロしている様子がわかりました。オンライン面接では、話している途中のわずかな「ずれ」がややわずらわしいという声もありました。

現在では、対面での面接を再開していますが、このように対面以外での環境などの状況から、やや負担を感じることが多く、来所しての対面がもっともよい、話しやすいということが明らかになりました。

カウンセリングでは対面が最も適切であるというわけではなく、これまでと同じスタイルでの面接が安心できて話せる環境であると受け止めているところです。

空間づくり

面接スペースに来ていただいての対面は、警戒することなく話をしていただけるように、さまざまな視点から空間づくりをしています。前回、時間管理についても記したように、カウンセラーが、面接の約束の時間や、終了時間を守ることもその一つとなります。万が一、面接終了時間が長引き、次の予約時間にずれ込んでしまうと、鉢合わせの可能性があります。他のクライエントさんと顔を合わせないようにすることが求められます。

さまざまな感覚への影響

実際の面接室では、どのような視点からセッティングをしているのか、まずは、聴覚に関する、音、人の話し声について考えます。

面接が行われる場所は、外部の音が入ってこないように、また部屋の外に話し声がもれないような空間が必要です。面接室にある窓は、二重サッシで防音効果を高めています。カフェのように人が大勢いる場所での話し合いは決しておこなわず、個別にかつプライバシーを守れる環境でお話をうかがいます。

光と明るさ

面接室の窓から外の景色が見えます。薄いカーテンと遮断カーテンの二種類があります。面接の時間帯にもよりますが、カーテンが開いていて外の景色が見えると、誰かにみられているような気がして落ち着かないというクライエントさんの場合には、昼間でも遮光カーテンをします。反対に外の景色が見えて視界が広がる方が、窮屈な感じがしなくて良いと感じるクライエントさんの場合には、薄いカーテンのみで自然光が入るようにして、クライエントさんの感覚に合わせます。

照明も工夫をしています。

面接室の照明は、蛍光灯とほっとなごむ暖色系の白熱灯との二種類を同時に点灯しています。蛍光灯の白っぽい光だと緊張してしまう可能性がありますが、すっきりした印象にもなります。暖色系の白熱灯では明るすぎない暗すぎないように調光機能を使い、季節、天候、時間帯に応じて、微調整をします。

面接室の理想の壁の色は淡い色ですが、現在行われている面接室の壁は真っ白のため、暖色系の照明で補っています。

飾らない部屋

実際の面接室が極めてシンプルなのは、絵画やポスターなど、飾るものをおいていないからです。それは、クライエントさんに不必要な感情の反応を引き起こさないためです。それぞれの好みや苦手なものに影響しないようにしています。例えば「子猫の絵」を置いた場合、ネコが大好きな人と極端に動物が苦手な人などがいるため、個性的なものは飾りません。

面接室のなかには飾るものはおいていませんが、出入り口付近には、風景画や季節のもの、たとえば今の季節であれば、ひな人形などを目立たないところに置いています。

室内に生花を飾ったこともありましたが、クライエントさんが特定の花粉等のアレルギーを持っている人がいたり、花の香が苦手な人もおられたりしたため、やめました。その代わりに匂いのしない観葉植物を部屋のすみに置いています。

カレンダー

クライエントさんが着席をして視線を向けられるところに、卓上用の小さなカレンダーがあります。来所ごとに、どのような出来事があったのか、日にちを確認することも多く、カレンダーの文字をカウンセラーとクライエントがともに追って話します。カレンダーは、文字だけのデザインのものを使用しています。

話すまでもないことですが、面接室はできるかぎり清潔にしています。とくに、面接が終了するごとに、拭き掃除をします。直前まで来所されていた人の気配のようなものを残さないようにします。小さなごみ、髪の毛、忘れ物がないかも大事な確認点です。

何かに気を取られない場所に座り、安心して話していただけるような静かな面接空間を整えます。

晩年

D・A・N 通信

No.3

2022.11.21～2023.2.20

団　士郎

２０２２年夏、東京・丸の内 oazo の maruzen で全く知らなかった平積みの本に手が伸びた。理由は裏表紙の文字、『またやって来たからといって、春を恨んだりはしない・・・』。前作の一節だと書かれたこの言葉に魅かれた。どこかで目にした記憶があるが思い出せない。その詩集を購入した。（後で検索をかけて思い出した。池澤夏樹著「春を恨んだりはしない－震災をめぐって考えたこと」の記憶だった。）

若い頃、谷川俊太郎の詩集を買ったことがあった。吉野弘詩集を買った記憶もある。黒田三郎詩集も持っていた。天野忠詩集は分厚い全詩集を持っている。しかしどれも三十年、いやもっと前のものだ。詩集とはずいぶん縁がなかった。

それが思いがけず七十九歳の女流詩人の最晩年詩集を手にすることになった。「すごいおばあさんの本だ！」と思ったのだが、よく考えたら私より四歳だけ歳上なのだった！読み始めると実に静かに胸にしみてきた。静かというのが一番の印象だった。

自分が人生の晩年にあることはいつも意識している。おかしな言い方だが、この年齢で晩年であることを有難いと思っている。それは昔、児童文学者の上野瞭さんに依頼されて、「晩年学フォーラム」の会報にずっとマンガと短文の連載をしていて、その時に「晩年」は「老年」とは違うことを学んだからだ。

人は誰も自分の晩年がいつ頃であるかを知ることはできない。亡くなって初めて、その人の晩年期は確定する。大好きな小説「ハーモニー」、「虐殺機関」等を書いて３４歳で早逝した伊藤計劃など、あれを書いていた時期が晩年だった。彼は病床にあったから、そのことを意識していた。それは作品に反映されている。

だから私が７５歳になって晩年を考えられているのは、運が良いということだ。一人暮らしになってはいるが、孤独でもなく、することがないわけでもない。無論あくせくしているわけでもない。好きでバタバタしてはいるが。今のところ心身の健康に不安があるわけではないので、特別なことが書きたいわけではなく、七十五歳以後の日々を、振り返りながらあれこれ連想的に拡げていくことになる。

2022/11/21～

▲月▲日

対人援助学会 zoom 開催二日目が充実の終了後、約束してあった次男と、久々に地元瀬田川沿いにある鰻の「ちか定」へ。近年、どんどん有名になってきて、行列しなければならなくなった。

故郷、琵琶湖畔では当然のことながら淡水魚を昔からよく食する。鰻に限定すれば名産地や有名どころは他県にも多いが。

しかし写真を見てもらえばわかるように、鰻丼の他に、鯉の煮付け、小鮒の酢の物、鯉の刺身、鰻巻、鯉こく（白味噌仕立てのお汁）。そしてやっぱり丼がめちゃくちゃ美味。

単品で鰻丼か鰻重の選択ももちろんあるが、やはりいろいろ食べたいから定食を選択。常連の知恵として、赤だしは鯉こくに変更、蒲焼きは丼にしてもらって、煮付けもできれば子付きの鯉にと願いする。そして熱々の鰻丼は桁違いに美味い。

大津市内には有名店「かねよ」があり、我が家の法事では定番利用する店だ。加えて、時には出前も頼む。しかし近年、値段は圧倒的に高いのに、「かねよ」は逢坂山の本店の座敷を利用することが主目的になってしまった。鰻料理の美味しさでは、圧倒的に「ちか定」である。

こちらは基本、田舎料理の量である。だから美味満腹。二店舗を使い分けることになる。

近頃は開店前に並んでいる車のことを思うと、運転をしない私には、訪れる機会が圧倒的に少なくなった店である。

▲月▲日

自宅の wifi が不具合で、触っていたら繋がらなくなった。面倒くさい。そもそも仕組みをよく理解しているわけではないので、うまくいっているときだけ快適で、トラブルと早速ストレスである。

連動して大型画面で楽しんでいる Netflix も具合が悪い。そんなときに、嘘か本当か識別できない知らせが届く。お使いの＊＊契約サービスは 23 年 1 月 31 日で終了します。ご契約の支払いが出来なくなっているので、再度、契約をし直してくださいとかなんとか。基本的にすべて無視しているが、根拠なく、そんなせいで繋がらなくなっているのかもと思ったり。

とにかく、関心も意欲もない高齢者には、カタカナ交じりの説明も、丁寧な対応も要らないから、スムーズに使わせておいてくれと思う。

なのに、長年使っていた炊飯器の具合まで悪くなったので、仕方なく amazon で目についた圧力 IH ジャー炊飯器なるものをポチっておいたら届いた。(アイリスオーヤマの安いの)

すぐ開封しないと段ボールのまま放置があり得るので頑張ってセットしてみた。手入れが少し面倒そうだが、炊き上がり次第か。

水加減が微妙で二度、好みよりも堅かった。そんなことをしていると、米ビツが空になったので米をネット注文。その結果、三度目からは新米を水加減もわかってきた圧力炊飯器で炊いて美味しく食べている。

▲月▲日

家族心理学会依頼の 1 日 zoom ワークショップが終了。プログラムの合間、世話役の N さんと今関心のあることをあれこれ話す。

この週末は金曜の zoom 講座 5 回目に始まり、土曜の家族応援プロジェクトと今日、三連発の zoom だった。さぁ月曜日は休み。何するかな？

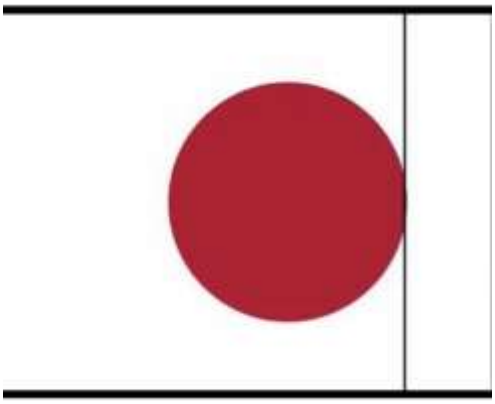
そんな間にも、W杯カタール大会は事前の空気とは大違いに盛り上がっている。

私はライヴでスポーツ観戦が出来にくい体質で、結果が出たもののダイジェストを楽しむのが好きだ。ハラハラしながらその場に留まっているのが苦しいし疲れる。

それでも第一試合のドイツ戦は頑張って大画面TV スポーツ観戦の好条件で臨んだのだ。しかし前半ドイツが得点したところで心が折れて風呂で読書していた。風呂上がり、スマホの速報が目について、大慌てで映像に戻るとお祭り騒ぎだった。安心して何度もシュートシーンを観た。

ついでに abemaTV、日向坂 46 影山にも初お目見え、「あなたのハートにゲーゲンプレス」か。

コスタリカ戦は余裕かと思っていたら、そうはならずくじけた。もうだめだからスペイン戦は結果だけで良い姿勢で他のことをしていた。するとまたスマホが大騒ぎしている。そして「三苫の 1 ミリ」で勝利。興奮した。そして、ネットで見つけたこのイラスト、『うまいなぁー』、脱帽だ。



▲月▲日

昨日、仕事場を訪ねてくれたのは、昔、妻にピアノのレッスンを受けていた人。大人になってから習いにきていた。そんな繋がりがきっかけの懐かしい昔話をいっぱいした。体調を崩す前はよく、この紅いグランドピアノの前にいた。探したらこんな写真があった。今はもう誰も弾かない。

▲月▲日

映画「ザリガニの鳴くところ」の話をしていた人から、「あの娘の半分は自然なのだ」と聞かされて、納得してしまった。

タンカー事故で汚された海岸がやがて回復するように、自然は傷ついたなどと訴えないで静かに再生する。汚染を分析したり恨んだりもしない。あの子はそうなのだ。だから孤独だ。

そしてこの作家はどうしてあんな結末の物語を書いたのだろうと思った経過を、トークライブの一話として話すことになった。

▲月▲日

今夜は 23 年目になるという草津の家族勉強会シリーズ。それにしてもなんという継続。私もだが世話人も、リピーター参加者も。

めったにやらない質問を受けて、私が自在に話す回にしてみた。

何をやっても私は私だが、続けることが肝だと思っていることは揺るがない。そういう風に生きてきて、今もそれを繰り返していて疑問はない。

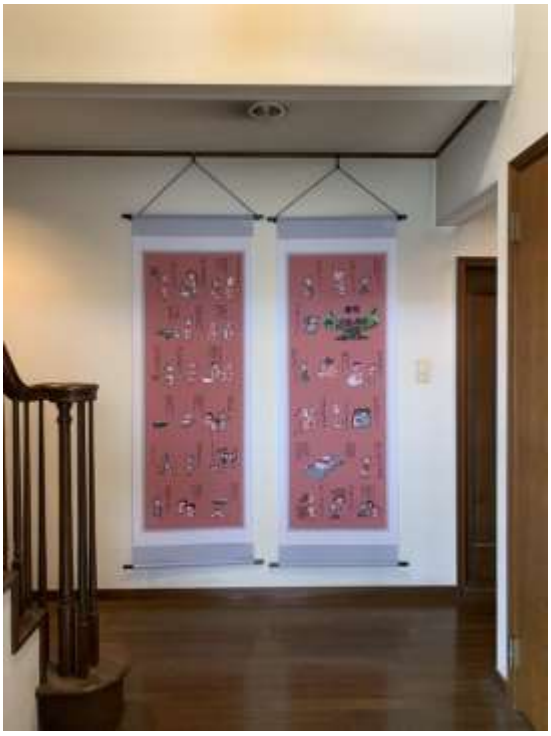
▲月▲日

東大阪市にあるここで開かれた落語会に、マンガ仲間の篠原と行ってきた。南光さんも同じ漫画集団ぼむのメンバーだ。

司馬遼太郎記念館の館長夫妻は、私が初めて原稿料を頂いて漫画や文章を書いたサンケイ新聞

の編集者だった方達だ。南光演目の「抜け雀」、40年以上前、落語・志ん生のレコードを結構な数コレクションしていて、その中で聞いた噺だ。今日もとても面白かった。

▲月▲日
　思いついて家の玄関に掛軸マンガを下げてみた。雰囲気が変わった。誰に見せるわけでもないのだが、気に入っている。



▲月▲日
　道具が増えると不具合も増える。体調の不具合は極力少ないよう心がけているが、物については何ともならん。繋がらなくなった Wi-Fi をサポートセンターで確認し、交換に来てもらった。

　その間、宅配を受け取ったり、340 ページ余の対人援助学マガジンを印刷製本しながら復旧を待つ。
　直ったのではあったが、二週間も経った頃に、また不具合になった。面倒くさくなって今も放置状態。そのうち何とかせねば不便だ。
▲月▲日
　明日の zoom 版トークライヴの準備をしている。70 人ほどの人が申し込んでくれているとか。今回は本「ザリガニの鳴くところ」の話と、人物「沢木耕太郎さん」の話を一時間ずつ、二本立てで聞いてもらう予定だが、その構成に手間取っている。
　近年、『家族理解 zoom 連続講座』をするようになり、そちらの話の展開進行は定番化できている。それと比べると新作感いっぱいだから、あれこれ考えてしまうのだ。

▲月▲日
　トークライヴが無事？終わって、年内の公式予定は終了。気になっていた話の中身を今日、ビデオ視聴の人達用アーカイヴスを見たがまぁまぁだと思えたのでよし。
　午後から、久々に出会う人が来訪。三時間ほどたっぷり話し込んだ。これで年内は人と会うか、仕込みか、1 月予定の準備。年末だから大掃除でもするかな？とは、言ってみるだけ。

▲月▲日
　情報に触れても、なかなか腰が重い。それではいけないと思うので努力すると、やはり十分見合うものに出会う。ネット告知で見た立命館大学衣笠キャンパスでのイベント、結構な参加者で、なかなか腹にこたえるものだった。思わず語りたくなること満載だった。
　そして自分の感覚がそう老けているわけでもないとも思えた。倍賞千恵子さんは良い。テーマはいかにも若い監督の切り取りたくなりそうな設定だなと思った。

▲月▲日

2022 年の年頭からホームページに、毎週連載で「あ」からスタートした 70～90 年代映画パンフレット・コレクション・コラム「私的埋蔵文化財」が一年続いて、いよいよ「わ」に。

時々、どうしても一本に絞り込めなかったり、一回は飛んでしまったりして、年内に収まらず 2023 年にオーバーランすることになった。興味があればここに連載しております。

www.shiro-san.com pic.twitter.com/MkbAKDkNh4

HP での週刊連載はこれでちょっと一息つくことにしたが、春になったら再開も考えている。
誰が読んでくれているかはわからないが、自分のための記憶記述は、あとから誰かが意味を見つけられたりするからね。

10 年以上前、妻が脊柱管狭窄症の手術をして養生していた頃、慌ただしく仕事に走り回っていた私の提案で、交換日記をしていたことがある。ノート二冊分くらいだが、それが今、とても懐かしい書き文字蓄積になっている。何かが残っているのは嬉しいところのあるものだ。

▲月▲日

ここ 2 年ほど、youtube で目につくと「山田五郎の大人の教養講座」をみる。結構な数をみていて、絵画の蘊蓄雑談の面白さを堪能している。

そこで話題になった映画を観た。面白く落ち着いたいい映画だった。いきなり NHK 受信料と同じ話が出てきて、おおそうだった BBC がこの方式だと思い出した。いろいろ繋がっている。

▲月▲日

元々正月に関心は薄かったが、一人で暮らすようになってますます年末、年始のスタイル、作法と関係なく、一人楽しむ時期になっている。読書したり、映画を観たり、調理したり、原稿を書いていると日々は過ぎる。

私は元気です。年賀状も失礼するようになって数年になりましたが、みなさん良いお年を！

2023

▲月▲日

あけましておめでとうございます。今年もつぶやきます。ツイッター開始から 13 年目、よろしく。

昨晩（大晦日）、次男がやってきて、歓談しながら蕎麦を食い、元旦は誘われて多賀大社に初詣。名物「糸切り餅」を食ったあと、青龍寺に墓参りに。「一人では来ないやろう」と言われる。その通り。思いがけず正月を堪能してしまった。

▲月▲日
　2022 も週 1 度ぐらい世話になっていた仕事場近くのお惣菜屋さん。大晦日の午後に前を通ったので覗いてみたらおばちゃんが、「うちの棒鱈はおいしいですよ」と言う。
　そもそも棒鱈を食べた記憶がないが（いやいや、大昔、八坂神社境内の『いも棒？』とかいう店で、料理に出たのを食べたことがありそうな気がするが、美味かった記憶はない）、言われると断れない。で、バラ売りのお節からいくつか購入していた。その結果、今朝は正月っぽい朝食に。

▲月▲日
　調理をする時にエプロンをするのが嫌いだ。汚したら洗濯するのも自分だから良いだろう。エプロンを付けるとお手伝いの気分になるのが好きじゃない。
　最近お気に入りの人参マシマシカレーの準備。昨日、次男と食べて作り置きがなくなったので。今夜の鉄板焼きの用意と兼ねてキッチンに。

▲月▲日
　自宅に長年の友と遠来のお客さん夫婦が来訪。話し始めるといろいろ語ってしまう。つくづくお喋りだなぁと思いながら、聞き手が挟んでくれる整理から、新たなことにいくつも気がつく。
　年末年始は心がけて、一年一度くらいになる人との面談を働きかけている。対話はクリエイティブだ。近年、ますます独演が多くなっているから、心がけなくちゃ。

▲月▲日
　地元、滋賀の友人二人が夕刻から自宅来訪。児童福祉業界人なので、いろいろその辺りの現実も聞いたり、例によって時節事情の放談会。楽しかった。明日からは三日間 KISWEC（京都国際社会福祉センター）の WS で十七人の参加者とご一緒する。新春の仕事始まりだ。

▲月▲日
　さぁ始まった 2022 年度家族療法 WS step2。十七名の参加者は step1 を受講済みの人ばかりなので、いろんなテーマも、踏み込んでいける。
　世の中がうっすら表面をなでるような対人援助サービスで溢れる中、役に立つことを求めて、深入りの練習中。

▲月▲日
　三日間の WS が終わった。午後 4 時前には皆さんに帰路についてもらい、片付けて四条河原町に出た。 MARUZEN で本を物色したのだが、どうしたことか気が乗らない。
　その中でこの本のハルビンやチェルノブイリの地名に惹かれた。加藤登紀子さんかぁ、学生時代の憧れだった。いろいろ思い出はある。

▲月▲日
　世間は祝日の夜。私は今から仕事場に向かう。その途上で夕飯にしようと思ったがレパートリーが少ない。たまには思い切って、入りそうにない店を！と決心。
　まず、通ったことがなさそうな木屋町からさらに入り込んだ路地、その通りの 2 階にある店。テーブル 4 席の二つには欧米人カップル。どういう店だこりゃ。バーガーの店。美味しい。

▲月▲日
　長いことかかって読み終えた。「このミステリーがすごい 2022　ベスト 1」のこれ。長い長い物語。誰も過去から解き放たれることはないと宣言したような街、人々、記憶。私には歯がゆいくらいに過去の出来事に縛られた物語だが、読むのを止めようとは思わなかった強い何かがあった。

▲月▲日
　今日出発して、明日には戻る北海道遠征。このところ気に入っているこれを空港で食す。リムジンバスの中もずっと読んでいる本が、ウクライナ侵攻中のこの時期、刺さってくるものがある。
　そうだった、そうだった、少し先輩の加藤登紀子さんの体験、記憶は心に沁みてくる。
　天気予報で聞いていたように積雪の札幌。夕刻のイルミネーションが綺麗な街で寿司を食う。上映時間の関係で見損ねているうちに、近所の映画館では終わってしまった「RRR」をホテルのすぐそばのシネコンで観る。19 時 40 分からは好都合。
　「バーフバリ」が気に入った監督のインド映画。とにかく楽しい。

▲月▲日
　勝手知ったる札幌の会場「かでる 27」で、北海道高校養護教員向けのお話。たくさん本を買って下さった方達から、嬉しい声を聴く。
　時季外れの雪解けの頃のような気温の中、ホテルに荷物を取りに戻り、隣の紀伊國屋書店で知らなかった本を一冊購入して、早々とエアポートライナーで新千歳空港に。

▲月▲日
昨夜は zoom 講座「家族を学ぼう」第 5 シリーズの初回を 20 時 30 分から。隔週 6 回継続がスタート。
そのまま仕事場泊まり込みで今朝は、明日 15 日の家族カウンセリング協会 zoom 研修の準備を TULLY'S で。
年明け、新規の仕事依頼がメールで届くと嬉しくて、忙しいのについ引き受けてしまう。

▲月▲日
お笑いは好きだが特に誰かのファンではないし、熱く語ることもない。「笑い飯」のこともそんなに好きではない。週刊文春に連載されたものが本になっているのは、「嫌われた監督」(これは面白い本だった)と同じ。面白く読んだが、すぐに忘れてしまうだろう。M-1 は漫才ではなく、M-1 という競技なのだ。なるほど納得。

▲月▲日
昨日は三時間の zoom 研修を無事終えた後、夕刻から来客。楽しくあれこれ四方山話。
そして今日から、スケジュールが一息ついたので、春のぼむ漫画展用の掛け軸作りに取り掛かる。
作業 BGM にこのところハマっているこのメドレー。ウキウキするのがいい。

▲月▲日
もの事には時があって、本にも手に取るタイミングがある。「太陽の子」は発売直後に買ったが、置いてしばし眺めていた。何だかわからないが、今だなぁと思って読み始めたら面白い。
著者の取材に同行するような気分で、話がドンドン前に進んでゆく。どうなっていくのだろう。六年かかったと筆者の書く本を、結局三日で読んでしまって、大きな深呼吸をする。
自分に与えられたテーマには、しのごの言っていないで向き合えということだな。私も頑張ります、三浦英之さん！

▲月▲日
今日、新刊が届いた。綺麗なブルーの仕上がり。17 年かかって九冊目。「家族の練習問題　第9巻」2 月 13 日発売なので、もうしばらく先ですが、どうぞよろしく。
あらためて通読してみる。すぐに読めてしまうが、我ながらいいなぁと思う。

▲月▲日
ドキュメンタリー「キャスティング　ディレクター」を観た。2011 年に亡くなったドハティの仕事を、たくさんの監督や俳優が称賛している。
　しかしアカデミー賞にはキャスティング部門はなく、長らくタイトルクレジットもされなかったという。誰かの素晴らしい仕事を認める力も能力だ。

▲月▲日
昼前に目覚めた仕事場で、ぼむ展準備のカラーリングの続き。あっという間に時間が経つ。夕飯に表に出て、行きつけの店で美味しいトンカツ。本屋を覗いて毎月購読の「本の雑誌」購入。その後、タリーズでしばし読書。この後また戻って作業の続き。今夜も仕事場泊まり込みだな。

▲月▲日
久しぶりに朝 7 時過ぎに家を出る。小雪混じりの曇り空。普段、昼前にしか起きないから、ことさら朝を感じる。昼過ぎには、私のノルマは終えている予定の土曜日。とりあえず新幹線でC君と東へ。

▲月▲日
浜松で夏に行うイベントのプレ勉強会。私の担当は朝、家族理解 2023。午後はＣくんが、二十年近くも立命館大衣笠キャンパスで続けていた「家族事例検討会」スタイルを実施。無事、終了。

▲月▲日
WS 世話人H君の車案内でC君と初浜松観光。浜松に砂丘があるなんて知らなかった。ウミガメの産卵、保護の話がこんな場所にもあるなんて。
　浜松まつりって？と思ったが、この大凧、見たことあるなぁ。そして締めはやっぱり鰻だ。白焼と蒲焼で共水うなぎを堪能。新幹線のダイヤ乱れもなんのその、無事京都に。

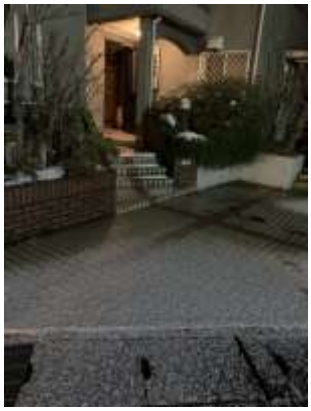
▲月▲日
　漫画仲間の篠原ユキオが、ウクライナ支援展に続いてミャンマー支援の漫画展を開催。
　私は一コマ漫画を描かなくなって久しいので出品作はないが、展示のお手伝いに。いつもの京都市役所西隣、寺町のギャラリー余花庵で。2 月 5 日までやっています。

▲月▲日
日本中が雪の中らしい。京都市内の正午頃、外出して急ぎ足で歩いたら汗ばんだのに、午後3時頃から雪模様であっという間に仕事場周辺はこれ。
あちこちでトラブっているようだが、皆さんご無事で。私は篭ってあれこれの準備をしよう。

▲月▲日
昨夜、帰宅はやめておこうと考えたのは、夕方の雪景色を見た気まぐれだった。その結果、気づかないところで、交通トラブル渦中に巻き込まれるのを回避していたようだ。
今夜はなじみの地名がニュースで連呼され、列車立ち往生の話題ばかり。寒いなぁ。（知人が巻き込まれていたことを、後から知った）

▲月▲日
さあ今年もシーズンがやってきた。確定申告のための帳簿整理を例年のように行う。この作業を始めると１年間の自分の動きがなんとなく理解できる。最後は毎年、義弟の税理士にお願いするのだが。コロナ禍の中、後期高齢者としてはなかなか活動的に動けた１年だった。

▲月▲日
午後、三時間半の zoom 講義を無事終えた。夕刻からまた雪模様というので、早めに帰宅。雪のせいで結果的に、今週はずっと仕事場泊まりだった。
明日はゆっくりしているので、久しぶりの自宅が楽しい。録画してある何を観ようか、積読本の何を読もうか。外はうっすら雪化粧。



▲月▲日
足下は氷雪の残る大津から、こんな快晴の場所に。三島（静岡）に来ると立ち寄るビュフェ美術館に三度目の訪問。
戦後、脚光を浴び、そういう人の宿命のように影が薄くなった。一時期は日本のマーケットでも多用され、消費された。画家自身も苦しかった様子が画業後半の作品から見える、なーんて偉そうに。
館内は私の訪問中、他の客は誰もなかった。そういうことなのだろう。

▲月▲日

で、三島といえば私的にはここ。先週は浜松、今週はここと連続鰻。広小路の桜家は 4 回目かな？美味しく食べてホテルへ。伊豆箱根鉄道で一駅。反対方向に乗れば、伊豆修善寺に行ける。

▲月▲日

初めて訪れた裾野市ってほんと、富士山のすそ野だ。静岡県は気温が暖かい。日本全国寒波だった時期に、雪のゆもない。いやいや富士山頂には見えたけど。とにかく温暖の地のようである。それがいいのか、悪いか、そこは何とも言えんが。
帰路、「こだま」に乗ったら、いつまで経っても静岡県だ、広いな。

▲月▲日

イベントが無事終了した。校正者の牟田郁子さんと団遊と三人で二時間。ちょっと刺激的なことも織り込んで、楽しく過ごせた。

普段、交流のない世界からのゲスト、どうなるかと思ったが、興味深い事ばかり。自著だけではなく、本を作るって面白いなぁと思った。

後日、あちこちから、この企画の好評を耳にした。私はもう次の一冊を考えているところだ。

▲月▲日

昨日は一日中、連載の新作を描いていた。午前 3 時頃にとりあえず仕上げて寝た。そして今朝は、早速校正に。先日のイベントの余韻か、わが目の校正が厳しくなっている。

仕上げたものに、あちこち直しを入れると良くなる気がするが、ただの気分かも。でも、手を入れるのは楽しい。

▲月▲日

明日は朝から徳島県児相職員向けの一日 WS をする。その前ノリで午後から JR＋バスの道中。好天の瀬戸大橋を渡る。

まとまった読書時間ができるのを待っていたこれを車中読むことに。グラフィックノベルだが、まぁ独特だ。わが業界人には馴染みのある設定だが、これは映画の中でよくみる奇妙さだ。

日本のコミックスは総じて、分かりやすさに従順だ。読むのに一苦労だし、途中で時間切れになったら、再開にエネルギーが要りそうな本だ。

▲月▲日

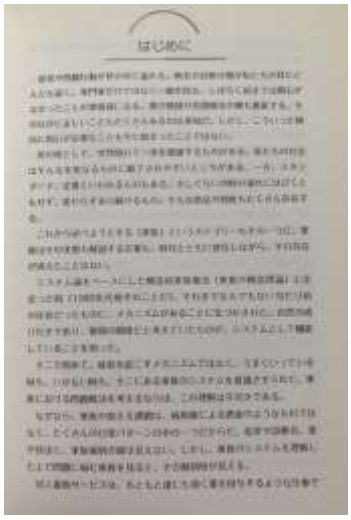
徳島県児相、一年目の人達が多数参加の家族理解 WS 六時間を実施。9 時半から 16 時半まで。用意したプログラム、参加者の顔を見ながら、最終的取捨選択しつつ六時間。意味があると思ってもらえているから 5 年も続いているのだろう。でも、5 年継続勤務の人は今の児相では少数派。

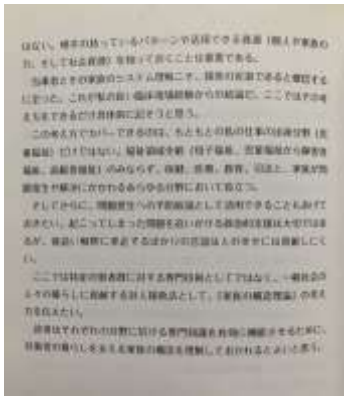
終了後すぐ駅に送ってもらうと、17 時発のバスが停まっていた。それに乗って淡路島を越えて JR 舞子へ。そこから大津までJR一本だ。

▲月▲日
これを観てきた。三時間近いんだ。面白かった。

▲月▲日
2013 年に出た本の印税のお知らせが、お年玉のように届く。仕組みがよく分からなかったので聞いてみた。すると実売数のキリの良いところで精算されるのだという。今回は、7000～8000 部までの印税らしい。まもなく 8 刷で一万部を越すようだがうれしいことだ。手にとってくれた人々に感謝。読み易いですよ。

▲月▲日
印税のことを書いたこの本を久しぶりに手にして「はじめに」を読んでみて驚いた。
今、こんなにわかりやすく過不足なく、この文章が書ける気がしない。10 年経ってもいい本なんだ。未読の方、騙されてみるのも悪くないですよ。（ある人からのメールで、同じことを2017年にも書いてますねと指摘された。調べてみるとその通りだった。私はまったく記憶になかったが、覚えてくれている人、凄い！）





▲月▲日
漫画グループ「ぼむ」の月例会で、消費税にまつわるインボイス制度の話を義弟税理士から聞かされた。細かく聞いたが、結局わからない。
世の中は後からいろんなことを決めて失敗をする。マイナンバーも後から取ったらお得？みたいなキャンペーンを今やっている。あほらしい、どうでもいいやと思った個人事業主です。

▲月▲日

新幹線、窓からの今朝の富士山はこんな風。品川駅近くの東京海洋大学で六時間の WS。二十一人の参加で半分が初参加。

いろんなところから来てくださる東京プログラムだ。私は相変わらずだが、聞いてくれる人たちの状況変化が小さくない。世直しせねば！なんてね。

▲月▲日

二歳近くなって、走り始めた孫と会う予定が、体調不良で延期になった。

ならばと、東京・上野公園に。ネット検索で 13 時からの東京都美術館の入場券が取れたので、「エゴン・シーレ」展に。

妻と中欧を旅した時、ウィーンで訪れた美術館の作品だと思う。クリムトの方が有名だったが、入館散策しながら、ちょっと驚いた展示室のシーレ作品群だった。

わりとよく絵画展に足を運ぶ。そして出向かないものも多くある。理由は、大混雑である。フェルメール展などそうだった。

旅が好きだから、国内外のあちこちの都市の美術館を覗いた。国内はたいてい何か企画展をやっている。そうでないとなかなか見ることのない作品群に触れられる。

しかし海外の美術館では、ほぼ常設展を見ていた。そしていつ行っても結構混雑のニューヨークのMOMAだって、大混雑ってことはない。ルーヴルのモナリザの前だけは、遠方から眺める感じだが、他はどこもそんな風ではない。

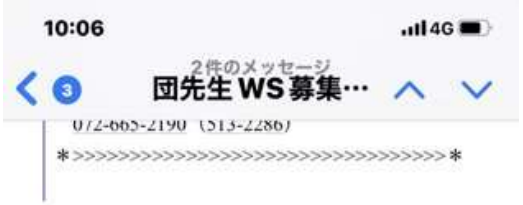
ゆっくり、じっくり、ガラスケースなどに入れていない絵画を見られる。スマホで写真を撮るのも自由だ。パリ・オルセー美術館など、超有名印象派絵画と自撮りできる。

日本の美術館だけ、独特のルールで展示している気がする。こんなのは世界標準にしてくれたらいいのだけど。

▲月▲日

二日間、立命館大学で WS と言うより、集中講演会風のプログラムを極少人数で実施。院生には社会人も含まれているが、いわゆる学生さんに話す機会は少なくなっている。

あちこちで開催している現任者に向けたものと、そう違えているつもりはないのだが、何かが異なる。キャッチャーの違いを感じている投手気分かな？


10:06
4G
2件のメッセージ
団先生 WS 募集…
＊＞＞＞

52・子どもが育つ園庭 その３

ぶらんこたのしー！（年少児）

前回に続いて、子どもが園庭での遊びを通して育っている様子をお伝えします。
動画も視聴してください

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

今回は、園庭で子どもたちが乗り回す三輪車や二輪スケーター、四輪車など定番の“のりもの”に混じって、園庭にあると子どもの発達に効果が期待されるし楽しい
「ストライダー」と**「トンカ」**を紹介します。
どちらも20年以上前に、横浜にある川和保育園の当時園長だった寺田信太郎先生に紹介いただいたものです。

「ドキドキ・ヒヤリで子どもは育つ」

NHK2007年放送
https://www.youtube.com/watch?v=gG3k0lGiChA

寺田先生は子どものあそびに対する嗅覚がすばらしく、園庭保育がNHKで特集されるほど、子どもが自ら育つ環境や保育活動を実践されていました。
◆動画の再生はYouTube→https://www.youtube.com/watch?v=gG3k0lGiChA

川和保育園の園庭を見てから自園に戻ると「なんて殺風景な園庭だこと･･･😢」と思ったものです。
（保育園は移転されて新園舎になっています）

川和保育園風の園庭づくりについては、専門家もいらっしゃって書籍にも紹介されていますので今回触れませんが、最近では子どもが「あそび込める」、自然を取り入れた設計の園庭を造っている園も増えており、川和保育園が先駆けとしてモデルとなったことは間違いないと思います。原町幼稚園ではそこまでの改築はしておらず、一般的な園庭を工夫して「子どもが育つ」園庭づくりをしています。

園庭あそび
『ストライダー』

寺田先生にはいろんなことを教えていただきました。**ストライダー**もその一つです。川和保育園には、補助輪無しのマウンテンバイク（ブレーキは手でなく足で逆回転させるタイプ）が最高峰の“のりもの”として君臨しており、目の前で年長児が後輪をドリフトさせて

連んで走るのが楽しいのよね

園庭のコーナーを曲がっていく様子を目を丸くしてみていたものです。
年少～年中児には四輪バギーや三輪車も人気でした。

年齢の小さい子どもたちは車や三輪車

ある日、寺田先生が「ツルちゃん、すごくよく走る**足蹴り自転車**があるんだよ、今から買いに行こう！」と誘ってくれて、車に乗って横浜の元町の狭い通り沿いの小さい輸入雑貨店に行きました。そこにはアメリカンのいろんな雑貨に混じって「ストライダー」が４台ほど置いてありました。輸入元は『豆魚雷』と書いてあったのを覚えています。２台買って帰ったのですが、子どもたちは取り合いするようにストライダーにまたがり、颯爽と園庭を走り回り、２台では物足りず、すぐに追加購入しました。

その後、ストライダーは全国的にぐんぐん人気が出てきて、1998年にストライダージャパン社が設立され、いまや本家ストライダーだけでなく、あちこちでランニングバイクを使った子どものレース大会が開かれるまでに爆発的人気な乗り物になりました。（余談ですが、毎日ストライダーで園庭を走り回っていた年長児が初めて出た大会で、たいした練習もせずに優勝しました(^^)）

こんなに人気の出た理由の一つに、自転車に乗り換えるときにスムーズに移行できるというのも親がチョイスする一因だと思います。
そして三輪車には出せないスピードと自転車より軽快な動き！これが自転車に乗る前の子どもたちを魅了しているのだと思います。
園の備品として購入するのりものとしては「値段が安い！」これも魅力です。丈夫かどうかと言われると、個人使用になっているものを何十人もが毎日毎日乗るわけですから、結構なスピードで消耗します。そのためスペアタイヤやパーツの補充は欠かせません。（スペアパーツが充実しているのもありがたい！）耐久性は保育業者仕様三輪車の５分の１ぐらいでしょうか（値段は3分の1程度）、それでも導入する効果は高いと思っており、現在は10台がひっきりなしに出動しています。

三輪車を卒業した子どもたち、３歳から６歳までの子どもたちがそれぞれ、サドルやハンドルの高さを変えて乗っています。はじめはヨチヨチ歩きのように歩いてるのか乗っているのかわからないほど足をゆっくり動かして、慣れてくると勢いをつけて足を上げて走れるようになったり、坂を下ったり、前傾して思いっきり足で蹴ってスピードを出せるようになります。
ルールは一つ**「危険運転をしない！」**危険運転は保育者たちが見ていて「危ないな」と思ったら注意していくことで身につけていき、衝突事故などはほとんど起こりません。まれに制御できずにドアにぶつかったりしたときには「免許取り消し！」（実際に免許はない）と言われて乗ることを制限されま

す。制限されるとイヤなので、子どもたちは気をつけて乗るという仕組みでまわっています。ちなみに園内ではヘルメットは着用していません。
（効果についてはストライダージャパンのHPを参照下さい。https://www.strider.jp/about/）

『トンカ』

寺田先生が「これ見て！すごいでしょ！」といって見せてくれたのは、倉庫にうずたかく積んであるトンカトラックの箱。30箱以上はあったでしょうか、「アメリカに住んでいる知り合いに船便で送ってもらったんだ、よかったら譲るよ」というのです。その日は５台購入させてもらってすぐに園庭に投入しました。

トンカとは、アメリカの玩具メーカーで、主に作業用車（はたらく車）のオモチャをつくっており、ビンテージものはコレクターに人気があるようですが、園では丈夫なスチール製が重宝しています。というよりこのダンプカーしか買ってません。
https://www.basicfun.com/tonka/

スチール製で丈夫なため、砂場あそびだけでなく走り回って遊ぶのにも対応してくれています。動画を見て頂ければ、運動玩具としても効果が高いことが分かるでしょう。実際に押してみると、雑巾がけと同じくめちゃくちゃキツくてすぐにバテてしまいます。
川和保育園では、当時運動会でお母さん方のトンカ競走があって、大人がこれを押して走る姿はそれはそれは、笑い転げるほどオモシロかったです。（スッ転ぶ人が続出で、けっこう危険ではありますが(^_^;)それがオモシロイ）

川和保育園の在庫もなくなり、追加で日本のおもちゃ屋さんも探したのですが見つからず、個人輸入などもしらべましたが、Amazonで注文できることが分かりました。先生から譲って頂いたきの３倍ぐらいの値段になりましたが、輸入の手続きの面倒さを考えれば、こちらでも仕方ないか、と仕入れることにしました。
アメリカにお住まいの方がいれば、お願いして船便で送ってもらえればいちばん安く購入できるでしょうね。
Amazon→https://amzn.asia/d/3dqlSCX

このダンプカー、ただのオモチャなれど、
たいした働き者ですよ(^o^)/

タイヤもボロボロになるまで・・・・

動画が再生されないときはURLをブラウザーにコピーして下さい→https://youtu.be/YRwkdlWByqM

《園庭はただの気晴らしの場所じゃない》

園庭というのは、保育者のねらいや目標を設定した保育計画の外側にあって、子どもたちが自由に遊びながら、周りの子どもとイレギュラーに関わったり、異年齢で関わったりしながら、それぞれ経験を重ねたり自分の思いを育む場所だなあ、と感じます。

それだけに、**園庭は重要な子どもたちの成長・発達の場**だととらえ、固定遊具や道具、おもちゃや素材を配置して遊んでいる子どもたちの育ちを促す“ 仕掛け ” を保育者は考えて環境を整えることが必要不可欠だと思います。

原町幼稚園　園長　鶴谷主一（62歳）　ＨＰ：http://www.haramachi-ki.ed.jp/

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
第31号　幼稚園の音楽教育
（その2・こどものうた）2017.12
第32号　幼稚園の音楽教育
（その3・コード奏法）2018.03
第33号　〔休載〕（2018.06）
第34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
第35号　働き方改革って難しい（201812）
第36号　満3歳児保育について（2019.03）
第37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
第38号　プールができなくなる！？（2019.09）
第39号　跳び箱（2019.12）
第40号　幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉（2020.03）
第41号　コロナ休園（2020.06）
第42号　コロナ休園から再開へ（2020.09）
第43号　ティーチャーチェンジ（2020.12）
第44号　除菌あれこれやってみた（2021.03）
第45号　マスクと表情（2021.06）
第46号　感染予防と情報発信（2021.09）
第47号　親子ソーラン節（2021.12）
第48号　親子コンサート（2022.03）
第49号　うんちでたー！（2022.06）
第50号　子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ（2022.09）
第51号　子どもが育つ園庭・その2 砂場（2022.12）
第52号　子どもが育つ園庭・その3 ストライダーとTonka（2023.03）

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

福祉系

対人援助職養成の現場から 52

西川 友理

保育士の「不適切な保育」報道

保育士が園で行った保育のあり方をめぐり、特に近年、様々な事件がニュース番組をにぎわしています。送迎バスに子どもを置き去りにした、保育士が子どもの足を持ってさかさまに吊るした、乳児の頬っぺたを引っ張った、子どもの顔に落書きをした‥‥いわゆる「不適切な保育」と呼ばれるものです。

「ちいさな子どもに何てことをするんだ！」

「専門職として自覚が足らないのではないか！」

連日ワイドショーでも犯人である保育士が批判される日々が続きました。

報道を受けて、現場の人は…

しかし、私自身が直接お話した保育現場の先生方は、どちらかというとこの「犯人」

たちを批判する気になれない、という人が多い印象を持っています。
「うーん、何があったんやろね。」
「何が起こったのか、その前後を知りたいなぁ‥‥。」
「そらまぁ、足首持って逆さにつるすとか、絶対やったらあかんことしてる、ってのはわかる、わかるけど…。」
「うん、行動によっては、この一場面だけ取り上げても仕方ない気がするよね。文脈がわからないと、何とも言えないと思う。」
という人が多いです。
　さらには
「明日は我が身、って思うわ…。」
「絶対に不適切な保育なんてしない！って思っているけど、でも、不適切をしない、そういう事態は起こらない、とは言い切れないよね。誰もがついうっかり、見落としてしまう可能性はあるんだし…。」
「いろいろと気を付けていても、けがをしたり、思わぬことで傷つけてしまっていたりするもんね…」
という人もいます。

厚生労働省の調査

　昨年末から今年２月にかけて、「不適切保育の実態把握」という形で各園に厚生労働省から調査が来ました。ある園長先生が教えてくださったことによると、「直近１年間で何件の不適切保育がありましたが」というものを問うものであったとのこと。なにをどう不適切保育と考えたらいいのか、どんな対応を不適切と考えるのか、なにがあったら「1 件」と数えることになるのか‥‥。
「何を書けっていうんだろって。途方に暮れちゃったよ。」
とおっしゃっていました

　そんな報道があってひと月もしないうちに、やってきたのです、あの季節が。

２月、節分の季節。

「ねぇ、今年はどうする？！」
「鬼は出す？」
「節分に鬼出さないで何出すのよ。」
「いやー、出すとしてもさ、どうやって出す？」
「鬼はマスクをする？大声出すんならコロナ対策のことを考えても、しなきゃいけないよね。」
「お面でマスクになるんじゃないの？」

　１月下旬は保育・幼児教育現場の先生から、そんなお話をよく聞きました。
　なにせ、あちこちで「不適切な保育」が話題になっている時期です。
　節分と言えば、怖い鬼が襲って来て、そいつから逃げ回りながら、豆まきをして、やっつける、というのがセオリーです。一歩踏み外せば「不適切な保育」と言われかねない関わり方を、積極的に園を挙げて行うというなかなかきわどい行事です。
　ある自治体では、運営主体が公立か私立かに関わらず、１月中に「今年は豆まき禁止」の通達が来たと言います。去年まではやっていたのに…。
　さらにある園では「うちはキリスト教系だからキリスト教系じゃない宗教行事はし

ないことになったのよ」とのこと。節分って宗教行事でしたっけ…うーん、まぁ、広い意味ではそうになる、かな？

その他、今年は特に多くの園が頭をひねって「不適切でない節分行事」を考えられたようです。

“不適切な保育”か、否か。

でも、そうやって考えた保育が、果たして適切な保育なのか、不適切な保育なのか、誰がどんな風に判断するのでしょうか。

子どもが泣いたら、悲しい思いや怖い思いをしたら不適切でしょうか。子どもが笑っていれば、それでいい保育でしょうか。トラブルのもとになるかもしれないからと言って、伝統行事を取りやめることが、子ども達の豊かな保育環境を保障することになるのでしょうか。ただただ子どもが泣いて怖がって逃げ出し、これも経験という、その経験はどういう意味があるでしょうか。それを見ている大人はみな、可愛いといって笑う。それは適切な保育でしょうか。その他諸々、どう考えたらいいのでしょうか。

…というか、そもそも“不適切な保育”って、何なのでしょうか。節分行事をすると想定して、「不適切な保育」とは何かを考えてみます。

不適切な保育ってどんな保育？

不適切な保育とは何か。誰から見て、どの時点で、どんなふうに不適切なのか。これについて、実は定義された文書があります。

厚生労働省の令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 として出された株式会社キャンサースキャンの『不適切な保育に関する対応について 事業報告書』によると、不適切な保育とは「保育所での保育士等による子どもへの関わりについて、保育所保育指針に示す子どもの人権・人格の尊重の観点に照らし、改善を要すると判断される行為」とされています。

同報告書では、不適切な保育の行為類型として、以下の５つを挙げています。

① 子ども一人一人の人格を尊重しない関わり
② 物事を強要するような関わり・脅迫的な言葉がけ
③ 罰を与える・乱暴な関わり
④ 子ども一人一人の育ちや家庭環境への配慮に欠ける関わり
⑤ 差別的な関わり

…なるほど、確かにこれらは不適切です。でも、これらは皆抽象的で、具体的に現場で起こっていることをこの類型に当てはめるのも難しそう。

節分はまさに難しいところです。「④子ども一人一人の育ち」を考えた時に伝統文化である豆まきや節分を伝えるということは大切でしょう、しかし「②脅迫的な言葉がけ」がよろしくないと言われても、節分の主役である鬼は基本的に「怖がられてなんぼ」の存在です。皆の前に現れただけで「③乱暴な関わり」であるといえば、まぁそういうことになるでしょう。うーん、鬼さんはどういう意味を持つ存在で、保育現場にどういう形で出るか、その意味をまず考えないといけないようです。

なぜ不適切な保育が生じるのか

同報告書では、「不適切な保育」が生じる背景として「“保育士一人一人の認識”の問題（子どもの人権や人格尊重の観点に照らして、どのような子どもへの関わり方が適切なのか十分に理解していない）」と、「“職場環境”の問題（施設における職員体制が十分でないなど、適切でない保育を誘発する状況が生じている）」のが２つを挙げています。

確かに、自分が良いと考えている保育や子どもとの接し方を「不適切」と考える人もいます。それは知識不足や認識不足ということもあるでしょうし、さらには価値観の違いで「不適切」とされることもあると考えられます。

また、疲れていたり、焦っていたり、忙しかったりといった理由で、いつもならしない接し方をする可能性も考えられます。確かに、それらが整っていない園では不適切な保育も生じやすいでしょう。

でもちょっと待って、と立ち止まります。このような「保育士の認識不足」や「職場環境」が不適切な保育の要因だとすれば、どうすれば適切な節分の保育が出来るだろうか、と園の職員皆で頭をひねって話し合っている時点で、それはもう「不適切な保育」からは距離を置く環境になっているのではないでしょうか。むしろ「この接し方や保育が正しい」と思い込む保育よりは、「不適切ではないか」と疑いながら、人権や人格の尊重に繋がる保育ってどんなふうにすればいいのだろうか、と考えることが大切です。子どもの人権や人格に配慮すること、職場環境をよくすること、それらはもう当然のものとして、その上で、「不適切な保育にならないように」対策を講じていらっしゃる現場は沢山あります。

「不適切にならないように」と「不適切と言われないように」

今回様々なエピソードを耳にしたのですが、そこで伺った「対策方法」は、大きく分けて二分されていたように感じました。１つは「不適切でない保育になるような」対策方法、もう１つは「不適切な保育と“言われないように”するための」対策方法です。そして、現在の騒動の中で節分を実施した園の先生方は、その多くが前者です。

「うちはこういう考えで、こういうことを大事にしたいから、こういう節分をした」ということを伝えてくださいます。そこには「不適切って言われないかな」「周りからどう評価されるだろうか」ということが中心なのではなく、「うちはこういう考えで保育をするんだ」という、いわゆる保育現場で言うところの「ねらい」を大切にする園の姿がありました。保育としてどういう意味や面白さをもって節分という行事をおこなうのか、園の先生方が自覚していて、そしてそれらをしっかり関係職員が皆で共有していらっしゃる姿です。

周囲から何と評価されるか、まったく気にしていないというわけではありません。地域の中の一員として地域の理解を得る事、子どもを預かる身としてその子どもの保護者の理解を得ることは当然大切なことです。しかし、もし何かあっても、きちんと自分

たちの姿勢として提示でき、さらには話し合っていこうとされる、そういう先生方の姿勢こそが、その園に対する信頼を生み、さらにはその園自身の自信につながるのものになると強く感じました。

また、そのような先生方の園は、そもそも普段から保護者や地域の人々と話し合いを密にし、園の姿勢を理解し合って、ともに子ども達の生活を作り上げていく意識が強いところであるように感じています。

というわけで、くだんの２月３日。

各園、実際にはどのように節分を過ごしたのでしょうか。

現場の先生に伺った話と、現場の先生が「知り合いの園ではね‥‥」と語ってくださったものと、ネット検索で見つけた話を織り交ぜてざっと挙げると、

「例年は走って逃げる園児を追い掛け回す鬼、だったのが、ゆっくり歩いて近づく鬼、そして早めに『バスのおじさんでしたー』と正体をさらす」

「いつもは子どもを捕まえていたけど、今年は子どもと距離をとる。一種のソーシャルディスタンス。」

「鬼さんを知ろう！ということで、年長さんが鬼さんへインタビュー、それを園児皆で見学」

「みんなとお友達になりたいと泣いている鬼を慰めて一緒に遊ぶ」

「子どもを連れて行こうとする鬼に先生が『この子はこれこれこういう良さがあるんです！悪い子じゃありません！』『その子はまた別のいいところがあるんです！』と説得し、子ども褒め褒め大会にして、鬼はなんとなく納得して帰っていく。」

「心の鬼をやっつけよう！というお話と豆まきで、リアル鬼は登場させない」

「ひいらぎといわしの頭のお話をして、風邪やコロナという鬼をやっつけよう、という、伝統をしっかり伝えることを中心に展開」

などなど、各園色々と頭をひねって、工夫をされて実施されたようです。

「節分行事」に対する評価

さらにインターネット等でいろいろ調べてみると、園で節分をすることについて、様々に創意工夫を凝らした園の取り組みがあったにもかかわらず、

「純粋な子どもに“鬼”という存在を教えた。」

「豆まきという食べ物を人に投げつける行為を教えた。」

「節分は鬼が園に来るだろうから休むと子どもがぐずっている。」

「節分のせいで夜泣きが２日ほどあった。園はどう考えているのか。」

「園では節分がなかったと聞いている。きちんと怖いものを教えることも大切なのではないか。」

「心の鬼をやっつける、だなんて、自分の中に悪いところがあると伝えるのは間違っているのではないか。」

等、全国では様々な意見が保護者から上がったこともあったようです。

あくまでもインターネットから拾い上げてきた結果で、情報の正確性や信ぴょう性は保証できずで、申し訳ありません。でも、

「そういう声が少なからずあった」ということです。

つまり、何をどうしたって、不安を持ったり、不適切と感じたりする人はいるようなのです。

それはもう、感じ方は人それぞれですから、仕方のないことです。不安や不適切を感じる人とは、また一緒にこのことについて話し合っていく関係性が始まる事でしょう。そうやって「よりよい保育」を考えていく道が少しずつできていくと思うのです。

不適切な保育を「どう排除するか」より「どう付き合っていくか」

ある園の先生がおっしゃいました

「そもそも不適切を徹底排除して、この不条理な社会に子どもを出すのって、いいのかしら。適切も不適切もある世の中で、そういう不適切について同僚や上司や子どもと一緒に考える、一緒に乗り越える‥‥保育の中で出会った不適切を、排除するとか、叩き潰す、という考えじゃなくて、不適切とどう付き合っていくのか皆で考える、っていう姿勢こそが、大事なんじゃないかしら。」

こんなふうに考える先生が、人権に対する意識、環境を整える意識がないということは考えにくいと思うのですが、いかがでしょうか。

養成校として

残念ながら今年度私が担当した授業はもうすべて終わってしまいました。しかし、来年度はこの一連のあらゆる園の試行錯誤を、学生に伝える授業をしようと思っています。

「これが不適切でない保育だ」と自信満々で動く姿よりも、悩みながら、「これが適切な保育じゃないかなぁ」と考え続ける姿勢、それこそがプロとしての在り方ではないかと、私は考えるからです。

そして学生に「あなたなら、どんな節分をする？」と問いかけてみたいと思っています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

参考文献：

○「＜特報＞不適切保育　全国調査も実態把握は「困難」」2022年12月15日　産経新聞

○令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 「不適切保育に関する対応について」 事業報告書（別添） 「不適切な保育の未然防止及び 発生時の対応についての 手引き」2021 年３月株式会社キャンサースキャン　厚生労働省

ああ、相談業務

～ 春奈さんの話 ～

12

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

発達相談室に移動してから数年後には、市役所を退職し、臨床心理士としてスクールカウンセラーをはじめ、更に私設相談室の開設をして、フリーで動くことが多くなった。私設相談室は、当市に筆者のところしかないため、ありとあらゆる相談が紹介されてくるようになった。これからはそんなあちこちでの相談業務の話も含めて事例を加工しながら伝えていきたいと思う。

子どもたちが携帯電話を持ち始めてから、様々なトラブルが増えたのは周知の事実であるが、中でも、大きな問題となったのは、簡単に知らない人と繋がり、その結果実際に会って、性的関係を持ち、妊娠してしまうケースである。以前にも似たような話を書いたが、また違った視点も含め春奈さんの話を紹介しようと思う。

家族

春奈さん（以下本児）は１７歳、高校２年生である。父親４０歳公務員、母親３８歳パート、弟１５歳、中学校３年生。家はまだ築数年の一軒家。春奈さんの高校は、公立高校で、レベルで言えば中の上くらいのところ。コンビニでアルバイトもしている。弟は、上位の公立高校を目指している。母親は勉強にうるさく、過干渉なところがある。父親も厳しいところがあるが、母親ほどではない。

相談の始まり

保健師さんから、高校生の女の子が妊娠して困っているので相談に乗ってほしいとの電話が入ったのは９月末のこと。産婦人科を受診、妊娠が確定、予定日は、翌年の４月初旬という状態で、母子手帳をもらうようにと言われて保健センターに来所した。母親がついては来たが、車で待っているとのことで、窓口には顔を出さず、本児のみだった。

母子手帳発行時に、書類に記入したりアンケートに答える作業がある。種類には、相手の名前や

連絡先、自宅の連絡先などを記入するし、アンケートには、自分が今回の妊娠をどのように受け止めたか、自分自身が愛されて育ったか、精神既往はないか、持病はないか、喫煙や飲酒はないか、相談相手は誰かなどなど、本人の愛着や、母性、或いは経済状況、支援者等を把握するための質問が連なる。その結果を見て、妊婦の状態を把握し、どの程度の支援が必要かを検討する材料にするのだ。本児の場合は、未成年なのに母親が付き添わなかったこと、即ち母親との関係が悪いだろうという仮定の下、本児の支援が必要と保健師が判断し、カウンセリングに紹介されたのである。

相談経過

北海道の夏休みは短く、８月半ばには学校が始まる。学校は二期制のところが多いので、１０月初めには秋休みがある。そのちょうど秋休みの時に、事務所の方に来てもらって話を聴くことにした。

本児は一人で来所された。細身で、しっかりした感じの、女の子である。まずは申込書に記入をしてもらうのだが、字は、小さめでまるっこい、かわいらしい字を書いていた。

一通り、家族の話を聴くのが私のパターンなので、父親のこと、母親のこと、弟のこと、更には父母の両親のことなど聴かせてもらった。父母の両親も健在で、父方は道外、母方は近くの市に住んでいるという。母方の実家には度々遊びに行くが父方は遠いので、年に１回行くかどうかだとのこと。父母の関係性は特に悪くはない様子。弟とは、余り口をきくこともないが、特に仲が悪いわけでもない。母親とは少しぎくしゃくしている感じが聞き取れ、父親の方がましだがやはり距離を取ろうとしていることが分かった。弟は本児より成績が良く、父母の期待を一身に受けているという。本児が高校受験の時は、母親に勉強のことで言われることが多く、塾に行かされたりしたが、結局、そんなに成績は上がらず、行けるところで考えて受験し、現在通っている高校に合格したそうだ。

学校内での成績は中くらいか少し下という。勉強はあまり好きではないが、高校を卒業したら、専門学校に行って、ブライダル・プランナーか美容師になりたいと話してくれた。

今回の妊娠については、妊娠検査薬で確認し、その後産婦人科受診をするにあたり、仕方なく母親に話したそうだ。その時の母親の反応は、半狂乱で、怒鳴り散らされ、「弟が大事な時に何をしてくれたんだ！」「そんなふしだらな子に育てた覚えはない！」とか「近所に知られたら母さん生きていけない！」とか「高校も辞めて、出ていけ」とまで言われたそうだ。とはいえ、20 歳までは未成年の時代である。出ていくところもない。母親が落ち着くのを待つしかなかったそうだ。

母親が少し落ち着いてから、病院を受診し、妊娠が確定した。

相手は携帯のサイトで知り合った男性で、本州から夏休みに遊びに来た折に出会い、性的関係を持ってしまった。相手に妊娠したことを告げたとたんに、連絡を絶たれたという。まあ、無責任な男の典型みたいな、所謂チャラ男であった。こういう話は、よくある。そもそも携帯のサイトで知り合っているので、相手の名前が本名かどうかもわからない。連絡先は変えられてしまったらもう連絡を取ることもできない。住んでいる住所もでたらめなケースも多い。認知などもちろんしてもらえないだろう。

若年の妊娠の場合多くが堕胎できない時期まで妊娠の発覚が遅れ、生まざるを得ないということになる。その場合、父母は動揺し、子をなじることもあるが、最終的には腹を決めて、生むことを受け入れる。そして、生むまでは母親も協力してくれる。ただし、生むまでに、生まれたら里子に出すか、自分たちで育てるかの選択はされていることが多い。これも、生まれた子を見ていて里子に出す予定を変更して、自分たちで見ると言い出すことも間々ある。

本児の場合、今の時点であれば、まだ堕胎が可

能である。堕胎すれば、学校にも知られずに卒業までいて、専門学校にも予定通り進める。しかし、このまま妊娠を継続すると高校も辞めねばならなくなるし、本児が望んでいる専門学校への道も遠のく。もし堕胎するというなら、保健師を通じて病院を紹介することになるし、それには保護者の同意も必要となる。堕胎の危険性についても説明をする。将来子どもが欲しいと思ったときに妊娠しにくくなる可能性や、最悪子どもが出来なくなる可能性さえある。その説明を受けた上でまずは、本児が生むつもりかどうかを考えてもらわねばならない。

本児はここに来るまでにも保健師から同様の話を聴いていたそうで、よくよく考えたが「生みたい」と筆者の目をまっすぐ見てはっきりと言った。そこに本児の意志をしっかりと感じた。

生むと決まれば、今後どのようにしていくかの話になる。

今、母親はどのように言っているか？父親はどうかと聞いていく。母親は生むことに反対していて、「生む」と言ってからは口もきいてくれないという。父親は最初こそうろたえて、相手の男を見つけて責任を取らせるなどと言っていたが、見つけることが難しいとわかると、本人が生むというならそれでよいのではと言っていて、そのことで父母の喧嘩が繰り返されているそうだ。弟は我関せずの状態。「私のせいで家族が壊れそう」と本児も涙を浮かべて話していた。

一般的には、父親の方が拒否的で中々認めてくれないが、母親の方は折れて、結局娘の妊娠を支え、出産後も手伝ってくれることが多い。生まれてきた子に罪はない。赤ちゃんは誰からも愛されるようにかわいらしく生まれてくることもあって、母親はおばあちゃんとしてというより先輩ママとして、率先して赤ちゃんの面倒を見てくれる。そして父親もいつの間にか赤ちゃんをかわいがり、おじいちゃんになっていたりする。こうなれば理想的である。しかしこのケースでは反対であった。

本児が生むつもりであれば、妊娠中から出産に至るまで、どうしても誰かの支援が必要である。法的には結婚できる年齢ではあるがまだ精神的には幼い。しかもシングルである。母親として胎児を守り、子を産むには親や周りの支援が必要である。したがってどの程度の支援をもらえるかの把握は重要である。

そしてもう一つの決断は、生んだ後のこと。自分で育てるか、施設や里親に預けるかである。

これについても本児は自分で育てると言い切った。高校は諦めて退学し、この子を育てたいと。母親としての自分を夢見ている雰囲気が感じられ、ちょっと不安になったので、子育ては大変であることも話してみた。それでも本児は自分で育てたいというので、それではということで、本児の父母との面談を提案してみた。

父母に理解してもらい、協力してもらうためには、父母と話していく必要がある。本児もそれを望んでいると言ってくれたので、本児の了解のもと母親に電話をすることにした。そして、学校をどうするかについて話をうつした。学校に妊娠がわかれば即退学のところも多い。今すぐ退学するつもりかあるいは通信に転学するつもりか？今でないとしたらいつ退学あるいは転学するか等検討していく。高校の修学旅行は２年生の１０月～１２月に行くことが多い。本児は修学旅行に行ってから退学したいという。本児の学校では秋休み後まもなく修学旅行に行くそうで、それまで学校には隠しておきたいというのである。今まであまり学校を休んではいないので、つわりがひどければ休むことも可能だという。

しかし、体育の授業はどうするか？妊娠が安定してからであれば旅行も可能であるが、まだ３か月に入ったばかりで安定期ではないので、修学旅行は諦めたほうが良いのではと伝えてみた。万が一、途中で流産になったりしたら、病院にも行かなければならないし、学校にもばれてしまうと。

あれこれ言ってみても、本児の気持ちは決まっていて、つわりはあまり酷くないし、体育は理由をつけて休めばよいし、修学旅行はどうしても行きたいと主張し、譲らない。頑固な子である。

何とか説得して、体調によっては行かない選択をすることを約束してもらって一回目の面談が終了となった。

数日後に父母に来てもらって話を聴いた。勿論今回のことは、父母にとってショックであったことは想像に難くない。その気持ちを受け止めつつ、今後についての話をする。

本児の意志が固く、生むつもりであり、また育てるつもりでもあることを本児の了解のもと伝えた。それに対し、父母も、本児は一度決めたことは通す子だと表現し、その気持ちは理解してくれた。自分たちの育て方が悪かったのだろうかなどに話が移ったりもしたが、過去を反省することよりもこれからのことを考えようと伝え、父母の覚悟のほどを確認した。父親は「もう仕方がないから生ませてやろう」と言い、母親は「百歩譲って生ませたって育てられっこない、育てるのは結局自分だからそれは嫌だ」と主張。生ませるなら母方祖父母宅に預けて、そっちの病院で生ませるなどと言い出した。母方祖父母もまだ６０代後半で元気なこともあるのだろうし、世間体を考えていることも分かった。また、学校については、父母としては高校を卒業してほしいので、通信への転学を望んでいるとのこと。修学旅行への参加については「すきにすればいい」と投げやりだった。

そこで、父母に介入し、今は、結構こういうケースがあること、シングルで子どもを育てている若年の母親もそれなりにいること、そういう母親との横のつながりも造っていけたらよいと思うこと、子どもを育てられるかどうかは、やらせてみなければわからないこと、先輩ママとして教えてあげてほしいこと等を伝えつつ、今この場で、もう一度喧嘩ではなく、冷静に、よく話し合ってほしいと伝えて、傍観していた。

最初こそ、母親は中々父親と意見を一致させようとせず、「男親なんてどうせ何もしないから」と反発したり、「負担は全部私に来る」と言ったり、「弟にも良い影響は与えない」などと母親が言えば、父親が「俺もできることはやるから」とか「弟の方は高校に行ってから出産になるじゃないか」などと言い、二人の話し合いは紆余曲折しつつも、

もともと仲の悪い夫婦ではなかったことが幸いして、最終的には本児の出産は認め、母方祖父母宅の方に病院を決めてそちらで生むこと、しばらくは祖父母宅で育てること、「もしあの子が子育てを放棄するようなことがあったら里子に出す」ということで決着がついた。修学旅行については、今までも全くつわりらしいものもなく、体育も普通にやって来たことから、行かせてみるという結論になった。つまり本児の思いが通ったのである。心配ではあったが、これが家族の決断であるならそれを支持するしかない。ただ、母親には、母親だからこそわかる妊婦のしんどさや異常もあると思うので、その時は修学旅行に行かせないでほしいとお願いした。こうすることで、母親としての支配的な部分を少しだけ残しておきたかった。もともと厳しい母親であるので、すべてのことが母親の意にそぐわない形になれば、母親と本児の関係性も悪くなるだろうと思ったからである。

数日後にもう一度本児の面談を設定し、来てもらった。本児はにこにこと表情も良く、明日から修学旅行に行くと話してくれた。父母が受け入れてくれたことをとても喜んでいた。体調もよさそうだが、くれぐれも体調管理を怠らないように伝え、調子が悪かったら活動も休むようにと伝えた。また、修学旅行が終わったら、すぐに学校に今の状況を伝えて転学の手続きを進めることを提案。父母にもこれは伝えてあるので、一緒に動くことを勧めた。

一か月ほどたって、本児から連絡が来て、無事修学旅行を終え、転学の手続きも終わったこと、通信制の高校に転学することで、普通に３年で卒業できることなどの報告を受けた。

翌年４月に、母親から電話があり、本児が無事女の子を出産したこと、学校の方は通信なので何とかなっていること、祖父母宅から赤ちゃんを連れて戻ってきていること、弟の方は無事レベルの高い進学校に入学し、姪の誕生を彼なりに喜んでいるようだとの話も聴かれた。母親も本児がきっ

と寂しかったのかなという反省の中で、本児を認め、先輩ママとして本児を応援してくれていることなど話してくれた。めでたしめでたしでだった。

まとめ

本ケースのように子どもが生まれてから、祖父母の態度がコロッと変わって、可愛がるようになることは多い。生まれるまでは里子に出すと言っていた母親や祖父母も、生まれてみたら可愛くて自分たちで育てると言い出すこともある。また、娘の子を母親が自分の子として養子縁組して育てるケースもある。いずれにしろ、生まれた子が産んだ母親やその家族の中で育てられることが一番である。

本ケースは大分前のことであるが、最近はもっとこういうケースが増えている。１０代の妊娠と言っても、高校生ならともかく、中学生の妊娠が問題となってきている。そうした若年の妊娠は、ＳＮＳで知り合ってというのがほとんどである。

本ケースのようにめでたい形で終わることもあるが、妊婦が家出をして、所在不明になったり、父母に受け入れてもらえないことで、自殺してしまったり、一人でトイレやどこかで生んで、殺してしまったりと、悲しい結果になる事もある。捨て子も相変わらず時折見られる。

諸外国では婚外子の割合は５０％ほどの国もある。日本は２％程度しかない（注１）。この違いが、こうした悲劇の遠因にもなっている。世間体やらなにやらで、我が子の妊娠を喜べない事情は分からないでもないが、出来てしまったのであれば、その子を受け入れ、育てていく社会にしていく必要があるだろう。

緊急避妊薬についても、婚外子を認めていく方向になれば、レイプ等の犯罪被害や若年の妊娠等でもない限り必要なくなる。少子化が問題となっている今、子どもを増やそうというのなら、この問題の早期の解決が望まれる。本ケースを書きながら改めてこんなことを考えた。

注１

国　名	（2020 年）	
	婚外子率	合計特殊出生率
日　本	2.4	1.33
韓　国	2.5	0.84
トルコ	2.8	1.76
イスラエル	8.1	2.90
ギリシャ	13.8	1.28
ポーランド	26.4	1.38
スイス	27.7	1.46
カナダ	32.7	1.50
ドイツ	33.1	1.53
イタリア	33.8	1.24
オーストラリア	36.5	1.58
アメリカ	40.5	1.64
オーストリア	41.2	1.44
イギリス	44.0	1.56
ニュージーランド	48.3	1.61
ベルギー	52.4	1.72
オランダ	53.5	1.55
デンマーク	54.2	1.67
スウェーデン	55.2	1.66
ノルウェー	58.5	1.48
フランス	62.2	1.79
アイスランド	69.4	1.72
メキシコ	70.4	2.08
コスタリカ	72.5	1.72
チ　リ	75.1	1.61
相関係数	r＝0.180113	

出典）OECD Family Databases（2020）

対人援助学マガジン第 52号

生殖医療と家族援助

～果たして、不妊治療は全てのカップルに解放されたか～

荒木晃子

保険適用で解決しないこと

前号で、保険適用がスタートした不妊治療（人工授精・体外受精・顕微授精）をためらわず受診する 20 代カップル、自己卵子・自己精子による妊娠・出産を目指す 40 代カップルに起きるであろう懸念を整理した。保険適用により、これまでの高額治療費が一部を除き 3 割負担となり、若年層カップルにとっては経済的負担が減り利用しやすくなった。また、一定の条件付きとはいえ、女性の年齢が 43 歳、もしくは 46 歳であっても適用範囲での治療が可能であることが表面化し、「年齢が原因であきらめる」カップルは減少傾向にあると推察する。

不妊治療の入り口が緩和されたとはいえ、不妊検査の結果、自己卵子・自己精子による妊娠・出産が困難と診断された場合、年齢にかかわらず受診したカップルに次なる課題と問題が生じることを忘れてはならない。検査の結果次第では、入り口より出口に更なる困難が待ち受けている可能性が大きい。

出口にある 3 つの選択肢、①妊娠・出産、②里親・養子縁組、③子どものいる/いないに拘らない生き方の検討、以外は、治療継続という出口のない状況が続く可能性が高い。検査結果如何では、生殖補助医療技術をもってすれば解決可能なケースもあり得る。しかし、いずれにしても不妊治療の保険適用では解決できない課題であり、同時に、第三者の配偶子の利用ともなると社会的合意が必要とされる法的問題を伴う。

今号は、「不妊検査の結果で問題ないと診断された事実婚カップル」に不妊治療が解放されたことで起きていること、また、事実婚カップルのほかに「解放されることを望むカップル」に起きていることを取り上げる。

事実婚カップルへの解放

保険適用によって、不妊治療は事実婚カップルを対象とすることが明文化され、これまで婚姻関係のある夫婦のみを対象としていた生殖補助医療が法的に婚姻関係のないカップルにも解放された。しかし実際には、これまでも不妊治療を受診する事実婚カップルは存在しており、医療現場では公的なガイドラインやルールのない状況下で施設ごとに対応してきた経緯がある。

一例をあげると、事実婚カップルの初診時にそれぞれ別のパートナーとの婚姻関係がない（単身である）ことの公的証明書の提出をもって、事実婚カップルを婚姻関係にあるカップル相当とする施設。また筆者の勤務する施設では、上の証明書提出に加え、不妊治療に入る前（検査前から検査終了まで）に、心理カウンセラーによるカップルカウンセリングを実施し、ふたりの関係性を確認、同時に妊娠・出産後に生まれた子どもとの戸籍上の親子関係を説明するほか、子どもが生まれることを前提としたカップルの対話を

心理カウンセラーが確認するなど、独自のガイドラインを設けている。ほかに、法的婚姻関係がないと受診を断る施設、ふたりの関係を確認せず患者の要望があれば粛々と治療を進める施設など、国内の生殖医療現場では事実婚カップルへの対応は施設ごとに異なっていた。その点では、今回、一定のガイドラインが提示されたことで、事実婚カップルへの対応が可視化され、新たな家族形態へ柔軟に対応できる医療体制が整ったといえる。

事実婚の定義とは？

「事実婚とは、婚姻届けを提出いない状態で、夫婦と同様の関係を有し共同生活を送るカップルを指す。実際に婚姻関係を結んでいる状態と認められれば、事実婚でも法律婚と同程度の権利が得られる場合もある」とは、ある弁護士の説である。

事実婚には、法律婚で得ることができる社会的保障、財産、金銭、相続などに公正証書の作成が推奨されており、子どもとの親子関係もその中に含まれる。したがって、生殖医療現場で事実婚の確認の際、カップルの関係性は重要なチェックポイントのひとつとなる。子どもが生まれることを目的とする医療の性質上、子どもとの親子関係に関する知識と認識、互いの同意、また、妊娠しても出産に至らない場合の合意と同意も不可欠である。互いが他に婚姻関係を持たないことは勿論、治療の結果、生まれてくる子どもとの親子関係に於いてもカップルの意思の確認は外せない要件となっている。

例外ではあるが、法律婚、事実婚に関わらず子どもを産むことを目的に、契約としてのカップル関係を結ぶ契約婚があることを、医療者は知り注意するとともに、そういったケースの事情や心情への留意を心がけたい。

事実婚カップル以外にも

まず、夫婦別氏制度を利用したカップルが不妊治療を受診したケースを紹介する。

夫婦別氏を選択するカップルの大半は、共に強い意思と信念がある場合が多いようである。仕事、家業、ジェンダー意識など理由は様々だが、一様にカップルの意思と同意に一点の曇りがないほどで、いずれのカップルもその信頼関係に疑う余地はなかった。また、夫婦別氏とは、戸籍上はどちらかの姓で婚姻届けが出されているため、医療現場に提出する保険証で法律上の婚姻関係があることは確認できる。よって、不妊治療の受診、保険適用の際に問題が生じる可能性はないに等しい。では、不妊治療する夫婦が別氏制度を利用することで、誰が何に不都合、不利益を被るのだろうか。夫婦別氏制度を利用し、婚姻前の旧姓を使用し不妊治療する女性の語りを紹介する。

「結婚前に二人でどちらの姓を名乗るか時間をかけて話し合った。その結果、互いに結婚して名前が変わると業務上支障が出るし、これまで積み上げてきた実績にも不具合が生じる可能性があるため、私が旧姓を使用すると決めた。結婚後も旧姓を使用することが自分にとって自然体で生きることにつながっているし、パートナーも同じ気持ちでいてくれる。でも、子どもが生まれると、子どもとの生活が始まり、ママ友などの人間関係や諸所の手続きが必要となる。子育ての環境のなかで両親の姓が違うことから、これまで経験したことのない問題や子どもの不利益が生じる可能性を考えると、この先、夫婦別氏制度を続けられるか自信はない。果たして、子どものために自分の信念を曲げる必要があるのかも疑問に思う。夫や義理の両親、さ

らに実家の両親までも、『子どものためには仕方がない。結婚しているのだから夫の姓に替えるしかない』と言う。夫まで、夫婦別氏で共に生きる約束を反故にしようとする。そんな彼に対して、不信、不満があり子どもを産むことに迷いが生じている。」そう語った女性は、このまま治療を続けるべきか、結婚生活を続けるべきかを悩んでいた。

法的婚姻関係のない事実婚や夫婦別氏制度を利用するカップルにとって、不妊治療は、妊娠・出産という医学的な解決を図るだけでなく、生まれた子どもとの親子関係に関わる新たな法的、社会的課題を生む。以上が、不妊治療が新しい家族形態に開放され、出産に至った親子に待ち受けている更なる課題である。

生殖における異性婚と同性婚

次に、異性婚と同性婚を検討する。

同性婚とは、女性と女性、或いは男性と男性による婚姻に準ずるカップル関係を示す呼称を表す。現在、国内では同性同士の婚姻は認められていないため、法的な婚姻関係はない。しかしながら現在、東京、大阪をはじめ各地で同性婚訴訟裁判の判決を待つ同性カップルの原告たちは、自分たちの関係は異性婚と同じであるため法的にも婚姻関係を認めて欲しいと訴えている。

事実婚は、法的婚姻関係がなくても不妊治療の保険適用は可能であるが、同じく法的婚姻関係のない同性カップルは、保険適用どころか不妊治療の利用も困難である。事実婚カップルも同性カップルも、カップルの強い意思と愛情でその関係を築いているのであって、その関係には疑う余地もない。事実婚カップルへの不妊治療の開放は、法的婚姻関係より、カップルの意思を尊重した子どもとの家族形成の推奨と捉えることができるのではないだろうか。

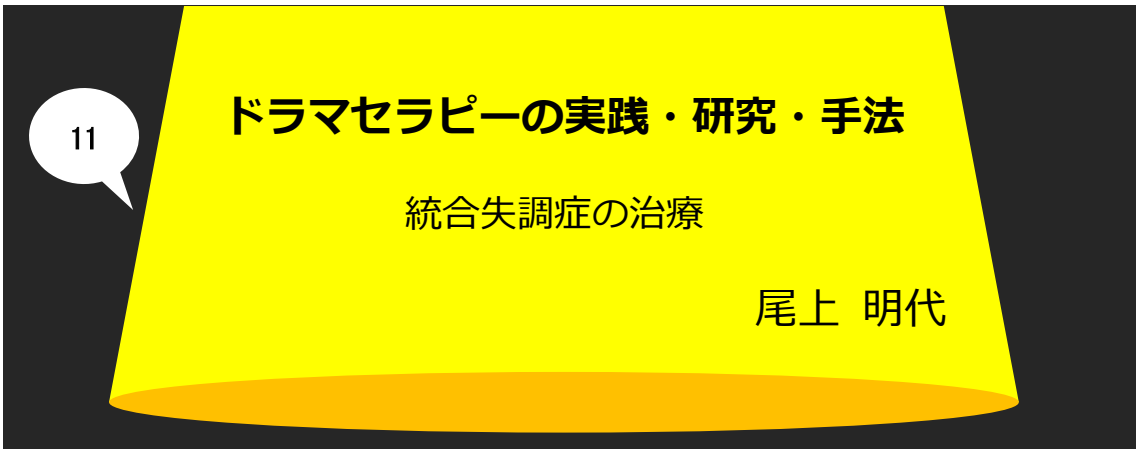
一般に、事実婚は法律婚と同じ、戸籍上の男性と女性カップルをいう。mtF（出生時は男性で後に性別変更手術を行い戸籍変更をした）トランスジェンダー女性、或いは、ftM（出生時は女性で後に性別変更手術を行い戸籍変更をした）トランスジェンダー男性と、戸籍上性別の異なるパートナーとの婚姻関係は成立し、事実婚も可能である。ただし、両者・両カップルとも、自然生殖における必須条件が揃わないため、保険適用の範囲で不妊治療は利用できない。彼らが子どもを望めば、不妊治療の出口の先に待つ、第三者配偶子による生殖補助医療、もしくは代理出産の利用を検討することになる。

不妊治療が保険適用になっても、生殖には精子・卵子・子宮の 3 つの要因が揃わなければ妊娠・出産に至らない。この点は、同性婚カップルと同じである。

ほかに、異性愛者で戸籍上は女性と男性カップルであっても、同性カップル、トランスジェンダーカップルと同様の生殖の条件を持つ場合がある。卵子がない女性、精子がない男性、子宮のない女性が、その条件に相当する。彼らは、保険適用の条件にも当てはまらず、トランスジェンダーでも、同性カップルでも事実婚でもないにもかかわらず、不妊治療を受診することさえかなわない現状を疑問に思う。

不妊治療の保険適用によって、一見全てのカップルに解放されたかに見える生殖医療現場には、双方が子どもを望んでも、未だ不妊治療にチャレンジすることさえかなわない多くの当事者カップルの存在を確認した。

（次号に続く）



これまで、ときどき古典的な論文や実践の内容を解説してきたが、今回は統合失調症を対象とする場合、ドラマセラピーがどのように役立つのかを主にJohnson(1981)の理論から紹介する。

統合失調症の原因については、長年にわたって、すでに様々な議論が展開されている。また治療法としては、精神科医療における薬物療法が一般的である。その功罪などについて述べるのは本稿の意図ではないが、まず、薬物療法（または最小限の併用を含む）以外のアプローチについて、簡単に言及したい。

「オープンダイアローグ」と「当事者研究」

例えば、フィンランドの「オープンダイアローグ（=開かれた対話）」や北海道の「べてるの家」の活動（当事者研究など）がある。

「オープンダイアローグ」について、私はSeikkuraとArnkilの著作(2006)に出会って以来、注目してきたが、日本では斎藤(2015)に紹介されて、急速に知られるようになってきた。医療者たちが、発症した患者の家に行き、その患者や家族等と毎日対話をすることで、入院や服薬が激減するということが起きる。また向谷地（2009等）が北海道浦河で始めた「べてるの家」では、患者たちが共同体を作り生活する。「三度の飯よりミーティング」というほど対話や話し合いを重視し、「当事者研究」では、自身の妄想、症状、そして困りごとなどを絵にする等して「研究」し、グループで分かち合う。グループで語ること、対話することの意味や意義が強く発信されている。両方とも１９８０年代からの取り組みで、今や統合失調症だけでなく、さまざまな「場」や「当事者」の活動に広がり応用されている。

また、Bateson(2000)が統合失調症の原因として人間関係を挙げ、ダブルバイ

ンド理論を発表したのは、それらよりずっと前、１９５０年代のことであった。このように、広く社会関係までを包含して病因を求め、グループで協働してその病状を改善したり受け入れたりすることで「治療」する、つまり薬以外に統合失調症にアプローチできる理論や方法がある。

統合失調症を対象としたドラマセラピーの機能

前述したことを大前提として、ではドラマセラピーがどのように役立てるかを解説したい。ドラマセラピーが、学問や心理療法の一分野として確立されたのは、１９７０年代であるが、その始まりは１９００年代に遡る。ドラマセラピーも、グループで人と関わり合いながら、対話や会話をする点で、上記のオープンダイアローグや当事者研究と同じスタンスであると言える。大きな違いは、当然ながら、架空の状況（物語など）を扱ったドラマで役を演じることである。Ruddy&Dent-Brown (2007) は、「統合失調症に関連した、様々な混乱した考えや感情を包み込む容器 (container) として、演じるというドラマの力は特に効果がある」と述べている。この包み込む容器、という概念は、どんな対象者とのセッションでも言えることであるが、統合失調症の場合は特に役立つと感じる。

さらに、Ruddy&Dent-Brown は、「ドラマセラピーは、参加者にドラマの世界を（筆者注：セラピーの）グループの世界から区別するという、環境を制御する方法を提供し、参加者が現実と幻想(fantasy)とを分離することを助けてくれる」と主張する。そして Emunah (1983) は、「ドラマセラピーが、統合失調症をもつ諸個人に、現実と幻想(fantasy)とを混同するかもしれないことに対処する援助を与える方法となる」と見ている。Emunah によれば、「劇遊びは、現実では制御し難い衝動を、幻想の中で制御し、現実を取り入れ、身につけるための方法」である。上記の記述の中で、fantasy という用語は、統合失調症での妄想として、そして、ドラマセラピーでの劇的世界という架空、の両方の意味で使われている。このように、患者の妄想への対処をドラマの幻想で受けて立てるところが、ドラマセラピーの奥深さの一つと考える。

しかし、当然、ただ架空のドラマを演じてもらえば良いということではない。セラピストが注意を払いながら演技を観察しリードしていかなければ、逆効果になりうるからである。この点をわかりやすく提起したのが Johnson (1981) の統合失調症治療に関する理論である。以下に紹介する。

＜統合失調症と対人関係＞

統合失調症の人は、自己と他者との境界が曖昧なので、対人関係への恐怖がその根本にある。その対人関係は、どんなものであれ、自分を飲み込み、また自己を失うことにつながるのだ。単に敵対的な関係だけでなく、友好的な愛情をもった関係ですら、自分が飲み込まれ自己を喪失してしまうと感じられる。その感覚には、見られることや話を聞かれることまでも含む。ゆえに、統合失調症の人は、すべての人間関係から撤退し、自己の中に閉じこもるようになる。しかし、まさにそのときこそ、最も他者からの援助が必要なわけだ。にもかかわらず、それを拒否することに凝り固まって、絶望的な状態になってしまうのである。このような悪循環に陥っているので、治療はこの循環を逆転していくことである。

＜役を演じて区別する＞

そこで、「役を演じること」が大きな役目を果たす。通常、自分ではない「役」を演じるときには、以下のような境界を明解にもっていなければならない。

A1：自分が演じている役　　B1：他者が演じている役
A：　自分　　B：　他者

演者「A さん」が認識しなくてはならないのは：
A と A1 との区別
B と B1 との区別
A1 と B１との区別
さらに、
A と B1 との関係が、A と B との関係とは異なるという区別
A1 と B との関係が、A と B との関係とは異なるという区別
A1 と B1 との関係は、A と B との関係とは異なるという区別
そして、（ドラマ外で）常に A と B との区別

これらの区別ができなくては、役を演じることができず、また、役を解除することもできない。統合失調症の人は、このいずれかで混乱が生じ、役を演じ続けることができなくなると言われている。つまり、役を演じてもらうことで、どこに問題があるかがわかるのだ。

ドラマセラピストが、混乱が生じた時点で介入して状況を理解させ、上手く

役を演じることができるように導くことで、クライエントは、
自分が演じている役と自分、
他者が演じている役と他者、
自分の演じている役と他者が演じている役、など、それぞれの区別を認識できるようになり、ひいては、自己と他者との区別が明解になっていく。

そして Johnson は、それが医療的な治療を超えて、統合失調症の症状をもたらしている根本を改善できる可能性を示していると言う。

私は、「べてるの家」と北海道全体の「当事者研究集会」でドラマセラピーを実施したことがある。当事者の方々だけでなく、援助スタッフ、各地から実習等に来ていた研修生などが一緒に同じドラマという場を共有して下さった。連続的なセラピーではなく、それぞれ、たった１回２時間だけのセッションで、しかも４０－５０人の大きなグループという状況であったが、良いプロセスを発生させることができた。皆さんは参加前、「ドラマ、と聞いて何をさせられるのか、と心配していた」とのことだったが、セッション後には、異口同音に「予想と全然違うものだった」と感想を述べていた。（どんな予想だったのかは、わからないが・・）そして「久々に本気でたくさん笑った」「みんな２時間前と全然違う表情だ」等々の感想も多くあった。

また、札幌なかまの杜クリニック（精神障害者が創るユニークな精神科クリニック。さまざまな意味で、べてるの家の「文化」を実践している）では、定期的に連続セッションをさせていただいている。そこでの様子は、以前、本稿でも紹介したことがあるが、毎回、楽しみながら個人レベルでもグループとしても、終了後に大きな変化を遂げている。

ワーク内容と、参加者への一瞬一瞬の対応を注意深く丁寧に遂行することで、多くの参加者に、良いインパクトと心から笑う楽しさ、そして「柔軟な変化ができるんだ」という自信を提供できることを強く感じている。

Butler(2012)は、発展的変容（このマガジンで何度か紹介したことのある手法）を用い、統合失調症対象のドラマセラピーを多く実践している。彼はその手法の視点から見る統合失調症を、以下のような障害であるという。

１　自分の身体を適切に感じることができない
２　他者と出会ったり関係を作ったりすることができない
３　自分を柔軟に変化・変容させることができない

私はこのことを念頭において、上記のような統合失調症の方が含まれるグル

ープでセッションを実施する。すなわち、まず１に対しては、いろいろな役に「今ここ」で楽しく没頭できるプロセスを創ることで、その瞬間に自分の身体を感じてもらう。必要に応じてボディーワークも取り入れている。また、２に対しては、役を通してお互いに出会う関係を作るのであるが、役をしっかり降りたあとも、素（す）の自分として、他者と関わりやすくなっているのが感じられる。さらに、３に対しては、1 回のセッションでも効果が出る。発想力や創造性を開発できるワークをすると、多くの方が、周りが驚くような柔軟な発想で、ドミナントストーリー（支配的な物語）を変えたり、新たなオルタナティブストーリー（今までとは異なる物語）を演じて下さる。

ただし、これらの良い結果について特筆すべきことがある。その変容ぶりは、べてるの家や札幌なかまの杜クリニック等、参加者の属するコミュニティーにおける対話や関係構築など、元々培われていたものの力が大きいということである。そのような土壌の上に、私のセッションが耕運機となり、さらに耕されて良い結果に結びついていると解釈している。

文献

Butler, J.D. (2012) Playing with madness: Developmental Transformations and the treatment of schizophrenia. The Arts in Psychotherapy,39, pp87-94

ベイトソン，G.(2000)．精神の生態学(改訂第二版）佐藤良明訳, 新思索社

Emunah, R. (1983). Drama therapy with adult psychiatric patients. The Arts in Psychotherapy, 10(2), 77–84.

Johnson, D. R. (1981). Drama therapy and the schizophrenic condition. In Schattner, G., & Courtney, R. (Eds.). Drama in therapy (pp. 47–64). New York: Drama Book Specialists.

向谷地生良（２００９）技法以前―べてるの家のつくりかた（シリーズケアをひらく)、医学書院

Ruddy, R., & Dent-Brown, K. (2007). Drama therapy for schizophrenia or schizophrenia-like illnesses. Cochrane Database of Systematic Reviews, (1). Art. No. CD005378.

斎藤環（２０１５）オープンダイアローグとは何か　医学書院

Seikkura, J., & Arnkil, T. E. (2006). Dialogical Meetings in Social Networks (The Systemic Thinking and Practice Series). Routledge

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第 49 話

水野　スウ

40年目の紅茶の時間

毎週水曜の午後、家を開いて「紅茶の時間」をするようになって、今年で40年目になりました。25年前ほど前からはやっていないのは相変わらずだけど、コロナの時期はさらにそれが加速し。それでも不思議と誰かしらやってきて、近頃は、来た人と私たち夫婦だけの貸切状態になることも多い、静かな紅茶の時間がそこに流れています。

紅茶は、理由も目的もなんもなしに誰が来てもいい場所だけど、はじめてここにくる人には、たいてい何かしら理由があります。私の本を読んでか、話を聞いてか、またはどこかで名前を見かけてか、「一度来てみたかったんです」とはるばる県外からやってきた人の話を聴きながら、その理由がわかってくる場合もあれば、本人も気がついてなかったけれど、話しているうちにその人自身が気づいていくこともあります。

私はその場にずっと居て話を聴いているので、自分なりの来た理由を発見したとたんに、ひとの表情がかわる、その瞬間に毎回立ち会えています。それは、とても楽しくて幸せな瞬間の共有です。

何もしないことをする

2月のある日、マミさんという方から、金沢の友だちに聞いたんですけど紅茶に行ってもいいですかとメッセージをもらいました。

マミさんは神奈川県に住んでいて、本を出版したり、対話を広げる活動をしたり、まちづくりをしたり、家を半びらきにしたり（住みびらき、という言葉があるけど、そこまでフルオープンじゃないっていう意味かな？）しているそう。たまたま金沢に来る用事があり、何かのタイミングでお会いできたら、と連絡をくれた、というわけ。

はい、もちろんどうぞどうぞ、とメッセージの返事を書きながら、紅茶は長い年月続けてるとはいえ、週に一回開けているだけで、ましてや今は全然はやってない、はた目には何をしてるかよくわからない場所。もしか遠くからの人が、紅茶を過大評価したり、過剰期待したりして来るとなると、それはとっ

ても困る！　そう思ったものだからマミさんに、紅茶の時間って何もしないということをしている場所なんです、と事前に伝えました。そしたら「何もしないことをしてる！　最高です。私も、ただ場があるだけ、という何もしないイベント開きました」とお返事が。

え、どういうことだろう。彼女がメッセージに貼ってくれたリンク先を読んでみて、その意味がわかりました。

彼女の計画していたイベントがある事情でキャンセルとなり、だけど場所はもう予約済みで、お金も払ってある。ならば、主催者からは何も提供しないけど、誰が来て何をしてもいい、という“ただ「場がある」だけ”のイベントをしよう、と思いついたんだそうです。

その日、マミさんが来る人にリクエストしたのはたった一つだけ。カレーの材料になりそうなものを持ち寄ってください、と。

ふたを開けてみれば、当日は5歳から80歳近くの人が50人集まって場を囲み、みんなして大量のカレーをつくり、それをみんなで食べ、あとはそれぞれが自由に、そこにあるものでそこにある時間をシェアしたのだといいます。

何もしない、という言葉に紅茶の時間とのシンクロを感じました。それと同時に、マミさんがこのイベントをしようと思った理由の一つ——イベントの「消費者」になることの空虚感、主催者になって「消費される」ことの徒労感、と書いていた感覚にも、私自身、思い当たることがありました。

雪の日の紅茶

マミさんがやってきたのは、はじめてメッセージをもらってから7日後、結構な雪の日の紅茶でした。以前に何度か紅茶に来たことがあるという金沢の友人が、彼女を車に乗せて来てくれたんです。

なんてアクティブな人！という第一印象のマミさんに、前から気になっていた「消費者」とか「消費される」という言葉に話をむけてみると、彼女はこんなふうに答えました。

世の中にはさまざまなイベントがあるけど、自分が参加するときは、参加費を払ってそれに見あうものを持ち帰ろうとどこかで思っちゃう気がする。まるで消費者になるっていうか。逆に、自分が主催者になったときは、お金もらってるんだから期待されるものを提供しなきゃ、と思いがち。でも、それって自分が消費されるみたいな感覚。そのことにモヤモヤしている、と。

ああ、それ、わかるなあ。それを一番感じたのはいつだったか、そうそう、金沢から引っ越してきた、あの頃だったことを思い出しました。

紅茶って何するところ？

紅茶の時間のはじまりは、生後11ヶ月の娘を抱えた私の、子育て仲間見つけのためでした。

今から40年前は、子育て支援センターという言葉も場所もまだない時代。はじめての子育て、どうしたらいいかわからなくてとまどうこともたくさん。かといって、娘を連れて行ける場所もそう思いつきませんでした。

子育て仲間が切実にほしい、仲間と出逢いたい。そっか、それなら我が家に来てもらおう！　そんな思いつきからはじめた紅茶の時間は、赤ちゃん連れで気楽に行ける場、仲間と出会える場を求めていたほかのママたちにとっても、うれしくて大切な場所だったと思います。

なので当時は、紅茶って一体何するところ？と、考えることも訊かれることも、一度もなかった。おさなごと一緒にやってきた一人ひとりがそれぞれ、場と仲間を、当時の私のように真剣に求めていたのです。

だけど31年前にこの町に越してきて、知らない土地で紅茶の時間の続きをしようとした時は、状況が違いました。娘も10歳になっていて、赤ちゃん連れで来る人はもう少なくなっていたんです。まして、当時は金沢から車で40分の場所。子育てに忙しい金沢の人は、余計に来にくかったと思います。

まわりのご近所さんたちにしたら、金沢から越してきた人が、水曜日の午後、誰でもどうぞ、といっ

て家をひらくらしい。そこでいったい何をするの？　自由に、好きに、そこに行って、無料で、お茶を飲む、おしゃべりをする？　なんのために？　きっとそんな「？」マークが、近所のお母さんたちにはいっぱいあったことだろうなと思います。今は住みびらきという言葉があるけど、当時は家をひらく、っていう概念がちっともポピュラーでなかったですもんね。

期待して待たれる、ということ

紅茶をしてきた中で、実はその頃の半年間が、一番もやもやしててしんどい時期だった。そのわけが、マミさんの「提供することを期待される」という言葉で、改めて見えてきた気がしました。

私がしんどかったのは、近所のお母さんたちから、私が何かすばらしいものを提供することを期待して待たれている、その空気だったんじゃないかな、と思ったのです。

金沢時代の紅茶は、これといってとくべつなことは何もしていなかったけれど、場を開く私も、そこに来るお母さんたちも、一緒にその場をつくっている実感がありました。

だけど、津幡に越した途端、提供する側とされる側に分かれて、何かすてきなこと、いいものを期待されて待たれている私がそこにいた。いやいや、これってなんか違う。紅茶はこういう場所じゃなかったはず。だけど、それをうまく伝えられないもどかしさ。

ああ、そうだったのか。そんなもろもろのきもちがあの頃の私にはあったんだねえ。マミさんの、何もしない、何も提供しない、という言葉が呼び水になって、31年前にタイムスリップした私の中で、ようやくきもちが言葉を見つけ、すとんと腑に落ちていくものがありました。

マミさんが、何もしないことをする、というイベントを開いたあの日。主催者が用意したんでなく、はじめは何もないところに、徐々に人が増え、カレーの具が集まり、そこに参加した人たちと協働で1日限りの場と時間をつくっていったのだろうな。そのことが、「消費」や「期待」にモヤモヤしていたマミさんにとって、どんなにかうれしかったろう、と改めて思ったのでした。

焚き火に薪をくべるように

紅茶に来る人には何かしら理由があるとはじめに書いたけど、実はマミさんが紅茶に来たのには明確な理由がありました。仲間と一緒につくった本を、金沢の滞在中に献本する場所を探してもいたのです。

その本のタイトルは『ことばの焚き火』。それは、マミさんがこの数年間に「対話」を仲立ちにして出逢った人たちと、対話という名のミーティングを重ねて共著で出版した、対話についての本でした。

本について私に説明してくれる中で、対話することを、焚き火に薪をくべるように自分の思っているままを言葉にだしていくこと、と表現したマミさん。

焚き火に薪をくべるように――この表現には親しみがあります。というのも、紅茶の部屋の真ん中には薪ストーブがあって、長い冬の間はいつもそこに薪がくべられ、火が赤々と燃えているのです。もちろん、マミさんがやって来たこの日も。

金沢のマンションから津幡の一軒家に越してきて、はじめて薪ストーブを使い始めたときは、なかなかうまく火がつけられなくて苦労したものです。だけど、何度もトライするうち、だんだんコツをつかんでいきました。

はじめはクシャクシャの新聞紙、そのうえに使用済みの割り箸、そのうえに樹の皮や木端（こっぱ）をのせて火をつける。それが燃えたのを見届けて、次に細い薪を置く。ここで焦って大きい薪をのせると、重さに負けて火が消えてしまうので、慎重に。

炎の表情をじっと見ていると、ここらでもう1本足そう、というタイミングを炎が教えてくれる。そろそろ大丈夫そうと思ったら、次の太さの薪をくべる。燃え移って、燃え移って、だんだん大きな炎になっていく。勢いよく炎が出る状態がしばらく続いて、それを越えると、次第にやわらかく静かな炎に落ち着いていく。

私が一番好きなのは、炎がおさまって、炭のようになった木が赤く発光している、熾（おき）という状態。実は、燃え盛っているときよりも、熾のほうが火力が

強い。薪全体が集合体のようになっているところにそっと大きな薪をくべる。すると、そこからまた新しい炎が立ち現れる。

フィンランドで生まれたオープンダイアローグは、もともとは森の暗闇の中で焚き火を囲んで輪をつくり、その火を見つめながら順番に自分のきもちを語っていくことがそのはじまりだった、と聞いています。紅茶でしていることもどこかそれと似ているかもしれない、と以前から思っていたので、『ことばの焚き火』という本をプレゼントされた時、その感覚と初対面ではない、むしろ懐かしいきもちがしたのです。

自分とつながる言葉で

「対話」に出会うまでのマミさんはいろんな仕事をしてきたのだそう。だけどいつも一つのところ、一つの職場に長くとどまらない、数年単位でそこをやめてしまう。自分はなぜ一カ所で長続きしないんだろう、飽きっぽい性格だからかな、と自分を責めたこともあったというけど、彼女の根っこには、自分はいったい何者なんだろう、自分は何のために生きているのか、自分が自分であるためにはどうすればいいんだろう、という根源的な問いが常にあって、彼女の中でそのことがずっとぐるぐるしていたようでした。

やがてマミさんは気づく。そうか、自分っていう人間は、ある枠のなかにはいりこんでしまったら行き詰まる。息が詰まって生き生きした自分でいられなくなるんだ。

その頃からか、マミさんは「対話」というものに関心をもつようになり、対話について研究したり、実践したりしている人たちと次々に出逢っていきます。そして長年ずっと抱えていた、自分が自分であるためにはどうしたら、という問いの答えに近づくようなキーワードを見つけました。ああ、私は“自分とつながっている言葉”でひとと話してこなかったんだ、と。

自分とつながっている言葉——そうマミさんが口にした時、それ、とても大切な言葉だ、と、私はとっさにメモ帖にかきとめました。

安心のおざぶとん

マミさんの言葉を書きとめながら、私は津幡へ越して数年してからの紅茶を思い出していました。

金沢でのにぎやかな子育て井戸端時代から、津幡へ越してきて、何か素敵なものが提供されるのではと期待された時期も過ぎ。やがて紅茶が、毎週そんなに大勢がくるわけでない、はやらない場所になってきたころから、紅茶で語られることの中心は子育てに関することというより、それぞれの内なるきもちの方に移行していきました。

そのことに、はじめは私自身とまどっていたけど、カウンセラーでもなんの専門職でもない、ただの人である私がそこですること、できることといったら何だろう、と次第に考えるようになりました。

そうだなぁ……その人の話を、平らな関係性の中で聴くことと、その人のきもちが言葉をさがしやすい安心のおざぶとんを用意すること、ぐらいかなぁ。

そのためには私自身が、身の丈の言葉で思ってることを語ってないとな。その頃から、自分の口にする言葉を前より意識するようになりました。そう意識することが、私にとっては、自分とつながる言葉で話す、という練習のスタートだった気がします。

そうか、ここって思ったままを言っていい場所なんだ。弱音はいてもいいし、後ろ向きのきもちを見せてもいい、否定されない、ああせいこうせい言われないとこなんだ。紅茶に来る誰かれが、そんなふうに紅茶という場を信頼して安心できるようになると、一人ひとりの話す内容や言葉がだんだんかわっていくのを感じました。

どうやら、自分の感じていたことを言葉にできた！という体験は、話の大きい小さいや深さにかかわらず、少しずつだけどもその人の囲いにひびを入れていって穴をあけ、本人も気づいていなかったその人自身とあらたに出逢わせてくれるようです。

自分がかわると、いつのまにかそのまわりの人もかわっていく、そういう体験を、私自身はもちろん、

紅茶の仲間たちも、くりかえし積み重ねてきて、今のような紅茶になっていったのだと思います。

紅茶の時間というところは、自分がいま思ったり感じたりしてることを言葉にしていく場、きもちにできるだけフィットする言葉を探し、探し、話していく中で自らを放していく場、ではないのかなぁ。そのプロセスはマミさんが言った、自分とつながる言葉で話すことと、とても近いもののように思えました。

そうはいってもね、自分の思っていることを言葉にする、って言うは易く行うは難(かた)し。マミさんも長いこと、それをしてこなかったように、それぞれの人の中に、建前とか立場とか組織とか世間とか空気とか常識とか思い込みとか育ってきた環境とか、きもちの言葉化をじゃまするハードルはそこら中いくつもある。だから自分とつながる言葉で話すってことは、誰にとっても何がしかの練習が必要なことなのかもしれません。

紅茶は別に言葉化トレーニング！（笑）なんてしているわけではないのだけど、紅茶に来て、きもちを話している人の横でたまたま一緒に話を聴いていた人が、その日は自分のことを話さなくても、その場の安心という空気を持ち帰り、次に来た時、自分のきもちを話しはじめる。その場にいた同士がお互いに影響しあって、安心を届けあう。

「ここにくるとほっとするの」「なんか安心できて、別に話すつもりじゃなかったことまで気づいたら話してた」という言葉を紅茶ではよく聞きます。人と人の間でそんな循環が自然に起きて、いつのまに貯まった安心貯金が、長年かけて今の紅茶の時間の空気をつくっているんじゃないかと思うのです。

たいわ紅茶

その雪の日の紅茶は、マミさんと、彼女を車に乗せてつれてきてくれた金沢の友人と、私たち夫婦の貸切、と思っていたら途中で、小松からひさびさに古くからの紅茶仲間が2人で顔を見せました。

はじめまして同士の人と人が、対話についての話を、へえ～とか、ほお～とか、いっぱいつぶやきながら言葉をかわしあう。窓の外の雪降る景色を眺めながら、薪ストーブの燃える火を見ながら、誰かの言葉に呼応して、感じた言葉を出していく。私は、マミさんの言葉をきっかけに、今の場所に越した当時をふりかえり、いっぱい思い出し、それをまた火に薪をくべるように言葉にしていき……。

それはまるで、紅茶のしてきたこと、していることに、「対話」という立ち位置からあらためて光をあててもらったような、とてもここちよい、たいわ紅茶の時間でした。

植本(しょくほん)、という言葉

マミさんは「献本」する場所を探して紅茶にきた、と先に書いたけど、マミさん自身の言葉ではそれを「植本(しょくほん)」と表現していました。へぇ、おもしろい言葉。

マミさんの言葉を借りるなら、対話する、って、焚き火に薪をくべるように自分の感じてる言葉をだしていくこと。その焚き火は、木がないことにははじまらない。本は紙でできているけど、その紙はなんでできているかっていったら、木です、森です。対話の本を仲間と一緒に対話の森でつくって、その本を人と人がまじわる場所に置くことを、本を植える、と表現するのは、なるほど、理にかなっていることかもしれませんね。

お返しに私からの献本、マミさん流にいうなら植本は、たぶんこれが一番ふさわしそうだ、と2004年に出した紅茶の本『きもちは、言葉をさがしている』を彼女に手渡しました。この本もまた、紅茶の時間で生まれた対話からできている本なので。あ、この本のタイトルは同時に、対人援助学マガジンのこの連載タイトルでもありましたっけね。

2023/2/19

『ことばの焚き火Dialogue in Daily Life』
著者：大澤真美・中村一浩・植田順・野底稔
発行：ハンカチーフ・ブックス
発行年：2022年

路上生活者の個人史

第７回

竹中尚文

今回、聞き取りに応じてくれたのは宮城智幸氏(仮名)と広島慎治氏(仮名)である。お二人とも、とてもインタビューをとりにくかった。話したくないことがあるのを感じながら、それを問うことをしなかった。お二人は戦後十年が過ぎた時代に生まれて、高度経済成長期に育った。経済成長が破綻した時は中年であった。全く異なる所で生まれて、育った二人である。話を聞いていて、何か同じ時代を生きてきたのだと感じた。

宮城智幸氏(仮名)1955 年生まれ。

生まれたのは、東京です。生まれて間もなく父親は亡くなりました。だから、私は父親の顔を覚えていません。母子家庭とはいいながらも、歳の離れた兄が二人いました。私が小学校の頃には二人とも働いていましたので、経済的に苦しい生活の記憶はありません。だからといって、高等教育を受けようという空気でもなく、学校を終えるとできるだけ早く仕事に就くものだと思っていました。

中学校を卒業して電気の専門学校に行って、電気工事の会社に就職しました。

母親は、私が 30 代の時に亡くなりました。それからは、兄弟とも疎遠になりました。結婚して、子どもが二人ありましたが、40 代で離婚しました。それから子どもたちとも会っていません。離婚の理由ですか？勘弁して下さい。

趣味はパチンコでした。他に趣味と言えるようなものはありませんでした。パチンコは開店から閉店まで一日中、やっていました。40 代で止めました。止めた理由ですか？いいじゃないですか、聞かないで下さい。

仕事は 50 代半ばで辞めました。頑張って生きようという気力もなかったのでね。一人だし、何となく生きていればいいかなという気分です。今の生活は年金がありますから、アパートで暮らしています。何か欲しいものがある訳でもないので、いい暮らしですよ。

広島慎治氏(仮名)1956 年生まれ

生まれは、新潟県です。両親と兄と姉がありました。実家は専業農家でした。周囲の同級生と同じ小学校、中学校、高校を卒業したと思っていました。特に何か、将来に対して選択肢があったようには感じませんでした。高校を卒業するとき兄がいましたから、農業を継ぐことはできないと思いました。就職先も田舎ですから、たくさんある訳でもなく国鉄に入りました。

18 歳で就職をして、25 歳の時に結婚をしました。30 歳の時に国鉄民営化で辞めることになりました。多くの同僚と一緒に辞めました。

それから病院事務をして、薬屋さんで 3 年ほど勤めました。売り上げ等に煩わされるのが嫌で、工場勤務で 10 年ほど勤めました。

45 歳の時にパチンコの借金がどうしようもなくなって、妻子を置いて逃げました。

横浜に逃げて、建築現場で働きました。そこで 20 年間、1K マンションをあてがわれて働きました。60 歳を越してから、毎年の夏が辛くなりました。炎天下の仕事が耐えきれなくなって、大阪に逃げてきました。

今は公園で野宿をしています。また何か仕事を始めるつもりです。生活保護の申請は、するつもりはありません。今でも、女房と子どもの夢は見ます。会いたいか、って。それは思いません。思ったらダメですよ。

【聞き取り者の後記】宮城氏も広島氏もそれぞれの人生で間違ったことをしてしまったと思っていると感じました。それが間違いであったことを自認しているようです。それに対するペナルティーは第三者が決めたのではなく、自らが決めたことだと思います。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第46回

『ある男』

1. おじさんとの再会

今年の冬休みは思わぬことが起きた。

俺は１月１日に帰省する予定で、チケットを買っていた。年末年始は新幹線が混む。元旦だとむしろ移動は少ないからその方がいいと思っていた。年末はギリギリまで授業もあったので、そうそう早くは帰れないし、1 日に帰って 5 日に京都に戻ってくるという計画だった。

本当はあまり帰りたくない。何度も書いている通り、俺は故郷が嫌いなのである。とは言っても、母ももうすぐ 85 歳。いつ何時何が起きるかわからない。これまで散々苦労をかけてきたので、たまには帰ることが親孝行だろうと思って、ここ数年は１年に２回くらいは帰るように心がけていた。

帰る 2 日ほど前である。弟の FB を読んでいると、母と一緒にお墓参りに行ったら、ずっと音信不通だったおじさんと偶然、再開したという記事が出ていた。ドキッ!

このおじさん、母の兄にあたるのだが、25 年前、父が亡くなったときの葬式以来会っていない。その後、このおじさん、母や他の妹たちとも縁切り状態で、連絡が途絶えていた。別に妹たちと喧嘩したわけでもないのだが、何か気まずいことでもあったのだろうか。父が死んだ翌年、俺の弟が亡くなったのだが、その葬式にすら来なかった。その数年後、おばさんの夫が亡くなったことは知らないだろう。

おじさんは元々自由人で趣味人である。商業高校を卒業すると、趣味のお茶用品のお店に就職した。長らく独身だったのだが、中年になってから、自分よりも一回り以上年上の、バツイチで、子連れの女性と結婚し、しかも、周りには内緒でその女性の籍に養子に入ってしまった。きょうだいで男は１人なので、伝統的な考え方でいけば家を継ぐ使命もあったのだろうが、そんなことにとらわれる人ではない。

実は俺は子供の頃からこのおじさんに似ていると言われていた。頭でっかちで、スポーツが全然

できず、子供の頃は病気だと偽って、体育の授業に参加していなかった。話し方もお姉言葉になるので、ゲイなのかと思われることもある。

しかも、芸術好きで、絵を描くことが好きで、世間の常識にとらわれるのは嫌いな人だ。まさに俺はこの人の DNA を受け継いでいるのだ。と言っても、おじさんのほうが俺よりも遥かにイケメンである。母やおばさんたちは美人ではないのだが、おじさんは色白で目鼻立ちも整っている。

俺が生まれたばかりの頃は、このおじさん、俺のことを相当可愛がっていたみたいだ。俺を産んだ後、しばらく母が体が悪くて、退院できなかったため、その間はおじさんが俺の面倒を見ていたとのことである。俺はよく泣く子で、ミルクとかも甲斐甲斐しく作ってくれていたらしい。

このおじさん、自由人で常識にとらわれるのが嫌いな人だったが、誰にも迷惑をかけることはない人だった。また俺が不登校になって、白眼視されていた頃も、このおじさんだけは何も気にしていなかった。

「学校に行かないからって、人様に迷惑をかけるわけでもないわけだから」というのがおじさんの理屈だった。

しかし、俺は思春期になるとこのおじさんにも反抗し始めた。俺にとっては 10 代の頃は社会全体が俺の敵だったのだ。

その後、徐々に京都が本拠地になって行って、おじさんとは会うことも無くなって行った。

母たちは、たまに法事などで姿を見ていたらしいのだが、何があったからなのか。おじさんは忽然と姿を消したのだ。88 歳だから、もう男の平均寿命よりもはるかに年取っている。もうどこかで亡くなっているのかと思っていた。母やおばさんたちも連絡しようがないし、いつのまにか全く縁が切れてしまっていた。

それが突然忘れた頃にお墓で母や弟と再会。しかも、その後、早速、俺の実家に泊まりにくるようになってしまったのだった。

奥さんは、ずっと年上の人だったからもう何年か前に亡くなったらしい。子供や孫もいるのだが、奥さんの連れ子だからおじさんとは血縁関係はない。だからそうそう我儘も言えないだろうし、久しぶりに母と会って、妹に頼ろうかという気持ちになったのだろう。

「もうあの人も、昔とは違って大人しくなっているから。別に気にしなくていいから」と母は電話口で言った。

俺はちょっと重い気持ちを抱えながら、実家へと向かった。おじさんはすっかり歳をとって頭は禿げ、足が悪くて透析に通っているらしく、トイレまでいくのも難儀そうである。母と会った翌日にタクシーで、母のところにパジャマのままやってきたのだそうだ。

ちなみに母は 4 人きょうだいで、おじさん、母、そして 2 人の妹がいる。

上のおばさんは、サラリーマンに嫁いで、その後、あちこち転勤した末、埼玉にマンションを購入して暮らしている。元々都会好きの人で、土の香りがしない人だ。昔から自分が東京圏で暮らしていることを鼻にかけるような人だった。「私は六本木ヒルズのところを通って仕事に通うのよ」などと自慢していた。六本木ヒルズのところを通るなんて誰でもできることなのに。

下のおばさんは、波瀾万丈な人生を歩んだ人で、できちゃった婚の走りである。今はできちゃった婚なんていくらでもいるが、50 年以上前だから、周りは腰を抜かすような一大事だったらしい。その後おばさんは離婚し、息子はあちこちをたらい回しにされて、結局心を病んでしまい、もう 50 歳を過ぎているはずだが、30 年ぐらい福祉のお世話になって暮らしている。今は社会福祉が行き届いているから衣食住は大丈夫であるにしても、30 年も 1 人で何もせずに暮らしていくというのはどういうものなのだろうか。

離婚後、このおばさんは、また新たな男性と再婚し、その人との間に娘をもうけた。2 度目の旦那はだいぶ年上だったので早くに亡くなり、その後、おばさんの娘は未婚のまま母親になった。彼女の

場合は最初から結婚してもらう気もなく、確信犯的シングルマザーである。まだ25歳で、子供を産むのに焦る歳でもないのに、どうしても子供が欲しいと出産ノイローゼになっていたと聞いていた。

シングルマザーといえば、芯の強い女性を想像する人が多いだろうが、彼女は心も体も決して強い女性ではない。おばさんがいたから公団住宅でどうにか息子を育ててきたが、もし、おばさんが倒れでもしたら、俺の母に頼ってきていただろう。相手の男性も災難だ。最初から結婚する気もなく、種だけ提供して、まだ今のところ、なんの迷惑もかかっていないはずだが、万が一、幸せな家庭を築いているときに、「この子、あんたの子よ、なんとかしてよ」と言ってこられたりしたら、男の方はたまったものではないだろう。

その息子が高校 2 年になって不登校になり、2年で中退して、通信の高校に移った。俺と全く似たような人生を歩んでいる。

とはいうものの、不登校も昔と今では変わった。彼が出席不足で、進級できなくて、学校を辞めることになったとき、友達が家に泊まりに来たのだそうだ。学校の先生たちもみんな親切で、彼をどうにかしてあげようと至れり尽くせりしてくれたらしい。だから、彼は先生たちに感謝していて、この後大学に入って、学校の先生になろうと思っているみたいだ。今は予備校生なのである。

かくいう俺もいまは学校の先生だが、俺は成り行きで先生になっただけのことで、学校の先生にだけはなりたくないとずっと思っていたのだった。

家に帰ってみると、母が言っていた通り、おじさんは大人しくなっていた。リビングを自分の部屋みたいにしていて、お風呂も勝手に入ってしまう。しかも、リビングで服を脱ぎ捨てて、恥ずかしがってもいない様子を見て、歳をとったら、俺もこうなっていくのかと悲しくなったものだった。

かつては、いくら妹の家とはいえ、リビングでパンツ一枚になるなんて絶対にするような人じゃなかったのだ。むしろ、そういう行儀の悪いことは大嫌いで、常に身だしなみもきちっとしていなければ気が済まない人だった。そういう人であっても、歳をとると子供がえりしていくのだ。もうそこまで頭や体が回らなくなっているのだった。

母に言わせれば、おじさんは、透析していて足は悪くなっているが、まだまだ頭はボケていなくて、お金は持っているから、タクシーで美味しいものを食べに行ったり、自分の描いた絵の個展を開いたりはしているとのことである。

おじさんは 1 月 1 日に帰る予定だったのが、結局もう一泊することになってしまった。正月早々、リビングに居座っていられたんじゃ、俺や弟は迷惑である。しかし、それも気にかけている様子じゃない。

俺もいずれはこうなるのだろうか。『モリー先生の火曜日』によれば、人間は死期が迫って骨と皮みたいになってくると、体は単なる容れ物で魂だけが自分の存在になるので、死ぬことも怖く無くなるとのことである。まさにおじさんはそういう状況なのだ。もう身体はどう見られてもいい。魂だけで生きているのである。あとは体が終わるときに魂が抜けていくだけのこと。もう何も怖いものなんてないのだ。

2. 男はつらいよ

マッサージの友人は、お店にお客さんが来ないので、この頃夜間のバイトに通っている。宅配業者のやつなのだが、ミネラルウォーターとかお米とかを送ってくる人が結構いるみたいで、重労働のようである。体には自信のある人なのだが、それにしても痛々しい。ある夜は、バイトの直前にマッサージに来てくれて、眠そうな顔をしていた。「この後、朝まで仕事なんです」と話していた。

「子供の顔を思い浮かべて頑張るしかないよね」と俺は言った。

「本当にそうですね」と彼。

そういえば、彼につく前に通っていた、鍼灸の先生も、店にお客さんが来ないから、寿司屋のバイトに行っているとおっしゃっていた。この人も

子煩悩な人で、奥さんが東京の人で、東京に行きたいと言い出して、仕方がないからついていった。

「嫁がパートに出てくれれば、店を閉めることはしなくてすんだんだけど」ともおっしゃっていた。彼のほうは直前まで「僕が京都を離れるなんてことは絶対にないですよ」と言っていたのだが、奥さんの方は京都の水が合わなかったらしい。奥さんだけだったら離婚してもいいけど、娘と引き離されるのだけはつらいと悩まれていた。

それで東京に行くしかなくなったのである。奥さんは性格が激しくて、喧嘩ばかりしているみたいだったが、自分に収入がないとなると男は妻に頭が上がらなくなる。本当に「男はつらいよ」である。

彼らの姿を見ていると、収入のない夫、働くお父さんは本当に痛いと思う。しかし、2 人とも子供がいるから、つらくても頑張れるみたいだった。

俺は子供をつくらなかった。そもそも女性恐怖症で恋愛することができないし、できたとしても、俺の子供なんて可哀想でつくれない。俺は少年時代、毎日が生き地獄だった。そういう悲しい思いをする子を作る気にはなれないのだった。

アメリカでは今は＃MeToo 運動の名残りなのだろうが、かつてセクハラされたと摘発する俳優が増えている。『ロミオとジュリエット』のオリビア・ハッセーとレナルド・ホワイティングが最近になって、映画会社を訴えたと聞いている。彼らが幼少期の頃に、騙されて性的シーンを演じさせられたとのことである。『ロミオとジュリエット』といえば、フランコ・ゼフィレッリ監督の名作だが、その裏にはこういうストーリーが隠されていたのだ。

こうやって考えてみると、まさしく俺が小学校や中学校の頃、俺が受けていたのはセクハラ、パワハラ教育なのだ。その当時、先生に反抗しなかった子供達が悪いのだとは言えない。たとえば中学生の子と性的関係をもってしまったら、仮に同意があったとしても同意とはみなされない。まだ小学生や中学生となったら、物事の善悪がわからない。先生たちにコントロールされれば、したがってしまうだろう。

一方で、俺はどうしてもそれに従えなかった。その結果、心が壊れ、その後、孤独で長い辛い人生が待っていた。あの当時の先生たちは、今だったらパワハラ、セクハラ、暴力で懲戒免職になっていたとしても、仕方がないような先生ばかりだったのだ。しかし、あの当時は、社会がそれを認めるほど成熟していなかったのである。今頃になって、俺が訴えても、彼らを有罪にすることなんてできないだろう。

このやりきれなさ、いかにして晴らすべきなのだろうか。

3. あと 1 年で還暦

この頃わけもなくブルーである。

この原稿がアップされる頃には俺は 59 歳になっている。いよいよ還暦まで 1 年。そのことを話すと、大抵の人は「60 代なんて今はまだ若いから、人生これからですよ」と言ってくれる。だけど、本当にそうなのか。

確かに俺の母は 60 過ぎてから人生が開けた。思いもかけない方向に開けた。一方で父は 65 歳で死に、義理のおじさんも 68 で死んだ。

父の場合は自業自得である。もともと若い頃から糖尿で、医者から節制しろと再三再四言われながらしなかったわけだから、むしろ 65 まで生きてこられたのが奇跡。父の死の時は周りの親戚も大して悲しんではいなかった。ついに来たるべき時が来たという感じだったのだ。おじの場合は、スモーカーで酒飲みだった。もう少し早くに病院に行っていたら、死ぬことはなかったはずなのだが、それをしなかったと聞いている。

今は確かに人生 100 年時代で、新聞の死亡欄を見ていると 90 過ぎてから亡くなる人が極めて多いことに驚かされる。しかし、その一方で死ぬ人も確実にいるのだ。毎日、芸能人や文化人の訃報が流れる。渡辺徹は 62、プロ野球選手の門田博光は 74、YMO の高橋幸宏は 70 で亡くなった。80

代、90 代まで生きるのが普通の時代になっているとはいえ、歳をとると確実に死ぬ確率はあがっていく。先日もかつてお知り合いだった先生が 55 歳の若さで亡くなった。

残された人生で何ができるのかということを考えると、それはそれで虚しい。これから待っているのは老いである。そのなかで俺は何をして生きていくのだろうか。

弟はこの頃、一人暮らしを始めた。五十路を過ぎたので、少しは好きなことをして生きていきたいのだけど、弟は「何が好きなのかがわからない」と言って悩んでいる。

「何が好きかわからない」という弟の悩みに俺はちょっとショックを受けた。俺は好きなことだけして生きてきたので、「嫌なことはしたくない」「こだわりに合わないことはしたくない」で悩み続ける人生だった。ところが、弟はこれまで現実的に定められたルートの上を歩いてきているので、何が好きなのか、何をしたいのかがわからないというのだ。

俺が弟に苦労をかけたせいなのだという忸怩たる思いもある。不肖の兄だったので、弟は現実的に我慢強く生きるしかなかったのかもしれないのだ。

でも弟は俺と歳が離れていて、まだ 50 になったばかりだ。俺はもうすぐ 60 歳。死に対する恐怖は最近になって小康状態だが、60 歳近くになると本当に死が間近にきていると感じることがある。時々息が苦しくなって、体調が悪くなって、このまま死ぬのかと思う時があるのだ。

この頃はむしろこれだけ自分が長く生きてきたことに対して感慨を覚え、もうこれ以上生きても何があるのかという気持ちにもなる。しかし、死ぬのも怖い。これから平均寿命まで生きるとしたら、まだ 20 年以上はある。その間、この死への不安と闘いながら生きていくのか。残る人生で何か生産的なことができるのだろうか。

ただ、自分ながら成長したと思うのは人の不幸を喜ばなくなったことだ。ある同僚だった先生は、基礎疾患があったらしく、ワクチンを受けることができないため仕事をやめて田舎に帰られた。去年まではオンラインでなんとかなさっていたのだが、もう続けられないと判断されたみたいだ。ある女の先生はまだお若いのだが、癌で大変な状況らしい。以前から親しかった先生も、俺より 5 つくらい年下のはずだが、非常勤をやめて田舎に帰って家業を継がれるという噂を聞いている。

昔だったら、こういう話を聞くと、俺の方が自分の道で生き延びている、幸せだと自分の幸せに優越感をもっていただろう。今でもそういう不遜な気持ちが全然ないとは言えないが、若い頃に比べれば相当マシになった。

人の不幸を祈ったところで、何も得るものなんてないのだ。人間なんてみんな死ぬんだから、人の人生なんて、宇宙の歴史に比べれば、本当に儚いんだから、みんな一緒なのである。

映画もこの頃、昔ほど夢中にはなっていない。むしろ、この年まで映画一筋で生きてきた自分がなんとなく恥ずかしい気もする。今度、カズオ・イシグロが脚本を書いた『生きる Living』という映画が公開になるが、これは黒澤明監督の名作『生きる』のリメイクである。この映画では、主人公が「命短し恋せや乙女」と自分の人生の虚しさを振り返るブランコの場面が感動ものである。

人間なんてみんな死ぬんだし、人生なんて儚い。人間は結局、何をしても虚しいのだ。

4.『ある男』(石川慶監督・2022)

春休み中の悩みは時間をもてあましてしまうことである。普段は仕事で極めて忙しいのだが、暇になったら何もすることがなくて、悩んでしまう。俺はいつの間にか仕事人間になってしまっている。

この頃少し時間のゆとりがでてきたので、斎藤環さんの『引きこもり文化論』という本を読んだ。俺は新人類やオタクが生まれた頃の世代なのだが、この本の考察では、「現実を回避して物語に逃げ込む」のがオタク、「現実を物語として生きる」のが

新人類。まさに俺にピッタリ。あまりにも当を得ているので笑ってしまった。

俺は自分の人生を物語化しているとは、30 歳の時についたカウンセラーの先生から言われた。確かに俺は毎日過去のことを反芻し、その過去と折り合いをつける物語を考えようとしている。

不登校だった頃のことは、今でも具体的には親しい友人にも話していない。辛酸を舐めるとはまさにあのことだった。

そして大学に合格して、京都に来て新しい物語を書き換えようと前向きになったのも束の間、大学にも溶け込むことはできなかった。今思えば、それまで何年も引きこもっていたブランクがあったのだから、最初から追いつくことは無理だったのだ。しかし、あの頃はベルトコンベヤーの時代、皆に並ばなくてはならないというプレッシャーのみがあった。

あの当時の俺は前向きになっていたから女性恐怖症なのに英文科を選び、しかも、不運なことに他のクラスよりもはるかに女子学生が多いクラスにふられることになってしまった。それでもあの頃の俺は頑張った。できる限り、女性に偏見をもたずに過ごそうと努力する日々だった。

しかし、これは引き寄せの法則なのだろうか。また女の子たちから陰口を言われ、困らされる日々。なぜ、俺はこれだけ女性から迫害される人生を歩み続けることになったのか。DV されやすい人、セクハラされやすい人、事故に遭いやすい人は確かに存在する。世の中には目に見えない力が存在しているのだ。俺は女性から迫害される運命を背負って生まれてきたのだと考えるしかない。

30 代になって、男性運動に参加したが、これも俺には逆効果だった。俺は女性から受けたトラウマを分かち合いたくて、メンズリブに参加したのだが、そこで出会った人たちは、女性にわだかまっているのではなくて、女性を支援し、弁護する立場の人たちだった。したがって、普通の世界以上に女性を批判することは禁句である。俺は度重なるトラウマと無理解に遭遇する。

今更繰り言を言っても仕方がない。当時の体験を反芻すればするほど、憎しみは募るだろう。

島崎藤村原作の映画化『破戒』を最近配信で見た。これは、被差別部落の話だが、映画の最初のところで、自分の過去を絶対に話してはならないと主人公が告げられる場面が出てくる。俺は不登校だった。このことは今だったら言えるが、30 代くらいまではまだまだ人に話せない過去だったのである。俺は自分のアイデンティティを求め続ける人生だった。

『ある男』は昨年の日本映画を代表するものの一つで、キネマ旬報のベストテンの２位に選出され、あちこちで賞も取っている。映画を見てからだいぶたっているので、多少記憶が薄れているのだが、これは自分のアイデンティティについて考える映画である。

ある男が亡くなるのだが、その男は実際には名乗っていた男とは別人だということがわかる。それは彼が殺人者の息子で、それに気づかれないために、別人になりすましていたのだ。戸籍ロンダリングの話である。

一方、彼を捜査する弁護士も在日コリアンで、自分のアイデンティティ探しに迷っている人物であることがわかってくる。

俺もこれと似たような人生を歩んできた。

俺は人生の初期に不登校という重荷を負わされた。これが俺の人生に重い影を落としてきたのだ。

京都に出てきてから、新しいアイデンティティをつくろうと頑張ったのだけれど、これも何度も連載で書いてきた通り、大学生活は上手くいかなかった。

しかし、その後、非常勤で英語を教えるようになってから、徐々に自分の居場所は長い年月を経て、できていったようにも思える。

俺は 29 歳の頃から教え始めているので、もう教歴 30 年である。30 年の間に俺は９つの大学と１つの専門学校で教えた。

最初の頃は、京都の大学１つと大阪の大学２つ。大阪は片道２時間半かかるところもあったので大

変だったが、どうにか切り抜けた。その後京都の大学の仕事が徐々に増えて行き、専門学校で教えたり、大阪の他の大学で教えたりもしてきたが、結局、今は京都の5大学で勤務している。

非常勤の身なので、あれこれ言われて腹が立った時期もあったが、今はこの生活に満足している。映画の講義、専門科目、大学院の授業、卒論の口頭試問なども担当させていただいているので、それなりに力を認めてもらっているという実感はある。

俺は今の生活はそれなりに幸せなのだ。

何よりも、俺は若い教え子たちと楽しくやっている。2月は誕生月で春休みなので、何人もの元教え子がつきあってくれる。先生の役得である。

そのうちの1人は、俺と同じ大学だったのに途中から他のところに編入した子だ。俺はその子に会った時から、大学で上手くいかなくて他のところに移ったのか、俺と同じかと親しみを感じていた。

ところが会って話してみると、彼の場合は中学から付属校に入って、エスカレーター式に大学に入り、憧れる先生がいたから他大学に編入したのだそうだ。俺と違って、別に最初の大学と上手くいかなかったわけではないし、特別な愛着もないけど、確執もないらしい。

すごくいい子で、俺が驕ろうとしても、驕らせようとしない。食事もデザートも自分で払う子だった。小学校から私立だったとのことで、生粋のお坊ちゃんで好青年だった。

人生は星の数だけ。様々な人生が存在する。ところが80年代は規範の力があまりにも大きく、個を無視する時代だった。したがって、俺のような規範から外れた人間は容赦無く断罪されたのだ。

人間は恐ろしい。誰かを差別しなくては自分を支えられない生き物なのである。しかし、今俺は誰かを差別したり、人の不幸を喜んだりという自分からは少し脱却してきている。60近くになって、少しだけ自分の思い描いていた理想に近づいている。

もうすぐ59歳。起承転結でいえば、結の部分に差し掛かってきている。俺の「起」は子供の頃周りから虐められ、不登校になったこと、「承」は京都に来たが、大学では上手くいかず悪戦苦闘したこと、「転」は40過ぎて、少しずつ京都に居場所ができてきたこと、そして、これから「結」。どういう結末が待っているのだろうか？？？

どういう結末が来たにしても、それが人生なのだ。せつないなあ。笑

役場の対人援助論

（４４）

岡崎　正明

（広島市）

謝罪と反省のお作法

誰のため？何のため？

昨年あったサッカー男子日本代表のＷ杯カタール大会。日本がドイツ・スペインといった優勝候補に勝利したことで、ネットやテレビは連日盛り上がった。最終的に世界の壁は厚く目標のベスト８には届かなかったが、世間は概ね健闘を称える高評価のようだった。

だがグループリーグで格下と思われていたコスタリカに敗れた直後、その状況は大きく違っていた。特に１戦目のドイツ戦に勝っていただけに、「なんでここで…」というガッカリ感が報道全体をおおった。ネット上では１億総評論家状態で意見や批判が飛び交い、中には選手個人のSNSへ「戦犯」「帰ってくんな」「コスタリカ12人目の選手」などといった過度なバッシングや、個人攻撃のようなことが起き、一部報道で問題視されていた。

選手のSNSに誹謗中傷や攻撃的なことを書き込む神経と目的は皆目理解できないが、私も自宅でテレビ観戦中は思わず「なんでパス出さないんだよ～」とか「バカ、そこじゃないよ！」「決めろよ！」とか興奮して言ってしまい、娘から「パパは自分が出来もしないのに言ったらダメよ」とぐうの音も出ない注意を受ける人間だ。だからつい強い批判をしてしまう感情については理解できるし、自分も気をつけないと、勢いで他者を傷付けてしまうかもな～と振り返ったりする出来事だった。

12月２日19：32付けの毎日新聞配信記事には「SNS上での度を越した批判や誹謗中傷は、今回のＷ杯に限らずスポーツ選手たちを苦しめ、社会問題となっている。昨年の東京五輪では競技結果などを受け、選手が過剰な非難や攻撃を受けたことが問題になり、

国際オリンピック委員会（IOC）が大会中に警鐘を鳴らす事態となった。国際サッカー連盟（FIFA）も今大会前、期間中に選手を守る取り組みを始めることを発表。FIFA が出場選手の SNS アカウントを監視して差別や脅迫を示唆する書き込みを抽出し、違反者を法務当局に通報する方針を示している」との記載もあった。

プロスポーツ選手に限らず、多かれ少なかれ私たちの仕事というものは世間から見られ、評価や批判の対象となりうる。特にお役所はその性質上、市民から厳しくチェックを受ける。権力を行使する側であり、常に暴走のおそれをはらんでいる行政という組織にとって、それは当然と言っていい扱いだろう。そんな目があると思うからこそ、お役所は自らを律し、全体の奉仕者として正しい仕事をしようと思える。そういう効果があることは間違いない。
ただそんなお役所でも、人間のすることは完璧じゃないわけで、ときにはミスや不正が起こってマスコミに取り上げられることがある。個人情報の扱いだとか、不正競争に手を貸しただとか。最近では、給付金を誤って個人に多額に振り込んでしまったなんて事件もあった。
そんなときは役所のえらい人がカメラの前で謝罪し、内部調査の実施や、関係者の処分、再発防止のための検証委員会などというものが立ち上がったりする。悪意の犯罪や重大な過失があれば謝罪や反省は当然だし、批判を組織全体で受け止め、そこからどう改善・再発防止をしていくか。行政として責任を持って取り組んでいくのは当然のことだろう。
ただ似たようなシーンがニュースで繰り返されるのを見ていると、知らない町のえらい人が頭を下げたり、神妙な顔で述べている反省の言葉が、どこか空虚に切なく見えてくる。「この人が謝ってもねえ…」「前も同じようなことなかったっけ？」などと思うのは、私だけではないのではないだろうか。

ケースワークで謝る意味

児童家庭福祉の現場では、あまり談合とか癒着といった不祥事は聞かない（そもそもそういう利権などに縁遠い）が、それでも謝罪や反省と向き合う場面はある。
我々が行うケースワークでは、対象者である保護者や子ども、関係機関とのコミュニケーションの中で、こちらの不手際や誤解やすれ違い、連絡ミスなどから謝罪が必要となることも稀ではない。「一時保護していた児童の所持品を返し忘れていた」「約束した面接を急遽こちらの都合でキャンセルしなければならない」などは、完全にこちらに非がある分かりやすい例だろう。
難しいのはどちらに非があるのか判断が難しいものや、客観的に見てこちらに明らかな非がないケースへの対処だ。
例えば保護者側は「〇〇と決めつけた言い方をされた」「××について説明がなかった」などと主張するが、こちらの認識は違っていて、決めつけた言い方はしていないし、必要な説明もしていたといった場合。いわゆる「言った言わない」の世界であり、水掛け論になってしまいやすいケースである。
こういう例にも濃淡があり、相手が誤解したり理解しにくい状況になるのも分からなくはないような事例から、対立的状況もあって、明らかに相手が事実無根の内容や、揚げ足取り的な言動をしてくる場合など、実に様々だ。

お役所的には間違っていないことを謝る必要はないし、揚げ足取りや不当な攻撃をして

くる方には、組織として毅然とした対応が欠かせないのはもちろんだ。
だがケースワークという業務上、常に“正しさ”ばかりで推し進めることが必ずしも最善ではない。正しさ以上に“伝わりやすさ”や、相手の“受け入れやすさ”といった価値を大事にしなければ、効果的なケースワークはできない。相手の立場に立てば、行政という圧倒的存在に過度に防衛的になって攻撃的な態度をとってしまう。そういうこともあるだろう。
だからまずは相手の不安に耳を傾け「そんな風に思われたなら申し訳なかったですね」と、事実の有無よりも気持ちを扱って受け止め、共感する（ここでは不快な気持ちにさせたことについて詫びる姿勢を示すこと）。その方が対立構造が深刻化することを避けられ、より建設的な話ができることもある。

もちろんこちらがどこまで詫びたり、許容したり、譲れるのか。そのボトムラインは明確にしておく必要があるだろう。なんでも平身低頭では、相手方に「押せばすべて受け入れてくれる」と、間違ったメッセージが伝わってしまいかねない。例えば虐待対応なら「どんな理由があっても暴力は肯定できない」というラインは死守しなければいけないだろう。「イライラして叩きたくなってしまう」に対して「そんな気持ちになることもありますよね」と心情は共感できても、行為まで認めては本末転倒だ。

虐待死を省みて

児童家庭福祉の現場で虐待が大きく注目されるようになって以降、謝罪や反省がもっとも注目される場面といえば、子どもの命に関わる場面。児童虐待死亡事件である。正直関わるものとして触れたい話題ではないが避けられない事実であり、国の統計でも令和 2 年度には 77 名が虐待で亡くなっている。
事件が起こると行政は記者会見を行うが、その説明は個人情報保護のルールもあり、どこかはっきりしない印象を与えがちだ。死という最悪の結果に対して「極めて残念」「遺憾」との見解はすぐに言えても、行政の責任や瑕疵についてはどうなのか。適切な対応をしていれば防げたのか。それとも突発的な事態で予測不可能だったのか。複雑な事情と、関わる人間が多岐に渡ることからも、すぐに明確な答えが出せるはずもなく、それがより一層消化不良な感じを与えてしまうようにも思う。そのためもあってか最近は、検証のための第三者委員会を立ち上げる方針を、早めに出すのが定番のようにも見える。

こどもの命が失われるという重大な事態だけに、報道では「児相や役所が関わっていながら…」「1 度は保護していたのに」「市民から心配な情報があった」など、厳しい指摘や責任追及がされる。コメントを求められた専門家も、起きてはならないことが起きている以上、批判的な見解を述べるのは当然だし、そうした問題提起を受けて様々な法律や対策が進んだのも事実だろう。
また第三者委員会でも、「再発防止」という至上命題のため、やるべきことに漏れはなかったか、法律や国の基準どおりに対応できていたのかなど、因果律を中心とした検証が細部に渡って行われることになる。

ただ気をつけたいと思うのは、スポーツの評論と同じで、現場でその瞬間の判断をするよりも、結果が起きてからアレコレ言うのはたやすいということだ。地域は常に限られた時間・人材・予算・資源の中で、様々な事情を抱えながら展開している。そうした実情

を無視して理想だけを語っても、あまり良い変化は期待できないのではないかと思う。
もちろん検証して対策を講じることも、理想的な支援のあり方を提言することもひとつの方法だが、それだけではなく、例えば困難事例でも重大な問題が起きていない事例を検証し、その共通の特徴やストレングスを研究するなど、別のアプローチも必要ではないだろうか。

また子どもの死というショッキングな事態のあまり、世論の中で感情的な意見や攻撃的な言葉が飛び交うという問題がある。特にネット上では、憶測や間違った情報で関係者を誹謗中傷するようなことも見られる。「役人の怠慢」「税金泥棒」「責任とれ」。中には事件が起こった自治体に連日クレーム電話が入って業務が滞ったり、メンタル不調から職員の休職が多発した例も聞く。
私も仕事の中で出会った関係者から「死亡事例を出した担当者は処分すべきだ」などという言葉を耳にしたこともあり、私自身が攻撃されたわけではなかったが、少なくないショックを受けた覚えがある。

虐待死を社会から減らし、家族の中に加害者と被害者を作らないためにどうすればいいのか。児童相談所や支援に関わった者をバッシングすることが、その近道となるのだろうか。虐待親の異常性をセンセーショナルに報道し、社会的・法的に厳罰化していけば、虐待は減っていくのだろうか―。
これは児童家庭福祉に関わるものだけでなく、社会全体が省みなければならない問題ではないだろうか。

反省のその先に

残念ながら私たちの社会はその歴史上、殺人事件を撲滅できたことはない。そして殺人の多くが他人同士よりも、関係性の深い「家族」の中で起こるというのは、統計的事実である。虐待死事件が起こるたびに「二度と繰り返さない」「あってはならない」と正論を語り、時間と共に事件が忘れさられ、また次の事件が起こる…。そんな反応を繰り返すのではなく、冷静に現状を分析し、具体的で現実的な施策を、スモールステップでいいから社会全体で進めていく。そういう取り組みが必要な時ではないだろうか。
それは児童相談所や役所だけをどうにかする話ではない。
自分と相手を尊重できる性教育。DV や薬物依存、精神疾患、ネットリテラシーなどへの正しい理解と啓発。子ども食堂やアフターケア、若者シェルターや子育てサークル、オープンスペースなどの多様な居場所づくり。ヤングケアラー支援や無料低額塾、子ども宅食などの充実。子育て世帯への経済的・人的支援制度の拡充はもちろん、保育士の待遇改善から、男性の育児参加を改善する働き方改革の推進。そして地域全体で子育てを支えるための、仕組みや仕掛けづくりなどなど、様々な分野が「我が事」として取り組むべきものだと思う。

今、児童家庭福祉の現場には夢や目標をもってやってくる若者が少しずつ増えている。
児童虐待や子どもの貧困が社会的に注目され、そうした子どもたちの力になりたいと思う人がこの業界を目指してくれている。
彼ら彼女らは高い志を持ち、試行錯誤を繰り返しながらも成長しようとしている存在だ。
全国的に児童家庭福祉現場の職員が増員される中、ベテラン職員や経験者は不足してお

り、経験の浅い職員への教育や研修、職場への定着は重要なテーマとなっている。
この分野で働く職員が不当な攻撃や誹謗中傷から守られ、心理的安全性や労働環境の質を高めていくことで、児童家庭福祉全体の専門性や熟練度の向上を目指す。それが結果的には、支援を必要とする地域の子どもたちを守り、虐待死を減らしていくことにつながるのではないだろうか。

児童虐待という社会が抱える課題に対し、私たちは反省すべき点は反省しつつも、では次の一歩として何をしていくべきなのか。
犯人探しやバッシングで誰かのせいにして安心するのか、それぞれができることを考え、希望を捨てずに協力して向き合うのか。その答えは私たちの中にあるように思う。

臨床のきれはし

Sheet20

浅田 英輔

DUALISM

少し前に、JAXA のロケット「H3」の打ち上げに関して、「失敗」という言葉を言い捨てた記者が炎上していた。打ち上げ途中でやめたのだから「中止だ」という声が大きく、打ち上げをしていないのだから失敗ではないだろう、事前の中止だ、という言い方であった。動画をみてみると、失敗か中止もそうだが、言い捨てる感じがとても印象が悪かった。

炎上すると様々な意見が出てくるのだが、その中には「失敗でいいじゃないか」「失敗というものはそれほどまでに【悪いこと】なのだろうか」といったものもあった。

「【成功】じゃなければ【失敗】でもいいのでは？」といったものもある。

実際に携わった方からすれば、そんな言葉なんてどうでもよくて、「今回できなかったから次やるだけだ。失敗か中止かはどうでもよい」という気はする（完全な推測）。もちろん、記録をどう書くかとか、オカネをどうするかとかそういう問題はあるだろうけれど。

成功か失敗かどちらなのかが、それほど重要なことであろうか。

世の中、二元論に囚われすぎていないだろうか？

ロケットは失敗したのか中止なのか。子育ては成功か失敗か。大学にいくかいかないか。マスクはいるかいらないか。ワクチンは必要か不要か。コロナ対策はよかったのかわるかったのか。ロシアが悪いのかウクライナが悪いのか。いじめたほうが悪いのか、いじめられたほうが悪いのか。不登校はよいのかわるいのか。うつの人に「がんばれ」といっていいのかわるいのか。現政権はよいかわるいか。これらは、一元的にわかるものであろうか。

子育ての成功失敗はどこでわかるだろうか。いい大学に入ったら成功？よい企業に就職したら成功？生涯罪を犯さなかったら成功？よくわからない。でも「成功する子育て」といった本が売れたりする。その場その場で適切なかかわりはあるかもしれないが、それをやったら成功するのか？？

子どもにかかわる際の助言として「ほめるようにしましょう」というものがある。こういうと、「叱っちゃだめなのか」という質問を受けることもある。「なんでもかんでもほめなければならないのか」といった指摘をされることもある。そんなわけないのだ。「ほめる主体のかかわり」＝「叱らない」でもないし、「何もかも許す」でもない。ましてや、「叱ることは悪」でもない。

不登校の子に、登校刺激をするのはよいのかわるいのか。うつの人にがんばれと言ってよいのかわるいのか。正しい答えを求めたい気持ちはとてもわかるが、答えとしては、「一般的によくないとされるが、場面によってケースバイケース」である。

対人援助についても同様である。例えば、リストカットについては、そりゃやらないほうがいいに決まっているが、「やめなさい」といってもやめられるものではない。治療の経過でリストカットはなくなったが、例えば過食が

ひどくなった、ということも起こるだろう。その場合は「成功」なのか。「主訴がリストカットなので、成功だ」ということもできるだろう。でも、そのクライエントの大変さが変わっていないのであれば、「失敗」ということもできるだろう。リストカットをやめられる薬（そんなものはないが）を飲んでやめられたら成功なのだろうか？リストカットが続いていると「失敗」なのだろうか。本当にうまくいったかどうかは、かなり長い年月を経てみなければわからないのではない。短期的な「成功だ」「失敗だ」ということ自体が意味のないことなのではないだろうか。

役所の仕事でも、短期的な結果を求められることが多い。自殺対策にしたって、「去年がんばって対策したから今年の自殺者が少ない」ってことはあるだろうか？平成半ばの 3 万人越えに対する長年の取り組みの結果として、いま 2 万人と少しになっているといえるのではないだろうか。青森県は自殺率が高いが、ある年だけ「ワースト 1 を抜けだした、よかった」なんて言う意味はあまりない。

なんだか、「正しさ」を求める世の中である。何が正しいか正しくないかなんて、そんなにわかるものではないはずなのだが、皆がそればかりを求めているように思う。強い言葉であるほど「正しくない面」も含んでしまうため、はっきりした言い方がしにくくなっている。少し前に話題になった「保育園落ちた日本しね」もそうだ。たしかに「日本しね」なんて言葉はよくない。でも本質はそこではないなんてこと、みんな知ってるでしょう？

何にだっていい面と悪い面がある。100 パーセント完全な善などない。そんなことみんなわかっているのに。

ネットにも「ある人がこれこれこういうことをするのは正しいと思いますか？」みたいな質問が出ていたりする。しらんがな。場合と関係性によるわ。としか言えない。

正しいことばかりを追い求めていくと、そこに生まれるのは分断である。「あちら正しい人、こちら正しくない人」と分けられてしまうのだ。正しさなんて人の数ほどあるわけで、それを「そんなもんだよな」と内包していくのが健康的な社会ではないかと思う。わかりやすいのが心理業界の分断ではないだろうか。臨床心理士資格も公認心理師資格も、どっちもどっちな感じの不完全さである（完全な資格などあるだろうか、いや、ない）。譲れない部分をもつことも大事だが、大所高所で構える必要のある資格団体などは、「いろいろあるけど、みんなでやっていこうぜ」くらいの鷹揚さが必要なのではないだろうか。

世の中に分断を作り出すことは、あまりいい結果を生まない。現在の様々な支援制度も似たところがある。「はいアナタ身体障害ですね、コチラです」「ああ、精神障害はこっちです」「65 歳過ぎた方はみんなこちらになります」と、別々の箱にいれて、まさに「分断」している。「不登校はこちらです、学校を卒業する年齢になったらひきこもりのコースになります」みたいな。

診断名などの「名前をつけること」は、援助をやりやすくする意味がある。AD/HD の人にはこういった対応が有効ですよ、とか、この薬が効き目ありますよ、とかだ（人によってかなり違うが）。身体医療の分野では特にわかりやすい。そのために診断名がある。でも、診断名を付けるのは分断するためではないはずだ。「学校には未診断の発達障害の子がたくさんいる」という話もあるが、だからなんなのだ。「だから分断しなければならない」とも聞こえてしまう。発達障害であろうがなかろうが、その子にあった対応をすればよいだけである。今の学校にその余力があるとは思い難いが。発達障害も含めて、一人ひとりの生徒にほどよく適切な対応ができたなら、世の中は今よりずいぶんと平和になるのではないだろうかと思う。

自分の中の芯としての「ただしさ」を持っていることは大事だが、それが絶対に正しいものではないという認識と、違いを許容できる寛容さも持っていたい。

発達検査と対人援助学

⑪ 赤ちゃん調査員の育児回顧録

大谷多加志

2020 年から同志社大学赤ちゃん学研究センターで 10 か月児の赤ちゃんとその保護者を対象とした調査を行ってきました。今後、同じお子さんが 1 歳半、3 歳になった時に再度調査にご参加頂く予定で、調査自体はまだまだ続くのですが、これまでに 100 名近い赤ちゃんとその保護者の方とお会いしてきました。私自身が威厳や威圧感めいたものを持ち合わせていないことや赤ちゃん用の検査用具の魅力も相まってか、幸いなことに、ほとんどの赤ちゃんは上機嫌で調査に参加してくれました。そんな中で、保護者の方から時折「赤ちゃんの専門家なら、さぞ上手に子育てをしてきたのでしょう」というコメントを頂くことがありました。保育や教育の専門家が子育てや教育が上手かと言われたら「それは人による」としか言えないのと同じで、このような感想もほぼ幻想に過ぎないとは思うのですが、そう言われたことが、10 数年前の乳児期の育児を思い出すきっかけにもなりました。今回は少し趣向を変えて、改めてその当時の育児について書いてみようと思います。

予定日を巡って

30 歳で結婚し、子どもが生まれたのは 31 歳の時です。その頃、心理系の学会でワークショップの企画に関わっていたのですが、企画者の先生から「来年もやろうか！」とお声がかかったタイミングが、妊娠がわかった直後で、かつ学会の期日がほぼ予定日と丸かぶりという状況でした。正直どう考えていいかよくわからず、行ける可能性はあるだろうかと妻に相談したところ、“ふざけんな”と一喝されました。企画者の先生に事情を説明し、当然ながらその年のワークショップは不参加としました。今考えれば、そんなこと聞いたら怒られるに決まっているとわかりそうなものですが、その当時は「ちょっと聞いただけやん…」とやっぱりピンと来ていない自分がいました。そのくらい現実味が薄かったのだと思います。この件、いまだに時々蒸し返されるくらいの失点になっています。

予定日を過ぎたけど…

妊婦健診には、2-3 回に 1 回くらいのペースで一緒に行っていました。4D 画像やエコー画像などを見せてもらったり、医師の説明も一緒に訊くのですが、お腹の子どもの様子は、よく言えばすくすく、率直にいえばぶくぶく大きくなっている風で、身長・体重とも大きめでした。特に大きいのが「頭囲」で、医師は『大きめですが、標準範囲で

す！』と、エコー画像の右下に記された「+1.8SD」という数字を指しつつ説明してくれました。“いやいや、＋1.8SD なら、学年でもトップクラスというレベルででかいやん…”と思いつつ、医師が大丈夫というものをあまり心配しても仕方ないかなと思っていました。「＋２SD を超えたら、お医者さんは何って言うんだろうね」と話していたのですが、最終的に右上の表示が 2SD を超えると医師もこの数字をさらりとスルーするようになりました。

そんなことがありつつも、基本的に経過は順調で、無事予定日を迎えました。しかし、予定日に産まれる兆候はなく、翌日も、そのまた翌日も…という感じで日々が過ぎていきます。予定日を１週間過ぎた 41 週目の健診も何の兆候もなく終わったのですが、半休を取って午後から出勤しようとしたところで陣痛が起こり、再び産科に戻って、そのままお産に臨むという流れになりました。

テニスボールとツボ

陣痛の波が来ている間、看護師さんからテニスボールを渡され、妻の背中を押すように言われました。しかし、背中のどこを押したらいいものかわからないですし、そもそもテニスボールで人の体を押すということ自体が慣れない作業です。よくわからないなりにツボを探りつつ、必死に背中を押していたのですが、後日妻いわく「全然いいところを押さないのがムカついた」とのことでした。お産ってムズイです…。

Come On Baby 4000 Over!

頭囲が大きかったのでどうなるかと心配していたのですが、色々あって案の定の緊急帝王切開となりました。初めての手術同意書にサインし、待つことしばし。無事産声があがり、4000g 超えのビッグベイビーが誕生していました。

出産の数日後に、新生児室にいる我が子を見たのですが、同じ日に生まれた赤ちゃんと比べても二回りは大きく、何となく留年して異年齢のクラスに我が子がいるような心持ちになりました。

腰痛と腱鞘炎と…

出産から１週間後、母子ともに健康で予定通り退院となりました。しかしながら、妻は帝王切開での出産となったため、起き上がるのも辛いという状況。仕事もなかなか休める状況ではなかったため、何とか家事も含めてこなしていく必要がありました。出勤前に朝食と昼食、場合によっては夕食も準備して、冷蔵庫に入れてから出勤。帰り道にスーパーに寄って食材を買って帰宅…という日々でした。一日一日を必死で過ごしていたのですが、やはり結構堪えていたみたいで、この時期の記憶があまり残っていません。

4000g 超えで生まれたことで思いがけず大変だったのは、「だっこ」です。体も大きければ頭も大きかった我が子はなかなか首も座りませんでした。また、寝かしつけは縦抱きでないと寝てくれなかったので、毎夜の寝かしつけの際の手首と腰の負担から、生後半年くらいは慢性的な腱鞘炎と腰痛に悩まされました。

児童虐待とわたし

これはどの家庭でも同じだと思いますが、やはり新生児期の寝かしつけは大きな負担

でした。1-2 時間ごとに起きてしまい、授乳後は抱っこでしか寝ないのですが、寝つくまでに短くても 20 分、長ければ 30-40 分は抱っこし続ける必要がありました。

また、抱っこで寝ついた後は、起こさないようにベッドに置くという最後の難関が待っています。寝息を立てている息子を抱っこしつつ、もう少し眠りが深くなるまで待つか、このタイミングでトライするかと悩みました。決意を固め、爆弾処理班の気持ちで慎重に慎重にベッドに横たえようとしますが、その途中で「ふえっ」と声が上がってしまえば、もうジ・エンドです。ああ…またここから 30 分だ…と絶望に包まれました。時には寝不足も手伝って、ベッドに置く直前で目覚めてしまった息子を、“やってられるかぁ！！”と放り投げたくなる衝動に駆られたりもしました。

当時は児童福祉の現場で働いていて「児童虐待」という問題も日常の近くにありました。一方で、自分の子どもを虐待する親を“ありえない”、“信じがたい”としか捉えられていなかったのですが、自分が親となってひと月もしないうちに、児童虐待まであと半歩しかないところにいる自分を知ることになりました。

毎月の発達検査

おそらく、こんな子育てはどの家庭でも起こっているのだと思います。唯一、我が家が他の家庭と違ったのは、仕事柄、月に一度定期的に発達検査を行っていたことでしょう。普段の仕事の中で発達検査を使うことはあっても、0 歳の赤ちゃんの検査を実施する機会は得られなかったので、自分自身にとって必要な経験だと思ったのが理由のひとつです。そして、今後の研修会などで使うための映像資料を撮っておく、またとない機会だとも思っていました。この時に撮影した映像は今でも研修等で用いていて、思った通りとても貴重な資料となりました。ちなみに、0 歳の間はひと月に一度、1 歳から 3 歳までは 3 か月頃、3 歳から 6 歳までは半年から 1 年に一度というペースで検査を実施していました。我が子ながら、よく付き合ってくれたものだと、今さらながら感謝です。

離乳食開始

5か月頃から、離乳食が始まりました。最初はすりつぶした果物、野菜を数口食べさせるだけでしたが、ありがたいことにとてもよく食べてくれました。スプーンを差し出すと、口をカパッと開けて待っている姿が、まるで鳥のヒナのようでした。あまりにテンポよく食べてくれるので、調子に乗って次々と食べさせていたのですが、妻からは「スプーン入れすぎ！」と注意が。自分ではまったく気づいていなかったのですが、スプーンが口の中の方まで入って、微妙にえずいていました。

離乳食を始めたばかりの赤ちゃんは嘔吐反射が口の前の方でも起こります。そのため、大人で言えばのどの奥にスプーンが来た時にオエッとなる感じが、口の真ん中くらいでも起こるわけですが、その嘔吐反射が出ていました。知識としては持っていたはずなのに、全然気づかず食べさせる私と、オエオエしながらも食欲を爆発させる息子というトホホなコンビでした。

思い返してみるほど、とてもではないけれど「よい育児」ができているとは思えず、知識も完全に宝の持ち腐れというような日々だったと思います。でも時間が不思議なくらいゆっくりと流れる、思い出深い 1 年だったと思います。

対人支援点描（30）

「スピリチュアルケアと公共性（１）」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

はじめに.

スピリチュアルケアという概念のなかに、宗教的ケアとの対比のなかで公共空間における中立的な立場によるケアという要素があるように思われる。この場合の中立的な立場によるケアとは、ケア提供者の価値観や特定の宗教観をケア受給者に押しつけないことにあるように思う。臨床心理的な表現でいえば、クライエント中心主義の立場に立つケアということであろう。ケアの主役は、あくまで相手本位によるもので、ケア提供者はその補助役でしかない。そこで、改めて宗教的ケアを問えばそれは、ケア提供者の価値観や特定の宗教観を提供することにある。宗教的ケアは、広義における布教や伝道活動、キリスト教における魂への配慮と表現される牧会活動に含まれるものといえる。相手の利益につながるという願いや確信のもとに、ケア提供者の価値観や宗教観を提供することである。

だが、この両者の相違は、しばしば宗教者間や、一人の宗教者自身の内にも関わり方の混乱を生じさせると思われる。

そこで架空の事例を考えながら考察を進めたい。

１．架空事例

福祉現場で働く A 相談員は、ある新興宗教を信じており、在家のまま、その宗教の得度（＝仏教における僧侶となるための出家の儀式）を受けていた。A 相談員は、自分が福祉現場で相談員として働くようになった動機も、A 相談員の宗教的価値観から、困っている人々のために役に立ちたいという動機からであった。A 相談員は、仕事についてからも一生懸命働き、その仕事にもやりがいを感じていた。こうした A 相談員に対する周りからの評価は高く、将来は責任者になって事業を引っ張っていってほしいと期待されるようになっていた。

ある時、A 相談員は B 利用者の相談を受けるなかで、その生い立ちがあまりにも不憫に思い、どうにかしたいと考えるようになった。A 相談員は、障害年金や、福祉制度上のサービスといった利用できる手段をつなげ、B 利用者の益になるように頑張って働きかけてきたが、B 相談員の生い立ちや将来の見通しを思うと大きな改善は見通せなかった。それに B 利用者の「自分なんて生まれてこなければ良かった」「自分が、この先、生きていて何の意味があるのだろう」「どこにも救いがない…」という度々の発言が、A 相談員の脳裏

から離れず、ますます何とかしてあげたい気持ちになっていた。

A 相談員は、B 利用者の支援に自分や社会の限界を感じながら、B 利用者の先の発言がスピリチュアルな痛みであると感じて居たたまれない気持ちになった。

そこで、ある時に A 相談員は B 利用者との面談のなかで自分が信じている宗教（信仰）を勧めて神仏の力を借りようと提案した。B 利用者は、A 相談員の話に関心を向け、二人とも面談の際に信仰の話をするようになった。A 相談員は B 利用者がスピリチュアルな痛みを感じさせる発言が減り、信仰が B 利用者の支えになっていると思い、ますます A 相談員自身の信心を高揚させ、B 利用者にも熱心にかかわるようになっていった。その後、A 相談員は B 利用者を A 相談員が信仰する宗教の寺院に行き、入信させる手伝いをするまでになった。A 相談員から見て B 利用者は信仰の力を得て、信仰が支えとなり歩んでおり、A 相談員も信じる宗教の信者が増えたことや、自分自身の信仰の確信が強まった思いがして、充実した思いとなっていた。

しかし、ある時のこと、B 利用者が生活保護のケースワーカーに入信した宗教のお布施や毎回かかるお祓い供養の費用が生活を圧迫してつらいこと、A 相談員に信仰の話ばかりされて福祉相談の面談になっていないこと、A 相談員にはお世話になってきたことから信仰の話も入信の件も断れずに調子を合わせてきたがしんどくなっていることなどが話されることが起こった。

この B 利用者の訴えが問題となり、A 相談員が所属する事業所と関係機関で倫理・ハラスメント委員会が持たれた。

A 相談員は自分がしたことの問題を自覚しながら、自身の宗教的信念から、B 利用者に良かれと思いしてしまったことを告白していた。B 利用者もお世話になっていた A 相談員が自分のことを心配して宗教を勧めてくれたことであって事を荒立てたくない、きちんと拒否できなかった自分の問題でもあると話していた。

倫理・ハラスメント委員会としては、信仰は個人の問題であり、入信退会については立ち入らないが、A 相談員に対しては始末書と、今後業務のなかで宗教の勧誘を行わない誓約をさせるという結論となった。

２．宗教的ケアが多重関係を起こさせる時

先の架空事例の場合、A 相談員の行為の何が問題であったのだろうか。

その一つは、やはり単純に A 相談員は相談業務のなかで A 相談員が信じる宗教の話を伝えて誘ってしまったことが問題であるといえる。「宗教の話を伝えて誘った」ことは、あからさまで積極的な行為ではなかったとしても、布教であり伝道活動といえる。それを A 相談員は得度した信者であったとしても、相談業務のなかで布教活動をしたことになる。倫理的には多重関係という倫理違反である。

だが、A 相談員は宗教的価値観から人々や社会のために役に立ちたいという思いから相談業務の仕事に就き、働いていた。このような宗教的価値観から公共性を発揮させて人々や社会のために働くことは、何ら問題ないことであるといえる。また、A 相談員は、B 利用者のスピリチュアルな痛みを知り、こうした問題が身体・心理・社会的なケアで解決できない問題であることを認め、何とかしたいという思いに駆られたことは、A 相談員の宗教者（得度などしてなくとも）だからこ

そ汲み取れた痛みであったと考える。しかし繰り返すが、宗教者ではなく相談員としての立場のAさんがB利用者にA相談員が信じる宗教の勧誘をしたことが問題であったといえる。宗教者が宗教的ケアの観点から宗教や信仰を提供するというものではなく、Aさんという一個人の内に相談員と宗教者であることの混在から生じた問題であった。このような出来事は、案外、素朴な形で多く起こる問題ではなかろうか。信徒も含めて、自分の宗教的価値観から相手のことを思いはかり、相手のために良かれと思って宗教を勧める行為は、ありえる話である。確固たる宗教者ならば、むしろそういう時こそ自分が信じている信仰を伝えないで、何が信仰者かと息巻くのかもしれない。必要とする人に自分が最善と信じる価値観を提供する。そして信じる人が増える。人と人との出会いと関わりによって伝播するのも宗教の姿として自然な営みであるといえる。

だが、現代社会においては、会社、病院、学校といった公共の場、公共空間で布教や伝道活動を行うことは認められない。素朴な営みとしての宗教や信仰の共有が許されない社会であるといえる。宗教や宗教者の正当的行為は、必ずしも社会的に正当化されない行為として受け入れられないのが現代社会であるといえよう。

（つづく）

講演会＆ライブな日々㉞

古川　秀明

『講演会＆ライブ　in 城陽市働く女性の家』

２０２３年の幕開け講演会＆ライブです。

城陽市は私が３０代～４０代まで、スクールカウンセラーとして長く勤めました。

まさにホームグラウンドです。

講演会前に城陽市のランドマークともいえるアルプラザで腹ごしらえ。

なんだか未来都市にみたいになりました。

私が勤めていた頃は、もっと田舎のスーパーマーケット的な匂いがしていて馴染めました。

当時はなんと、小さいけれど映画館もありました。

映画館の横にはゲームセンター。

非行少年たちのたまり場でしたね。

行きつけの喫茶店があり、そこでナポリタンとコーヒーを飲むのが楽しみでした。

今はその店もなく、大手チェーン店が入っています。
しかし、時代に能動的に適応するのが私の信条。

新しいアルプラザにはとても美味しいきなこ団子屋があります。

また一時期は私の主食に近かった天一のラーメンの店も入っています。

だけどこのアルプラザにはいろんな思い出があるなぁ・・・。

いやいや、思い出を語るにはまだ早い。

今日の演題は「無敵のオカンとカウンセラーな僕」

この演題は以前に私の講演を聞いてくれた主催者の方が考えてくれました。

是非この話をして欲しいとリクエストを頂いたのです。

実はこの話、随分前にも城陽市で話しています。

この日は、その時にこの話を聞いてくれた方も大勢来てくれました。

その時に小学生や中学生だった人が、この日は子どもを連れて来てくれました。

その時に母親だった人たちは立派な祖父母として、その時に祖父母だった人は祖祖父母として来てくれました。

長く学校で仕事をしていると、こういう時代を迎えるのですね。

会場はほぼ満席。

話は絶好調。

もちろん今日初めてこの話を聞く人も大勢います。

講演後、みなさんからの感想をもらい驚きました。

昔、この話をした時とほぼ同じ感想です。
時代や世相に合わせて講演内容も変えます。

しかし、この話はまったく変えていません。

そして感想も変わっていません。

時代が変わっても、子育ての本質は変わらないのだなと思いました。

世の中には変えていいものと、変えない方がいいものがあるようです。

どんどん変えた方が良いものと、変えてはいけないことをよく見極めながら、これからも細く長く続く話と歌を紡いでいきたいと思います。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

立場が変わると何が見える

～その4　私を見つめなければならない時　～

坂口　伊都

はじめに

　新しい年が始まり、今年度も終わろうとしています。皆さま、お元気でしょうか。今年、あるいは今年度、どのような1年になるか楽しみですね。皆さんにとって、良い1年になりますように。

　２月1日に団先生と牟田都子さんの『家族の練習問題 9-木陰の物語-』発刊記念オンライントークショーがありました。9巻目にして「団遊」というタイトルの漫画が選ばれました。遊さんが大学を終え、就職しないでものを書いて暮らしていきたいと父である団先生に伝えると、「やりたいことがあるならやればいいよ。もう一年浪人か留年をしたつもりで授業料分の費用を持たせるから家を出てみろ」と言われ、家を出ていくお話です。会場から、その時の遊さんの気持ちを教えて欲しいと質問がありました。回答の全てではありませんが、まとめてみます。

　「家を出され、仕事もなく、1年分の学費は出すから一人で生きていけと言われ、とにかく心細かったですねぇ。振り返ると、自分の人生の中で一番大切だった時期はあそこですね。あのとてつもなく先が見えない不安さと稼げないから預貯額がどんどん目減りしていくというリアリズムと向き合いながら、から揚げ弁当の5個入りを買いたいけど3個入りを毎日買いながら小説を書き続ける。あの時の孤独感、誰からも重要視されていない、誰からも見守られていないであろう自分を何とかして自分だけは見守らなければならない時期を過ごして、ただ心細かった、奮い立つなんて一つもなかった。この時の私と今の私は全然違うので、自分の話という気もしないのですよね。」

　この内容が、私に突き刺さりました。ポイントは5つです。
　・稼げない私と向き合うこと
　・社会から切り離された状態の中で自分を保つこと
　・奮い立つなんて一つもなかったこと
　・後から思うと、貴重な体験だったこと

・今の自分とは違う感覚

今回は、自分が慣れ親しんだものを失くしたり、手放したりする時に何が起こるかを考えていきたいと思います。どうぞ、最後までお付き合いください。

社会の中から切り離された感覚

私も先日、体調不良で仕事を辞める経験をしました。起業を考えていたり、子育てや介護等、次にすべきことがあって辞めるのと、急にプツンと途切れたように辞めることの違いを肌で感じました。

自身を振り返ると、ずっと走り続けていたように感じます。仕事をしていなかったのは、出産前後ぐらいでしょうか。体調不良で辞めたので、すぐは起きているのもままならず、かといって寝込むほどでもなく、見事な中途半端者となりました。周りからは、好意で「ゆっくり休んで」や「何か好きなことをして」と励まされました。でも、何かしても楽しめる気がまったくしませんでした。遊さんと同じように、稼げていないので先行きの不安を感じます。夫もいますし、すぐに食べるものに困るわけではありませんが、お金を使う気が起きません。外に出ても、ウロウロしている不甲斐ない自分が浮き彫りになるだけ。体調を崩して長期休暇を取得していた友人も、「ずっと休みたかったけど、実際に休んだら逃げいると感じて、楽しいことは一つもなかったよ」と聞かせてくれました。誰も休んでいることを責めないし、勧めてくれますが、自分がそれを許せないのです。頭でわかっていても、迫りくる焦りと不安から逃れられない。そのような時、橘玲さんの著書の中で、アイデンティティは、「社会の中の私を意識することだ」と書かれているのをみつけて、目から鱗でした。

人というのは、社会の中で生きている存在で、その部分がないと感じていると、楽しむことも発想力も乏しくなり、動くことも上手くできなくなるようです。

仕事をしている時は、あっという間に時間が流れていきましたが、仕事がなくなると、さて今日はどう過ごそうかと思案するところから始まり、家にいることにウンザリしているくせに出かけることにも消極的になっていきまいた。

そんな時間を過ごしている時、ふと老後の私をイメージしました。70歳過ぎた頃、死ぬまで何年あるのかわらずに何をして過ごしていくのだろうか。時間を持て余す苦痛を考えると恐ろしくなりました。老人になれば、それを受け入れられるようになるのだろうか。

社会の中の私を感じられないことは、土台を失くすようなものでした。

居場所

私たち人間は、一人で生きてはいけません。生きていくために協力しあうことは必要で、社会は必要不可欠です。ここでいう社会とは、家族や親せき以外を指すことにします。

社会の中の居場所を持てず、家を中心とした生活をしていくと、誰かと知り合いになっていく機会がほとんどありません。自分の世界が閉じていくような、狭まっていくような感覚になりました。これまでの知り合いや友人もいますが、学生時代のように毎日連絡を取り合ったり、会う約束をしたりとはならないのは何故なのか。
それは、日常生活を共にしていないからではないでしょうか。学校や職場などで、毎日のように出会うことで、共通の話題を持てます。共通の部分がなくなると、何を話せばいいか迷います。同窓会のような非日常の場に入れば、その当時の感覚が戻ってきますが、日常生活の中が閉じていくと、他の人は働いているのに、忙しくしているのにと遠慮し、浮遊して彷徨っている自分を強く意識することになり、人と交わること自体をためらいました。

心地よく休むことも簡単でないと知りました。休職をしている人が、延長を申し出たと聞くと、目的も役割も持てずに、どれだけしんどい日々を送っているのだろうかと思慮します。
子どもがいない家の家事をして、犬や猫の世話をしていましたが、そこに生きがいをみつけることはできませんでした。子どもが小さかったりしたら、また気持ちも違ったのかなと思いますが、子育てしながらも働き続けることを選択してきた人間なので、子育てをしていても社会の中の私を感じられないと子どもに当たってしまったかもしれません。

先ほどの友人も上司から、「部署を変えるから、もう1年いて欲しい」と連絡をもらった辺りから前向きに考えられるようになったそうです。遊さんが言っていたように、誰からも重要視されていない自分からの脱却だったのでしょう。

この先、何年生き続けるかわかりませんが、子育ても終わった女がどう生きていくのか考えました。図書館に通って、本もたくさん読みました。空を見上げたり、話を聞いていくれる家族や知人、友達がいることなどを再確認し、有難いと感じました。それでも、なかなか奮い立つことができません。
そこで、まず自分に社会とのつながりを作らないと何も始められそうにないので、外に働きに出ようと決めました。では、どのような職業をしていけばいいのでしょう。銀行員のパート募集が目について、これか？と考えましたが、たぶん違う。今まで積み上げてきたことなら、親御さんやご家族と話ができる仕事だよなぁ、やっぱりと思いますが、それができる職場は限られ

ます。自分でその土壌を作っていくこともやりながら、知人の紹介で、それができる仕事に就きました。浮遊していた自分から、足元に大地を感じるようになりました。その仕事が、本当にやりたかった仕事なのかと問われればたぶん違いますし、薔薇色の人生が始まるわけではありませんが、次のステージに向かっての準備が整ってきました。

人と関わることが増えれば、当然ストレスになることも出てくるでしょう。人と関われないしんどさも忘れ、今あるしんどさの方を強く感じる。私たちの祖先は、狩猟採取の時を長く過ごし、楽しい事よりも恐ろしかった時をインプットさせて生き延びてきた遺伝子を我々は受け継いでいます。そのため、不安を感じやすくして、すぐ警戒できるように人は形作られていると言われています。狩猟採取の時代は、いつ命を狙われるかわからない状態が通常でしたが、食べる物に困ることなく、安心して快適な寝床を得ている現代になると、この反応と付き合うことにやっかいさを感じます。

人によって、社会とのつながり、居場所と感じられるところは違います。しかし、それは誰にでも土台として必要なのだと改めて感じます。人は休めば回復するような単純なものではないと知りました。これまでの相談業務の中で、その人の土台になっているものをしっかりと意識してこられていなかったと反省しています。

喉元過ぎれば熱さを忘れる

遊さんは、「団遊」の漫画を見ても、自分の話という気がしないと話していました。人は、その時に置かれた状況の中で物事を感じるのだなとわかります。私も、ついこの間まで浮遊する人生の迷子でした。ですが、今はその感覚が薄らいできています。
何者でもなくなってしまった私を持て余し、励ましの言葉が眩しすぎて辛くなることもありました。誰かに助けてもらいたいと切望しながらも、自分で何とかするしかないということもわかっていました。ここで動かなければ動けなくなる、誰にもわからないような小さな変化を起こし続けられるのは自分しかいない。この状況を脱するきっかけを作れるかどうかも自分にかかっていると思いながら過ごし、私なりに動いてきました。その体験は、遊さんが言っていた、誰も見守っていない自分を自分だけは見守るという感覚に近いのかも知れません。

生きていくことは、その人にしかできない。だから、対人援助職がその人の人生を引き受けることもできない。その人の力を信じて、支える姿勢が大事だと感じます。

子育ても儘ならないのに働きに出ようとする母に出会う時があります。その時、「子育てもまだまだ手がかかって大変な時だし、そんなに無理して働かなくてもいいのではないですか」と声をかけたくなりますが、この母は社会の中で認めらたいと願っているのではないか。人間関

係も上手ではない、仕事もテキパキとこなせるわけでもないということが重なると仕事を辞めてしまったと知らせが入ります。その時の傷つきは、いかほどのものなのでしょう。母自身が、傷ついたことを感じないようにしているかも知れません。対人援助職も母が社会と感じる一人となり、認められた感じられるストーリーをどう組み立てられるのだろうと考え始めています。

何者でもなくなった自分を体験して、これまでとものの捉え方が変わりました。
２５歳の時に社会人を辞め、地元を離れ、大学に入り直した経験も私には大きな出来事で、社会人でなくなってしまった私を受け入れることから始まりましたが、学ぶという目的が明確にありました。今回は、その目的も役割も突如失くし、これからの人生を考えるあり余る時間を与えられました。そして、あがき続けました。望んだわけではありませんが、今回の体験は貴重なものだと思います。

『木陰の物語　9巻』の「夢の途上」にこんなセリフがあります。

失敗や自己喪失の時間なしに、夢がかなうことはないのではないか？

もともとは自己喪失ではなく自信喪失だったそうです。
そこを指摘できなかったと牟田都子さんは悔しがっていましたが、今の私には自己喪失と言われた方がしっくりきます。そのままにしてくれて、ありがとうございます。

周辺からの記憶 38

2020 年　福島

村本邦子（立命館大学）

今年の 1 月、鹿児島で学会があって、友人を知覧に案内した。知覧平和祈念館は昨年も訪れたところだが、前回と比べて語り部の話がアップデイトされていた。「なでしこ隊」（特攻隊のお世話をした知覧高校の生徒たち）だったという母親の話や、女子高生たちがお守り代わりに渡していた手作りのマスコット人形を特攻隊員が大切にしていた話は興味深かった。

もうひとつ、私が以前、本で読んで、強烈に印象に残っていたエピソードも紹介された。幼い子どもが 2 人いて、特攻隊に行く立場ではないのに、「自分も後から行くから」と教え子たちを送り出した教官が、妻の必死の頼みにも耳を貸さず、特攻隊に志願していた。観念した妻は、「私たちが残っていたのでは、あなたも心残りになるでしょう。お先に行って向こうで待っています」と、二人の子どもを連れて川に身を投げた。その後、夫も後を追うように特攻隊で飛び立った、あの世で家族 4 人仲良く暮らしていることでしょうという話だった。

語られなかったもうひとつのエピソードは、逆に、妻の反対を押し切って特攻機に乗ったが、どういう方法でかその特攻機を突き止め、滑走路に走り出て出撃を止めたりと、妻が二度も妨害して、結局、出撃できないまま敗戦を迎えたという話である。ずいぶん昔、本で読んで忘れられない対照的な話だった。語り部の講話が終わった後、このエピソードのことを伝えに行った。それは認識していなかったということで、出典を知らせた。次からは、このエピソードも語ってくれるだろうか。女性の立ち位置を強烈に感じさせられるエピソードである。語り継ぐ物語が与える印象やメッセージは、語り方によって大きく変わる。

2022年9月　原子力災害伝承館へ

今年のプロジェクト最終地である福島も、リモートでの開催となったが、実は、9月24-26日、個人的に福島へ足を運んだ。2019年に訪れたチェルノブイリと福島の記憶の継承について、河野暁子さんと一緒に論文を書いていた。福島のミュージアムとして、福島県環境創造センター交流棟（通称コミュタン福島）を筆頭に、環境再生プラザ（旧除染情報プラザ）、特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま（以後、リプルンふくしま）、東京電力廃炉資料館（以後、廃炉資料館）、原発災害情報センターを取り上げていたが、2020年9月20日に東日本大震災・原子力災害伝承館がオープンしたのだ。もともとは7月オープン予定とされていたが、コロナ禍のオリンピック延期により遅れていた。締め切りまで1週間を切っていたが、これは論文に反映しなければならないと、急遽、双葉へ向かった。

「伝承館」は、震災と原発事故の記録や教訓を後世に伝えことを目的に、国が計53億円の事業費を負担し、公益財団法人「福島イノベーション・コースト構想推進機構」が指定管理者として運営している。コミュタン同様、非常に立派な建物だ。入場料は600円。しかし、「写真撮影はできない。国や東京電力の津波対策の不備や情報発信の問題点に触れていない。炉心溶融、メルトダウンという言葉を隠し、SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測システム）予測結果の公表が遅れたことなどは説明されない。『原子力明るい未来のエネルギー』の看板は写真のみである。語り部29人が日替わりで常駐しているが、内容は検閲されている」など、オープンと同時にマスコミやネット上で批判が相次いだ。放射能のリスクについての展示が皆無であることは大きな問題だと思った。

とは言え、原発事故について、爆発の映像とともに現場の電話音声が公開されており、緊迫感が伝わってくるし、事故直後の対応では、東京電力の職員、オフサイトセンターや自治体で指揮に当たった人々の証言がモニターで見られる。「高い放射線量の中、誰かが状況を確認しなければならず、自ら志願した人がいた」という証言があり、その人はその後どうなったのか気になった。

映像では、県民の平穏な日常がどのように変化したのかの証言を聞くことができるが、とくに語り部による口演は印象に残った。南相馬市に住む三人の子どもを持つシングルマザーで、何の情報もなく、どうしたらよいのか皆目見当もつかないなか、個人の判断で必死に逃げ回ったこと、一時的に家族が別れて暮らし、子どもが精神的な問題を抱えたこと、南相馬市に戻り家族で暮らす選択をしたこと、子どもに甲状腺嚢腫が見つかったが何度目かの検査でそれが消えたこと等々を語られた。

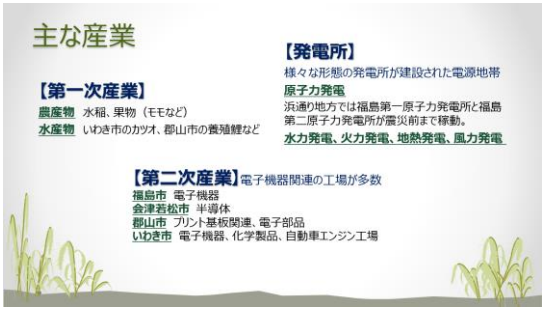
立ち話ではあったが、たまたま一緒になった来館者やスタッフと話し合う機会を持

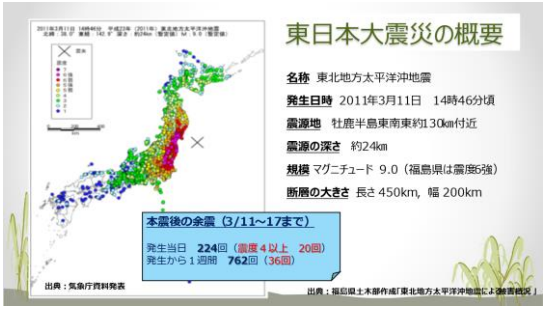
つことができ、とても有意義で満足度が高まった。展示を見た人々が、感じたことや考えたことを他の来館者と語り合い、分かち合うことができるようなコミュニケーション・スペースがあるといいと思った。

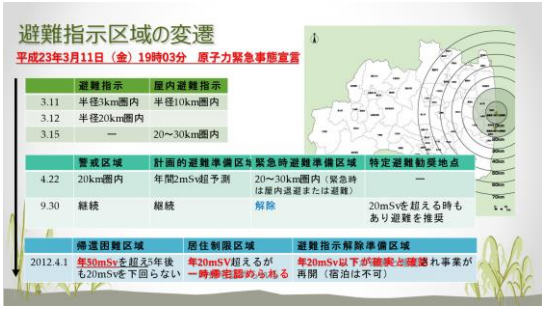
その後、12 月の漫画展の打ち合わせのため、福島市にある極久里珈琲を訪れた。

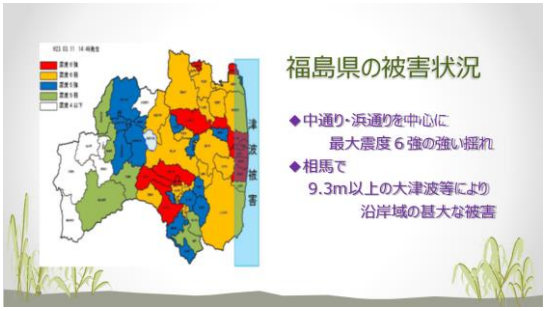
11 月 23 日(月) 福島事前学習報告

プロジェクトでは、6 人の院生が福島企画委員となってくれ、ZOOM で 2 回の企画委員会で企画を決めた。最初は、院生たちによる事前学習報告である。ここには、院生作成のパワポのごく一部を紹介する。




東日本大震災の概要
名称 東北地方太平洋沖地震
発生日時 2011年3月11日 14時46分頃
震源地 牡鹿半島東南東約130km付近
震源の深さ 約24km
規模 マグニチュード 9.0（福島県は震度6強）
断層の大きさ 長さ450km，幅200km
本震後の余震（3/11～17まで）
発生当日 224回（震度4以上 20回）
発生から1週間 762回（36回）
出典：気象庁資料発表
出典：福島県土木部作成「東北地方太平洋沖地震による被害概況」


避難指示区域の変遷
平成23年3月11日（金）19時03分 原子力緊急事態宣言
避難指示 屋内避難指示
3.11 半径3km圏内 半径10km圏内
3.12 半径20km圏内
3.15 ― 20～30km圏内
警戒区域 計画的避難準備区域 緊急時避難準備区域 特定避難勧奨地点
4.22 20km圏内 年間2mSv超予測 20～30km圏内（緊急時は屋内退避または避難） ―
9.30 継続 継続 解除 20mSvを超える時もあり避難を推奨
帰還困難区域 居住制限区域 避難指示解除準備区域
2012.4.1 年50mSvを超え5年後も20mSvを下回らない 年20mSV超えるが一時帰宅認められる 年20mSv以下が確認され再開（宿泊は不可）
破壊れ事業が

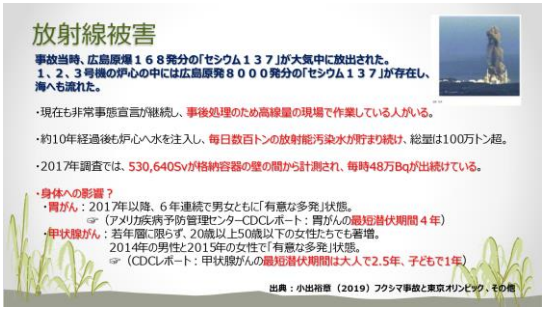

福島県の被害状況
◆中通り・浜通りを中心に
最大震度６強の強い揺れ
◆相馬で
9.3m以上の大津波等により
沿岸域の甚大な被害
津波被害

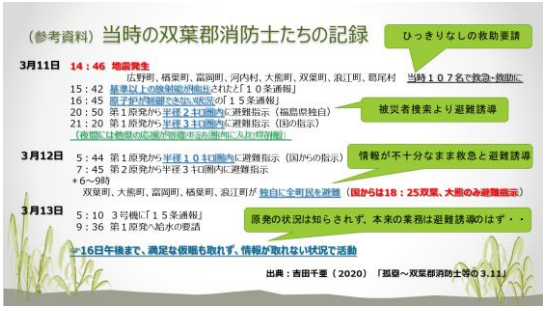
現在の避難指示区域
避難者合計 37,000人（2020年9月10日現在）
・県内への避難者数 7,471人
・県外への避難者数 29,516人
・避難先不明者 13人
<避難指示解除の要件>
年間積算線量が20mSv以下
☞チェルノブイリでは5年経過後、
5mSv以上で移住義務
双葉町の避難指示が解除
・駅周辺などごく一部に限定
・5900人の住民はまだ帰れない
出典：経済産業省作成の資料をもとに福島県が加工したもの

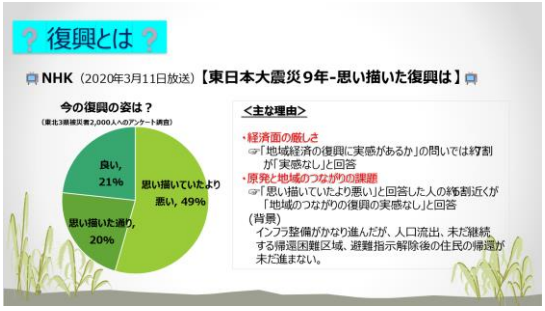
人的被害 特徴は関連死の多さ!!
死者（人）
直接死 ＊関連死 ＊死亡届者 合計
浜通り 1,568 2,236 222 3,880
中通り 36 76 3 112
会津 1 3 0 4
1,605 2,315 225 4,145
＊関連死：災害による直接の被害ではなく、避難途中や避難後に死亡した者の死因
＊死亡届者：明確に死亡が確認できる遺体が見つかっていないが、死亡届等が出されている者
1995.阪神・淡路大震災
死者 6,402（全国6,434）
直接死 5,483
関連死 919
出典：平成23年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報（第1769報-2020年10月2日） 福島県災害対策本部

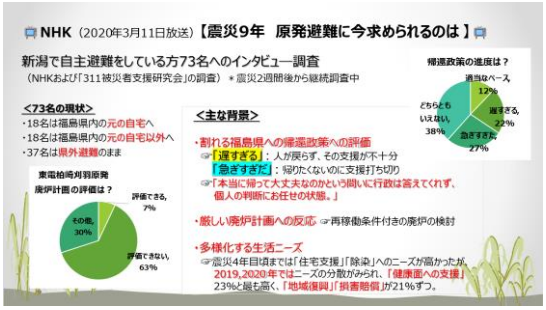
除染
放射性物質には「半減期」がある。事故後まだ約10年…。
例えば、ヨウ素131 は８日間、セシウム137 は30 年間で半減するが、
カリウム40 は13 億年かかる。
○ 県内の面的除染は、帰還困難区域を除き、平成２９年度末までに全て終了しました。
出典：福島県生活環境部除染対策課 （2020年3月）福島県の除染等の取組み

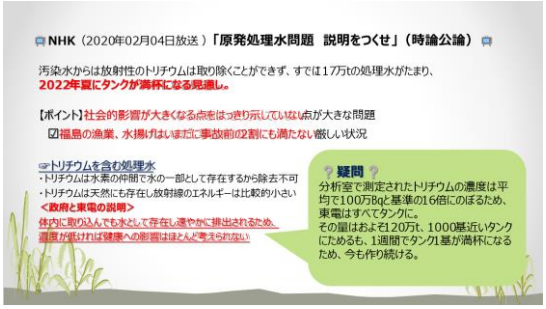
原発事故
放出された放射性物質は約万テラベクレル（ヨウ素131、セシウム137）
☞ INESでは最も重い評価レベル7
平成23年3月11日(金)14時46分
福島第二原子力発電所 1～4号全機自動停止
14時49分 津波警報（大津波）発表
15時37分頃 津波により第一原子力発電所 1～3号機で所内電源を全て喪失
※以下、第一原子力発電所の状況
平成23年3月12日(土)15時36分頃
直下型の大きな揺れが発生 →水素爆発
平成23年3月14日(月)11時1分頃
3号機原子炉建屋で白煙発生 →水素爆発
平成23年3月15日(火)
6時頃 2号機圧力抑制室付近で異音発生 →水素爆発
6時14分頃 4号機原子炉建屋5階屋根付近に損傷確認
→水素爆発
事故後の福島第1原発3号機と4号機
事故後の福島第1原発1号機
出典：独立行政法人 防災科学技術研究所 (2012) 東日本大震災タイムライン

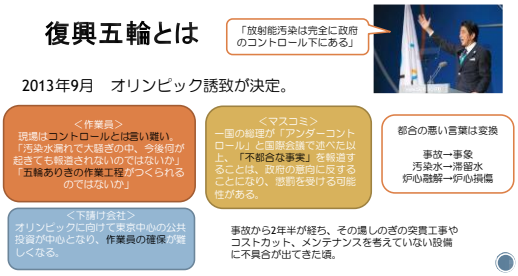

放射線被害
事故当時、広島原爆１６８発分の「セシウム１３７」が大気中に放出された。
１、２、３号機の炉心の中には広島原発８０００発分の「セシウム１３７」が存在し、海へも流れた。
・現在も非常事態宣言が継続し、事後処理のため高線量の現場で作業している人がいる。
・約10年経過後も炉心へ水を注入し、毎日数百トンの放射能汚染水が貯まり続け、総量は100万トン超。
・2017年調査では、530,640Svが格納容器の壁の間から計測され、毎時48万Bqが出続けている。
・身体への影響？
・胃がん：2017年以降、６年連続で男女ともに「有意な多発」状態。
☞（アメリカ疾病予防管理センターCDCレポート：胃がんの最短潜伏期間４年）
・甲状腺がん：若年層に限らず、20歳以上50歳以下の女性たちでも著増。
2014年の男性と2015年の女性で「有意な多発」状態。
☞（CDCレポート：甲状腺がんの最短潜伏期間は大人で2.5年、子どもで1年）
出典：小出裕章（2019）フクシマ事故と東京オリンピック、その他

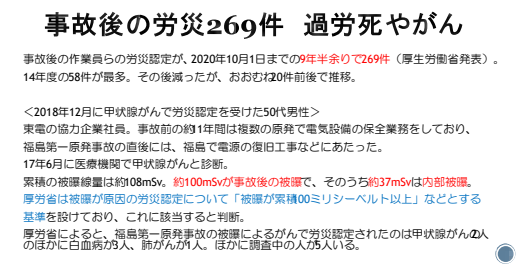

（参考資料）当時の双葉郡消防士たちの記録
ひっきりなしの救助要請
3月11日 14：46 地震発生
広野町、楢葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村 当時１０７名で救急・救助に
15：42 基準以上の放射線が検出されたとの「１０条通報」
16：45 原子炉が制御できない状況の「１５条通報」
20：50 第１原発から半径２キロ圏内に避難指示（福島県独自）
21：20 第１原発から半径３キロ圏内に避難指示（国の指示）
（夜間には救急の応援が到着不安な圏内に入れず撤収）
被災者捜索より避難誘導
3月12日 5：44 第１原発から半径１０キロ圏内に避難指示（国からの指示）
7：45 第２原発から半径３キロ圏内に避難指示
＊6～9時
双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町、浪江町が独自に全町民を避難（国からは18：25双葉、大熊のみ避難指示）
情報が不十分なまま救急と避難誘導
3月13日 5：10 ３号機に「１５条通報」
9：36 第１原発へ給水の要請
原発の状況は知らされず、本来の業務は避難誘導のはず・・
☞16日午後まで、満足な仮眠も取れず、情報が取れない状況で活動
出典：吉田千亜（2020）「孤立～双葉郡消防士等の3.11」


復興とは
NHK（2020年3月11日放送）【東日本大震災9年-思い描いた復興は】
今の復興の姿は？
（東北3県被災者2,000人へのアンケート調査）
良い, 21%
思い描いていたより悪い, 49%
思い描いた通り, 20%
<主な理由>
・経済面の厳しさ
☞「地域経済の復興に実感があるか」の問いでは約割が「実感なし」と回答
・原発と地域のつながりの課題
☞「思い描いていたより悪い」と回答した人の約割近くが「地域のつながりの復興の実感なし」と回答
（背景）
インフラ整備がかなり進んだが、人口流出、未だ継続する帰還困難区域、避難指示解除後の住民の帰還が未だ進まない。









12月3日(木)　震災10年を経て
-市澤秀耕さん＋市澤美由紀さん(極久里珈琲)

毎年、福島に行くと必ず訪れる極久里珈琲の市澤美由紀さんと秀耕さんにこの十年を振り返っての思いを聞かせて頂いた。

美由紀さん･･･1992 年、飯舘村に自家焙煎の珈琲店を立ち上げ、そんな田舎に誰が行くかと言われながら、百キロ圏内のお客さんが来てくれて、3 年経った頃には行列のできる店になった。借金も返し終わり、これからは楽しみながらやりたいなと思っていた矢先だった。

20 年目を迎えるところでの原発事故。飯舘村は 40 キロ離れていたので放射線量が高いとは知らず、被爆していた。4 月 11 日に計画的避難区域に指定され、13 日には店の道具を荷造りして、「とにかく逃げなさい」と従業員たちを解雇した。若い人たちを被爆させるわけにはいかなかった。

福島市に引っ越したのは、事故から 2 ヶ月以上経った 5 月 25 日だった。仕事中心の生活だったので、まずは店をやれる物件を探し、解雇したスタッフを戻すということで 7 月に仮店舗で営業を再開した。今の店は、土地を買うところから始めて、2015 年に福島店として本格オープン、ここまで来るのに 5 年かかった。

9 年が過ぎ、少しずつ福島の店として認められてきたかなというところで、体の半分くらいは福島に慣れたが、頭にはいつも飯館のことがあり、胸の中がムカムカ、ドロドロしている。今年、漫画展に手を挙げたが、今までとにかく必死で、やっと今年になってイベントをやろうという気持ちになっ

た自分がいる。

秀耕さん･･･店があってコムコムの漫画展を見たことがなかったので、今回は宮古市まで見に行った。良かったなと思った。避難の十年は大変で、いつも怒りがあったが、「これでは体壊すな。笑ってないとやってらんねえ」という感じで、笑ってなければ生きていけないような状態だったが、5 年くらい経って、笑うこともできなくなった。

夫婦で一緒にやってきたが、椏久里珈琲への思いには少しずつ違いがあり、自分は役所をやめて店を始める時、農業と珈琲でやっていこうと思った。親が農業をやっていたが、できなくなったので、先祖代々の土地を活かしてと、ブルーベリーの栽培を始めたところだった。原発事故で農業の部分がすっぽり抜けてしまい、人生の目標をひとつ失った。福島の店も頑張って軌道に乗ってきたが、やはり農業への思いがある。飯舘村のブルーベリーは、最初の年、500 ベクレルあった。食用は 100 ベクレル以内だったし、少しでも汚染されているものは使いたくないと思ったが、一昨年から ND（不検出）になって、昨年も ND で、まったく検出されなくなった。「これならば使えるな」と、何とか畑を再生させていきたいと考えている。66 歳になり体力も衰え、将来の見通しは立たないが、「きちんとやっていけば、何とかなるかな。それがこれからの生き方かな」という思いで、休日には飯舘に帰り、畑仕事をしている。先祖代々というのもあるけれど、土地が荒れていくのを見ていられない。周りにいる同世代の者たちは皆、同じ思いでいる。

美由紀さん･･･夫婦であっても考えは別、尊重し合う関係を築いてきた。店も来年で 30 年目となり、目標像は少し違うところもあるが、良いとこ取りすれば奥深い店になるだろう。

福島に来て店を始めた頃は、避難民のたまり場みたいな捉え方をされていた。客の顔の半分は浜通りの人で、いつも津波や原発事故のことを話したり、泣いていたりというような店になっていて、もう少し普通の店にできないかと思ってきた。ここ 2~3 年でようやく地域の人たちにも通ってもらえる店になった。近くに浜通りの復興住宅があり、皆さん孤独なので、「1 日、誰とも話しないというような時には珈琲飲みに来てね」と言ってあるし、浜通りの人ももちろ

ん来てくれる。良し悪しは決められないが、どんな方たちにも良いコーヒーとおいしいお菓子と場を提供できたらと思う。

飯舘の家は広く、9 部屋に 3 人で暮らしていた。今は狭い所で、隣の家も近いし、眺めもない。たまに飯舘に行くと、「こんなに広かったんだ」とあらためて思う。7 棟あったが、除染もできないし、朽ち果てていくだけだから、住居部分だけコンパクトにリフォームして、あとは全部壊した。家の中の片づけに 1 年くらいかかった。子どもたちは「リフォームしてどうするの？」と言うし、戻るのかどうなのか、家族でも、自分の中でもぎくしゃくして、どうしたらいいのかわからない状態だった。そんな中でマスターがどんどんリフォームを進め、結局、今の私たちには良かったのかもしれないが、今後のことはわからない。

飯舘の店はそのままだったが、2 年くらい前に借りたいという人がでてきた。貸してしまえばもう戻れない。2 店舗できれば理想だが、現実にはひとつで精一杯。結局、貸すことにして、今年の夏、飯舘に移住してきた方に貸した。年々、いろいろ変化している。心もどんどん変化していく。来年はまた何かが変わるのかもしれない。今を一生懸命やっているが、何が起こるかわからない。未知。こんなことを考えないといけないこと自体が悔しい。

私たちも苦しんでいるが、もっと苦しんでいる人もたくさんいる。お客さんもいろんな思いを持っていて、いろいろ話す。何もかも、家族も亡くして、一人復興住宅に入り、生きようと葛藤している人もいる。周囲をよく見ると、自分たちは家族を亡くしたわけでなく、一所懸命頑張るという役割を果たしていかなければと思う。もともと福島にいた人も傷を負っている。福島全体が悩みを抱えている。農家の人の風評被害。家の周りには除染したものが埋まっている。避難でなくても悩みがあるし、伊達市では一部避難で地域が分断。自分だけが避難して辛い辛いと言っていても、皆が辛いことを理解したいと思っている。

秀耕さん･･･震災前、飯舘村は 6000 人、1800 戸だった。平成 27 年の春、長泥の帰還困難区域を除いて避難解除された。現在、戻ったのは 1400 人。うち、かつての村民は 1300 人で、残り 100 人は移住者。従来の村民はほとんど年寄りで、移住者には若い人たちが多い。移住のための優遇措置も手厚く、役に立ちたい、新しい事業にチャレンジしたいという人たちで、そういう人たちがエンジンになって、これからの飯館は新たに築かれていくのかもしれない。南相馬の小高も同じ。とは言え、農業には蓄積が必要でリスタートはなかなか難しい。

お話の後、参加者との対話が行われた。年月が経ち、村民との集まりも減ったこと、「復興だ、復興だ」と言われるが、「ガハハ

と笑えるつながり」が失われ、みんな逆に笑えなくなっていることを知り、言葉を失う。飯舘や新地は坂上田村麻呂の時代から 300 年に 1 度は戦があって生き延びた人たち。何かが起こっても起こらなくても、十年という年月は変化を与えるなどの話が出た。

個人的には、秀耕さんの名前にも込められた農業への強い思いをあらためて知ったこと、美由紀さんの飯舘で生まれ育った娘たちの哀しみに故郷喪失の辛さは想像を絶していたという話が印象に残った。新しい店も軌道に乗り、外からは苦難を乗り越えて力強くやっておられるように見えても、こんなふうにひとつひとつのエピソードから根底にある思いを少しでも想像することができる機会は貴重だと思った。多くの人々に知って欲しいと思う。

以下、参加者アンケートの声を紹介したい。

・ひとつの画面からおふたり並んでお話しされている様子を見ることができて、それぞれを尊重され、歩んでこられた道が垣間見られたように感じました。
・年を経過する度に心の復興があるのではなく、気持ちには変化があり、割り切れない複雑な思いを抱えて生活されているのが伝わってきました。
・原発事故が奪ったものはあまりに大きいと、改めて感じました。原発事故を我が事として考えていこうと思います。
・心の底から笑える状況ではないお話、娘さんの故郷を失う悔しさのお話をお聞きして、涙が止まりませんでした。辛い状況から前に進んでおられる事が伝わり、自分自身も前に進んでいく力を頂きました。
・10 年という年月の中、生活の変化、家族や友人、故郷への思いなど様々な情景が見えるように伝わってきました。被災された方にとっての本当の復興とはなんぞや。そんな本質を問いただすようなお話しだったと感じました。
・話を聞くことができて感謝しています。子と親との飯舘への思いの違いがとても印象的でした。数年ではなく数世代のスパン。われわれの証人役割もそのぐらいのスパンがいるのかもと思いました。

12 月 5 日(土) 団士郎漫画トーク

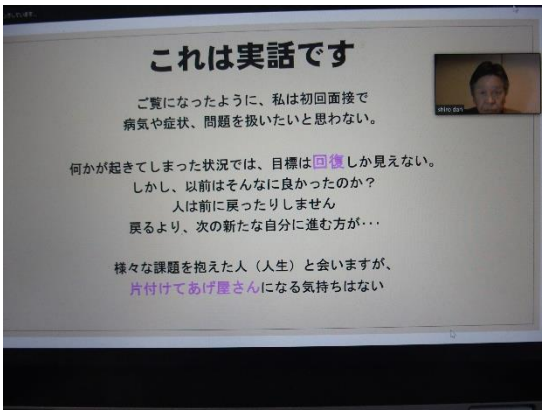
今年度の漫画展は、初めて極久里珈琲で行なわれた。場所が変わったことで客層が変わり、年配の方が増えたようだった。極久里珈琲の方からは、アンケートも多く、他の地区でも巡回できないかなど積極的な声もあがったらしい。今年、参加院生たちにとっては、すべての場所のプロジェクトに参加することが可能になったため、漫画トーク

の内容は重複する部分も少なくなかったが、聞くたびにあらたな発見があるとの声があがっていた。ブレイクアウトルームを使った交流も高評価だった。

終了後のアンケートには、以下のような感想が寄せられた。

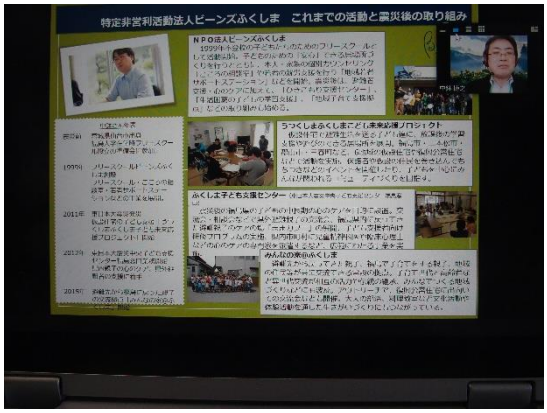
・友人に招待されて、初めてお話しを伺いました。何気なく過ぎていく日常の合間に、ちょっと立ち止まって自分の事や自分を取り巻く周りの事を見つめ直す事が大事だなと思いました。
・ご一緒させていただいた方と感想を共有できたこともよかったです。一人で夜空を見上げた日のこと、見上げる余裕もなかった日々のことを思い返しました。
・私自身、生き方についてぼんやりと悩んでいることもあって、今日のお話を聞いて少し心が軽くなりました。
・お話が、今とこれまでの自分の状況とぴたりと当てはまり、話を重ね合わせて聞かせていただきました。「人は刻々変わるもの」ということを改めて考えました。
・初めて参加させていただいて、このような形は初めてでしたが、とても良い機会を与えられました。極久里さんまで原画を見に行かれなくて残念です。 団先生の作品、是非拝見したいです。
・さまざまなヒントをいただき、そのことを心に置いて相談に乗っていきたいと思いました。少し気が楽になった気がして、同じ話を違う状況で聞いているとこんなふうに違って聞こえてくると気づきました。また、グループセッションの参加者の方からもとてもいいお話が聞けました。

有難うございました。



12 月 5 日(土) 被災者支援 9 年のあゆみと残された課題
中鉢博之さん＋小磯厚子さん

中鉢博之さん（特定非営利活動法人ビーンズふくしま常務理事・事務局長）と小磯厚子さん（白河市つどいの広場事業おひさまひろば副代表）に、被災者支援 9 年のあゆみと残された課題について話してもらった。

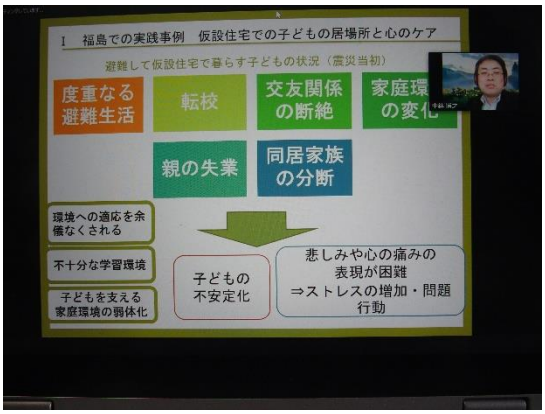


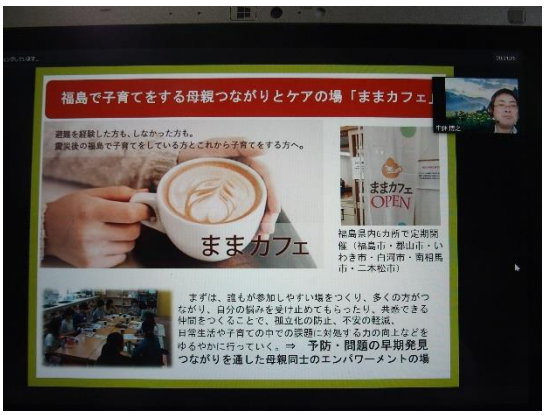
中鉢さん･･･ビーンズふくしまは 1999 年からフリースクールとしてスタートした団体で、不登校の子どもと家族、地域に関わってきた。震災によって地域のダメージは大きく、仮設住宅での子どもの居場所づくりや学習支援、中長期の心のケアとしてお母さんたちが集い悩みを話すことのできる「ままカフェ」、子育て中の家族や地域の人々が交流できるなとしての「みんなの家」などの事業を展開してきた。

福島の復興はひと回りもふた回りも遅れている。避難指示解除されても若い人がなかなか戻らない。令和 2 年 11 月現在で、県外避難者は 29,359 人、県内避難者は 7,459 人いる。しかも、この数字にはカウントされない人たちがいる。自主避難の人たちや、復興住宅に入ると避難者数から除外されるので、故郷に帰れているわけではない。

仮設住宅での支援をしてきたが、たとえば浪江の仮設を例にとると、自宅から 80 キロ離れたところにバラバラに避難し、転々とした。プライバシーなし、転校、友達との別れ、家族の分断、親の失業、家庭環境の変化などによって、子どもも不安定になり、ストレスも高く問題行動も見られた。9 年経って、仮設から復興公営住宅へ、避難先での住宅建設があり、避難指示が解除されるなかで親の迷いと決断、子どもの不安があった。

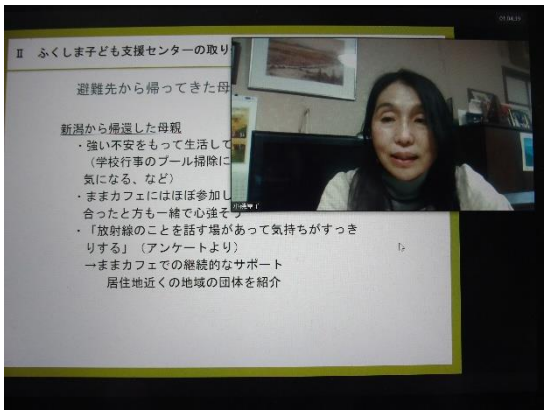
母子で自主避難した人たちが帰ってくると、放射線の心配がある。震災後に子どもが産まれた人、震災後に引っ越してきた人も強い不安を抱えている。「ままカフェ」、食と放射能の講習会などもやってきた。





小磯さん･･･白河は安心・安全と言われている場所だったが、避難しようがしまいが、全員が被災者であり、線量の高さや避難した人だけが支援の対象ではない。白河でもと手を挙げて、「ままカフェ」をスタートさせた。まったく安全だと思っている人、安全だと思って避難してきた人、避難した人などさまざまな立場の人たちがいて大変だったが、それぞれの事情に合わせた道筋がある。おそらく、場所、場所で、「ままカフェ」のあり方は違うのではないかと思う。

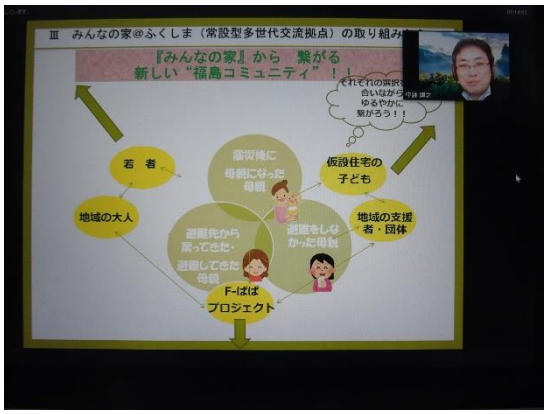
福島では、一時期、線量について話しにくい空気があった。「県も国も安全だと言っているから、大丈夫」と思っている中で、「心配だ」と言いすぎると外されると思って言い出せない人もある。心配事を堂々と言える場所として「ままカフェ」があった。忘れたいと思っても、線量計が眼に入り、除染の案内が耳に入り、忘れさせてもらえない場になっている。ここ何年かは、線量のことを言う人は減ってきているが、もしも気になったら、いつでも言える場があるといいなと思っている。

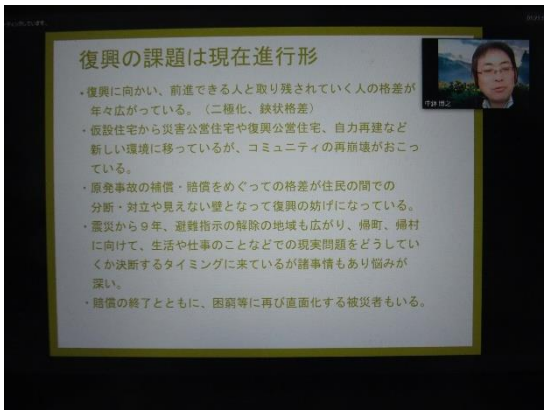


中鉢さん･･･今年は、コロナでマスクや行事ができないなど震災を思い出すことが多く、「あの時もひどかったけど、今もひどい。思い出してもやもやする」というような声を聞く。安心できる場があれば共有できる。「ままカフェ」の常設拠点として、分断を回復できる場として「みんなの家」をやっているが、コロナで予約制となり、食事もできず、交流活動がやりにくくなっている。テーマを決めて話す「ままトーク」を始めた。オンラインでもやっているが、県外や沿岸部からの参加もあり、思わぬ良い面もあった。

これからの子どもたちに、大人として何を届けられるのか。村本より、当時子どもだった人たち、現在の子どもたちの様子を聞いてみた。中鉢さんからは、「復興課題は現在進行形で、不登校や生活困窮などのなかに震災課題が入り込んでいる。当時、幼稚園くらいだった子どもたちも、故郷や避難のことを結構覚えていて、話題を共有できる友達がいると、ふとした拍子に話すことがある。それ以下だった子どもたちはあまり意識していないかもしれない。学校で放射線教育やコミュタンなど社会見学はあるが、わずかな時間だし、震災については深く学んでいないのではないかと思う。仮設には、当時小学生で劇的変化があり、当時、我慢してたことを、理不尽だったと表現する子はいた」という事だった。小磯さんからは、「今、高校生くらいで、避難した経験がある子どもは、その時の体験が良くも悪くも影響している。環境が劇的に変化して、どうやってそこにいたらいいか悩みもがき苦しんでいたことが親の眼にも明らかだった子ども、学校や進学にも何らかの思いがあったり、当時、進学で他県に行った子が、福島から来たことを隠さなければならない自分が

1 年くらいいて、それが辛かったという声を聴いた」ということだった。





参加者からもたくさんの声を頂いた。

・「これから福島の子どもたちに何を届けたらいいのか」ということばを反芻しています。誰かと一緒に感じることのできる場は、どんな場所でも必要だなあと感じるお話しでした。
・実際に福島で支援をやってこられている方々のお話を聴いて、福島の現状を知ることができました。
・ひとりひとりの思いを大切にできる場所であり、支えとなる場所があるというだけで救われる方は多いと思います。コロナ禍で大変だと思いますが、続けてほしいと思いました。
・福島での子どもの様子や具体的な支援を知ることができたこと、さらに今後の課題も聞くことができ、自分自身、何ができるかと考える機会となった。
・福島の復興は、まだ他の被災地に比べて遅れていると仰っていましたが、毎年聞かせて頂く度に現状を知ることの大切さを思います。とりわけ、「ママカフェ」は、「お母さん方とって大変有難い場だ」と子育て支援をしている私は思いました。
・毎年素敵なおもちゃを見せてくださる小磯さん、いつも笑顔でしっかりとした声の張りから前向きな思いが伝わって元気をいただきます。（中略）「忘れずに福島と関わってくださることが嬉しい」と仰っていましたが、「忘れないこと」、「一緒に考えること」をこれからも心に置いて震災プロジェクトに参加させていただきたいと思います。
・とてもよい企画だと思います。福島の課題を福島の方たちだけに背負わすのではなく、我が事として考えていこうと思います。

12 月 6 日(日) 双葉を追われて －目黒とみ子さん

加藤恵子さん（みやぎ民話の会）のご協力を得て、目黒とみ子さん（宮城民話の会/原子力災害伝承館語り部）に「双葉を追われて」と題して話をしてもらった。

双葉で暮らしていた目黒さんは、あの日、2〜3日で戻れると思って家を出たのに、二度と戻ることはできなくなった。何も持ち出すことができなかったが、たったひとつ持ち出したものがある。それは双葉町に伝わっていた昔話だったと言う。「私も眼を閉じてお話しますから、みなさまも眼を閉じて聞いて頂けたらと思います」と、目黒さんは「小太郎狐」のお話を始めた。

昔、太郎という狩りのうまい若者がいました。ある日、山に狩りに出かけましたが、あまりに奥深く入って、道に迷ってしまいました。昔、じいさまから、「山で迷ったら沢に沿って行け」と教わっていたので、そのとおりにすると、一軒家がありました。「道に迷ってしまったので、ひと晩だけ泊めてください」と頼むと、中からきれいな娘が出てきて、招き入れてくれました。その娘はキクという名前で、ひと晩が2晩と、2晩が3晩･･･、1年、2年、3年と経って、かわいい男の子が産まれました。

男の子は小太郎と名づけられ、大きくなると、お父さんと一緒に狩りに出かけるようになりました。ある時、悪者がきて、お父さんを連れて行ってしまいました。お母さんと小太郎はずっと待っていましたが、お父さんは帰ってきませんでした。

何年かが過ぎ、小太郎も立派な若者になりました。ある時、小太郎が狩りから帰ると、家の前に立派な狐がいました。「こたろう〜」「小太郎、私は山に住む狐だったのです。姿を見られてしまったからには、もう、ここに住むことはできません。この球はどんな悩みも解決してくれるから、これを持っておきなさい」と、お母さん狐は、小太郎に水晶の球を渡し、山に帰っていきました。

その頃、町では殿様が悩みを抱えていました。かわいい一人娘であるお姫様が病気になり、お医者様も呪い師も、誰も治すことができませんでした。どんな悩みでも解決すると小太郎の評判を聞いた殿様は、小太郎を呼びにやり、相談しましたた。小太郎が水晶の玉に耳をあてると、「こたろうや〜」と、お母さんの声が聞こえ、姫の寝ている布団の下で、蛇と蛙とナメクジが喧嘩をしていて、その息がお姫様の健康に害をなしているというのです。家来が布団を上げると、確かに確かに、蛇と蛙とナメクジが喧嘩をしていました。家来がそれを追い払うと、お姫様はすっかり元気になりました。

喜んだ殿様は、褒美をとらせようと何がよいか聞くと、小太郎は、「私は学問をしたいのです」と答えました。感心した殿様は、城で一番の先生をつけてくれました。学問ができるようになった小太郎は、お姫様と結婚し、二人はいつまでも幸せに暮らしました。殿様が亡くなった後は、小太郎が殿様になって、この領土を立派に治めたそうです。

「それでは、東日本大震災の大変だった話

に入っていきます」と目黒さんは、双葉町の人々の経験を物語り始めた。

双葉にも地震がきました。津波がきました。そして原発事故が起きました。双葉町は管理区域となり、今年の 3 月 4 日、一部を除いて解除になったのですが、住民は住んでいません。

3 月 11 日、夜 9 時が過ぎていました。各家庭に入っていた防災無線から、「細谷地区の住民は山田地区公民館に避難してください」と放送がありました。細谷地区は福島第一原発から 3 キロ圏内です。山田地区は、私の住んでいたところで 10 キロ圏です。私は民生委員をしていたので、出かけて行きました。みなさん着の身着のままで次々に入ってきました。大きな荷物を持っている人は見受けられませんでした。一晩だけ山田地区公民館に避難したら、自宅に戻れると思っていました。この時の細谷地区住民は 69 名です。

次の日の朝、「双葉町民は、全員、川俣小学校に避難してください」と放送がありました。これが私たちの旅の始まりです。双葉町は 7 千人弱の人口でした。

川俣小学校へ行くには、国道 114 線一本です。渋滞が予想されました。私は夫と一緒に相馬の方に向かいました。行く途中、救急車が横倒しになっていました。大きな船が打ち上げられ、コンクリートの橋が流され、車がいたる所に転がっていました。こんなところまで津波がきたのかと思うほど、家のガラスが割れ、それはひどいものでした。

海の近くに住んでいた親戚の家に寄ってみました。何もありませんでした。そこで私が見たものは、親戚の家より少し高いところに立っていた隣の家の二階の屋根の上の乗用車でした。親戚の家のおじいさんは二十歳の孫に助けられ、全員無事が確認されています。

別の親戚の家にも寄ってみました。その家は高台にあったため無事だったのですが、その家の旦那さんの話が忘れられません。地震の後、大きな地鳴りのような音がしたそうです。何だろうと思って玄関の戸をあけると、目の前が海でした。津波です。「俺はあと何年生きるわからないけれども、大変なものを見てしまった」と言いました。

その後、相馬にも行きました。相馬も海側は集落ごと流され、何もありませんでした。その光景を高台から見ていた時、隣の男性と立ち話をしました。「俺はな、きのうここに夢中で逃げて来たんだ。上りきった時、津波がきてな、若い娘さんが『助けてー』と流されていったんだ。俺にはどうすることもできなかった」。

別の人の話です。「海の上の空が黄色くなってな、津波に流される家は紙きれを見ているようだった」。怖ろしい話でした。双葉地方で津波の一番高い所は 22 メートルです。相馬にいた時、おかしな音が聞こえてきました。最初は何の音かわかりませんでした。午後 3 時 36 分でわかりました。それは、福島第一原発から聞こえてきた水素爆発の音だったのです。

この水素爆発を見た人の証言です。ドンという大きな音がして、たくさんの白い煙が立ち上ったそうです。その後に続く音はこういう音です。「ウォ〜〜〜〜ン」。この音がどこまでもどこまでも続いていました。

震災からしばらくして本人がようやく話す気になったと NHK のニュースでやっていました。双葉町の海寄りにあった自宅は

流され、奥さんと旦那さも流されたそうです。奥さんは力尽きて、旦那さんの眼の前で海に沈んでいきました。そして、その旦那さんが、翌日、海の上から見たものは、福島原発が爆発する様子でした。この旦那さんの心境は察するにあまりあります。何かの漂流物に乗っていたところ、空から発見され助けられたそうです。

双葉町新山地区に住んでいた人に聞いた話です。新山地区で防災無線を聞き逃してしまった人 19 名は、新山地区の公民館に避難していました。炊き出しのおにぎりでも作ろうと準備中、テレビで福島原発が爆発したことを知りました。その時の様子は、体で風圧を感じ、音とは言えない衝撃音、雪のような白いものが降ってきました。ただ驚くばかりでした。

ここにいることはできない。どうしようと思っていると、近くにある双葉厚生病院から自衛隊のヘリコプター3 機が患者さんを運ぶことを知りました。それに便乗させてもらうことにしました。一機で 20 人くらいは乗っていたと思います。

自衛隊の駐屯基地にひと晩泊めてもらいましたが、次の日の朝、全員で出ました。次は二本松男女共同センターです。ここにもひと晩泊めてもらいましたが、病人、患者さん専用ということで、また出ることになりました。次は、郡山高校、川俣高校、川俣の体育館、ここで物資を頂き、助かりました。食事はおにぎりとおつけもの、着の身着のままです。この後、双葉町は、役場機能を求めて、埼玉県スーパーアリーナへ、バス 40 台、1200 人で向かいました。お世話になった川俣町での支援に感謝いたします。

私は、みなさんにこの絵を見て頂きたくて、今日、ここにいます。この絵は 3 月 11 日お昼近く、我が家の南の空で見た不思議な雲です。下は我が家です。2011 年 2 時 46 分が震災ですから、震災 3 時間前の雲です。

紺碧の空に小さな丸い雲が縦横きちんと並んでいて、全体に四角でした。正しくは上下に長方形でした。私は生まれて初めて見た雲で、あの雲は何だろうと思いました。後でわかったことですが、この雲は高積雲、ひつじ雲、地震の予知雲だそうです。失敗したと思ったことは、あの雲の写真を撮らなかったことです。でも、描いた方がいいと教えてくれる人がいて、描きました。

あの大揺れの時、私は、津波がくるだろうと思いました。でも、原発が危険な状態になるとは思うことがありませんでした。私は自宅にいましたので、揺れが収まってすぐ外に出ました。民生委員として、高齢者の安否確認に行きました。周りの様子は我が家も同じでしたが、瓦が落ち、車のフロントガラスが割れていました。あの大揺れの時、私はドーンという音を 2 回聞きました。それは、常磐線の上り下りの高架が揺れによりずれて地上に落下する音でした。大揺れは 4 分間続きました。震度 6 強、線路が落ち

る時、電車が走っていたらと思うゾッとします。その場所は、双葉駅から南の方に少し離れたところです。下には国道 288 号線が通っています。

この後も、目黒さんは写真を示しながら、双葉町民の体験を紹介してくれた。午前中に卒業式をしていた双葉中学校体育館の被災、双葉南小学校玄関にそのまま置かれたランドセルやくつ。それから、子どもたちの話や、原発事故による強制避難で捜索ができなくなって置き去りにされた人々のこと。声を聞いたのに、助けに行けなくなってしまった消防団員の苦しみ。2023 年 4 月 23 日午前 1 時に双葉町は封鎖された。目黒さんはそれから 8 回も転居を余儀なくされたそうだ。

目黒さんは、宮城に来て、みやぎ民話の会に入会し、双葉の話を語る機会を得た。語るためにまとめてみて、「私でさえこんなに話があるのだから、他の人はもっとすごい話があるのではないか」「孫たちの世代に双葉の体験を伝えなければならない」と思った。双葉から宮城に避難した人の会で協力してもらい、44 人の貴重な体験が集められ、冊子として発刊した。『放射能から逃れて』同じ時、同じ場所にいたのに、一人一人の体験はまったく違うものだった。

避難先でたくさんの人たちのお世話になったと感謝の言葉を繰り返しながら、目黒さんは、「避難で一番大変だったのは、お世話になることでした」と語った。目黒さんの話に参加者は言葉を失い、ZOOM での語りであっても、それぞれが身体で何かを感じ取っていたようだった。参加者アンケートにも多くの感想が寄せられた。

- 伝承者の語りを通し、当時の状況が目の前に浮かび上がり、涙が止まらず、心が揺さぶられました。
- 自分自身の知らないことについて知ることができ、語り手の方から聞くことでさまざまな思いが胸に残りました。また、自分自身の知識の少なさを痛感することができました。
- 語りの内容も、語り方も、非常に伝わるものがあった。語り方に関しても特に私たち世代が忘れていた言葉のまっすぐさ、淡々と伝える決意も感じられた。
- 実際に避難されている方の語りを聴く機会はほとんどなく、とても貴重なお話を

聴かせていただきました。

・語り手の話は情景が浮かぶような臨場感で、写真を元にしたお話からは当時の様子がありありとわかり、リモートながら語りを直接聞いたような気になりました。

・事実の生の語りがこんなにもすごい力を持っていることを初めて知りました。事実もすさまじいものでしたが、人の魂を揺さぶるような語りでした。

・加藤さん、目黒さんの存在感。とてもよかったです。

・貴重なお話を聴かせていただき、ありがとうございました。原発事故を福島だけの問題に留めず、我が事として考えていきます。どうかお身体にお気をつけください。

・ある日突然、今まで刻んできた歴史が絶たれ、故郷が無残に変化し、家族がバラバラになり、新天地で生きていかざるをえないという生活がどんなことなのか、語りの中で知り、心が痛くなりました。しかし、同時に知らなければならないことだと思いました。ありがとうございました。どうぞお体に気をつけて、今後も語り継いでくださいませ。

・語りと視覚的な資料でこんなにも、心に訴えかけることが出来るということを知りました。双葉で震災の時の起こったことを、生の声で一言ひとこと魂を込めて伝えていただき、心の奥に響きました。大きな声ではないけれど、とても力強く、心の叫びを聞いたような気がしました。孫の世代に残しておきたいという思いで、周りの方々に呼び掛けてまとめられた証言集が、若い世代にきちんと届いて、感想が寄せられたということに感動を覚えました。

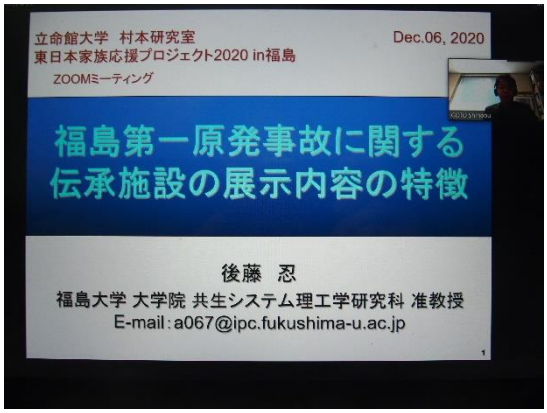
・実際にこのようなことが起こるのですね。目黒さんの思いがつながったのですね。福島の原発の理不尽な出来事がもたらした悲惨な事実を伝えていただきましたが、最後に若い世代に伝えることの大切さや、若い人達がきちんと受け止めてくれるのだという希望を抱くことにもなりました。本当に有難うございました。

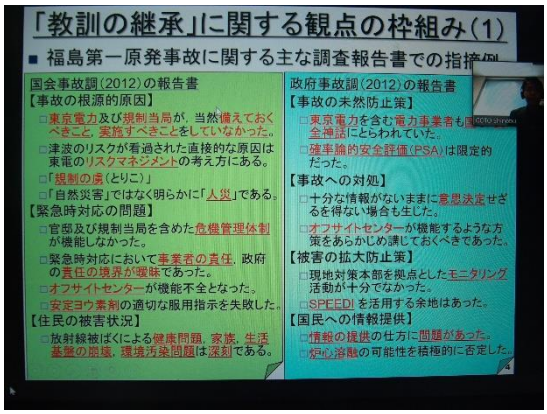
・私は、皆さんの辛さをまだまだ分かっていないと思います。でも、こうして伝えていただいたことを聞いた者として、自分なりに伝えていきたいと考えています。

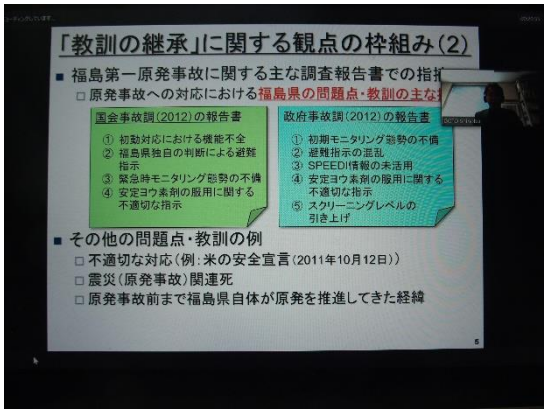
12 月 6 日(日) 福島第一原発事故に関する伝承施設の展示内容の特徴 －後藤忍さん

福島のプログラムでは、毎年、福島大学の後藤忍先生をお訪ねしている。例年、早目に現地へ向かうことのできる者しか、後藤先生のお話を聴けないのだが、今年はリモート開催のおかげで、多くの参加者に聴いてもらうことができた。

震災・原発事故の教訓を伝える施設はたくさんある。図のピンクが公共施設、緑が民間施設である。まずは、9 月にオープンした伝承館の展示についてだが、まだ分析途中なので、今後、結果が変更になる可能性があることを前提にした話ということだった。





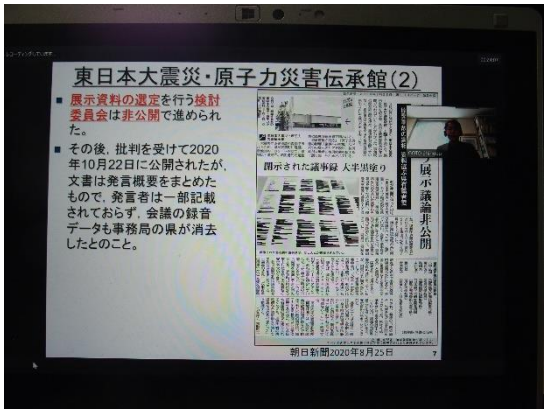


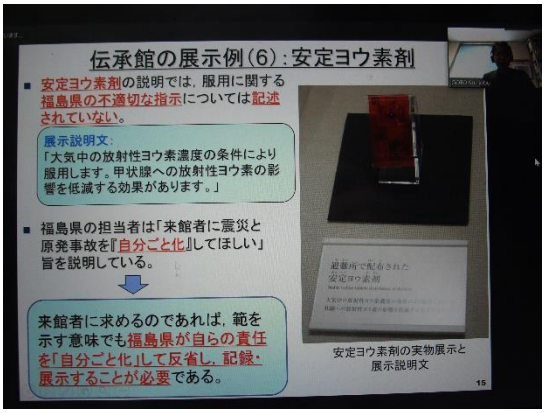
教訓の継承に関する観点の枠組みとしては、調査報告書の内容を参照することができるだろう。『国会事故調』（2012）、『政府事故調』（2012）では、国や東電の不十分な点を指摘している。たとえば、スピーディーを活用できる余地があったという指摘や、国民への情報提供に問題があったなどである。福島県の問題点や教訓の指摘もある。それ以外にも、関連死や、福島県が原発を推進してきたことも挙げられるだろう。

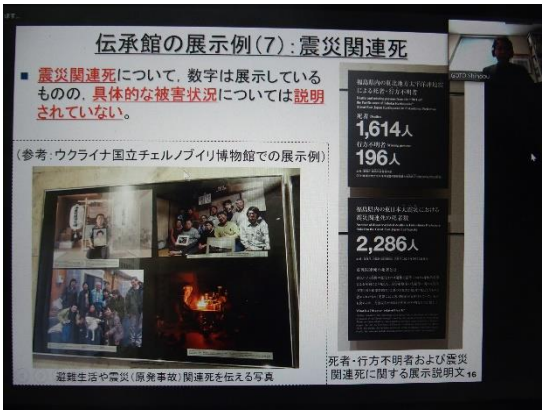
原発災害伝承館は、福島県が双葉町に整備している施設で、53 億円の国費によってできている。イノベーション・コースト構想の一環でできたので、復興に重きが置かれている。初代館長は、博物館の専門ではない高村昇さん（長崎大学）である。

HP にも挙げられているが、3 つの基本理念があり、①原子力災害と復興の記録や教訓の「未来への継承・世界との共有」　②福島にしかない原子力災害の経験や教訓を生かす「防災・減災」　③福島に心を寄せる人々や団体と連携し、地域コミュニティや文化・伝統の再生復興を担う人材の育成等による「復興の加速化への寄与」である。

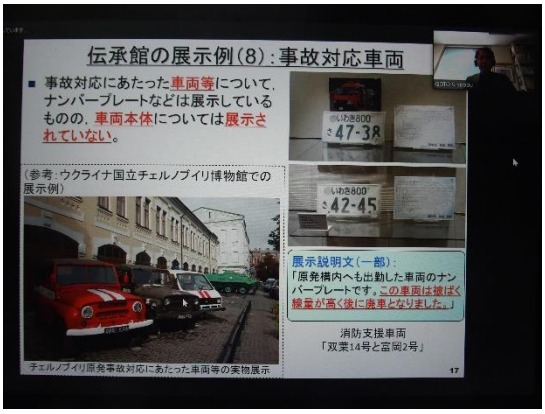
展示資料の選定は非公開で行われ、朝日新聞などが議事録の開示請求をしたが、多くの部分が黒塗りにされていた。開館 1 年前に河北新報が取り上げてくれ、いくつかの指摘をした。復興の強調が目立ち、福島県が原発を推進していたことや、スピーディーの教訓がなかった。復興を語るにしても、教訓を礎にして、過去の反省の上に成り立つものである。





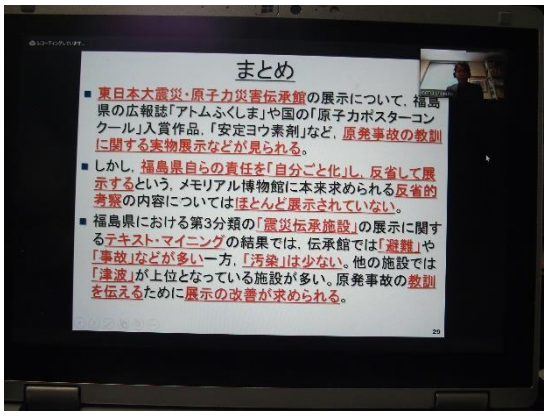


オープン後、10 月に訪問した後、河北新報がまた取り上げてくれた。県の担当者は震災を来館者が「自分ごと化」して欲しいというが、福島県が「自分ごと化」できていないのではないか。「関連死」への言及はあったが、数字だけで具体的な状況が見えない。ウクライナの博物館には、関連死した人の記事や写真が展示されていた。また、事故対応にあたった車両の実物展示もあった。甲状腺がんの調査結果についても言及はなかった。29 人の語り部については、ずいぶん批判もされた。自分は 2 人の話を聞いたが、天災として語られ、人災としての側面が語られなかったことは気になった。



まだ分析途中だが、伝承館の説明文から抽出した24,000語のテキストマイニングからは、「避難」が一番多く使われていて、「事故」「原発事故」等の否定語が上位に入り、「復興」も多く使われている一方で、「汚染」

が上位 150 語の中に入っていなかったとのことだった。「汚染」は福島の復興を語る上でマイナスなのだろうと推察されていた。『放射線副読本』で「汚染」の語が排除され、「汚染の除染」となっている。



参加者とのディスカッションを行ったが、河野さんから「チェルノブイリは世界にとっての課題であることがわかる展示だったが、伝承館は福島の話だと囲い込んでいる」、団さんから「チェルノブイリには、世界中から贈られたが、放射線量が高すぎてすぐに使えなくなったというさまざまな重機の展示に、人が扱え切れないものが実感された。モノが持っている力がある」、藍原さんから「国や県の姿勢は見えているので、福島県民のボトムアップでやるべきことがあると思う。ここに出てこない重要なもの、たとえば、1 本道を隔てると帰還困難区域で、中間貯蔵施設がある。館の中より館の外の方が多くを語る。伝承館の中には、県民から集めた貴重な資料がたくさんあり、あのまま閉じ込められてしまうのではないか。県民が家から集めて寄付したものが、国のレギュレーションからはずれたことによって、お蔵入りされ、第二の石棺、記憶の石棺になってしまうのではないかと思い、ジャーナリストとしてウォッチしている。また、謝り方を知らないのだと思っている。東電の廃炉記念館の最初のビデオで、真っ暗になって、誠に申し訳ありませんと言うが、謝罪って何だろう、責任て何だろうと深く考えさせられた。一人一人が見たうえで、県民として提案していく必要があるのではないかと思う」という感想が挙げられた。

後藤さんからは、白河で、来年、市民のボトムアップで、伝承館で実物展示に到らずお蔵入りしている「原子力　明るい未来のエネルギー」の看板の展示を企画していること、いわきの古滝屋で水俣の考証館に倣った博物館をオープンさせる準備がなされているという情報提供があった。古滝屋は、一度宿泊したことがあり、部屋に置かれていた手作り風の冊子に感銘を受けたことがある。オープンしたら、真っ先に訪れたいと思った。また、後藤さんご自身でも、原発推進の教育広報で消されてきたものを展示することを考えているとのことだった。

後藤さんの姿勢には感じるものが多かったようで、参加者アンケートには、さまざまな声が寄せられた。

・福島の伝承施設をチェルノブイリのような物に語らせる施設、悲惨さを伝えていく施設にしていく必要があると感じた。
・後藤先生が信念をもって丁寧に調べられた検証のお話をお聞きすることができ、大変勉強になった。
・教訓を継承するための施設と思っていたが、疑問の残る点が多くあることをよく知ることができた。

・自分がどんな立ち位置で物事を見ていくのかを考えさせられた。
・原発の課題が山積みであることを再認識できた。私自身もおかしいと感じる事は、自身で発信できる人間になりたいと後藤先生のお話から感じました。ありがとうございました。
・時が経ち、復興についてのマスコミ報道も少なくなり、今、いかに福島について考えていけばよいのかを迷走することがあります。

2013 年に偶然、後藤先生の論文「こころのケアとしての減思力の防止、『放射線と被ばくの問題を考えるための副読本』をつくって」に出会いました。それは、国が国民の思考をコントロールしているということについて、丁寧に検証されているものでした。とても衝撃を受けました。被ばくされた方々が、正しいことを知らされず、間違った捉え方にも気が付かず、今後健康被害に遭うことは十分考えられます。

今回のお話も、その後ずっとこの検証を続け、本来あるべき伝承、情報公開がなされていないことを後藤先生は伝えられていました。チェルノブイリの博物館では、原発で自死された遺族の方の写真がありました。水俣の語り部の実名の公表についても、今回の伝承館との違いがあります。

市民の力で、展示がよりよいものになっていくことも教えていただき、こうしてきちんと詳細にわたってどうあるべきかを示され、情報発信されていることは意義のあることだと思いました。今後も、学生の皆さんと取り組みを続けていかれることには、若い世代にこのことを引き継いでおられるという重要な役割も果たしておられます。社会の大きな力との闘いもあり葛藤されていると思いますが、是非またお聞きしたいと思っています。貴重なお話と資料を本当に有難うございました。
・市民の力を感じることができたし、あきらめてはいけないこと、継続の大切さを感じた。
・貴重なお話を聴かせていただき、ありがとうございました。原発に対して、自分も声を上げて行動していこうと思います。
・施設は記録や事実の報告であって、教訓にするための内容ではないと感じました。教訓とは同じことを繰り返さないため今後どうすべきなのか具体的な計画や行動として役立つものにならないといけない。実際全国に原発はたくさんあり、安定ヨウ素剤などどのように利用すべきか不明で、備える知識になっていないことに不安を感じた。津波からは逃げることしかできないが、原発は人々の意思で稼働させない、廃炉にすることなど未然に防ぐことができる。天災のように抗えないものではなく、抗えることができるのにあたかも抗えないように現状（日本の原発稼働）を受け入れることに違和感しかない。

原爆ドームのように悲惨な展示があっても、世界の核保有について強くいえない日本においては、恩恵のある原発について悪者にできないのは当たり前かもしれないが、それを取り上げない（言えない？）マスコミ、だから知らない日本の

市民が、あまりにも国の都合でコントロールされていることに情けなく感じました。批判的に見るという視点がどういうことか、弱者の視点に立って代弁することの重要性を実感しました。

12 月 6 日(日) フクシマとグローバルヒバクシャをつなぐ 藍原寛子さん

フリージャーナリスト藍原寛子さんとは、2014 年に水俣でご一緒して以来、毎年福島に訪れ、あるいは立命館にお招きし、貴重な情報を頂くとともに、多くを学ばせてもらっている。後藤康夫・後藤宣代（2020）『21 世紀の新しい社会運動とフクシマ -立ち上がった人々の潜勢力』（八朔社）という本が出た。社会人大学院生たちの原稿をまとめたというもので、エンパワーされる良い本だった。その中に、藍原さんは、「グローバルヒバクシャとフクシマをつなぐ ―その終わらない旅，そして運動」という素晴らしい 1 章を書いていて、今回はその話をしてもらいたいとお招きした。

グローバルヒバクシャ

グローバルヒバクシャとは、日本平和学会の分科会「グローバルヒバクシャ」が提唱したもので、「広島・長崎の原爆被害と共に、核開発が推進されてきた結果、被害者が世界で生み出され、甚大な環境汚染が地球規模で引き起こされてきた現実を明確に可視化すべく、作り上げた新たな概念装置である。グローバルヒバクシャは、各地の差異に留意しながらも、地域の特殊問題としてのみとらえるのではなく、広島・長崎を含め様々な核被害の問題を横断的にとらえ、核被害者を結びつけていきたいという問題意識を投影した言葉でもある」（日本平和学会 HP）。

放射能は見えないものだが、測定、体験、概念、知識などを使って、人々は何とかして見ようとしてきた。見えないものを見ようとしてきた体験は、過去にもあった。たとえば、米ハンフォード、広島、長崎である。その一方で、見えなくされているものの仕組みがあることもわかった。基準値を作り線引きすることで、人々の体験が変えられていく。被害の実態も、線引きされることで生じるものがある。何かに置き換えたり、取り戻すことができない被害がある。時間空間を越えた共通の教訓を知りたいと、世界各地を取材している。グローバルヒバクシャは、核被害による被害の体験をどのように認識しているのか。時間や空間を超えた共通の体験と、そこから得た教訓はあるのか。それは何か。

原発とともに成長して

1967 年、福島市で生まれた。福島原発 1 号機が着工した年だった。その歴史を体感

しながら成長したのかもしれない。中学生の時、初めて原発の存在を知った。当時、親に頼んで福島民報、福島民友と朝日新聞の３紙を取ってもらって、読み比べていた。朝日新聞には「木村県政汚職事件」が載ったが、地元の２紙には載らなかった。印象に残っている。

高校の時、バトミントンの試合で富岡町の体育館に行き、その立派さに驚いていると、友達がコソコソと耳打ちしてくれた。浜通り地区が原発の恩恵を受けていることを知った。大学のゼミで初めて原発を視察し、原発作業員のことを知った。

新聞記者になり、記者向けの視察があった。最初、女性の先輩が行くはずだったが、「将来、子どもを産みたいから、私は行きません」と言った。大きな衝撃を受けたが、「じゃあ、お前行け」と言われて、もやもやしたものを抱えて行った。避難した人、しなかった人のことを考える時に思い出す。地元紙の記者として、原発サイトを初めて取材した時のこと。朝日新聞だけが、自前のガイガーカウンターを持っていた。他の記者は東電のものを借りたが、中に入ると朝日新聞社のだけがピーピーと鳴った。東電のはゼロのままで変化なし。問題意識が拡がった。

いわき支社にも勤務していたが、マイナー事故多発（老朽化の証左）と安全神話、R-DAN ネットワーク（市民による放射能測定）、たんぽぽ舎（チェルノブイリ以後の市民による放射能測定や原発反対運動を行っている）、また、いわきにはチェルノブイリの子どもたちの保養を受け入れた家庭があって、取材していた。佐藤栄佐久元知事と東電の裁判も取材していた。

福島からフクシマへ　フランス

3.11 後、福島 FUKUSHIMA、フクシマになり、海外の取材に行くようになった。政府の話ではなく、各地の市民の動きを知りたいという切実な気持ちが市民のなかに産まれた。最初にフランスに行った。フランスはチェルノブイリの風下で、影響を受けたところである。2012 年 3 月に、佐藤栄佐久さんが行くというので、部分的に合流して、市民の測定を見に行った。

原発大国フランスの南東部、小都市ヴァランスにある「クリラッド」（CRIIRAD）と、西部ノルマンディ地方カーンにある「アクロ」（ACRO）という 2 つの放射線測定 NGO を訪問した。1986 年のチェルノブイリ事故後から活動を続けていた。

クリラッドは、1997 年、ノルマンディ地方のラ・アーグ再処理施設の排水パイプが高濃度の放射能で汚染されていた問題を NGO グリーンピースと共に調査して解明した。フランス国内に残る 200 カ所ものウラン鉱山閉山後に残された多くの放射性岩石の問題も指摘している。

アクローは、年 2 回、ノルマンディ地方の 600 キロにわたる沿岸の 12 測定地点で沿岸の魚介類や海藻、海の泥などを測定している。河川 10 地点の水質環境調査を定

期的に実施し、スキーリゾートの駐車場で汚染岩石が残されて高い放射線を発していたケースや、製材工場の裏のウラン鉱山跡で高い放射能汚染が放置されていたケースも、独自調査で発見した。そこから除染につながった。

測定に関わる人の中には、友人の息子がチェルノブイリ事故後病気になったことがきっかけで参加した人もいた。「放射能雲は国境を超えてまで来ない」と言ったフランス政府の嘘があった。こういうことは隠されるため、測定しようということになった。測定の活動から、フランスの旧植民地ニジェールのウラン鉱山で、労働者や周辺住民が被ばくした問題も世界に発信した。自分たちがチェルノブイリの被害者であるという認識と、自国フランスが持つ加害性への直面まで視点が拡がっている。自己から 25 年経っても測定を続けていた。

マーシャル諸島共和国

ミクロネシアのマーシャル諸島共和国は日本の南東、約 4600 キロの太平洋の環礁の国である。2014 年 3 月 1 日のビキニデイを取材した。首都マジュロで、ビキニ事件から 60 年のメモリアル式典があった。60 年後の福島はどうなっているのか。

政府の元外務大臣、トニー・デブルム（2017 年死去）は、クワジェリン環礁で核実験のフォールアウト（放射線の降下物）の被害に遭った。その後避難し、故郷喪失、健康被害を受けた。インタビューして、福島へのメッセージを聞くと、「（加害者は）嘘をつき（LIE）、否定し（DENY），機密扱い（CLASSIFIED）にする。フクシマでも同じことが起きるだろう」と回答した。

デブルムさんは、2014 年、核保有国に核軍縮の義務の履行を求めて ICJ（国際司法裁判所）に提訴した。この提訴には、日本を含め世界の弁護士たちが知恵を出し合って協力した。2016 年、大国はこぞって審議拒否し、「世界唯一の被ばく国」日本も、核武装国のアメリカ、ロシア、中国、フランス、イギリス、インドなどと並び、審議しない案に賛成した。

アバッカ・アンジャインさんはロンゲラップ環礁選出の元上院議員で、福島に招いた。福島県立美術館には、「ラッキードラゴン」というビキニを象徴する版画がある。「こうした被害は最後にしなければなりませんと書かなければなりませんね」と言ってくれた。ロンゲラップ島は、第五福竜丸と共に死の灰を浴びた。父ジェトン・アンジャイン上院議員、父の兄弟にあたるネルソンとジョンアンジャインも来日して被ばく問題を訴え、日本の原水爆反対運動にも大きな影響を与えた。

イギリス・ウエールズ

発事故後、日本は海外に原発を売ろうと進出した。「福島原発事故を経験したからこそ安全第一でやります」と言う。「これはいかん」と、2018 年 2 月、福島の農民 2 人が立ち上がった。米とあんぽ柿の生産者であり、福島県農民連会長の根本敬（さとし）さんと、帰還困難区域の浪江町津島地区で畜産を営んでいた浪江町議の馬場績（いさお）さんである。

日立製作所の 100%子会社、ホライズン・ニュークリアー・パワー社がイギリス・ウェールズのアングルシー島に新原子炉ウィルファ B を建設しようとしていた。

2 人は、現地に行って農家の人に会いたいと、FOE･JAPAN から情報をもらい、原発建設予定地で酪農・畜産を営むリチャード・ジョーンズと妻グゥエンダを訪ねた。「農地は先祖の代から、それ以上、何百年も前からここにある。農家は農地によって生かされている。土地は売り買いの道具ではない」「他の農家はビジネスマンのように土地を売った。日立の本社の人は、札束で土地を買うだけ、ここに来たこともない。ちゃんと来て、私たちと話すべきだ」と主張していた。数々の嫌がらせや誹謗中傷を受けても、農地というものに対する説明責任と自信があった。

2 人は抵抗の印として、日立の原発計画地である自分の土地に大きな風車を建てていた。馬場さんは、「今も自宅が浪江町の帰還困難区域にある。自宅に帰るのに行政の許可が必要で、防護服を着て入る」「農地や牧草地はこれほど荒れている。長期的に避難者を生み、帰れるかどうか見通しも立たない悲惨な事故を起こすのが原発。この地に原発を建設してはならない」と語り、根本さんも、避難できずに牛舎で餓死した牛たちの写真や「放射能ピラミッド」と地元では呼ばれている除染廃棄物の巨大な黒いコンテナバッグの山の写真を見せ、「アングルシーは美しい地域。こんな汚染物をまき散らし、人々を分断する原発はいらない」と励ました。

「フクシマでは、東電福島第二原発の廃炉に向けて住民が議会を動かし、県内 59 の全市町村議会が廃炉を求める意見書や決議を出した。そしてついに東電が廃炉を表明した。私たちには力がある。草の根民主主義の力を信じ、共に闘おう」「百姓は百のこと、なんでもできるから百姓なんだ。エネルギーだって自分たちで作り出せる。私も原発事故後、自宅に太陽熱温水器と薪ボイラーを設置した。農民連も県内各地域

で発電所を作り、年間約 3 億円の売電収入を得ている」と言い、リチャードさんと「これからも脱原発のために連帯していこう」と固い握手を交わした。

この訪問後、日立製作所とホライズン社の原発増設事業は白紙撤回された。

リチャードさん、グゥエンダさん

福島の2人の農民

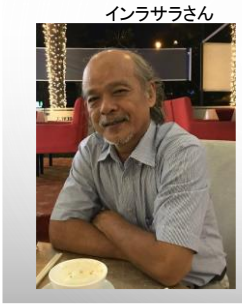
ベトナム

ベトナムでも日本企業資本の原発が計画された。少数民族チャム人の土地ニントゥアンである。2011 年の福島原発事故が起きた際、この建設予定地にたまたま福島の人が滞在していたので、オンタイムで情報が入り、市民の反原発運動が立ち上がった。反対運動の先頭に立ったのが詩人でジャーナリストのインラサラさんは、インターネットなどで積極的に内外に発信。命を狙われたことも何度かあり、検閲が厳しくて連絡をとるのも気をつけるようにと言われた。「100 万ドルやるから活動をやめろ」「原稿を高く買う」と言われるなど、会合での無視などの手法は日本の「原子力ムラ」が使う手段と酷似している。

インサラさんは、チェルノブイリ、ニントゥアン、フクシマを合わせた造語をタイトルにした小説『チェルノフニット』を発表した。3.11 フクシマが原発の危険性をチャムの人々に身近な危険として知らせてくれたことが、原発反対に向けて動く大きな動機になったという。彼の発信によって、イギリスやフランス、日本などの海外メディアや、研究者、支援の NGO など賛同者が増え、ベトナムでは極めて珍しい署名活動も展開され、その数は 600 人を超えた。原発建設計画は 2014 年 1 月に白紙撤回された。

原発計画はなくなったが、予定地は整地され、電線もあって使える状態。ベトナム政府がキャンセル料を求められている可能性もあり、建設予定地が原発の代替として核のゴミ捨て場などに再利用され、別の国の企業が進出するなどということにならないよう、今後も厳しく監視していく必要があるという。「原発予定地でのベトナム人の歴史と比べ、チャム人の歴史ははるかに長い。ニントゥアン省にはベトナムの半分以上のチャム人が暮らし、100 カ所以上の重要な史跡やお寺がある。もしも原発事故が起きたら、自分たちにとって大事なものが失われてしまう。そう考えたら、何も怖

くなくなった。とにかく必死で反対した」と、インラサラの闘いはまだ終わってはいない。


インラサラさん

原発建設予定地にある漁港と住宅地

アメリカ・スリーマイル島

アメリカ東海岸ペンシルバニア州スリーマイル島には3度行った。ここも軍と関係があり、福島と同じく、もとは軍の飛行場があったところである。島なので出入りを管理できる。40年前の1979年3月28日、スリーマイル島の原発が事故を起こした。運転開始からわずか4カ月弱の2号機が炉心溶融を伴う事故を起こし、その後保管状態になっている。事故から約5か月後、除染と燃料取り出しが始まったが、2号機の廃炉作業は完全完了していない。1号機の運転と作業員・住民の被ばくに反対する運動が、地元の市民団体「スリーマイル・アイランド・アラート（TMIアラート）」により、現在も続けられている。

市民から見た事故後の状況は、全体像を見るとあまりにも3.11フクシマに酷似している。それは、①元軍事施設・小さな空港　②国策も絡んだ民間の原発事業者が起こした事故　③放射能の拡散情報が迅速に地元住民に伝えられず、避難が遅れた　④事故後も十分な健康調査と補償が行われず、低線量被ばくや内部被ばくがほとんど無視された　⑤森林除染は技術開発すらされていない。

原発建設時から反対運動と監視活動を続けてきたスリーマイル・アイランド・アラート（TMIA）のメアリー・スタモス・オズボーンさんは、事故直後の初期段階から、被ばく・健康問題、環境汚染を告発し、熱心に活動している。かつては世界各地で被害の状況を伝えていた。事故当日、住民には何も知らされなかったが、メディアが何かの取材で集まっているとの情報を得た。子どもたちは普段と変わらず学校に向かったが、学校では風船を飛ばすイベントがあり、事故を直観したメアリーさんら地域の人たちは、娘に冬のコートを着せ、フードをかぶるように言った。

原子炉のメルトダウンが明らかになったのは数日後で、メアリーさん一家は数日間避難し、4月6日に帰還した。原発事故の映画「チャイナシンドローム」封切りと重なって、世界中の大問題になった。メアリーさんは、事故直後「金属味の空気」を感じ、家の中の植物が短期間で異常なほどに成長した。科学者たちは、「放射能の影響ではない。因果関係は証明されない」と言うが、地元の住民は「DNAへの影響が起きている前触れなら危険」と、採取した植物を持参し、多くの専門家に直接質問し、議論している。「感情的な人だ」「非科学

的だ」という批判や心無いうわさがある一方で、メアリーさんに触発されて、奇形の植物を探し出す人も増えている。

住民からの健康調査実施の訴えにより、公衆衛生基金で TMI-PRRC スリーマイル原発健康問題委員会が発足し、市民の手で健康調査や聞き取りが開始した。専門家の中にも、ネバダ州やユタ州の核実験場での健康被害やスリーマイル原発事故後の健康被害を多角的に分析する必要があると提言する人が現れ、市民や研究者のネットワークで様々な形での被害調査が始まった。

アメリカ・スリーマイル事故から 10 年後、メアリーさんは、「普通の母親や父親が、原子力に関する”専門家”になる必要はないと気が付きました。本当に必要なのは『人間として持たなければならない当たり前の常識』だけであり、まさしくそれは原子力を推進している人たちに欠けていることです」と言った。メアリーさんらの活動により、ニューヨークのスミソニアン博物館で数々の情報、資料、奇形化した植物サンプルをスリーマイル原発事故の記録として保存することが決定された。40 年の式典に合わせ、多くの市民が訪れた。

後年になって、隣家のフードをかぶらなかった女の子は白血病になり、メアリーさんは何も言わなかったことを後悔している。

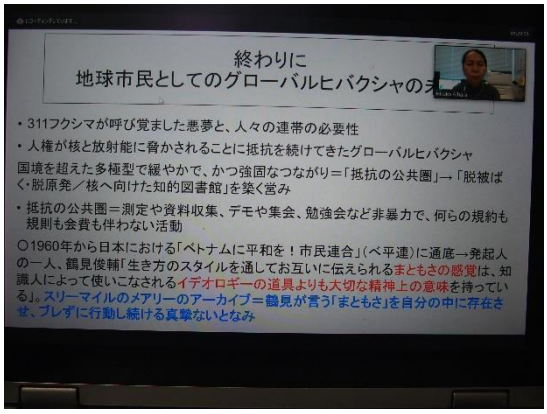
おわりに

フクシマが呼び覚ました悪夢と人権が核と放射能に脅かされることに抵抗を続けてきたグローバルヒバクシャ。測定や資料収集、デモや集会、勉強会など、非暴力で、何らの規約も規則も会費も伴わない活動、国境を超えた多極型で緩やかで、かつ強固なつながりが「抵抗の公共圏」を形成し、「脱被ばく・脱原発／核へ向けた知的図書館」を築く営みが始まっている。

1960 年から「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）の発起人の一人、鶴見俊輔さんは、「生き方のスタイルを通してお互いに伝えられるまともさの感覚は、知識人によって使いこなされるイデオロギーの道具よりも大切な精神上の意味を持っている」と語った。スリーマイルのメアリーさんのアーカイブは、この「まともさ」を自分の中に存在させ、ブレずに行動し続ける真摯な営みである。

こういった一人一人の強烈な体験は公的ミュージアムに残らないから、それは自分の仕事だなと思う。最後は自分に返って帰ってくる。パズルの 1 ピースでも、集まれば力になっていく。自分自身への未来への

重い問いでもある。



藍原さんのお話も胸に響くものが多く、参加者アンケートにはたくさんの感想が寄せられた。

・とても貴重なお話でした。世界と福島がつながり、市民の手で未来を作っていける希望を持つことができました。
・とても丁寧なお話をありがとうございます。原発について、自分も声を上げて行動していこうと思います。
・お金や発展より大切なものがあり、誰にとっても故郷の家や景色が失われてることは辛いが失ってからわかるのは辛い。失わずにすむような道を世界中で考えたいと思いました。
・体系的な話を聞く機会はなかなかないが、核被害者というくくりはその通りだと思う。
・今回の藍原さんのお話を聞かせていただき、一市民の抵抗が人を、社会を変えることがあるんだということに希望に持ち、自分の活動を続けていきたいと思います。
・自分達で行動してもいいのだと勇気づけられました。
・フクシマで起こったことに対して、どう抵抗したらよいのか、実際のグローバルな取り組みのお話は、大変説得力がありました。藍原さんから教えていただいた視点に勇気をいただきました。
・世界の原発に関する動きを知ることで、日本全体の思考の幼さのようなものが露呈し、何ともいえない気持ちになった。自分はどんな考えを示していくのか、考え続けなければならないと感じた。
・グローバルヒバクシャという事柄について学ぶことが出来ました。日本が事故後も海外に原発を建設しようとしていた事実にショックを受けました。ですが、世界中に原発について考え行動している方がいるということが分かり、もしかしたら原発がない時代も来るのではないかと思えました。
・世界には様々な原発事故があり、そこから学んだ知恵がたくさんあるにもかかわらず、日本はなぜそれを教訓にできなかったのか。お金や発展より大切なものがあり、誰にとっても故郷の家や景色が失われてることは辛いが失ってからわかるのは辛い。失わずにすむような道を世界中で考えたいと思いました。

・勇気をもらいました。毎回福島の震災プロジェクトに参加させていただき、福島の悲惨さや理不尽さを現地の方々から伝え聞き、現地を見せて頂く度に、どう考えたらよいのだろう、私たちに何かできるのだろうかと消極的な思いで帰っていました。今日のお話にあった、福島のことを伝えに行った根本さんや馬場さん、たった一人で活動を始めたインラサムさん、一人の何も専門性を持たない主婦が被ばく・健康問題等についての活動を展開され、それが、世界に広がりました。一市民の草の根の民主主義の力に感動しました。「抵抗の公共圏」についても、考えていこうと思いました。何ができるかはわかりませんが、今、私はNPO法人として、子育て支援を行っています。行政のやり方に涙しながら抗議することもあります。自分が一生懸命語っても変わらないこともあります。今回の藍原さんのお話を聞かせていただき、一市民の抵抗が人を、社会を変えることがあるんだということに希望に持ち、自分の活動を続けていきたいと思います。また、応援してくれる人や賛同者を増やすために、人とのつながりを大切にして、丁寧に温かく関わっていきたいと思います。「フクシマ」が世界中の人たちの問題としてとらえられることを願って、何ができるかわかりませんが、自分が今できることを次世代のためにやっていきたいと思います。力をいただき、本当に有り難うございました。

今年はリモート開催となり、現地に行くことができなかったが、Zoom を使ってより多くの方々のお話を聴くことができた。同時に、これまで参加できなかった人たちも参加可能になり、素晴らしいプログラムを多くの人と共有できてとても嬉しかった。

福島の状況は相変わらず、いや、ますます厳しい。そんななかで、声を上げ、つながり、できることをコツコツ続けている人々には敬意を感じるばかりである。藍原さんが言うところの、グローバルヒバクシャの「抵抗の公共圏」にささやかに連なることができたら、そして、一人でも多くの人に福島のことを知り、関心を持ってもらえたらと願う。

来年は、現地に行って、子どもたちとクリスマスカレンダーを作ったり、テーブルを囲んでみんなでわいわいおしゃべりしながら食事したりすることができたらいいなと思っている。最終年をどのような形で着地させるのか、プロジェクト終了後、何をどんなふうにつなげていけるのか考えどころだ。今年のリモートには、たくさんのヒントが隠されているはずだ。

つづく

精神科医の思うこと㉘

思い出の予備校の先生たち

松村　奈奈子

テレビで塾や予備校のＣＭが流れ始めて、受験もたけなわ。先週、中学生の診察では、早くも私立高校合格の報告を受け「おめでとうー」と子供たちと盛り上がったばかりです。

そんな私、高校時代に映画ばっかりみて勉強をさぼったツケで、大学受験では苦戦し、有名予備校や小さな予備校など、けっこう長く予備校に通いました。小学校、中学校、高校は地元の公立学校で、もちろん記憶に残る先生にも会いましたが、私にとって一番心に残っている先生は、予備校で出会ったキョーレツな講師陣でした。もう４０年程前の事ですが、私の人生に大きく影響し、今でも鮮明に記憶に残っています。なので、今回のテーマは「思い出の予備校の先生たち」

有名な女性講師は、美人で化粧もバッチリ、チョークを持つ指には赤いマニキュアが印象的でした。浪人生の間では「子どもが３人いるが全て父親が違う」と噂話がでてました。授業もいきなり「朝、家を出ようとしたら家のカギがなくて・・」と朝の自分のトラブルを話しだします。「で、２歳の子が誤ってゴミ箱に入れたと推理して、ごみ箱で見つかったのよー」と何でもない家での話を１０分以上します。でも、これが魅力的。「私生活は完璧ではない自分だけど、授業は上手なのよー」というメッセージが伝わります。人間って完璧な人などいるわけがなくて、得意・不得意があっていい！という教育は、当時の学校教育からは私には得られなかったメッセージでした。今までの学校の先生は、欠点を隠すところがツマラナかったのです。

有名な英語講師は、授業ではテキストを毎回５行ぐらいしか進めません。「元全共闘なんだよ」「自分は社会性がないから」「企業などには務められないし」など自分を語ったり、「先日、美術館でフランスの画家クールベの波の絵を見た」「ただの波の絵だが、

魅了されてしまった」「君たちも行ってみたらいい」と熱く語ります。今まで、会った事のない大人の話を、私を含めて多くの浪人生が熱心に聞き入ってしまうのです。

新人の英語の講師は、自己紹介で私と同じ高校を卒業していると話し、より身近に感じた先生でした。３年浪人して京都大学に進学するまでの苦労話がおもしろい。「３年目の浪人は宅浪で、家に籠って寝ていたら、ベッドの柵が歪んで見えたんだよー、こりゃ３年で浪人やめんとダメになると感じたわ」となんとも不思議感覚が魅力的。夏休み明けの講義では、「夏休みは一人で歩いて能登半島を周った。Ｔシャツもパンツも２枚あればいいんだよ。リュックの背にくくって歩けば、すぐ乾く」と、旅の魅力を語ります。青い海を背景に、先生がもくもくと海沿いの道を一人で歩く姿は、容易に想像できました。「旅の間は、一緒に住んでいる彼女に、毎日電話をするのが日課」と話し、まだ事実婚が珍しい時代に、そういう生き方もあるんだーと勉強になりました。

でも、１番印象に残っている講師、それは小さい予備校の国語の先生でした。医学部には小論文の試験があるところが多く、小論文の授業でした。その先生は大阪大学文学部の博士課程の大学院生で、アルバイトで講義にきていると話します。これまた「先週、森田芳光監督の映画みて面白かった。僕の授業を聞かずに映画を見に行った方が人生の勉強になるよ」と講義するユニークな先生でした。小論文の練習もテーマは自由で、提出した小論文にいつも丁寧にコメントをつけてくれました。当時の私は読書家で文章を書くのが好きで、作家や脚本家に憧れていました。そういうやり取りの中、私が勝手に『幸福感』というテーマで書いた文章への先生からの返事が１番の宝物です。

それは「あなたの文についてコメントを書く事は熱い。教師として書くならカンタンだ。もっと他の人にわかるように書きなさい、と。しかし感覚的に私はそう言いたくない。あなた自身にもわかっていない自分の中の何かを、そう簡単に表現できるものか。これからすべきことは、その何かをいかにして表現してゆくかとゆう事だ。授業や勉強のことなど何も恥じる必要はない。ただ少なくともあなたの中にある何かからは逃げないで欲しい。≪途中省略≫今の一般的社会的ルールに自分を無理にあてはめる必要はない、ということ。ただ、そうして生きてゆくためには、少なくとも他の人から壊されない自分自身のルールを作る必要がある」という長文のコメントでした。

ちょっと周囲に違和感をもち「自分はこれでいいのか？」とちょっぴり悩んだ１０代の私に、初めて自信を与えてくれた大人でした。今読み直すと、先生も私も、若くて熱いなー、なんて感じのやりとりですが、私の人生を救ってくれた様にも思います。そして、先生の添削してくれた原稿用紙は、４０年たった今もすべて大事にとってあります。私のちょっぴり自慢話であり、大切な宝物です。今回、マガジンの原稿を書くので、久しぶりに添削してくれた原稿を出して、先生の名前を検索したら、先生はそのあと国立大学の教授をされ、本もいくつか書かれていました。スゴイ先生だったのかー。ふと、

アマゾンでポチって、先生に再び触れたくなりました。

今では予備校は少数の有名講師が直接講義ではなく、配信のかたちで活躍する時代です。直接あって、息遣いを感じる事も減ったと聞きます。

予備校では、人生の多様性に触れ、生き方に自信をもつ事の大切さを教えてくれた様に思います。それが「なぜ大学に行くのか」「なぜ勉強するのか」につながり、受験に向かわせるエネルギーを与えるのが、予備校講師の仕事だったのかなぁなんて思っています。受験テクニックの伝授は、小さなことなのかもしれません。

しかし、全ての教育者が同じことをできるわけではなく、一般の公立学校の先生たちは、標準的な授業をしなくてはならないので、予備校講師の様に自由に授業ができないのも十分理解しています。さらに、大学を目指すモチベーションの高い学生相手に話す予備校講師は、大人として楽しいだろうなって思います。勉強嫌いの子供たちには、難しい事です。

私も数年間、病院付属の看護学校の講師をした事があります。あこがれの予備校講師をまねて、授業の最初の１０分は、自分の経験や思った事を話しながら、人生を楽しみながら医療の仕事を好きになってほしいなぁという思いを込めて授業しました。学期末テストには必ず大きくフリースペースをとって感想を書いてもらってました。その時、多くの生徒が授業の前の雑談が良かったと書いてくれて、嬉しかったのを覚えています。

大人がどう生きているのかを見せるのは、大切なんだと思います。ほんと、予備校に行けてよかったし、親には感謝しております。

馬渡の眼　10

居場所の大人にできること
－子ども食堂篇－

馬渡　徳子

我が子ども食堂の運営スタッフには、自宅を開放し30年以上こども文庫をしてきた方がおられます。その方がセレクトされた図書の内、中学生以上の子どもたちが貸与する機会の多い本が、

①稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる生き物をめぐる個性の秘密』ちくまプリマー新書、②宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』新潮社です。

昨年10月のこと。
Aさんが「Yさんにお手紙を書きたいのだけれど、どうやって居場所を調べたらいい?」と私に尋ねた。私は、「Yさんって、どこの方?」と聞き返すと、「あの元総理大臣を打った人」と答えた。私は、まだ三か月も経っていないのに、直ぐには気が付かなかった。
私の傍にいた子ども文庫をしてきた方が、「うん。居場所は、彼の担当弁護士事務所を調べたら、わかると思うよ。ところで、どんなことから手紙を書こうと思ったの?」と尋ねた。すると、「あなたがしたことは、決して人として赦される事ではない。けれど、まわりの大人が誰も受け止めてくれなくて、社会に絶望して怒りを向けてしまった。あなたのお兄さんは、その怒りを自分に向けてしまい死を選んだ。どんなにか悔しかったかと思う。でもね、今国会では、あなたのような立場の人たちを救う法律をつくろうとしています。だから、罪を償ったら、うちの子ども食堂に来てください。ここの大人たちは、あなたの話をちゃんと聴いてくれますよ、と書きたい。」とのことでした。

その動機となったのが、①と②の本を読んだことだというのです。①は「不登校だった頃の自分に、未来は大丈夫だよと教えてあげたい」②の「感情のペットボトル」のところが、強く印象に残ったようで、「自分のいろんな気持ちをため込まないで、信頼できるまわりの人に少しずつ出していきたい」と思ったそうです。

６年経って、子どもたちは、それぞれが、顔なじみの運営スタッフの大人や、大学生ボランティアにいろんな思いを表出します。
部屋も大小４つあり、出入りは自由で、**「誰もがいたいように過ごせる場所」**を、子どもたち自身が選ぶことができます。
この空間づくりの提案をされたのが、自宅での子ども文庫をしてきた方でした。

そう、我が地域には、宝物がいっぱいで、面白い!!

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

肺炎から学んだこと

戦前に活動し、戦後に活動再開した東京の日本画

高熱でフラフラになり自転車でおくられる小学３年の私

団体・Ｓ社の先輩から作品をまた出してみないかと誘われた父親、父は徴兵されたが内地（神戸）での兵役のおかげか、大きな負傷もせず復員できた。
無事帰って来れたものの極端な物資不足の世の中、家族４人（姉と僕は生まれてなかった）の食べ物を手に入れることが最優先で、日本画の注文なんてあるはずもなく絵描きを続けられるのか不安だらけだったらしい。
１年・２年と過ぎていくうちに、戦後ベビーブームが始まり新生児達の学用品とか若いママ達の化粧品の需要が増え、筆箱・ランドセル・化粧クリームの凝った意匠のフタの塗装などを父の絵ごころを見込んだ知り合いからアルバイトとして受注するようになり、生活が安定しだす。
僕の小学３年の早春、父がＳ社復帰を目指して公募展に応募する300号大作の写生取材に同行した。

いつものリラックスした父とは違う緊張し集中する姿に接し、自分も少々の腹痛や風邪で学校を休むなど「意気地なし！」と叱咤するもう１人のスパルタな自我が心に育っていた。
まだ朝は霞が出て冷える奈良県吉野の山中を父の後をついて歩きまわり、汗をかき普段以上の体力を使った。帰宅し一夜明けたら風邪気味で微熱があったが、「負けるもんか」と登校した。

ところが授業中に黒板が揺れて見え始め、顔色を見た先生に保健室に連れて行かれまもなく自転車の後ろに乗り帰宅させられた。
そこから１学期の残りと２学期をまるまる自宅で寝て過ごす闘病生活に突入した。
高熱が続き、相当危険な状態だったが天運に恵まれ命拾いをしたのでした。
一連の経験から学んだのは願いの為には「コツコツ努力、無理や近道しようと思うな！」でした。

やぶにらみ日記 （529）

東成区の昭和

（71）写生

やぶにらみ日記 （530）

東成区の昭和

（72）写生

やぶにらみ日記 （531）

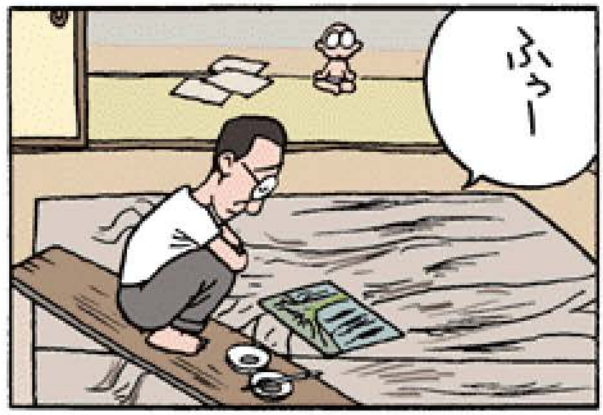
東成区の昭和

（73）写生

やぶにらみ日記 （532）

東成区の昭和

（74）写生



やぶにらみ日記 （533）

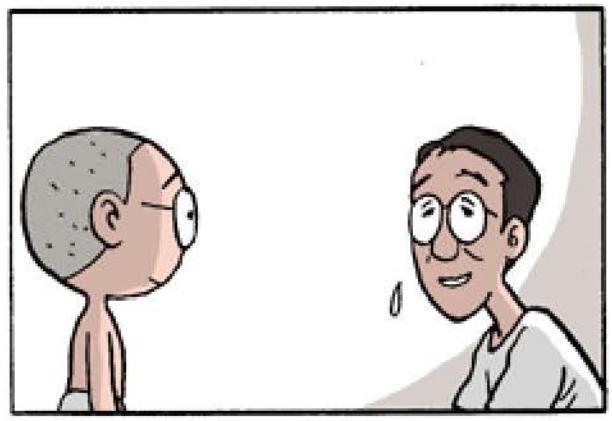
東成区の昭和

（75）写生

やぶにらみ日記 （534）

東成区の昭和

（76）写生



やぶにらみ日記 （535）

東成区の昭和

（77）写生

やぶにらみ日記 （536）

東成区の昭和

（78）写生

やぶにらみ日記 （537）

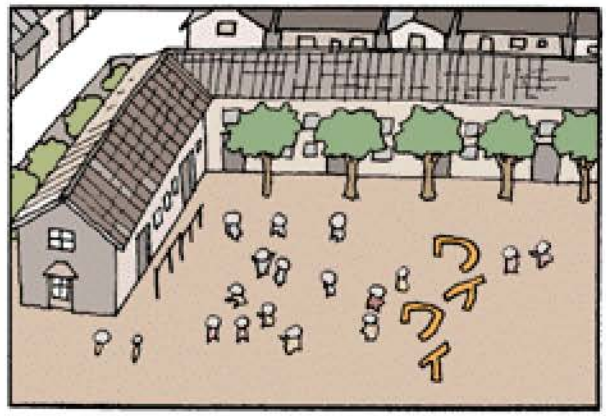
東成区の昭和

（79）写生

やぶにらみ日記 （538）

東成区の昭和

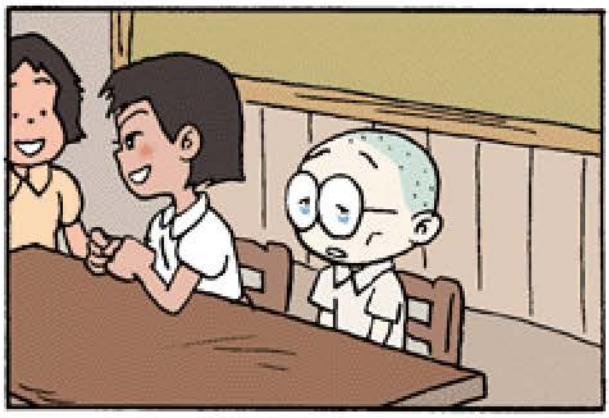
（80）写生



やぶにらみ日記 （539）

東成区の昭和

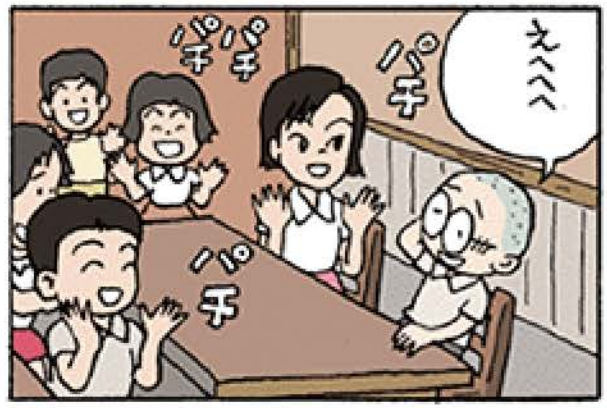
（81）写生



やぶにらみ日記 （540）

東成区の昭和

（82）写生



やぶにらみ日記 (541)

東成区の昭和

(83) 写生

やぶにらみ日記 (542)

東成区の昭和

(84) 写生

心理コーディネーターになるために Vol.10

山下桂永子

☆年度末が繁忙期

年度末の教育相談は忙しい。学校では、先生方が日々の授業をこなして宿題をチェックしながらテストを作り、行事をこなしながら成績をつけて参観や懇談を行っているわけで、それには尊敬しかないわけであるが、毎年 3 月は教育相談にとっても繁忙期である。

年度当初に比べるとケース数は増える一方で減ることはなく、面接、記録、保護者担当とこども担当の打ち合わせ、電話相談、発達検査に所見作成、学校とのケース会議、時には緊急支援対応も入ってくる。

そして他の自治体がどのようにされているのかわからないが、私の勤める某市教育センターの教育相談では、全てのケースについて、年度末で一旦面接を終えることになっている。3 月中旬で定期面談は終了し、そして来年度の面接を継続するかどうかについては、保護者や児童生徒本人にその意向を聞いたうえで、文書を作成し、3 月中旬以降に行われる「終了判定会議」で検討されることになる。

教育相談員の取りまとめをしている心理指導員である私の場合、さらに各種会議の出席と相談員への報告書類作成、他機関の連携窓口や指導主事との打ち合わせなど、マネージメントの業務がある。

年度末の教育相談員は、野球で言えば、マネージャーが試合にスタメンで出場するといった感じだろうか。年度末の心理指導員は、企業で言えば一人の社員が来年度の営業をしながら、面接というサービスをフル回転で実施し、引継ぎと決算の文書を作成して株主総会までするという感じだろうか（伝わらないかもしれない）。

←昨年 3 月のカレンダー。
上旬から中旬は週 4 日勤務の枠に予定が入りきらない。
下旬は、会議と書類作成に追われる日々。

☆終了判定会議の資料作り

終了判定会議とは、年度末に行われる会議で、通所している保護者および児童生徒について、教育センターでの面接が次年度も継続か、終了か、あるいは他機関へのリファーかなどを決めていくものである。

ここ数年、年度末の終了判定会議にかけるケースは、教育センター全体で100ケースを越えるようになったため、一つ一つにあまり時間をかけられなくなってしまった。事前に各相談員が準備した資料を会議出席者に渡し、一読してもらった上で、１ケースにつき概ね5分から10分程度ですすめなければならないが、それでも1回につき２～３時間会議を行っても2週間はかかる。

実際の検討に時間をかけられなくなったといっても、終了判定会議の資料は、今年度の面接経緯の振り返りや今後の支援方針などを決めていくにあたり重要な資料となるので、準備するにも簡単にはいかない。A4 用紙 1 枚に保護者担当と子ども担当それぞれの面接経緯と来年度の引きつぎ、検討事項を全て詰め込まねばならない。

心理士以外にも教員や言語聴覚士など他職種の方が読むので、どんな人にも伝わるように、うっかり心理用語を使って伝わった気になってはいけない。会議の参加者がこれを読めば、その子どもの人となりや課題、家族関係などを理解することができ、イメージ豊かに建設的な議論ができるような内容にすることが理想であり、一言一句、この言葉で相手にこのイメージが伝わるのか、限られた文字数に細心の注意を払っての文書作成になる。

そしてこの作業を、ケースをこなしながら数十人分（昨年度は 30 人あまり）作成しなければならないので、年度末は体も頭の中も大忙しである。 20年近くやっているが、いまだに年明けぐらいになると終了判定資料作成については気が重くなる。時間との闘いであり、自分の面接力および表現力のなさに打ちひしがれながらも、数回から数十回にわたる1年間の面接経緯を端的に、簡潔に伝えるということが至難の業であるということを実感している。

☆終了を判定することの難しさ

面接を終了するか継続するか、そう簡単に結論はでない。もちろん保護者や生徒児童とは十分に話し合うのだが、そこで折り合いがつかないこともあるし、終了判定会議で担当者の意見が分かれることもあるが、結論は出さなくてはいけない。

基本的には、児童生徒及び保護者の希望に沿うように、そして相談員から支援継続の必要性が説明されれば「では継続で」となるのだが、この数年、私の勤める教育センターの相談件数は右肩上がりで増えており、スクールカウンセラーや福祉、医療などの他機関につなぐことに積極的に取り組んでなお、保護者、児童生徒の継続希望にすべては応えられなくなってきている現状がある。

そのため、終了判定会議では、なぜ教育センターでの面接が必要なのか、他機関にはつなげないのか、緊急度や必要性が高いのかどうかなど、大事な確認ではあるが、なんだかケースの子どもやお母さんたちをふるいにかけるような議論で辛いなあと思うことも多い。

「そもそも、必要がなければ、好き好んでこんな山の上の教育センターになんかわざわざ通いたいとは思わないよねえ」と会議を終えて相談員同士でぼやいたりすることもある。そう。センターに通う保護者の方々は、駅からも遠いこんな山の上に、子どもを自転車の後ろに乗せて、急な坂道をこいで、雨の日も風の日も雪の日も月に１～２回決まった曜日、決まった時間に、何回も、時には何年も、通ってきてくださるのだ。

学校や園では相談できなかった事情がある。医療や福祉にも頼れない。教育センターに電話を一本かけることだってハードルが高かったに違いない。ここに来るまでにどんな思いでいたことか。どんな思いで来ているのか。想像すると断れない。というのが正直なところである。

継続的に関わることが少々のおせっかいだったとしても。

ねこ問題の変遷・高齢者とペット

数千年前に家畜化されたのにもかかわらず、野生のネコと私たちが“猫”と言われて思い浮かべる身近なイエネコには遺伝子の違いはほとんどないそうだ。それゆえに「人が猫を家畜化したのではない。猫は自ら人と暮らすことを選んだのだ。」とか、「猫は初めから完璧な存在だったのだ。」と冗談半分で言われたりしている。江戸時代の猫と、令和の猫、日本にいる猫と、アメリカにいる猫、おそらく変わりはほとんどない。でも、「猫の問題は？」と問われると、時代や国によって全然違うのではないかと思う。猫の問題は社会の価値観が作り上げるものだ。社会の価値観その時代によって変わる。つまり猫の問題も、その時代によって問題視される部分が変わる。20 年前は圧倒的にノラ猫の問題がメインだったと思う。そして 10 年ほど前から「多頭飼育崩壊」が社会問題として存在感を出し始めた。当時は、「飼い猫は個人の所有物であり、そこに税金を使うことは特定の個人に利益を与えることになるからダメだ。」という言い回しで多頭飼育崩壊に使用できる行政の助成金などほぼ無かったが、2021 年 3 月には環境省が「人、動物、地域に向き合う多頭飼育対策ガイドライン～社会福祉と動物愛護管理の多機関連携に向けて～」を策定、公表した。今では「多頭飼育崩壊は個人で解決することは困難であり、近隣や地域に影響を及ぼす社会問題である。」として助成金が様々なところから出たりしている。そして、今、存在感を放っているのが“高齢者とペット”である。

2023 年に都健康寿命医療センターが発表した「ペットを飼っている高齢者は飼っていない高齢者に比べ、介護費が半額に抑えられている」という調査が与えた社会的インパクトは大きかった。それでも、高齢者が自身の健康上の理由でペットを最期まで飼えなくなってしまう問題に対し、猫の里親希望者への年齢制限を厳しくする風潮が強まっている動物愛護団体と、健康寿命が延びることを売りに高齢者に子犬や子猫の販売を強く勧めるペットショップ業界。誤解しないでもらいたいので少しくどく説明をすると、高齢者とペットの問題も多頭飼育問題も“新しい問題”ではない。ノラ猫の問題も無くなったわけでも古い

問題になったわけでもない。どの問題も昔も今も問題としてずっとあるのだが、その時代時代で、力を入れて解決に取り組むべきだという空気感がある課題に集中する。そういう意味で、今「どういう問題なのか、どうやって解決していけるのか」という皆の関心が高まっているのが「高齢者とペット」の問題である。

ペット飼育高齢者、介護費少ない　都健康長寿医療センター発表

1/30(月) 17:26 配信　18　KYODO

犬や猫などのペットを飼っている高齢者は、飼っていない人に比べ介護費が半額に抑えられていることが460人の調査で分かったとする研究結果を、東京都健康長寿医療センターのチームが30日までに、米科学誌プロスワンに発表した。ペット飼育による社会保障費の抑制を明らかにしたのは初めてとしている。

同センター協力研究員は、世話のために活発で規則正しい生活を送ることが介護サービスの利用軽減につながるとみている。

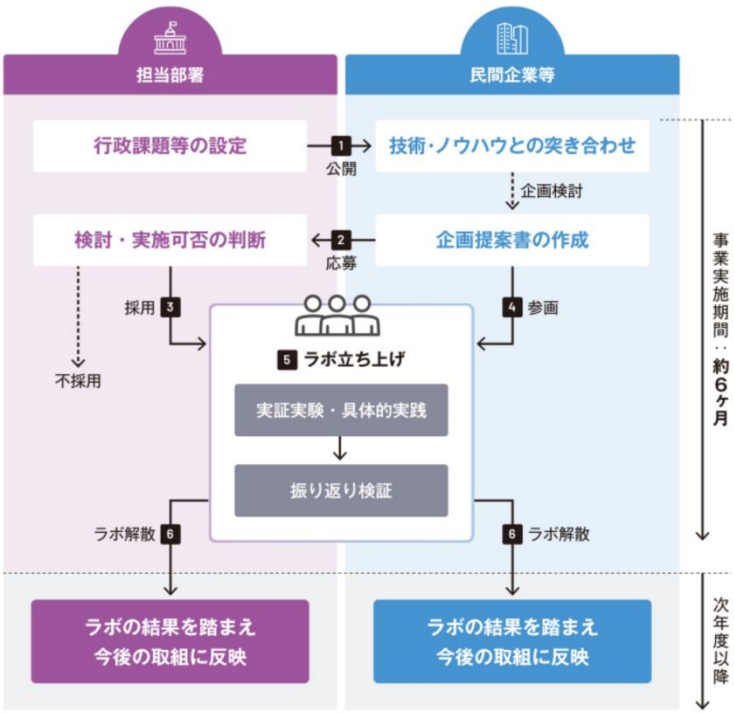
17年に埼玉県鳩山町でペットを飼っている96人と飼っていない364人を比較。介護保険サービス利用費は飼育者が月平均676円で非飼育者1420円のほぼ半額だった。

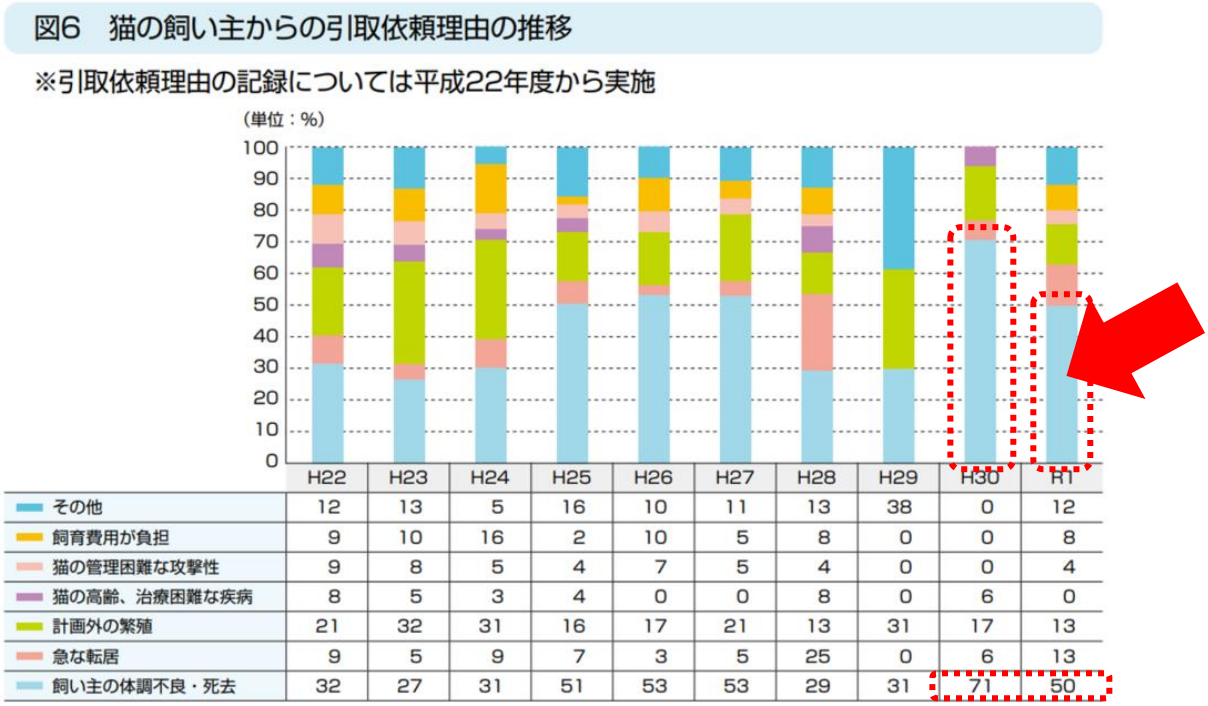
KYOTO　CITY　OPEN　LABO

京都市では、2021 年 7 月から、「KYOTO　CITY　OPEN　LABO」という取り組みが始まった。市役所の各部署が抱える行政課題を LABO のサイトを通して提示し、課題を提示した部署と、提示された課題に対する解決技術やアイデア、ノウハウを持つ民間企業をマッチングし、ラボチームを結成して実証実験等により課題解決を図っていく取り組みだそうだ。

2022 年の 8 月頃、「**高齢者でも安心してペットと生活できる仕組みづくり**」というテーマがラボに募集課題として掲載された。

その背景には、まず動物愛護センターに収容される犬猫の引取り理由の変化があげられる。





	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
その他	12	13	5	16	10	11	13	38	0	12
飼育費用が負担	9	10	16	2	10	5	8	0	0	8
猫の管理困難な攻撃性	9	8	5	4	7	5	4	0	0	4
猫の高齢、治療困難な疾病	8	5	3	4	0	0	8	0	6	0
計画外の繁殖	21	32	31	16	17	21	13	31	17	13
急な転居	9	5	9	7	3	5	25	0	6	13
飼い主の体調不良・死去	32	27	31	51	53	53	29	31	71	50

図１：京都市動物愛護行動計画　第二期　P.11 より

10 年前は 30%程度にとどまっていた”飼い主の体調不良・死去”という高齢者に関係する理由が、平成 30 年は 71%、令和 1 年は 50%と急激に増加している。そしてこれは、今後増えることがあっても自然に減っていく可能性は低いと見立てられているそうだ。（図１）

さらに京都市は、現状を把握する為に京都市が 2021 年に 65 歳以上の市民 300 人を対象に「高齢者のペットの飼養実態アンケート」を実施している。それによると、高齢者で、ペットを飼いたい方は全体の 57%であるが、そのうち、ペットを飼うことをあきらめている方は 67%。あきらめる理由としては「最後まで飼えるかわからない」を 49%、「急な入院等で世話ができない」を 44%の方が挙げており、健康等を理由に飼い続けられなくなることへの不安により諦める方が多いということが分かったそうだ。また、すでにペットを飼っている人でも「急な入院等でペットの世話をどうするか」について 36%の方、「最後まで飼えるか」について 32%の方が不安に感じている、という結果が出たそうだ。

こういった背景を踏まえ、高齢者とペットの問題を解決する為の取り組みを、「KYOTO CITY　OPEN　LABO」を活用して、2022 年の夏に公募をはじめた。募集要項の中には、前提として高齢者からの引取りが増加している現状は大きな問題だが、ペットとの暮らしは、生活リズムをつくり、孤独を癒し、生活に潤いを与える効果がある。また、ペットにとっても在宅時間の長い傾向にある高齢者との暮らしは、相性が良いはずである。したがって、安易に「高齢者はペットを飼ってはいけない」という社会にはしたくない。という京都市の想いが綴られていた。動物愛護団体の譲渡に対する年齢制限が年々厳しさを

増していくなかで、はっきりと意思表示をした勇気はすごいなと思う部分と、「ダメ絶対」のスローガンで解決した社会問題を知らないので、高齢者のペット飼育を認めつつも、それによって生じる問題を最小限に留める対策を検討するべきだと私も思うので、ぜひ応募したいと思った。

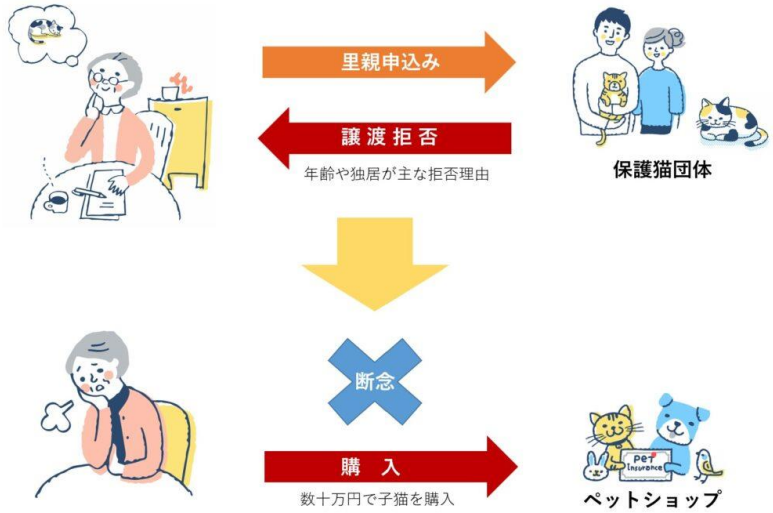
京都市が解決したい課題として掲げているのは次の３つ。

1. 高齢の飼い主が十分に世話ができなくなった時に、ペットの世話をする等、飼い続けられるように支援する仕組みがない
2. 高齢の飼い主が入院や亡くなった時に、ペットを次の飼い主へつなぐ仕組みがない。
3. 高齢の飼い主からのペットに関する相談に対応する場がない。

これらの課題を解決するようなサービスをつくり、高齢者が安心してペットと暮らすことを選択でき、なるべく長くペットと暮らし続けられるような社会を目指したい。と結ばれていた。

背景の補足

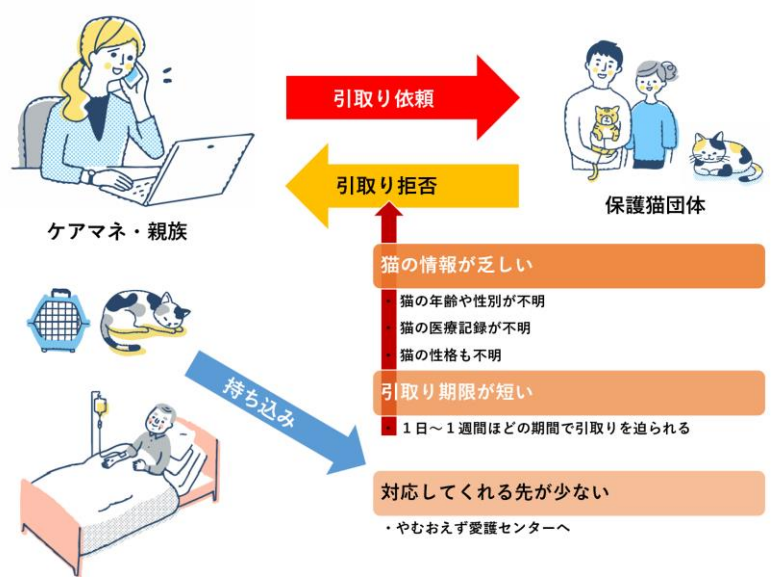
高齢者とペットの問題は、京都市に限ったことではない。保護猫業界的な視点で背景を補足すると、猫を飼いたいと思った高齢者が保護団体に里親の申し込みをしても、年齢や独居を理由に最期まで飼い続けられることが困難な可能性があるとして、断られてしまうケースが多い現状がある。親族で万が一の時に猫を引き取ってくれる猫後見人がいるのであれば、譲渡も可能という付帯条件を設けている団体もあるが、ペットを飼いたいと思う方ほど、近しい身内がいないことも多い。



断られた高齢者は、やむなく猫と暮らすことを断念するか、諦めきれない場合は、数十万円のお金を出してペットショップから子猫を購入する流れになる。

そして、飼い始めるのが子猫になってしまうがために、最後まで飼い続けることが難しく、

保護団体や愛護センターに引取り依頼をせざるを得ない状況になってしまう。しかし、飼い主さんが倒れている状態では、ペットの情報（年齢・性別・医療記録・性格など）が乏しいうえに、猶予期間が短くボランティアの保護団体では対応できないケースがほとんどだ。



愛護センターに収容されると、運よく次の飼い主さんへ譲渡されるケースもあれば、ペット自身も高齢であったり、飼い主さん以外には攻撃的であったりといった理由から、殺処分の対象になってしまったり、持病があったりして環境の変化のストレスに耐えられずセンター内でなくなってしまうこともある。そして、保護団体はさらに高齢者への譲渡に慎重になってしまう、という綺麗な悪循環ができあがっている。こういった現状を踏まえ、高齢者の方に無期限に保護猫を預かってもらうサービスや、ペットと一緒に入居できる施設など様々な取り組みが各地で試されているが、まだまだどこも試行錯誤の段階だと思う。

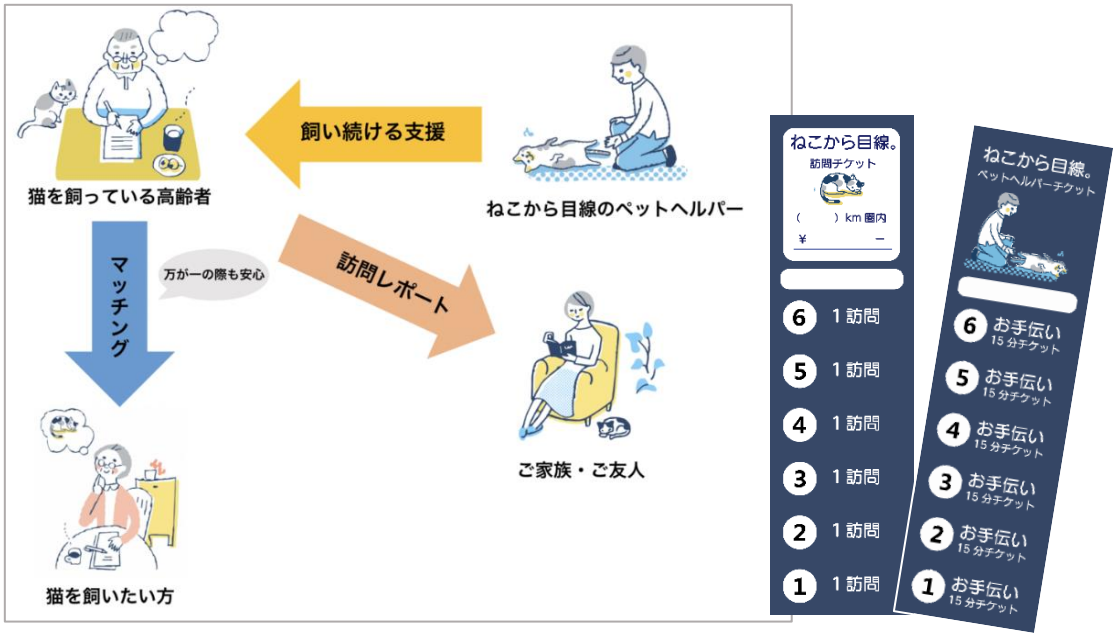
KYOTO　CITY　OPEN　LABO へのエントリー

高齢者とペットの問題に対する企画案は人もねこも一緒に支援プロジェクトを立ち上げた頃に作っていた。ただ、NPO で動かすにはリスクが高く、人件費を回せる事業としての設計がしきれずにお蔵入りとなっていた。ただ、今はねこから目線。の会社があり、頼れるメンバーがいて、収益化に時間がかかってもしばらくは補えるくらいの金銭的な体力もできた。そこで昔の企画を社内でブラッシュアップして、持続可能な収益事業として組み立て直しラボに応募することができた。企画タイトルは、「飼い続ける支援」と「飼い始める支援」。飼い猫に対するホームヘルパーサービスと、高齢者向けの保護猫譲渡サポートの２本柱で成り立

つサービスです。いきなり“です”が出てきて読んでくださっている方は違和感しかなと思うのですが、新しい取り組みへの不安なのか、自分の無意識的な何かが働いて、である調では非常に説明がしにくいので、ここからは「ですます調」で書かせてください。笑

■飼い続ける支援（猫のホームヘルパーサービス）

飼い続ける支援は、すでに猫を飼っている方が少しでも長く、安心して猫と暮らし続けられるようサポートするペットのホームヘルパーサービスです。既存のペットシッターさんは飼い主さんが不在の時に、ご自宅を訪問して代わりに猫のお世話をするお仕事ですが、ペットヘルパーは飼い主さんがご在宅の時に、ご自宅に訪問して猫さんのお世話をお手伝いしたり、飼い主さんと猫さんの健康確認をさせていただくサービスです。



爪切りやトイレの丸洗いなど、高齢じゃなくても一人でするには大変なお世話。そういったことを月 1 回の訪問からサポートさせていただきます。単発のペットシッターではなく、月々の定期訪問を契約いただく形となり、最低月 1 回の訪問、半年契約から利用できるように設定しています。料金は基本 1 訪問 3,000 円としており、内訳は出張交通費 10km1,000 円＋お手伝い 15 分 2,000 円という内容です。毎回の訪問時に現金のやりとりをすることを避けるために、コーヒーチケットのような 6 枚綴りのチケットをまず購入いただき、毎月の訪問毎に 1 枚チケットをもぎらせていただきます。お世話のお手伝いは全く必要ないけれど、いざという時の保険のように予防的にご利用いただく方の場合は、15 分間ひたすら猫さんと仲良くなるための時間に使わせてもらっています。「今日はトイレ 2 つを丸洗いしてほしい」といった要望がある場合は、30 分ほどのお手伝いになりますので、「では、今日

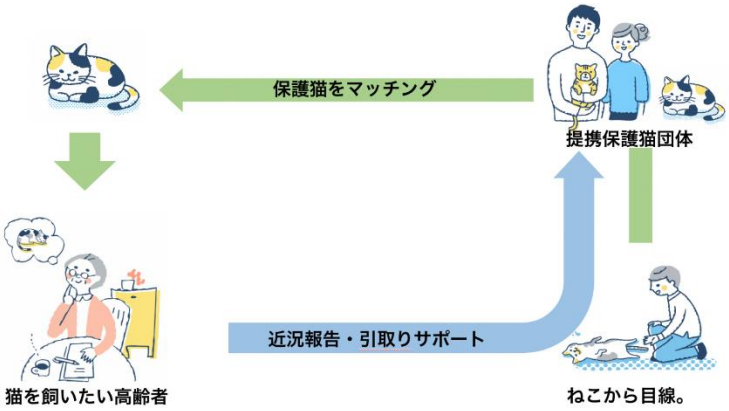
はチケット２枚もぎらせていただきますね！」というようにやり取りをしていきます。

このサービスの第一の狙いは、少しのサポートさえあればまだ猫さんと暮らし続けることができる方が、なるべく長く暮らし続けることができるようサポートすることで、飼い主さん宅で一生を終えさせてあげたい。ということです。それは、猫のためでもあり、猫を愛する飼い主さんの一番の望みでもあると思っています。保護できるシェルターを用意するという方向ではなく、そもそも飼い猫が保護猫にならなくていいように支援する。それが第一の狙いです。

もう一つの狙いとしては、ペットヘルパーとして、ねこから目線。のスタッフが定期訪問させていただくことで、猫さんの性格や年齢、生活スタイルといった情報を把握しておくことです。また、定期訪問を行うことで、飼い主さんの状況も、毎月聞くことができるので、万が一飼い続けることが困難になりそうになったら、先手を打って新しい飼い主さんを探すお手伝いをさせていただいたり、猫と一緒に入所できる施設を探したりするサポートができます。もちろん、シニアだったり、人馴れしていなかったりと、全ての子に里親さんを見つけてあげることはできないと思います。それでも、やってみる価値はあると思っています。100％の解決策にこだわって、悩むことや心を痛めることに時間を使い、結果何もしないのではく、今思いつく中で、自分が提供できる最大限のことをやってみたいと思っています。

■飼いはじめる支援（保護猫譲渡サービス）

飼い始める支援は、これから猫を飼い始めたいと考えているものの、自分の年齢を考えると少し不安がある方、後見人となるご家族がおらず、猫の譲渡を断られてしまった方も安心して猫を飼うことができるように、ねこから目線。が提携保護団体から、譲渡対象の猫さんを紹介させていただくサービスです。保護猫団体さんも、高齢の方が猫を飼うことに否定的なところばかりではありません。譲渡後の見守り体制さえ整えば、積極的に譲渡したいと考えている団体さんも多くいます。そこで、ペットヘルパー訪問の度に、猫さんの近況報告を保護団体さんにさせていただくことを条件に、万が一の時の引取り保証をしていただくという仕組みです。里親さんと保護猫の里親譲渡のマッチングを長年実施しているねこから目線。が間に入ることで、猫さんの安全と飼い主さんの満足度、保護団体さんの安心感を最大限に引き出せるのではないかと考えています。



最近増えている猫の安全を無視した短期レンタルサービスとはかなり異なり、基本は終生猫の飼い主になるつもりの方にしか譲渡はしません。「1週間だけ猫と暮らしてみたいわ」といった希望には対応できません。猫を飼う事による癒し効果は、自分が猫に対して最大限の癒しやケアを提供することによって、満足そうな猫の姿を見て、かえって自分が癒されている“癒し”にこそ意味があると思っています。一方的に関係性の無い動物を撫でまわして得られる癒しは薄っぺらく効果の短いものです。これは、1965年にリースマンが提唱してた「ヘルパー・セラピー原則（「他者を援助することは、(結果的に)援助する人が利益を受けている」とする考え方)」に近いと思います。

また、飼い続けることが困難であると判断した場合、猫を引取りなおさせていただく特約付きの譲渡契約を交わさせていただきます。飼育環境によっては譲渡できない場合ももちろんあります。猫の安全に最大限配慮することは、ねこから目線。として絶対に譲れないポイントです。

サービスリリースの順番がいつもと逆という不安

サービスについて長々と説明をしました。自分でも説明長いなと思います。おそらくそれは、今回のサービスはこれまでのねこから目線。のサービスリリースの流れと真逆だということが大きな原因だと思います。内心の不安が理論武装というか、説明過多という感じに表れているのかなと思います（笑）これまでのねこから目線。のサービスは、なんでも猫の相談に対応する便利屋として対応しつつ、その中で多い依頼を、より広げるためにサービスとしてパッケージ化していく、という「対応案件の蓄積」からの「サービス設計」という流れがほとんどでした。先に課題を受け、理屈や予想、事前ヒアリングといった会議を経てサービスを設計する、というやり方は始めです。

サービスを発表して、「いい内容だね！」と言っていただくことは多く、大変ありがたいのですが、本当に必要とされているのか、必要だとこちらが想定している方々にどうやって届けていけるのか、そういった部分を今は試行錯誤しながら頑張っています。やったものの、契約0人です。とかになったら、まじで笑えないですし、自分としてはぜひ回していきたいサービスだと思っているので、頑張っていきたいと思います。また、いつかのマガジンで、このサービスがその後どうなったのか報告できたらと思います。

おわり

小池英梨子
ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～　代表
NPO法人FLC安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表
ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から
39

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

中々進まないこのシリーズだが、何とかサ行が終わる。千里の道も一歩よりなので、ぼちぼち進めていこう。

今回は「そ」のところから以下の８つ。

- 曾参人を殺す
- 総領の甚六
- 鼠穴を治めて里閭を壊る
- 謗りを止むるは身を修むるに如くは莫し
- 外襤褸の内錦
- 備えあれば患い無し
- 備わらんことを一人に求むるなかれ
- 其の進むこと鋭き者は其の退くこと速やかなり

＜曾参人を殺す＞

嘘でも同じことを何度も言われると、ついには人がそれを信じるようになるということのたとえ。　　出典　戦国策

ある女の子が、母親から「かわいくない」とずっと言われ続けてきた。その子はずっと自分は「かわいくない」と思い続け、すべてに自信を持てずにいた。でも本当はその子はとても可愛いのだが、母親がその子の可愛さに嫉妬していた。こんなケースはそう多いわけではないが、刷り込みというのは怖いものだ。

同様に、この情報過多の中で、多くの人たちが、自分に都合の良い情報を拾い集め、信じ込む。良いほうに信じ込めば良いが、悪いほうを信じ込むことの方が多い。信じれば救われることもあるが、信じることで苦しむこともある。

そんなことを伝えたいときにこの諺を使う。

＜総領の甚六＞

最初に生まれた子は大事に育てられるので、弟や妹たちに比べるとおっとりしていて、お人好しで世間知らずのものが多いということ。いろはがるた（江戸）の一つ。総領＝家の跡目を継ぐ者。長男・長女を指すが、一般に長男を言う。甚六＝「ろくでなし」を人名めかして言ったもの。また、「順禄」のなまりで、順序として父の世禄を継ぐの意という説もある。

この諺が使えるケースと使えないケースとある。一人目の男の子の場合、初孫や跡

取りだったりすると、祖父母も含め大騒ぎで、大事に大事に育ててしまって、弱弱しい子になったり、一人で決められない子になったりする。また、長男なんだからと、妙に背伸びさせられてしまうケースもある。成長が不自然にゆがめられることで、神経症や精神疾患に移行するケースも多い。過敏性腸症候群が長男によくみられるのもそのためではと思われる。

まして、最近は父母の精神状態も影響し、母親が長男に依存的になってしまうと、母子密着になってしまい、家族としても問題を抱える可能性も高くなる。長子というのは、どうしても上だからということでしっかりするよう言われることも多い。好きで長子になったわけではないので納得できないことも多いだろう。

昔ながらの雰囲気で、のんびり育てられれば良いが、世界が全般的にスピーディーな中では、ゆっくり、ゆったりとした子育てができないことが多く、おっとりとした性格にならないことも多い。ただし、子どもたちは概して優しく、親に対して歯向かわない良い子になっている。世間知らずということよりも、ネットで調べて良く情報を知っていることの方が多いだろうが、優しさがかえってあだになる事もある。そういう意味では次男は気楽なことが多く、それは今も昔も変わらない。

騙されやすいかと言えば言えないこともないし、お調子者になりやすい子も見かける。「長男の甚六」よりも英語の「次男の方が賢い」方が納得しやすいかもしれない。

そんなことから、父母には、長男長女に対して、好きで長男長女になったわけではないということを伝えながら、子どもは出来るだけ、ゆっくりゆったりと、子どものペースに合わせて育てるように、また、優しい子に育つと騙されやすいというマイナス面もあることをこの諺を用いて伝えている。

英語では・・・

The younger brother has the more wit.

（弟の方が賢い）

＜鼠穴（そけつ）を治めて里閭（りりょ）を壊（やぶ）る＞

小さな害を除こうとして逆に大切なものを台無しにしてしまうたとえ。鼠を退治しようとして村の門を壊してしまうということから。「鼠を治めて里閭を破る」ともいう。里閭＝村の入り口の門。　　出典　淮南子

小さいことばかり気にしてしまう母親が増えた。完璧主義だったりもする。そんな母親にこの諺を伝えることがある。

小学校低学年の子が、準備や宿題を忘れたり、家庭学習をやらなかったりすると、目くじらを立てて叱っている母親に出会う。宿題を忘れようが、忘れ物をしようが、楽しく学校に行けている方が、不登校になってしまうよりずっと良いだろう。小さなことばかり言っていれば、子ども自身も小さいことを気にするようになって、不安の強い子にしてしまう。不安が強くなれば、学校に行くことにも抵抗が出てきてしまう。

コロナ禍になって、母親が過敏に消毒やうがい、手洗い、マスクを強要している間に、子どもも過敏になって、見えない敵（ウィルス）に対して必要以上に不安を感じるようになったケースもある。

これは学校の先生方にも言えることではないだろうか。不登校になった子どもたち

から、先生が怒ってばかり、注意ばかりしていると聞くことも多い。注意ばかりされていたら、学校はつまらなくなる。楽しく過ごせる、楽しく学べる学校であれば不登校にもならないだろう。細かいことばかりに気をとられ、肝心な学校に行く楽しさを台無しにしてしまわないように、保護者も学校も気を配ってほしいと思う。

＜謗(そし)りを止(とど)むるは身を修むるに如(し)くは莫(な)し＞

他人から非難されないためには、まず自分自身が正しい行いをするのが一番大事であるという教え。　　出典　中論

この諺は、子どもにも、保護者にも、或いは先生方にも伝える必要があると思う。他人のことはいくらでも非難する人が増えている今の時代、自分はどうなのか、自らの姿勢を律することの重要性をもっと考えてほしい。

子どもたちに、「約束を守りなさい」と言いながら、約束を守らない保護者や先生。規則や規範を守らない大人たち。人の話を聴かない大人たち。こうした大人たちを子どもたちは見本にしてしまう。子どもたちだけをいくら叱っても、見本が間違っていては説得力も何もない。

子ども自身も、自分を客観視できないこともあるので、人を非難する前に、自分を確認しようという意味で伝えている。

＜外襤褸(そとぼろ)の内錦(うちにしき)＞

外見は飾らないが、内実はすぐれていること。また、貧しい生活をしていても、心が豊かなことのたとえ。外見はお粗末な衣服だが、その下には豪華な絹織物を着けているの意から。

昨今、自分の顔や姿を気にする子が多い。ガールズモデルが流行り、ヤング向けの週刊誌もあって、どんな服が良いとか、化粧がどうとか、ネールにも小学生から熱中している。小学生の服装も、モデルさながらで、肩だしはあるし、胸が大きく開いている服などを着ている子もいる。髪も染めていたり、マニキュアを落としきれない状態で来ている子もいる。外見ばかりに気を使っていて、内面を磨くことがおろそかになってしまうと、人としての成長が滞るだろう。見た目に気を配るのもよいが、人とのかかわりを表面的にしてばかりで、ぶつかり合うことを避けていると、内面は育たない。もっともっと内面を磨くために、人との摩擦を感じ、距離感を掴み、人を怖がらずにコミュニケーションができる子に育ってほしいものだ。それは小中高すべての子どもたちに言えるし、場合によっては大人である保護者にもあてはまる話である。見栄ばかり張っていては、いろいろ疲弊する話になるし、見た目ばかりにとらわれていても良いことはない。見た目はおいしそうだけど、実は不味い料理より、見た目は今一つでもおいしいほうが絶対良いだろう。そういう風に考えられる人になってほしくて、この諺を使うことがある。

＜備(そな)えあれば患(うれ)い無し＞

普段から準備を十分にしていれば、いざというときにも心配ないということ。

出典　書経

これは、どんな年代でも、どんな人にでも通用する諺であろう。大きくは自然災害に備えておくこともそうだし、避難訓練もこれにあたる。小さくは、試験前や旅行前の準備なども同様。

筆者は長年茶道に親しんできたが、千利休の言葉に「降らずとも雨用意」というのがある。雨が降るか降らないかではなく、用意しておけば突然の雨にも対処できる。どんな場合でも、いろいろな事態を考えて、準備しておけば、何があっても慌てないで済む。人は慌てるとろくなことにならない。そういう意味でも、この諺は自分への戒めも含め広く伝えている。

英語では・・・

Lay up for a rainy day.（雨の日に備えて蓄えよ）

＜備わらんことを一人（いちにん）に求むるなかれ＞

一人の人間に才能や人格・知識などすべてを兼ね備えるように要求しても無理である。完全無欠な人などいないのだから、一人に過大なことを求めず、それぞれの長所を生かすようにすべきだということ。

出典　論語

この諺は子育て中の保護者によく使っている。自分自身も完ぺきではないはずで、なぜ子どもに完璧を求めるのかと問う。勉強ができる子に、体育も音楽もと欲張ってみたり、性格についてまでもあれこれ注文が付く。そんなに完全無欠を求めたら、子どもが潰れてしまうのに、欲というのはとめどない。

先日も、こんな子がいた。その子は相談室に来た時に、きちんと靴をそろえて脱ぎ、更にきちんと座って靴を反対向きにそろえて並べるのだ。まだ幼稚園児である。挨拶も、深々とお辞儀をして、「おはようございます」と言い、帰るときも、「有難うございました」とまた深々とお辞儀をしていった。絵を描くというので画用紙と鉛筆を渡せば、「有難うございます」と丁寧に感謝を述べる。きちんと座って鉛筆も正しく持ち、「描いてよいですか？」と許可を求めるなど、堅苦しい。およそ子どもらしくないというか、きちんとしすぎているというか・・・。しっかりしつけられていると言えばそうかもしれないが、相談室にくる子のほとんどが、小学生でも、ワーッときてワーッと帰っていくので、違和感を覚えた。

母親に聞くと、「社会に出て困らないようにしつけている」という。母親自身はどんなしつけを受けたのか確認すると、「何もしつけられなかった。それで社会に出て困ったから」という。母親の親は反面教師となったようだ。それにしてもここまでしっかりしつけなくても、子どもの時代は子どもらしく過ごすことも重要だという話とともに、この諺を伝えている。

＜其の進むこと鋭（と）き者は其の退（しりぞ）くこと速（すみ）やかなり＞

進み方が著しく早い者は、途中で気力が衰えて退くのも速い。物事には適当な速度があって、学業も一歩ずつ着実に進んで行くべきであるといういましめ。

出典　孟子

物事の進め方についての諺でもある。何でも興味を持つと異様にのめりこむ人は飽きやすいということとも重なるかもしれな

い。人との関係においても、長く付き合おうと思えば、ゆっくりと知っていく方が、一気に知ってしまうより長続きするだろう。

勉強も一気にやってしまって、数日ですっかり忘れてしまうことがある。毎日少しずつの方がよいということだろう。しかし、これも人それぞれ。一夜漬けが得意な人もいれば、少しずつという人もいる。その人にはその人のペースがあるのだ。

自分にとって適切な速度というのは大事にすべきである。最近の社会変化の速さについていけない人もいる中、もう少し、ゆっくりということでスローライフということも言われるようになってきた。特に子育てにおいては、子どものスピードに合わせてあげてほしいと思う。

出典説明

戦国策・・三十三編

中国の雑史。前漢の劉向（りゅうきょう）の編。戦国時代に諸国を遊説した縦横家（じゅうおうか）が諸侯に説いた戦略を、国別に集めて三十三編にまとめた書。いくつかの書にのっているものを校訂・編集したもので、当時の政治・外交・軍事などを知るための貴重な資料。現在伝わるものは、北宋の曾鞏（そうきょう）が欠けた部分を補って編纂したものに姚宏（ようこう）が注を加えた三十三巻本と鮑彪（ほうひょう）の十巻本の二系統がある。

淮南子・・・内編二十一巻

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦（りゅうほう）の孫である淮南王（わいなんおう）劉安（りゅうあん）。無為自然の道家思想を中心都市、政治・軍事・天文・地理などにわたって諸学派の説を収めている。内編二十一巻・外編十三巻があったとされるが、現存するのは内編二十一巻のみ。

中論・・・

正式名称『根本中頌（こんぽんちゅうじゅ）』初期大乗仏教の曾龍樹（ナーガールジュナ）の著作。インド中観派、中国三論宗、更にチベット仏教の依用する重要な論書である。本文は論書というよりはその摘要を非常に簡潔にまとめた２７勝の偈頌からなる詩文形式であり、注釈なしでは容易に理解できない。

書経・・・

五経の一つ。太古の伝説上の帝王堯舜（ぎょうしゅん）から春秋時代までの、模範となる帝王の詔勅（しょうちょく）を中心に政治理念などを記した歴史書。講師が百編にまとめたとされるが不詳。秦の焚書（ふんしょ）によって散逸し、現存するのは東晋（とうしん）の梅賾（ばいさく）による『弘安国伝古文尚書（こうあんこくでんこぶんしょうしょ）』五十八編であるが偽作の疑いがあり『偽古文尚書』といわれる。本書は先秦時代には『書』、のちに『尚書』と呼ばれていたが、宋代以後『書経』と呼ばれるようになった。

論語・・・二十巻

儒教の経典。『大学』『中庸』『孟子』とともに四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、孔子の死後に門人たちが編集したものと言われる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知るうえできわめて重要な資料である。

孟子・・・七編

中国、戦国時代中期の思想書。孟子の原稿を門人が編纂したもので、「大学」「論語」「中庸」とともに四書の一つ。性善説に基づく道徳論を説き、覇道（武力による政治）を否定して王道（仁徳による政治）を提唱している。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第25回

黒田長宏

＜2022年11月4日＞

51号用の原稿を提出。毎度のことだが、今回こそパートナーを見つけなければ大変なことになる。
孤独死しないための準備はもう始まってしまっているのだ。（と、言いながらずっと止まったまま）

＜11月13日＞

某マッチングアプリから某マッチングアプリに乗り換えた。以前やっていた某マッチングアプリだが、今まで一つだけ残してやっていた某マッチングアプリが効果が出ず、第二希望のマッチングアプリがなぜか登録できず、今回やってみる某マッチングアプリで引き続き頑張ろう。

＜11月20日＞

ユーチューブの『婚難救助隊』サイトのファイルを結合しようとして、デジカメからビデオカメラにするとできるかと思ったが、なぜか2つに分かれてしまったため、結合ソフトを見つけてやっているところ。このほうがいいと思う。

＜11月23日＞

まだ冬のボーナスも未定なところに、マッチングアプリを増やして2つ登録した。以前会員だったのをストップしてまたやりはじめたが、前よりサイトが進歩しているように思える。作戦を変えてみるのも結婚達成には必要だったか。

＜12月13日＞

短信に書いたが、YouTube の改革を行い疲れた。ユーチューバーとして出世したら、見向きをしなかった女性の方々がなにかとやってくることになるからだ。

＜1月29日＞

YouTube のファイルをくっつけてオール一本にしたことで、力を抜かずにパフォーマンスできた気もするのだが、ほぼ1

日に1人が登録者になってくれるペースにこのところなっている。1000人の登録が一つのバロメーターだが、このペースだと減らない場合ではあるが、2年ちょっとかかる。
私自身がパートナー探しをあきらめてはならない。YouTube1000人突破と、結婚は私自身の2大目標にしていいだろうと思う。マッチングアプリは残念ながら、効果的な方法ではないと思う。効果的ならとっくに私が結婚できている。それよりも、私自身が YouTube でアピール力を強めたほうが良いと思ってきた。

＜2月11日＞

日記形式の良いところは、書いていればの話だが、締め切りコールが出たらすぐ提出できることである。まったくの白紙から書いていくのはつらいところがあるが、日記形式なら積み重ねである。今キーボードを叩いたら罪重ねと出たように錯覚した。あーあ。今日で55歳と8か月だと思うのだが、いつの間にこんなに歳月が経過したのか。そしていまだに寅次郎でもないのに、婚活の話題を続けているのか。ただ、唯一の私の生涯で初めてと言ってもいいだろう、挑戦のバロメーターとして、私の YouTube、『婚難救助隊』の登録者数が、229人になっている。この一か月は一日に一人登録のスピードに上がってきている。まずは目標は登録者数1000人だが、どうやって登録してもらうかわかってもいない。とにかく1回1回の動画を精一杯やって増やしていくことしかわからない。だが、YouTube がある ことが、私にとって私が考える、私にとっての唯一といってもいい、（対人援助マガジンは？）結婚難に物申す力を得るための方法だと思うのだ。だがら、明日も一つ増やしたる。（茨城弁ではないな、この言い方は）

〔PBLの風と土　第24回〕

よりよい地域のために大学は地域と共に

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、連載5年目には米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題しています。

1. 問題解決の掛け声は無限ループ？

「課題解決型のボランティアはなかなか続かない。」先日、ある会議の席で、委員の1人から、そんな発言が出た。この発言には続きがある。「解決すべき課題を考えて行動することは大事」と前置きした上で、「楽しみながら活動して、結果として課題が解決していた」という形もあること、そして発言者の携わる現場での経験をもとにすれば、その方が望ましい、という感想と意見が示された。

コロナ禍も一定の収束を見せ、対面での取り組みの比率が高まる中、1月23日に久留米大学の地域連携センター・久留米大学基盤教育研究センターの主催による研修会で「サービスラーニングの教育手法とその展望」と題し話題提供をさせていただく機会を得た。コロナ禍を経て、改めてキャンパスに整備された地域連携のための教育・研究・社会貢献の拠点を活かしていく契機に、という期待のもとでの企画だった。当日の様子は早々に久留米大学のホームページで公開されているので、そちらに譲るとして、終了直後に地域連携型の科目を担当する教員から寄せられた「プロジェクト型の科目は、どう始め、続け、終えられるのか」という個別質問を紹介しておきたい。というのも、今回の冒頭で紹介した「課題解決型のボランティアは続かない」という現場から寄せられた素朴な思いと深く関連するためである。

久留米大学での講演でも、前回の連載でも、本連載で何度も取り上げているSOFARモデルを紹介した。簡単に言えば、大学の地域貢献活動を組み込んだ学習プログラムにおいて、学生(Students)・地域団体(Organizations)・教員(Faculty)・大学の執行部や事務局(Administrators)・地域住民(Residents)の人間関係が良好にあるよう、対人関係をうまく調整しよう、という観点である。言うまでもなく、対人関係をうまく調整するということは、地域に根ざす課題や、そうした課題をもとにした具体的な問題を解決するための手段でこそあれ、それが主要な目的にはならない。加えて、地域内の人間関係を無視して学生や大学側が自己完結した取り組みを行ったとしても、地域が抱える問題は解決せず、課題はむしろ膠着化することさえ想定できる。

そこで今回は、前回の結語でも述べたとおり、大学と地域との連携・協力において変容的な関係構築を図るための自己点検評価ツール「TRES（Transformational Relationship Evaluation Scale：変容的関係評価尺度）」[1]のの改良版「TRES2」（Kniffin et al. 2020）を紹介する。Kniffinら(2020)は「TRES2はTRES1に引きつづき、関係性の現状と望ましい状況の両方についての認識を求めるもの（As with TRES I, TRES II invites perceptions of both current and desired status of relationship characteristics）」（p.9）と述べていることから、点検・評価の過程で、自ずと教育実践を展開する現場のよりよい姿を展望することになることが暗示されている。一方、前回紹介したとおり、TRES1では4つのセクションからなる緻密な点検・評価の枠組みでもあり、SOFARのパートナーシップの

検討する上では、自己評価に一定の時間と労力を必要とする。冒頭に紹介した、よりよい地域社会のために「解決をめざすと続かない」という現場の声と、地域社会と共に「何をめざして取り組むのか」という大学の声、それら両者に対する1つ応答として、TRES2の紹介により、TRES1も含めた大学と地域とのよりよい関係構築のあり方を探る手がかりを整理してみたい。

2. TRESの理論的・方法論的背景

TRESがSOFARモデルと深い関係にあることは、前回の本連載第23回で「SOFARのフレームワークに含まれるすべての構成員が使用できる単独の調査票を開発」したClaytonら(2010)の論文を解題したことで、一定の理解はいただけることだろう。ただ、Kniffinら(2020)の論文では、より明快にBringleら(2009)の論文が「サービス・ラーニングや地域貢献の研究全般に3つの貢献がなされた（three contributions to the study of SLCE relationships in general）」ものとして、その意義をまとめている。順に、(1)関係性と関係構築とを区別したこと（distinguishing Between Relationships and Partnerships）（p.4）、(2)利害関係者・構成員の差異化を図ったこと（differentiating the Stakeholders/Constituents）（p.5）、(3)関係性と関係構築に関して明快なパラダイムを拡張して適用したこと（expanded on and operationalized the relationship paradigms）（p.6）である。これら3点について、順に見ていくことにしよう。

まず、関係性とパートナーシップの区別については、第19回で紹介した「関係の連続性(Relationships continuum)」の図に象徴されるように、大学—地域間の関係性（つまり、関係の有無ではなく個々の関係の特性）について、親密性・公平性・誠実性の3つの特徴が見られるときに望ましいパートナーシップ（つまり、関係構築）がもたらされている、と示したことが挙げられる。また、そうした関係性は一時のものではなく「共通の目標達成に向けて地域資源の結合のもとで共通活動に従事する個人・グループ・組織からなる構造化された存続的な関わり」のもとで構築されているもの、と捉えている。筆者が時折用いる比喩表現としては、「瞬間最大風速」や「底力」といった非日常や無理をした場合ではなく、「平年並みの気候」あるいは「実力」といった具合に普段の日頃の振る舞いがどのような状態かに関心が向けられる。これらの点を踏まえ、Kniffinら(2020)では「関係の連続性」を簡略化して「関係性の型の性向（The Nature of Types of Relationships）」として提示している。[2]

続いて、関係性とパートナーシップにおける

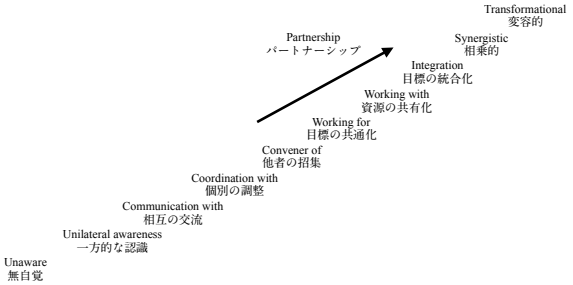


図2：関係性の型の性向（Kriffin, 2020, p.4、筆者訳）

利害関係者/構成員の差異化は、言うまでも無くSOFARの5つに分解したことを指している。なぜなら、大学と地域との連携は、構成員の複雑さや多様性のもとで行われているため、「大学」と「地域」と一括りにしてしまっては単純すぎ（too simplistic）で、そもそも両者とも一枚岩（monolithic）ではない。そして、かねてよりサービス・ラーニングの教育実践における対人関係への関心（Bringle & Hatcher,2002）をもとに、SOFARモデルを提示した[3]。なお、Kriffinら(2020)の論文では、Bringleら(2009)では図4として示された「SOFARの5つの構成員の詳述（Elaboration of Five Constituencies）」（p.16）を、構成員内・構成員間で相互作用がある動態を追記した上で「SOFARモデルの拡張（Extension of the SOFAR Model）」（p.6）として再提示している。

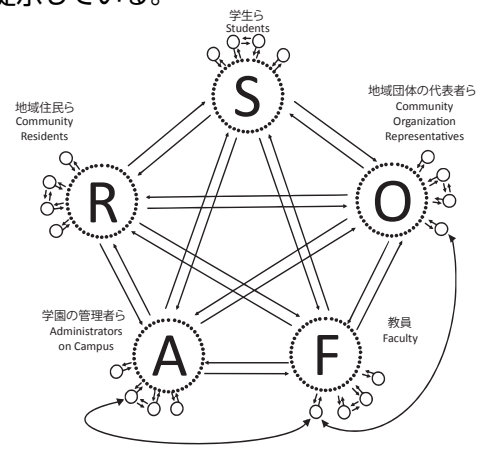


図3：SOFARモデル拡張版（Kriffin, 2020, p.6、筆者訳）

そして3点目の関係性とパートナーシップの新たな理論的枠組みが「搾取的—交流的—変容的からなるE-T-T連続体（E-T-T continuum: Exploitative—Transactional—Transformational）」（Kriffin, 2020, p.6）である。これはEnosとMorton(2003)が示したサービス・ラーニングにおけるパートナーシップを短期的かつ特定の活動に関わるクローズエンドな「交流的（transaction）」なものと長期的かつ既成の規範に疑問をもち社会システムに変化をもたらすオープンエンドな「変容的（transformational）」の2種類に、「搾取的（exploit）」という状態を追加したものである[4]。そもそもサービス・ラーニングでは、よりよい地域社会をもたらす活動の維持・発展に大学が貢献するという教育・学習プログラムが展開されることもあって、理論的というよりも理念的な観点から、当事者間での功利的・戦略的な関係構築がそぐわないことは容易に想像がつくだろう。実際、Kriffin(2020)では「搾取的関係」とは大学との地域の連携が「最終的に負の結果をもたらす（net negative outcomes）」(p.6)「または抑圧的な要素を含む（or as including oppressive elements）」（p.7）もので「それらがないと理論的枠組みが不完全なものになる（the framework incomplete without them）」（p.7）という実体験から連続体へ追加されたと記されている。

3. TRES1とTRES2の共通点と相違点

こうしてサービス・ラーニングのパートナーシップにおいて、SOFARに象徴される5つの構成員間・構成員内において適切な関係構築がもたらされ、それが搾取的なものにならずに交流的なものから変容的なものへと発展することの意義が確認できた上で、実際の現場の特徴を検討できるようにしたのがTRESの略称で呼ばれる指標である。前回、第23回で示したとおり、9つの領域に対して「現状」と「理想」の両方を自己点検・評価するための設問が示された。また、文章で記述された選択式の質問に回答するだけでなく、自由記述やベン図から大学と地域の2者関係を選択するという手順も組み込まれた。なお、第23回ではClayton(2010）では(a)質問票を用いた60-90分の対面インタビュー(n=15)と(b)同じ質問票を回答者が個別に記入(n=5)する2形態により、計20名から各々2団体の実践についてのデータ収集が行われたこと、また文章からの選択式の回答とベン図での選択式の質問の回答とのあいだで、両者の結果には高い相関があることを紹介したが、t検定により心理学的な検証がなされている。その際、TRESの9分野の各質問への回答を5段階の得点に変換して大学と地域とのパートナーシップの有り様をE-T-T連続体では現状と理想がいずれに該当するかの度数を求めたところ、双方向で変容的な関係がもたらされることを望む傾向が見られたこと（以下、表1）、「人間関係の相互依存性理論（interdependency theory of relationships）」をもとに、大学と地域の親密性について、活動の頻度・活動の多様性・パートナー側からの相互依存性・大学側からの相互依存性の4つの指標（以下、表2）も特定された[5]。

表1：5段階の得点に変換し捉えた大学-地域間の関係性（Clayton et al., 2010, p.13）

TRESの概念スコアに基づいた搾取的、交流的、変容的と記述される関係性の度数
(Frequencies of Relationships Described as Exploitative, Transactional, or Transformational, Based on TRES Conceptual Scores)

頻繁な相互作用 (Type of Relationship)	度数 (Frequency): 現状の関係性 (Current Relationship)	度数 (Frequency): 理想の関係性 (Desired Relationship)
一方か双方が搾取的 (Exploitative for one or both) (TRES < 1.5)	0	0
一方のみが交流的 (Transactional for only one) (1.51<TRES<2.5)	3	0
双方が交流的 (Transactional for both) (2.51<TRES<3.5)	8	6
一方のみが変容的 (Transformational for only one) (3.51<TRES<4.5)	17	8
双方が変容的 (Transformational for both) (4.51< TRES<5.0)	9	24

注：関係性を調査した全数N=40から若干のデータが欠損 (Some data missing from total of N=40 relationship studied)

表2：人間関係の相互依存性理論に基づいた親密性の4指標（Clayton et al., 2010, p.13）

親密性の指標に対するTRESの評価 (TRES Ratings for Indicators of Closeness)

測定 (Mesurement)	TRES *M*	TRES *M*
頻繁な相互作用(Frequent interactions)	あり (Yes) =4.71	なし (No) =3.62 **
多様な相互作用(Diverse interactions)	多い (Many) =4.81	1か2 (One or two) =3.97 **
受入団体の意思決定に大学側が貢献 (Respondent contributed to community partner's decisions)	実例多数 (Many Examples) =4.76	実例少数 (Few Examples) =3.87 **
受入団体が大学側の意思決定に貢献 (Community partner contributed to respondent's decisions)	実例多数 (Many Examples) =4.70	実例少数 (Few Examples) =3.86 **

注：TRESの概念的範囲 (TRES conceptual range)：1=一方あるいは双方が搾取的 (exploitative for one or both)、5=相互に変容的 (mutually transformative)
** $p < .05$

Kriffinら(2020)によれば、TRES1は関係性とパートナーシップの「発展的探究の小宇宙（A Microcosm of Evolving Inquiry）」（p.7）として、緻密に設計・使用・検定されたものの、「あまりに時間がかかりすぎ複雑（too time-consuming and complex）」（p.9）なものとなってしまった。そこで、当初は2010年の出版予定だったとのことで、先行して簡略版を検討し、それがTRES2として改良されることになったという[6]。TRES1では心理学的な検証のために対人関係の古典的な理論を参照されたが、TRES2ではより高次なネットワーク（apply to higher levels of networks）にも対象が広げられた。ちょうど、図3でのSOFARモデル拡張版にある、複数パートナー・組織間も射程内と捉えられる。

表3-1：TRES1（Clayton et al., 2010, pp.9-10）

変容的関係評価尺度　Transformational Relationship Evaluation Scale (TRES)

パートナーシップの分析

あなたの視点から見てパートナーシップの実際の特徴を最もよく表している**選択肢に×印を**
（現在のパートナーシップであれば現在の状態、以前のパートナーシップであれば開講時の状態）

あなたの考えるパートナーシップの望ましいあり方を最もよく表している**選択肢に○印を**
（×を付けた選択肢と同じ場合もあれば、異なる場合もあることに注意）

1. サービス・ラーニング（SL）におけるパートナーシップでの成果
   a. _____ このパートナーシップでは、私たち双方に恩恵よりも負担が多くかかる。#
   b. _____ どちらかが恩恵を受けるが、もう一方に負担を強いている。#
   c. _____ このパートナーシップによって、どちらも大きな恩恵を受けないが、どちらも大きな負担を被らない。#
   d. _____ どちらかが他方よりも大きな恩恵を受けるが、どちらかが大きな負担を被ることはない。##
   e. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）このパートナーシップによって等しく恩恵を受ける。*
   f. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を受け、どちらかがパートナーシップを通して発展する。**
   g. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を受け、双方がパートナーシップによって発展する。
   h. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を受け、双方が成長し、関係そのものが発展する。
   i. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を得て、双方が成長し、関係そのものが発展し、お互いが属するシステム（例えば、組織など）がパートナーシップによって、より発展しやすくなる。

2. SLにおけるパートナーシップでの共通の目標：あなたとあなたの地域パートナーは、SLでの協働において、どの程度の共通の目標を持っている／いない、持っていた／いなかった、と捉えている？
   a. _____ 概ね私たちの目標は対立している #
   b. _____ 対立はしていないものの、概ね私たちの目標は筋が通っていない。*
   c. _____ 私たちの目標は、いくつかの点で1つにまとまっている。*
   d. _____ 私たちは共通の目標を持っている

3. 意思決定：SLの活動について決定する際、あなたとあなたの地域パートナーとのあいだでどの程度協働した？
   a. _____ このプロジェクトに関する決定は、他のパートナーを考慮することなく、単独で行われる。#
   b. _____ このプロジェクトに関する決定は、単独だが、他のパートナーをある程度考慮し行われる。##
   c. _____ このプロジェクトに関する決定は、単独で行われ、他のパートナーに相当の配慮がなされている*。
   d. _____ このプロジェクトに関する決定は、他のパートナーと協議して行われる。*
   e. _____ このプロジェクトに関する決定は、協働的に行われ、概ねどちらかの関心によって主導されている。**
   f. _____ このプロジェクトに関する決定は、協働的に行われ、概ね共有されたの目標への共通のコミットメントを反映した合意形成のプロセスに至る。

4. 資源：このSLでのパートナーシップにおいて
   a. _____ 私たちのうちの一方は、その活動に必要な資源のほとんど、あるいはすべてを提供し、もう一方はほとんど、あるいはまったく提供しない。#
   b. _____ 私たちのうち、一方が他方より多くの資源を提供し、もう一方はいくらか資源を提供している。*
   c. _____ 両者とも多大な資源を提供している。

5. 対立管理：このSLでのパートナーシップの活動に関して対立が生じる場合（あるいは生じた時）
   a. _____ 私たちの双方が、その対立に対処することを積極的に避けるだろう。##
   b. _____ 私たちのうち一方は対立に対処しようとし、もう一方はそれを避けるだろう。##
   c. _____ 私たち双方はその対立に対処するだろうが、それは私たちにとって不快なことだろう。*
   d. _____ 私たち双方は、問題を解決するという共通の期待を持って、対立に公然と対処するだろう。

6. 活動とアイデンティティ形成におけるこのパートナーシップの役割：このSLパートナーシップにおいて
   a. _____ 私たち双方とも、全体的に活動に支障をきたしてきた。#
   b. _____ 私たちのどちらかが、全般的に活動を支障をきたしてきた。#
   c. _____ 私たちのどちらかが活動の役に立ったが、もう一方の活動には何の影響も与えていない。##
   d. _____ 双方の仕事を助けた。*
   e. _____ 双方が活動を助け、どちらか一方の「自分らしさ」の定義に役立ったが、一方に留まった。**
   f. _____ 双方が活動を助け、双方にとっての「自分らしさ」の定義に役立った。
   g. _____ 双方が活動を助け、双方にとっての「自分らしさ」を定義に役立ち、私たちのうちの一方が活動を通じて重要な貢献をする能力を高めた。
   h. _____ 私たち双方が活動を助け、私たち双方に「自分らしさ」を定義するに役立ち、私たち双方が仕事を通じて重要な貢献をする能力を高めた。

7. 力関係：このSLパートナーシップにおいて
   a. _____ 一方がほぼ、すべての力を発揮し、もう一方はほぼ、まったく力を発揮しない。#
   b. _____ どちらかが多少なりとも力を発揮している。*
   c. _____ このパートナーシップでは平等に役割が共有されている。

8. このSLでのパートナーシップにおける重点事項
   a. _____ 私たちのあいだではお互いにとって重要なことは何もない。#
   b. _____ 私たちのこの関係から各々が得るものが重要である。##
   c. _____ 私たちのこの関係から双方が得るものが重要である。*
   d. _____ 私たち双方が何を得るか、そしてどちらかがどの程度成長するかが重要である。 **
   e. _____ 私たち双方が何を得て、互いにどこまで成長できるかが重要である。
   f. _____ 私たち双方が得るもの、成長する度合い、そして互いの環境での成長を育むパートナーシップの力量が重要である。

9. 満足度とよりよい変化：パートナーシップの成果として
   a. _____ 双方とも不満があり、双方とも悪い方向に変化している。#
   b. _____ 双方とも不満があり、どちらかが悪い方に変化した。#
   c. _____ 双方とも不満だが、どちらも悪い方に変化していない。#
   d. _____ どちらか一方だけが不満で、どちらも悪い方に変化していない。##
   e. _____ 双方とも満足しており、どちらも良い方向にも悪い方向にも変化していない。*
   f. _____ 双方とも満足し、どちらかが良い方に変化した。**
   g. _____ 双方とも満足し、両者とも良い方向に変化している。
   h. _____ 双方が満足し、より良い方向に変化し、関係そのものもより良い方向に変化している。
   i. _____ 双方が満足し、より良い方向に変化し、関係そのものもより良い方向に変化し、周りの世界もより良い方向に変化している

注：TRESの生データは、選択肢aを1点、選択肢bを2点として、各項目の得点を合計し、回答選択肢の数で割って平均値を算出されたものである。
TRESの概念的データとして、上記の#は少なくとも一方にとって押取的と示された項目には「1」のスコア、##は一方にとって有益だが双方とって有益ではない項目には「2」のスコア、*は双方にとって有益なので相互に交流的となる項目には「3」のスコア、**は両方にとって有益で一方にとって変容的な項目には「4」のスコア、上記の表の空欄=相互に変容的な項目には「5」のスコア、それぞれを与えて計算される。

表3-2：TRES2（Kriffin et al., 2020, pp.10-11）

TRES II の領域と項目

説明書：以下の調査は、地域社会と大学のパートナーシップに焦点を当てたものです。正解も不正解もありません。パートナーシップに関するご自身の通常の印象をお示しいただきたく、そのパートナーシップにおけるご自身の経験を最もよく表す選択肢を1つだけ選んでください。ご自身の視点から見たパートナーシップの実際の特質を最もよく表している選択肢には「X」印を付けてください。ご自身がお考えのパートナーシップの望ましいあり方を最もよく表している選択肢には「*」を付けてください（望ましいあり方が実際と同じ場合は、選択肢の横に「X*」を付けてください）。

1. 目標 *(Goals)*：
   a. 一部のパートナーの目標が不明で、それが妨げとなって、不都合が生じている。
   b. 一部のパートナーの目標だけに基づいて行動しているものの、誰にも不都合が生じない。
   c. パートナーシップには全パートナーの明確な目標が重要で、パートナーシップで育まれる。
   d. 私たちは（「うちの」や「皆さんの」といった個々の目標ではなく）「我々の」目標だと言えるような、共通で統合された発展的な目標を共有している。

2. 対立 *(Conflict)*：
   a. 対立が認識されないまま、あるいは回避されることで、パートナーに不都合が生じる。
   b. 対立が認識され、根本的な争点は未解決なものの部分的には対応されており、パートナーやパートナーシップには不都合が生じていない。
   c. 対立がパートナーによって首尾良く解決されている。
   d. パートナーシップの新たな可能性を生み出すきっかけとして、パートナーが対立を受け入れている。

3. 意思決定 *(Decision-making)*：
   a. パートナーの中には、全体を巻き込まない形で意思決定を行い、その意思決定が少なくとも一者を不利な立場にもたらすものがある。
   b. 単独ではあるものの、他のパートナーに配慮して意思決定が行われている。
   c. パートナーらは、全体が納得する方法で意思決定を行い、その決定が私たち個々のパートナーに役立つものとなっている。
   d. パートナーらは、可能な選択肢を慎重に検討し、どう決定するかを共に確認し、その決定は、個々のパートナーだけでなく、パートナーシップにも恩恵をもたらす。

4. 資源（重要な物品、時間、経験、資金など）*(Resources[e.g.,material goods, time, expertise, money])*：
   a. 一部のパートナーが他のパートナーから資源を奪う状態、かつ/あるいは、お互いに提供することが適切か検討されていない状態で、その結果、一部のパートナーに不都合が生じている。
   b. 一部のパートナーは、提供する資源を持たないと思われている他のパートナーに、またはそのパートナーの代わりに資源を提供している。
   c. パートナーらは、互いの恩恵のために手持ちの資源を交換している。
   d. 資源をつぎ込むことは公平なことであって（たとえ不平等であっても、それぞれが提供するものは我々が選んだ方法として釣り合うもので）、新たな資源が生み出されており、資源は（「うちの」「みなさんの」ではなく）共通のものだと理解されている

5. 各パートナーの活動におけるこのパートナーシップの役割 *(Role of this partnership in each partner's work)*：
   a. パートナーシップに参加することで、一部のパートナーが活動に支障をきたしている。
   b. 他のパートナーの貢献を通して、一部のパートナーは独特な活動に発展がもたらされている。
   c. 他のパートナーの貢献を通して、全てのパートナーが独特な活動に発展がもたらされている。
   d. パートナーらは、私たちが「我々の」活動とみなすことのできる活動を共創し、その活動を理解し実行するための個別的・集合的な能力が高められている。

6. 自己認識におけるこのパートナーシップの役割(自信、主体性、発言力など)
   (Role of this partnership in sense of self [for example, confidence, agency, voice])：
   a. パートナーシップに参加して、パートナーの一者あるいは複数の自己認識がぐらついている。
   b. 他のパートナーの貢献を通じて、このパートナーシップは、あるパートナーの独特な自己認識への一助となっている。
   c. 他のパートナーの貢献を通じて、全てのパートナーの独特な自己認識が強められている。
   d. 全てのパートナーの自己認識は、（パートナーシップのメンバーとして）連帯感が発展するにつれて深められている。

7. 相互作用の範囲と特質 *(Extent and nature of interactions)*：
   a. 一部の者にとって、パートナー間での相互作用は否定的に捉えられている。
   b. 一部は相互作用の範囲と特質を抑えているものの、パートナーらはその意図に肯定的である。
   c. 相互作用の範囲は、全てのパートナーの発言によって決定されている。
   d. パートナーらが企図する多様で頻繁な相互作用は、私たちの誰もが自分自身で実施しうる物事を超越したものとなり、パートナー（およびパートナーシップ）の成長の支えとなっている。

8. 力関係（別の言い方をすれば、影響力を及ぼす能力）*(Power [in other words, the ability to have influence])*：
   a. 一部のパートナーは、他のパートナーが能力を発揮していることによって、自身の能力が認識できていない。
   b. 一部のパートナーは、他者が示す（一部の）パートナーの恩恵のために自身の能力を発揮している。
   c. 全てのパートナーの能力が束ねられ、全員が力関係が分配される上での公平性を高める権限を持っている。
   d. 全てのパートナーが能力を結集させ、私たちが一人ひとりでも、パートナーシップとしても、能力を発揮する新たな源泉や活用する方法を生み出している。

9. 成果 *(Outcomes)*
   a. このパートナーシップは一部のパートナーに重要な成果をむしばんでいる。
   b. このパートナーシップは（全てではないが）一部のパートナーに重要な成果を個別にもたらしている。
   c. このパートナーシップは全てのパートナーに重要な成果を得る機会を与えている。
   d. このパートナーシップは、個別的かつ集合的な成長を育みながら、全員に個別的にも共同的にも意義のある成果を与えている。

10. 満足度 *(Satisfaction)*
   a. 私たちの大半は、このパートナーシップに不満を抱いている。
   b. 大半はこのパートナーシップに満足しているものの、不満を抱いている者もいる。
   c. 全員がこのパートナーシップに満足している。
   d. 私たちの大半もしくは全員がこのパートナーシップに満足しており、当初の期待以上である。

注：Clayton et al. (2009)を修正（*Note*. Modified from Clayton et al. (2009)）

表3-1と表3-2とを比較してみれば、TRES1とTRES2の共通点と相違点に気づくだろう。まず、共通点は関係性の現状と理想像の双方について回答を求めていることが挙げられる。一方、相違点についてはTRES1が9つの領域ごとに必要な選択肢が検討された上で示されているのに対し、TRES2は10の領域に全て4つの選択肢を提示する構成とされている。また、各領域のラベルについても、TRES1は質問紙調査として質問文の文体が取られているのに対し、TRES2では各領域を端的に表す単語のみで表現されており、回答者がより直感的にサービス・ラーニングの実践を振り返りながら現状と理想像に思いを巡らせることができるようにしたと想像できる。

今回はTRES1とTRES2の項目の相互比較のみに留め、Kriffinら(2020)で示されている使用結果については次回にて取り上げる。なぜなら、その相互比較表（Kriffin et al., 2020, pp.12-14）では、(1)調査票の使用例（誰が何のため

に回答したか）、(2)使用対象（SOFARのどの関係性について検討したか）、(3)位置づけ（実践の振り返り・研究・診断的評価、これらの複合など）、(4)目的（関係構築、知見の導出、ツール開発、ツールの改良、ツールの普及、プログラム能力開発、プログラム能力向上）、(5)詳細と意義、これらについて、TRES1では3事例、TRES2では6事例を紹介している。これらにより「心理学的に検証された尺度ではない（not yet a psychometrically validated scale）」ものの、「E-T-T連続体上の関係領域の代表的かつ適切なサンプルを有している（adequate sample of relationship domains on the E-T-T continuum)」こともあって、「内容的妥当性がある（has a representative）」と記したと受け止められる（Kriffin et al., 2020, p.9）。

4. 共通認識のもとでの集団意思決定へ

以上、今回は前回紹介したClaytonら(2010)による報告では、教員による地域への視点に力点を置いた調査だったことを踏まえ、その続編であるKriffinら(2020)の報告をもとに、教員だけが牽引しないサービス・ラーニングが展開されるための知恵を求めることにした。TRES1とTRES2は、調査票の設計と表現を比較しただけでも、互いの趣向の差異を見てとることができる。筆者の関心に即して表現するなら、TRES1は研究者らの「わかりたい」という思いが、TRES2は研究者らの「よくしたい」という思いが、それぞれ反映したものではなかろうか。もちろん、両者に優劣はなく、TRES1ではいかにして大学が地域に貢献できるかを可視化・数値化できるかに向き合った成果であり、TRES2では教員のみならずSOFARで示されるサービス・ラーニングの5種類の構成員が自らの振る舞いそのものだけでなく関係者間での相互作用の有無とその動態についての省察を促すものとして仕上げられている。

調査票としての趣向が異なるとしても、TRESは1も2も「現状」と「理想像」との相互比較をするという共通点があることは、サービス・ラーニングが大学側の、また学生側で自己完結した思考と実践に留まってはならないことに改めて注意を向けてくれる。折しも、2023年1月15日に3年ぶりで対面にて開催された立命館大学のサービス・ラーニングによる正課科目「シチズンシップ・スタディーズ」の活動報告会の際、その資料集として配布される中に「自己完結せず、満足しつつ、地域に貢献を」と題した小文を収めさせていただいた。自主性・自発性が求められるからこそ、時に受講生たちは現場から求められる「すべき」ことと、自分たちが「やりたい」ことの双方を実現しようと試みる。しかし、「やりたい」ことを優先してしまうと「すべき」ことが軽視され、一方で「やりたい」ことが「やり遂げよう」とするときにはそれがチームのメンバーでの総意ではなく、一部のメンバーの思いが先行し「私たち」の活動にならないこともある。

立命館大学の「シチズンシップ・スタディーズ」では、現場でのオリエンテーションを経た事前学習で目標設定を行い、中間ふりかえりで目標の再設定を行い、事後学習で目標に対する相互評価を行うことで、活動が自己完結しないように促している。現場の方々は受講生の意思決定を尊重いただけるため、受講生の思いを最大限に尊重しつつ、その姿勢や態度を寛大に受け止めていただけるものの、使命感や責任感が強い受講生ほど、思い入れが思い込みとなる場合がある。そこで筆者は「皆さんはそれでいいとしても、それが何になるのか」と介入することがある。そのとき、一部の受講生からは議論や活動が止められたことへの不快感を「こんなにがんばっているのに」と言わんばかりの表情で示されることがある。

ここに、冒頭で示した「解決をめざすと続かない」という現場と、地域社会と共に「何をめざして取り組むのか」を結ぶ上で，少なくとも大学の教育実践を展開する上でのヒントがあるのではなかろうか。それは学生が「すべき」ことと「したい」ことと「できる」ことを結ぶ、ということである。学生の現場への関わりは単年度、セメスター単位かもしれないが、大学と地域との関わりは交流的から変容的へと、継続的かつ発展的に展開することも可能である。そこには日常生活を送る住民の存在も、学生の活動環境を整える大学の執行部や事務局の役割も不可欠であり、そうしたパートナーシップのよ

りよい形を探るためにも、次回はTRES1とTRES2との相互比較を通じて得られた知見を紹介し、サービス・ラーニングにまつわる構成員が地域やプログラムのあり方について共通認識を抱き、よりよい地域へと導くための集団意思決定の大切さを確認することとしたい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

Ash, S. L., and Clayton, P. H. 2009. Learning through Critical Reflection: A Tutorial for Students in Service-Learning (Instructor Version). Raleigh, NC. PHC Ventures.

Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.

Bringle, R. G., & Clayton, P. H. 2013. Conceptual frameworks for partnerships in service learning. In P. H. Clayton, R. G. Bringle, & J. A. Hatcher (Eds.), Research on service learning: Conceptual frameworks and assessment (Vol. 2B: Communities, institutions, and partnerships, pp. 539–571). Stylus.

Clayton, P. H. Bringle, R. G., Senor, B., Huq, J., Morrison, M. 2010. Differentiating and Assessing Relationships in Service-Learning and Civic Engagement: Exploitative, Transactional, or Transformational. Michigan Journal of Community Service Learning. Michigan Journal of Community Service Learning, 16, 5-22.

Kelley, H. H., & Thibaut, J.W. (1978). Interpersonal relationships: A theory of interdependence. Wiley-Interscience.

Kniffin, L., Camo-Biogradlija, J., Price, M. F., Kohl, E., Williams, J., Del Conte Dickovick, A., Goodwin, A., Johnson, K. V., Clayton, P. H., & Bringle, R. G. (2020). Relationships and partnerships in community– campus engagement: Evolving inquiry and practice. International Journal of Research on Service- Learning and Community Engagement, 8(1), Article 15.

【注】

[1] 本連載では第20回の初出時を含み、第22回・第23回でもTRES（Transformational Relationship Evaluation Scale）の訳を「変革的関係評価尺度」としていたが、今回のKniffinら(2020)の解題を通じて、改めてE-T-T連続体との関連づけが確認できたため、以後「変容的関係評価尺度」と訳出して使用していく。

[2] なお、Kniffinら(2020)では、こうしてBringleら(2009)の論文の要約や簡略化に加えて、新たな語用も提示している。実際、SOFARにおいてステイクホルダー間の3者間以上の関係性を取り扱うときにrelationshipやpartnershipでもなくnetworkという表現を用いる（we have chosen to reserve the term network for those relationships that are more extensive than a triad）」を示している。なお、SOFARモデルは、当初のBringleら(2009)はもとより、TRESを紹介したClaytonら(2010)でも、さらには専門書に収められたBringleとClayton(2013)でも、S-A-R-O-Fの順であったが、Kniffinら(2020)ではS-O-F-A-Rの順で配置されている。

[3] 第20回の注1では、AshとClayton(2009)において示された地域（コミュニティ）に対する大学（キャンパス）の構成員を「教員と学生」に分けた3者関係を、Bringleら(2009)では大学を「管理者、教員、学生に区別すること」と地域を「組織」と「住民」に分けられた背景について、原文を引用して示した。ただ、Kniffinら(2020)では、BringleとHatcher(2002)にて、後に「正式にSOFARモデルとされる（to formalize the SOFAR model）」5つの構成員について「明示した（clarified）」と述べている（p.5）。具体的には「キャンパスとコミュニティのパートナーシップは、キャンパススタッフ、教員、学生、地域に根ざした組織のスタッフ、住民自治組織の利用者や多様なコミュニティを持つ住民ら、これらによって形成される社会的ネットワークを形成する複数の二項関係を伴う（campus-community partnerships involve multiple dyadic relationships that create social networks of campus staff, faculty, students, staff from community based organizations, clients of community-based organizations, and residents of various communities）」（p.513）とある。

[4] transactionalは「取引的」と訳出するのが自然かもしれないが、サービス・ラーニングのパートナーシップでは親密性・公平性・誠実性の3つの特徴が反映するものという観点から「交流的」としている。ただし、これは本連載第10回で紹介した、ミネソタ大学のアンドリュー・フルコ先生が2019年7月27日に立命館大学での講演時、筆者が日本語を併記する際からの一貫した工夫である。その際にはサービス（活動）とラーニング（学習）とのあいだでの双方向の矢印の太さに着目し、連載第8回のタイトルにも掲げた「中道を行く（balanced approach）」という観点からの工夫であった。なお、フルコ先生の講演内容に基づいたパートナーシップに関する議論は第12回にて紹介したので、改めて参照されたい。

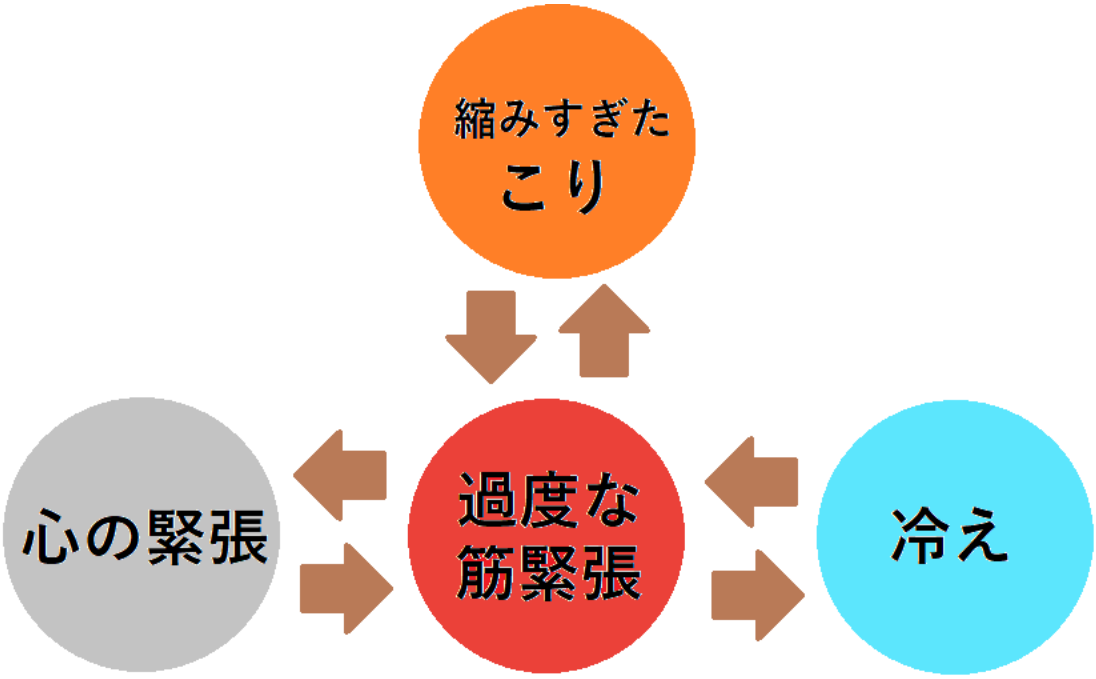
[5] ちなみにBringleら(2009)では、「人間関係の相互依存性理論」について、社会心理学者のハロルド・H・ケリーとジョン・W・シボーによる研究（Kelley & Thibaut, 1978）を筆頭に挙げている。なお、表2として訳出したとおり、結果として、TRESの5段階評価の平均値は、交流頻度が低いほど、相互作用の多様性が低いほど、そして相手の意思決定に貢献する関与が低いほど、有意に低かったことが明らかとされた。この結果を反転すれば、高い頻度で交流し、多様な形態での相互作用がもたらされ、大学側からも地域側からも互いの意思決定に積極的に関与し貢献していくことが、変容的関係への発展と維持がもたらされうることがわかる。

[6] Kniffinら(2020)では、TRESの簡略版を未公刊の資料として「Clayton, P. H., Janke, E. M., Hess, G., & Bringle, R. G. (2009). Transformational Relationship Evaluation Scale, II [Unpublished document]. PHC Ventures.」と紹介している。

佐々木雄二先生のこと

JR 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

前の２２号で、
「縮みすぎたタイプのこりと過度な筋緊張、心の緊張、体の冷えは相補的な関係にあります。
反対に、心の緊張を少なくすると、過度な筋緊張も少なくなり、こりが減りやすくなります。
次回はそんな話を書いてみたいと思います。」
と書きました。



今回は、心の緊張をとく方法として、自律訓練法というとても良い方法があること、そして、日本での自律訓練法の普及に貢献された佐々木雄二先生のことを書くつもりでした。

しかし実は今、息子が離婚調停を申し立てられています。息子を支えるので精一杯で、自律訓練法については原稿を書けそうにありません。

２月２２日、息子の妻側から申立書が届き、その内容に怒りがこみ上げました。夜、布団に入っても、いつまでたっても眠れません。
そこで、眠れないのなら自律訓練をしようと思いました。でも、どうしても意識が息子のことにいってしまい、うまくできませんでした。

「佐々木先生ならこんなときどうされていたのかなあ」
そう思いながら、体をストレッチしてみたり、公式（自己暗示の言葉）を心の中で繰り返してみたりしました。
時間ばかりが過ぎていき、とうとう一睡もできずに朝を迎えました。

もう、今回の対人援助学マガジンの原稿は休ませていただこうかなあと考えていたら、佐々木先生の奥様から電話がありました。
そして、昨日先生が亡くなられたと知りました。

病気になって１４年間、最近は漫才みたいな会話をして笑うことが多かった。でも、体調を崩してから食事がとれず、最後は食べることを拒んで、潔く、きれいに旅立った。亡くなる前に、催眠医学心理学会の学会賞受賞を知らせていただけたのが良かったーーー
と教えてくださいました。

私：「実は、息子が離婚調整を申し立てられていて、昨日は一睡もできず、自律訓練をやってみたけれど、それでも

眠れなくて、先生ならどうされていただろうと、佐々木先生のことを思い浮かべていたんです。一睡もできなかったのは、何か虫の知らせもあったのかもしれません」
奥様：「主人もよくストレッチをしながら、自律訓練をしていましたよ」
私：「えっ、先生もストレッチをされていたのですか。それは初耳です。たしかにストレッチをすると自律訓練がうまくいきやすいんです。でも昨日はストレッチしても眠れなくて・・・」
奥様：「寺田さん、子どもさんの離婚のことで気に病むことはないですよ。〇〇先生も、お嬢さんが妊娠中に離婚することになって、ほんとうにつらかったそうですが、今は孫と暮らすことができて幸せだとおっしゃっていますから」
私：「〇〇先生もおつらかったでしょうね。私も孫と暮らせるように頑張ります。私が奥様を励まさないといけないときなのに、私のほうがはげまされてしまって、申し訳ない気持ちです。いつも佐々木先生には励ましていただきました。いまこうしていられるのは先生のお陰だと、本当に心から感謝しています」

佐々木雄二先生は大学時代の指導教官で、とてもやさしくておだやかな先生でした。私に自分のやりたい研究をさせてくださいました。
卒業前、私の書いた性的マイノリティーに関する論文を通すべきかどうか教授会がもめたそうです。そのとき佐々木先生がかばってくださったおかげで、私は卒業することができました。それは佐々木先生からではなく、卒業後何年かして別の先生から教えてもらいました。

出版社に勤めていたとき、『臨床心理学辞典』を作りたいので、監修してくださいませんかとお願いすると、快く引き受けてくださいました。
しかし出版社を退職することになり、企画を途中で投げ出すことになりました。先生はそんなときでも少しも怒らず、次の仕事を頑張りなさいと励ましてくださいました。

ある心理療法センターで、心理カウンセラーになりましたが、収入が不安定だったため長続きしませんでした。
心理療法センターも退職し、柔道整復師の学校に行きながら、細々と心理療法も続けることにしました。
佐々木先生に事情を話して、心理療法ができる面接室を探していますと伝えたところ、大阪で開業されている知り合いの先生を紹介してくださいました。

接骨院の開業前に「仕事がうまくいくことを祈っています」と添え書きして送ってくださった先生の著書➡は、私の宝です。

開業後、先生が大阪に来られたとき、宿泊先におじゃましたことがありました。肘が痛むとおっしゃって施術させていただいたことが貴重な思い出です。

催眠医学心理学会で発表したときも、正面の席でニコニコと頷きながら聴いてくださいました。
佐々木先生がかけてくださった言葉で、自信を持つことができ、胸を張って生きてこられました。
ご病気になられてから、もう一度ご尊顔を拝しに伺いたかったのですが、ご病状や新型コロナ流行のためにかなわず、心残りです。

個人的なことしか並べられませんでしたので、佐々木雄二先生の業績を他の先生がまとめられているページへのリンクを貼らせていただきます。

http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/29214/rsr009-02.pdf
偉大な先生なのに偉ぶったところはひとかけらもない、そんな謙虚で誠実なお人柄のお医者様であり、先生（教育者）でした。

私も先生を見習っているつもりでしたが、息子たちを信じてやれず、怒ったことがしばしばありました。
アンガーマネージメントを学んだらと息子に勧めましたが、必要だったのは私でした。
これからは息子を信じて、一緒に離婚調停と裁判を闘っていきます。息子や孫と暮らせる日を信じながら。

闘いが終わったら、アンガーマネジメントやアサーションを学ぼうと思います。

佐々木雄二先生

たくさんの励ましと　やさしいお声と笑顔
ありがとうございました
日本の心療内科と臨床心理の発展にご尽力され
また長年のご闘病　たいへんお疲れさまでした
ゆっくり　お休みください
不肖の教え子で末席をけがしていたと思いますが
先生のゼミに入れてもらえたことが誇りです
ご冥福を心よりお祈りしています

寺田弘志

今回は自律訓練がうまくいかなかった話を書いてしまいましたが、次は、自律訓練法のおかげで私の肩こりが良くなった話を書きたいと思います。

ではまた

現代社会を『関係性』という観点から考える

㉓　自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

連載 14 では**『「開く」ことと「閉じる」こと』**について書かせていただきました。

その後、連載 15 では**『つながりが支えるこころ』**と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となり社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、**『「見える」ことと「見えない」こと』**という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、**「地域社会」との「関わり方」を考える**というタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、**「地域社会」で生きるということ**、について考えてきたともいえます。また、現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。これに関しては連載 19 で**「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ**というタイトルで問題提起をさせていただきました。連載 19 回では**「自分は誰かとつながっている」という感覚**を持つために私が必要だと痛感している**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**について、連載 20 では、**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**というタイトルで、コロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について、連載 21 では、**Society から Home へ矮小化していく社会**について述べさせていただきました。

連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も、自身の専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだこと、触発されたことをこの連載原稿に落とし込んでいきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」についてというテーマで、現在議論されている地域包括ケアシステムの在り方について私論を述べました。

連載 24 回となる今回は、**自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ**というタイトルで、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、

「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながることなどについて、私見を述べさせていただきます。

連載原稿として一定の一貫性は保持したいと考えており（現代社会における関係性に関する考察という観点を大切にすることが主目的）に冒頭で振り返りが必要と考えており、連載 14 以降、これまでの連載をまとめる短い文章を記載していることを御了解ください。

1　「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎないということ

知識として単に「知っている」「聞いたことがある」というレベルではなく、自分自身が主体的にその事象に関わっていくなど体験を通し、より「深く理解している」物事というものは、いったいどのぐらいなのでしょうか。

個々の人間がそのために費やすことのできる時間、「深く理解する」「それを記憶する」ことに要するワーキングメモリーともいうべき部分にもおそらくは制限もあるであろう（脳科学に関しては素人なのでこうした表現が正しいかわからないのですが）ことを考えると、**「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎない**ということについて、私達人間はより自覚的である必要があり、それが社会で生きていくうえでの謙虚さや他者への気遣い、社会課題への積極的関心につながっていくのではないかと考えています。

それならば、**「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎない**と自覚するによって、初めて自発的に「より深くこの世界を知ろう」という動機付けがなされるのであろうと思われますし、何よりも「自分に知らない世界がある」ということを「知っている」（自分の無知を知っている）ことは、例えば「自分の知らないことを知っている人」と話し合う際に、相手のことを尊重することにつながると考えています。

援助専門職の分野でも、昨今とみに専門分化・多様化が進展していく傾向が強くなりつつあると感じられる場面もあり、ならば一層この点について自覚的であることが、いわゆる「知らないがために適切な支援ができない」「他機関（多機関）と有機的な連携ができない」と理由で、支援を必要としている人にとって不利益な事態を招きかねないと考えています。

もちろん、人間は神様のように万能でもないので、全てのことを自らの体験に落とし込みその本質を深く知り得るということは、まずなし得ないでしょう。少なくとも私の場合は到底難しいと考えます。それならば、「知らないこと」に直面した際、自身が「知らない」ことを必死で隠そうとしたり、「知らない」ことを指摘された時に体面を潰されたと感じたり、「自分の知らないことを知っている人」に対して、マイナスの感情（嫉妬など）を向けたりするのではなく、その時点で「知らないことについて、体験と理論の双方で理解している現場の方に教えていただく」ということが大切ではないでしょうか。

2　「相手と自分との違い」を認め合わないことが、争いや円滑な連携阻害のもとになる

小は一対一の人間関係から大は国際紛争に至るまで、解決の糸口がつかめない原因というのは、実は標記にあるのではないかということを、改めて考えさせられる機会が、私自身にもあります。

私が従事する刑事政策、なかでも更生保護に関する業務は、もともとは民間篤志家

の善意の活動に端を発し、保護司や更生保護女性会等多くの更生保護ボランティアの方に支えていただているものでもあります。何より、非行や犯罪を行った人で立ち直りを真剣に考えている人々の社会復帰に際しては、地域の方々の理解と協力が不可欠です。私自身、こうした啓発広報のため、地域社会や大学・大学院等、職能団体などで様々な講義やゼミなどを担当してきました。

しかし、その一方で、事件発生当時は大きく報道され、被疑者逮捕時や被告人の裁判時にも新聞その他の紙面を賑わす事件であっても、加害者や被害者の「その後」を知る機会はけっして多いとはいえません。特に少年院に出向した折には、少年矯正を含む矯正分野については、漫画や小説等のフィクションにおいて事実と異なるデフォルメが目立ち、それに触れた方々から様々な誤解に直面しました。

更生保護については、矯正の分野に比べて配置されている国家公務員の数も少なく、全国の官署の数も少ないため、広報（ただ知ってもらうだけではなく、理解者や協力者を増やしていくという Community Relations）必要性を痛感する場面も多々ありました。

個人的なことになりますが、私が社会福祉士や精神保健福祉士の資格を取得し専門職として活動していることの理由の１つとして、更生保護を含む刑事政策全般について福祉の世界で働く方々に正しく知っていただきたいと考えていること、そして、法務省の施策とは異なり、都道府県独自の施策展開がなされていくことも少なくなく福祉行政について、私自身も積極的に学びたいと考えたことです。

職能団体では専門委員会に所属し定期的な例会に参加し、そこで討議に参加したり、毎期違ったテーマで講師を招いて勉強会を行っています。そのたび実感するのは、対人援助職というものは、個々の経験は自分の中で大切に蓄積していく一方、知識を貯金のように考えて「貯金」だけで仕事をすることはできず、常に貪欲に自分の専門領域や隣接他療育の動向を知る、できれば実際に働いている方かその体験を聞き理解に努めることが必要であるということです。

私は周囲の御理解もあり、双方の国家資格で職能団体において「認定」という専門性の証明を得ることができましたが、これはただ専門性の証というだけではなく、生涯にわたって学び続けることを自らに課すものでもあると考えています。「認定」更新申請の時期に仕事や家庭の様々な事情が重なると非常に繁忙になるため、単に国家試験に合格をするだけではなく、「認定」を得てからの日々がより学びという意味ではシビアだと実感しましたが、自分が得た知識や資格に甘んじるのではなく、「学び続ける」という行為のその中にこそ、社会をより深く知りそして考えるという機会も当然ながら少なからず含まれていると感じます。「知らないこと」の存在を知り、「資格があるから」という慢心を排して謙虚に対人援助の仕事に向かい合うことを常に心がけています。

刑事政策の業務に携わっていると、「怖くないの？」という質問もよく受けます。特に大きな事件が発生すると、刑法犯認知件数も刑務所の新規受刑者などもピーク時代の平成半ばに比べて大きく減少しているにも関わらず、いわゆる「体感治安」が悪化するのか、そういった質問が出ることもあります。「無知と無縁は人を歪ませる」という言葉は北九州で NPO 法人「抱撲」を運営されている奥田仁志氏が多くの論文等で強調されている言葉ですが、我々更生保護行政に携わっている者も積極的に大学や地域において、更生保護出張講座等の形で、刑事政策の流れ、更生保護の役割を知っていた

だくように努めています。実際にこうした機会を契機に、更生保護の仕事について更に理解を深め、更生保護の職域で働いてみたいという人もいます。

しかしその一方で、「私ならとてもできないわ」「なんでわざわざこんな仕事についたの」と言われることも経験しました。初対面でいきなりそうした質問をされる方は、おそらく何らかの生きづらさも感じておられるのだろうと思いながら、「御自身が怖いと思っておられることも、嫌だと思っておられることも、それに敢えて従事する人々がいてこの社会は回っていますし、貴女自身の安全も保たれているのではないでしょうか」と私がにこやかに～自分ではそのつもりでしたが～お返した言葉で彼女の表情がみるみるこわばるのが分かりました。この後、彼女の御主人から笑いを含んだ声で「さぞ驚かれたころでしょう。」と電話がかかってきました。「あなたと同じ年齢でも社会経験が少ないためか、つい思ったことを言ってしまうのです。」と「お詫び」をされたのです。私は、「怖いと思われるのも当然でしょうし、こうした言葉をお伝えすることも正直躊躇われましたが、お子さんもおられる場で、親御さんがこうした発言をなさることはいかがかと思われましたので。当方こそ失礼いたしました。」と(電話に向かって)頭を下げました。「社会経験が少ない」という一言で話を丸めるのもどうかなあと思いつつ、その場は収まりましたが、その後のおつきあいの場面でも、なかなかに難しいなと感じることが重なりました。「自分の知らないことには関心を持たない」ことは、援助専門職として生きていくという境遇になくても、自らの生きる世界を狭め、相手も自分も社会的に(年齢相応の役割を)要求される役割を果たせなくしんどくなることも多いのだとその後実感することになるのでした。

多様性という言葉が昨今多く用いられていますが、相手との違いを認め合うこと、厳しいご時世だからこそ利他の気持ちを持つことが、今の時代を生きていくための鍵になるとも昨今考えています。

3　援助専門職の「資格」を、チームでの支援に役立てるために

社会福祉士、精神保健福祉士等は、様々な分野に配置されています。特に、精神保健福祉士については精神科病院等よりも行政機関における配置の割合が増え、長年馴染んだ PSW（Psychiatric　Social worker）という英語表記も、令和 3 年 4 月からは MHSW（Mental　Health　Social　Worker）に変更されました。更生保護においても、医療観察制度の導入に伴い、PSW（現 MHSW）の有資格者で一定の実務経験を要する方が社会復帰調整官として多く更生保護の業界に職員として入職され（それ以外も社会福祉士、看護師・保健師、臨床心理士（公認心理士)、作業療法士等の有資格者で一定の実務経験を有している方もおられます)、私自身も PSW（PHSW）の仕事ぶり（特に地域の諸機関との連携）に大きな刺激を受けたものです。結果的に 30 代で精神保健福祉士養成課程通信課程（短期）で学ぶことになりましたが、実務経験 30 年近い方、セカンド・キャリアとして学びを深める方々も参加されており、資格取得のための学習だけでは得られない経験に基づく知恵の多彩さに、多くの刺激を受けたものでした。

当時はまだ保護観察官経験者でも実習に参加することが必要でしたので、仕事を前倒しに片付けて年次休暇を取得して実習に参加しました。受入れていただいた事業所さん（就労継続支援 B 型）は、実習生の受入れにあたって、実務経験が長い社会人の受入れを希望されており、若いスタッフの方と実習生とが、様々な場面で真剣に協議することもありました。私は実務経験が自分より更に長い男性のとペアで実習

で参加しましたが、利用者さん同士のトラブルにさりげなく介入してごく自然に納めたり、利用者さんを尊重しながらふるまう彼の姿に、多くの学びを得たと思っています。こうしたこともあり、資格取得後、職能団体が企画する、自分の業務とは敢えて異なる職域で実習をする機会に参加することに手を挙げました。これまで業務として知っていた「精神科デイケア」等の現場に身を置くことや、そこで聞く当事者やスタッフの方の話は、ケア会議や協議会とは当然異なり、より具体的で本音を聞くことができました。私自身はこの実習を通して、「(知識として) 知っている」ことが「(ささやかだが) 体験として腑に落ちる」とは差異があることを実感しました

ただ、その一方で、「資格」の有無が、チーム支援の円滑さを欠いてしまっているのではないかという場面にも遭遇しました。たとえば、専門職と地域の民間ボランティアが同じ支援チームで動く場面も少なくありません。しかし、専門職の、これもごく一部の方ではあると私は思いたいのですが、地域の民間ボランティアの方々について、「地域の普通のおっちゃん、おばちゃん」「資格も持っていないから専門性がない」と研修会の場で公言され、これに対し、「まさしく私なんて地域のおばちゃんですねえ」と、地域で知らない人はない先駆的な事業を行っている事業の立ち上げ人として活躍されている方が応じられるという場面に出会ったこともあります。

社会福祉士等は、あくまで業務独占ではなく名称独占の資格です。たとえ資格を持っていなくても、その地域社会に生活者として根を下ろし (ここで様々な役割を担い絶大な信頼を獲得されている方も少なくありません。生活者として地域社会で生きる中で得た経験や智恵も、単なる資格のための勉強などでは到底得られないものです)、地域の社会資源に通じ豊かな人脈を生かし、経験の浅い、あるいは異動してきたばかりで地域性について疎い専門職より、当事者の支援や地域課題の解決を成し遂げる活動を展開されることもあります。

本誌編集長が「木陰の物語」で述べられたように、今は「資格社会」です。一方、社会福祉士や精神保健福祉士についても、資格取得がゴールとなってしまい、実務経験がないままいきなり専門職を名乗り資格を持たない援助職との差別化を自ら図ろうとする方もおられます。また、いわゆる「独り職場」への配置もありえます。一方で、学びを得る場としての職能団体への加入率は社会福祉士・精神保健福祉士ともに決して高くはありません。

資格取得は単なるスタートに過ぎないと私は考えています。また、実際の社会資源を知り、多機関連携などを学ぶということについては、やはり実務をこつこつ積み上げていくことに勝るものはありません。特に、当該分野での実務経験がない方については、しかるべき指導員のもとで実際の現場連携を重ねるような仕組みが必要ではないでしょうか。

3　「専門職としてのプライドに賭けて」

ある時私は、精神障害を持つ方の地域移行に関する業務にチームを組んで業務をすることになりました。私自身が全体のコーディネートをしながら、地域の各事業者や担当者が業務を分担しつつ移行のタイミングを図ることになりました。諸般の事情があり、対象者が現在居住している施設は閉鎖までの期間が迫っているなかで、グループホーム入居に関する調整を担うスタッフが一番の重責を負っていました。彼女は私よりも年上で実務経験も長いベテランでした。

しかしこのケースの地域移行は、グループホームの入居時期が再三変更され、チームメンバーから確認されるたびに、担当である彼女からは「多分●●頃」という感じで、ケア会議のたびに入居時期の延期が報告されることが重なりました。

この方は持ち前の明るさで、当事者の方との距離を縮め、物事が支障なく進んでいる時にはまさに弾むように仕事ができる方でした。しかし、その一方で、「見込み」「期待」で発言される傾向があり、この時も、緻密な調整・確認よりも、見込みで期日を報告してしまうことが一度ならず続きました。しびれを切らした別のメンバーから、「そうおっしゃる根拠は？」と確認され、そこで彼女が述べたのが上記の言葉でした。

専門職としての自負に賭けざるを得ない決断というのは確かにあると思いますし、春日武彦先生の「初めての精神科」（第２版）でも、施設入所を拒否した高齢者女性を、「このままでは死んでしまう」という判断で入所させ、結果的には当該女性は施設内であたたかな暮らしをされて亡くなったというエピソードにこの言葉が添えられています。

ただ、こうした事務手続的な瑕疵を指摘されて、それを標記のような言葉で返すことは、瑕疵を指摘した方や支援チームへの明確な回答にはなり得ません。結果的に、グループホームに新たに防災設備の設置をする必要がありそれには時間を要するし見込みが立ちづらいということも判明し、結果的に、当事者の方の治療が断続的で成人期を前に服薬などの再確認も要するということで、現在入所しているところから帰る場所はあくうまで当該グループホームとしながらも、施設退所後は服薬調整も兼ねていったん入院し、グループホームについては見学・外泊などのプロセスを経て施設移行を行うこととなりました。結果的には、服薬調整などもでき、かつ、入院による多角的なアセスメントにより治療方針や退院後の生活設計などもより具体化しました。彼女ができない事情を正直に述べて、そこで皆が考えて次善の策を練るという体験をしたことで、彼女自身も自分の「矜持」について、考え直すきっかけになったということを聴きます。

4　自分が「知っている」だけの世界生きることの危うさ

結論から申せば、資格や国家試験に合格しただけでできる仕事など、殆どないのではないでしょうか。ましてや対人援助の業務に長く携わっていると、生活者としての地に足のついた社会経験など自分の生き様が問われるような心持ちになることがあります。制度等を緻密に知っていることも無論必要ですが、それをどのように活用していくのか、場合によっては自分の職域を御存じない分野との連携、自分が相手の職域を御存じない分野との連携もあり得ますので、自分が「知っている世界」に閉じこもらず、経験だけに甘んじず、自分の経験と知識をブラッシュアップしながら支援の質を高めていくことが重要であると考えています。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

迫　共（比治山大学）

⑲　『母は汚屋敷住人』

掃除や片付けが得意な人もいれば、苦手な人もいます。筆者は片付けが苦手で、放っておくと部屋がものであふれかえります。本や服が大量にたまり、使わないのものなのに処分しようとすると、不思議な罪悪感が出てきて、全然はかどりません。

高嶋あがささんの『母は汚屋敷住人』（実業之日本社、2015）は、汚部屋どころか家や庭まで使わないものであふれさせてしまう母親との闘いを描いた実録エッセイ漫画です。

あがささんは弟と父親、母親の 4 人家族ですが、父親と弟は父親の実家に別居、あがささんも大学時代から会社員を経て漫画家になるまで別居していたようです。

漫画家は自宅での作業が長いもの。「実家に戻れば家賃負担が減る」と考えて、母親だけが暮らしていた「汚屋敷」での同居を自ら提案したのでした。実家を離れて数年が経ち、「時とともに母の片づけられなさを甘く見るようになっていた」と書かれています。「この選択が結果的に家賃よりも高いツケを払うことになるとは気づくはずもなく…」（pp.18-20）。

10 年ぶりに戻った実家には冷蔵庫が 4 つありました。大型 1 つ、中型 2 つ、小型 1 つ。大型と中型 1 つは壊れています。さらに庭先にも壊れた洗濯機が野ざらしに…。引っ越しサービスの不用品引き取りで冷蔵庫（中型とあがささんのもの）、洗濯機（壊れたものとあがささんのもの）を処分してもらうと、引っ越し代より処分費のほうが高額に。（略）実家のあらゆるものの寿命が過ぎていることに気づいたあがささん。「業者が通れるように廊下と玄関のゴミ、整理して捨てよう」と言うと、母親は「全部使うものだから、捨てる物なんて無い！」とものすごい剣幕で怒ったのです。（第 1 章「汚屋敷育ちの娘、実家に帰る」pp.24-36）

ゴミ屋敷の住人たちは、他人の目には必要のないもの、明らかにゴミでしかないようなものまでをもため込んでしまいます。そして家族や近所の人などが捨てようとすると激怒するのです。「全部使うものだ」「勝手にさわるな」と。一見、マニアックなコレクターのようですが、コレクターが愛好者たちの中で価値が認められたものを集め、たいていはきちんと整理して保管するのに対して、ゴミ屋敷の住人たちは、実際には価値がなさそうなものを集め、しかも整理ができないことが多いのです。

本人が「大事なもの」と呼ぶものの上にまた「大事なもの」が積み重ねられ、しだいに生活スペースが「大事なもの」で埋め尽くされます。本人の生活の妨げになったり、怪我や火災のもとになったりする場合もありますが、それでも「大事なもの」を捨てることに大きな抵抗があるようです。整理を薦めるとひとまずは頷くものの、右のものを左に動かすだけだったりします。

近年、この状態には「ホーディング障害（ためこみ症）」という名前がつけられました。2013 年の DSM-5（米国精神医学会による「精神障害の診断・統計マニュアル」）に初めて記載されました。

ホーディングの原因は様々あると考えられています。強い抑うつや不安感、ADHD や自閉スペクトラム症などの発達障害、認知症、強迫性障害、統合失調症などとの関連を指摘できる場合もあります。

研究者のスティケティーとフロスト（2007）の記述を筆者なりにまとめると、ホーディングに関連する要因として、①虐待や喪失体験をはじめとする「家庭環境や遺伝的要因」、②見えるところに置かれていないと認識できないなど、「情報処理の問題」、③ものに対して、自分のからだの一部のように感じるなどの「愛着の問題」、④ものが溜まっていることに安定感を感じ、処分することに拒否感をもつなどの「感情的反応」、⑤ホーディング行動を繰り返すことで自ら身につけた「問題のある学習」の 5 つがあげられます。

『母は汚屋敷住人』から 5 つの要因について考えてみましょう（あくまで作品中の描写をもとにしているので、断定的なことは言えませんが）。

あがささんの母親の「家庭環境や遺伝的要因」について、じつは実家にも新婚時代の家にも「お手伝いさん」がいたそうです。祖父が早く亡くなり、祖母が働いていました。しかし、同じ境遇の叔母はちゃんと家事ができるので、あがささんは「本人の資質だという結論」に至りました（pp.74-75）。

母親は階段に物を置く癖があります。それも段の端ではなく真ん中に。また押し入れの中身を捨てても、手前にダミーの荷物を置いておけば気づかないようです（pp.41-42、P.52）。こうした特徴から「情報処理の問題」は何らかありそうです。

あがささんが 10 年間ネズミにかじられ、糞まみれになった母親の靴を捨てると「直して使うんだよ！」とキレられます。他にも、捨てたはずの自宅のゴミを母親が持ち帰って散ら

かしなおし、「なんでお前は勝手に捨てるんだ！」と激怒する場面も描かれています(pp.80-81、pp.92-93)。

客観的にはゴミにしか見えないものでも、母親にとっては大事なものなのです。大事なものを勝手に捨てられると怒る、というのは理解できなくはありません。ただ、それはゴミであって使えないもの。何らかの「誤学習」が繰り返された結果、独特の認知と行動のパターンが出来上がっているようです。「愛着の問題」「感情的反応」「問題のある学習」についても絡み合っているように思えます。

片づけ始めて２年――トラック数台分は軽く捨てたと思います。腐った物、カビが生えた物、黄ばんだ物…しかし捨てる倍のスピードでゴミが増えます。この時、私はようやく気づいたのです。この人（母親）は片づけたくない人なのだと。（略）ありとあらゆる手を使いましたが、この人にとっては何十年分の物に囲まれることが「幸せ」なので、無駄なのです（第３章「片づけられない母 VS 片づけたい娘 決着!!」pp.94-96）。

あがささんが母親に対する認識を新たにした頃、母親は、あがささんの飼い猫にストレスをぶつけるようになります。それに耐えかねたあがささんは、父親と弟の住む家に、逃げるように引っ越しをします。「もし母が倒れて孤独死したらと一瞬頭をよぎりもしましたが、ここまできたら、母自らが招いた結果だと思うしかありません」(P.99)。

ゴミ屋敷の住人のゴミを整理しよう、捨てようとすると、かれらと戦うことになります。それが親であれば、子どもはいわゆる「毒親育ち」になってしまうこともあるでしょう。家族や身近な人の立場でかれらと戦うことは、心と身体の健康を損なう可能性があります。家族だから、近所の人が迷惑だからというのは大事な心がけではありますが、家族や身近な人だからこそ難しい問題があるように思います。

ホーディングへの介入は簡単ではありません。ゴミ屋敷の住人自身が、客観的な現在の状態を把握し、過去のトラウマや不安などの溜めこんでしまう要因を部分的にでも理解し、「もったいない」とか「もう少ししたら、あるいは自分一人で片づけられる」などの返答で自己防衛をしていることにゆっくりと向き合うことが必要です。そのためには、相談援助の専門家の介在が不可欠だろうと思われます。同時に、実際に仕分けを行い、整理、処分する行動の習慣化を学習する必要もあるでしょう。家族や身近な人には、溜めこむことを責めず、逆に、少しでも整理できたことを褒めていく心がけが求められます。

筆者自身も、書きながら自分の部屋の状態が気になってきました。「毎月○日は片付けを行う」などと決めておくとよいそうです。

紹介作品：

高嶋あがさ(2015)『母は汚屋敷住人』実業之日本社

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考文献：

ゲイル・スティケティー、ランディ・O・フロスト（五十嵐透子訳　2013)『ホーディングへの適切な理解と対応　認知行動療法的アプローチ セラピストガイド/クライエントのためのワークブック』金子書房

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法２１～

＜こんなはずではなかった＞

杉江　太朗

～学生用マンション建設を巡って～

自宅近くの空いた土地に、学生用マンションを建設するか検討しているという方がいて話を聞く機会があった。銀行から大きな借入をすることになるが、ローンは毎月の家賃収益で返済しつつ、尚且つ貯蓄も可能で、さらに税金対策にもなるとの勧誘を受けているとのこと。

私が、訝しそうな反応をしていると、当然そんなにうまく進む保証はなく、学生用マンションは絶えず新しい物が建ち続けるため、人気があるのは最初の数年、尚且つ大学生であれば、卒業と同時に退去することが多いので、入居率を維持することが難しい場合もあり、建設時に見込んでいたような収益が得られない可能性があるとのことであった。さらに大学が立ち退きになるのとたちまち借主が減ってしまう。さらに、マンションを修繕するための費用も追加で必要になり、災害時の対応など将来のリスク管理も必要で、簡単に踏み切れるものではないとのこと。

この話とは少し異なるかも知れないが、例えば水道事業を巡って、過去に設置した水道管が耐用年数を超えてしまい、その修繕が必要となり、その費用を捻出するために、水道料金を値上げする自治体があるとのニュースを耳にしたことがある。

また、豪雨災害により、盛土が崩れたというニュースも報道された。盛土がどのような経緯で置かれたのかはわからないが、結果として災害を引き起こしてしまった。水道の工事にせよ、盛土にせよ、人為的な行動の後には、その先がある。そのことがわかるのが、１ 年後なのか、10 年後なのかはわからない。さらに、良い結果なのか悪い結果なのかもわからない。そのような先を見通した決定がどの程度されているのであろうか。

～こんなはずではなかった～

私自身の記憶ではもう、遠い過去になってしまったが、その最たるものがオリンピックではないか。様々な自治体でその開催に向けて準備をされ、競技施設の整備、宿泊施設や選手村の建設などに投資をしたのではないだろうか。特に東京などは、開催に向けて大きな事業展開が

あったに違いない。実際に、東京オリンピックの関連施設を建設するために、父が単身赴任をしているという話も聞いたことがある。各自治体でも、それぞれの選手団を受け入れるキャンプ地として様々な企画を計画していたように記憶している。

そのために大きな支出をした自治体は、新型コロナウイルスの影響で開催時期がずれ、さらに大会そのものの縮小を余儀なくされたことで、「こんなはずではなかったのに・・・」と思っていたのではないだろうか。そもそもオリンピックを誘致したその関係者の人も、「こんなはずではなかった」と思っていたかもしれない。新たに建設したものには、建設費用だけでなく、その後の管理費用も必要となる。新しいものは将来古くなるのは必然である。オリンピックという世界規模の大会で収益をあげ、将来かかるであろう費用をその収益で賄うつもりであったのかもしれないが、開催規模が大きく変わったことで、将来的に管理費用による赤字が続くとも言われているようである。

当然、誰もが未来を読むことは出来ないし、オリンピックの開催が決まった時点でも、開催そのものに対する賛否はあった。しかし、新型コロナウイルスという、未知の感染症を理由にその開催の是非が問われたり、収益が減収したりすることは想定外であったと思う。しかし現実には起こっているのである。自治体だけでなく、インバウンドを期待して、宿泊施設（例えば、ゲストハウスとか）を開業した方も多いはずである。皆、オリンピックによる利益を得ようと考えた人たちは「こんなはずではなかった」と思っていたのではないだろうか。

冒頭に書いた学生マンションの建設を検討された方は、将来のリスクを考えて建設をしないという選択をした。そして、偶然ではあるが、その数年後、近隣の大学の立ち退きが決まったらしい。寝耳に水の話で、その自治体は、人口が流出し、地域経済を縮小させるとの理由で、撤退をしないように求めたらしい。その後、その方に話を聞くことはなかったが、少なくとも「こんなはずではなかった」とは思うことはなかったであろう。

人が何か決断をするときには、将来のリスクにも目を向け、自分がした『決定』の先にある結果がどのようなものであったとしても責任を負うという覚悟が必要である。そうしたリスクを引き受けた上での決断であれば、仮に思い描いたような結果でなかったとしても「こんなはずではなかった」と振り返ることはないのではないか。むしろ、思い描いていなかった結果を受けて、今、出来ることや次にすることを考えているかもしれない。自身の行動が招いた結果に対して、「こんなはずではなかった」と振り返っていること自体、その決断や決断に至るまでの過程が浅はかであり、さらにその結果を

引き受けられていないと思う。

～対人援助における「こんなはずではなかった」～

マンションの建設やオリンピックの誘致と同様に、対人援助領域においても決断が求められる場面はあり、それは１度や２度だけではなく、決断が求められる場面が連続して到来する。それは、法的な対応を取るかどうかという大きな決断もあるが、一方で、接触をしなければいけない相手に対して、どうやって連絡を取るか、電話？メール？直接訪問？というような決断まで多岐に至る。

どのような場面でも、私が大切にしていることは、自分のした決断がその先、誰に、どこで、どのような影響を与えるのかなどを踏まえて検討して導き出すということである。「ただ何となく」とか「思いつきで」というような決断にならないことを大切にしている。

児童福祉領域の課題とも言える部分に、担当者の変更が目まぐるしく、人事異動や退職などもあり、連続して関われる期間は２年～3 年でサイクルしているということがある。そのことにより、自身の決断したことの「結果」を見たり、知ったりすることがないまま転勤をしてしまうことが往々にしてある。例えば、施設入所という決定をした後に、人事異動などで担当から離れてしまうと、その子どもがその先、どのような未来を歩んだのか知る術がないのである。私は、専門職として採用され、基本的に人事異動がないため、出会った子どもが、成人して親になったという連絡を受けることもある。他者がした過去の決断に対して、その検討が浅はかであると感じることも少なくはないが、当然、全てが思い描いたようになるわけもなく、思い描いたようにいかないことしかないため、それぞれの場面で、数ある選択肢の中から、少しでも良いと思う決断をする毎日である。

～決断するということ～

決断をするということには責任が発生する。ここで言う責任とは、誰に責任があるのかというような、事件があったときに擦り付け合われるものではなく、決断をした結果を引き受けるという、ようは「腹をくくる」ということである。その責任を負うことにより、「こんなはずではなかった」と過去を振り返るのではなく、まず先に、その結果を受けて、「次の一手をどうするか」「今何が出来るのか」「今出来る、最善策は何か」を考え、さらに並行して「最悪の事態」を常に想定し、そうならないための策を練り続けるのである。

児童相談所における「最悪の事態」は、子どもが亡くなるということである。常に、「子どもが死ぬか、死なないか」ということを念頭に置きながら、限られた時間、限られた社会資源の中で、優先順位

をつけて決断をする毎日である。他の児童相談所で働く方もそうではないだろうか。それでも、事件は後を絶たない。社会的関心の高まりや人の感情を揺さぶるような報道が続くこともあり、注目を集めやすい。そのことが、現場の職員の不安を駆り立てており、疲弊にも繋がっている。しかしそれがこの社会の現実なのである。その中で決断をしなければならない日々が続くが、「こんなはずではなかった」と振り返るのではなく、「これからどうするか」を常に考え、常に目の前の子どもに対して最善を尽くさなければならないと考えている。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑦～

2022年・振り返り

♪♪♪

松岡園子

昨年は、様々な自治体で母との体験をお話しさせていただくことや、機関誌に載せていただく機会がありました。

今回は、聴いてくださった方からいただいた感想や、改めて当時を振り返り、話をする際に考えたことをまとめておきたいと思います。

※　感想は読みやすいように表現を変えている箇所があります。

～いただいた感想の一部～

・苦しい状況の中でも、周りの人の助けで生き抜いてこられたことや、具体的な実体験話が聞けてとても勉強になりました。

誰かがサポートしてくれることの大切さと、小さな支援であっても人の心に残る支えになるという事を改めて気づかされるお話でした。困った時に「この人」に相談しようと思える、「助けて」とＳＯＳを出せる世の中であってほしいですし、支援に携わる人間としてその輪が広がるよう努力していきたいと思いました。

・さりげなくお弁当を持たせ続けてくれた人の話（関心を寄せ続ける必要性）、中卒で就職という選択をされたけれども、それは松岡さんにとって「働いて支えられる」という点で自分を保つ力になった話、（中略）専門職が（当事者に対して、家族のケアをしていることなどを）「お手伝い」という捉え方をすると、そう意味づけてしまうこと、でもそれを「あなたのやっていたことは介護で、意味のある頑張ってきたことなんだよ」という伝え方をすることで捉え方を換え、自分を意味ある存在と思えることなど、お話から多くの学びがありました。

子どもを理解しようとする気持ちを持ち、やっていることを意味づける視点など、ここでの学びを伝えていきたいと思います。

・自分自身、自覚はありませんでしたが、思えば介護保険もない時代に介護の手伝いをしていたんだな（「それ介護です」）と思い当たりました。

今のような介護保険サービスもなかった時代、大人から見るとわからないけれど、子どもにとっては（介護にまつわる）お留守番でさえも、とても辛い時間でした。

現在社会において、家族のカタチや在り方も様々でライフスタイルも価値観も多様化しています。子どもに限らず「こんなコト相談してもええんかな？」「こんなとき、どこに？誰に話をしたらええんやろ？」相談に行く窓口がわかりやすくなるようになればいいなと思いました。

小学校では家庭科の時間にお片づけ（整理）を学びますが、介護や社会の仕組み（相談窓口や相談できるコト・相談してもいいんだよというコト）を子どもが知る機会を設けるコトも大切だと思います。

・「ご苦労さまやったね」

聴きに来てくださった 70 代の女性（支援に関わる方でなく市民の方）から、このように「ご苦労さま、お疲れさま」と声をかけていただいたことがありました。私にはそれが、とても自然な感想に感じられました。

仕事で対人援助に関わっているなどしていなければ、一（いち）隣人としての言葉かけ、援助になることが自然だと思うのです。これは、当時の私の周りにいた友達、友達の両親、近所や同じ職場の人の感覚に近いものだと思い、印象に残りました。

～今、家族のケアをしている若者に伝えたいことは？という質問に対して考えたこと～

家族のケアをしたことが自信につながれば良いと思います。また、ずっと、あるいは一時的にケアを担わないという選択をしたとしても罪悪感を感じることはないと思います。自分が担わない分、他の人や物の力を借りることになると思いますが、そうした力も借りながら、自身と家族にとって良いと思える方法の種類を増やしていくことは、自分を助けることにもつながると思います。

我慢するのが当たり前でなく、自分にも優しく、楽しい思いをしてほしいと伝えたいです。

また、当時の私は、学校の先生や近所の人たちから「頑張っているな」と認められ、誰かが見守ってくれていることで安心し、救われました。しかし、母に代わって働いて夜は勉強もして、認められている反面、プレッシャーに感じてしまうことがありました。
例えば、遊んでしまうと「頑張れていないのでは」というふうに、自分を追い込んでしまうことにもなりました。それは、結構しんどいことなのです。
「息抜きをしてもいいのだよ。遊んでもいいのだよ」という声かけも時には必要だなと思います。

◇◇◇

こころ日記「ぼちぼち」その③

脇野千恵

不登校生との生活

今も適応教室に来る不登校の子どもたちの支援をしている。

不登校の子どもたちが、学校へ行かなくなった、行けなくなったきっかけは様々だ。友だちとのトラブル、先生との相性が悪い、勉強が嫌い、家庭の事情などなど。

適応教室では、特に指導などはしない。学習も自主的に取り組ませ、無理はさせない。中学生は学校へ行けば校則を守らなくてはならないが、教室へは私服でやって来る。人に見られることを嫌がる子もいて、教室に通っていることを内緒にしている子もいる。

私は心理士ではないので、カウンセリングはしない。ただ教室に来る子どもたちと共に過ごすだけだ。ほとんどの子どもが何らかの「発達障がい」？と診断されてくるのが不思議だが、私は「発達障がい」には関心がないので、その子自身と素で関わるようにしている。場面寡黙な子も、なんとなくコミュニケーションが取れるようになり、ほとんど会話らしいものがなくても、ゲームやスポーツなどで関係が持てるようになっていくのは嬉しい。

どこの高校に入れるの？

以前学校現場にいたから教員の気持ちがよくわかるのだが、学校は不登校生が中学３年生になると進路が迫ってくるので、さすがに心が騒ぐ。不登校生が行ける高校探しが大きな課題となるからだ。とりあえずどこかの高校という組織にあてはめなければ、卒業はさせられない（とは言え、卒業していくが…）。

長い教員生活の中で不登校の生徒を何人も担任してきた。１年、２年のころはなんとなく毎日を過ごし、いつか迫ってくる高校受験のことは先延ばしにしている。しかし３年になると、進路保障という言葉が重くのしかかってくる。

不登校生の高校選択は、本当に選択肢が狭くなっていく。その当時はフリースクールも単位制高校もあまりなかったから、入れるとすれば、夜間か通信になる。教師が一番気になるのは、出席日数だ。内申に記載しなければならないし、出席が足らないと「副申書」なるものをつけなければならないからだ。そこへは、なぜ不登校になったのか？その理由を、ありもしない嘘を色々並べ書き連ねなければならない。その時の苦痛は忘れられない。

その点今の時代は、フリースクールがたくさんあるし、塾や企業が経営する高校もある。お金さえあれば何らかの高校に入ることができ、ある程度選択肢が広がっている。

色々な進路選択

Ｋ代は、受験をして私立の中学校へ行った。地域の公立小学校で、友だちとのトラブルといじめに遭い、地元にはいられなくなったからだ。それなりの進学校だったので、親も喜んだ。ちょっと遠い通学だったが、しばらくは順調に学校生活を送っていた。しかし、そこでも同じような友達とのトラブルがあり、不登校になってしまった。中高一貫の学校だから、不登校になるとそのまま高校への進学は歓迎されない。といって地元の中学校へ戻れないのが辛いところだ。３年生になりようやく適応教室に通い始め、出席日数を稼ぐことになった。親は不登校になっても、私学の高い授業料を払い続けることに不満を持ちなが

ら、じっと何も言わずに適応教室に通わせてた。
いよいよ進路選択が迫ったとき、父母の離婚問題が浮上した。仕方なく母とともに祖母が住む地方へ引っ越すことになった。
全く知らない土地での高校探しは大変だったようだ。自分に向いている高校かを確かめる間もなく、とりあえず合格切符を手に入れ、あっという間に去って行ってしまった。高校へ入ったら、バイトをしてお金を貯めると言っていたが、今は彼女の近況さえわからない。仕方ないとは言え、家族の変化での高校選択で、彼女の人生も大きく変化した。

家を継ぐから…

Ｍ介は、中学１年の５月の大型連休明けから、学校へ行けなくなった。運動が好きで、小学校からサッカーのクラブチームにも入っていた。中学でもサッカー部に入り頑張っていた。突然の不登校に、両親はとても悩んだ。何があったのか、尋ねても言わない。息子のかたくなな登校拒否に、たた見守るしかなかった。
適応教室に来たのは、２年生になってからだった。家から出るにも、近所の人に顔を見られるのを嫌がった。教室に来るまで、パーカーのフードを被ったままだった。
不登校生の中には、中学生になると出席日数をとても気にする子がいる。内申に影響することを知っているからだ。Ｍ介もその一人だった。彼は３人兄弟の末っ子。２人の兄はとても優秀だった。家業はお寺。三人の息子たちは、小さい時からその環境に慣れ親しみ、いずれ誰かが後を継がねばならないことを知っていた。
２人の兄達にはなかった不登校。両親は進学のことが気になり、あれこれ策を考える中、適応教室にたどりついた。
寺の仕事はサラリーマンとはかなり違う。父母は日々の寺の行事や信者の対応に追われる毎日だった。末っ子で母親と近かった彼。寡黙な父だったが、毎朝彼を起こし、自動車に乗せて送ってくるようになった。学力も気になるので、夕方からは個人対応の塾にも通わせられた。
彼には夢があった。サッカーの強い高校に入ることだった。どう考えても無理だとわかっていても、彼は３年生の後半になっても、そのことを熱く語っていた。いよいよ進路選択の時期が近づき、彼の夢は遠のき、入学できそうな単位制高校を選ばざるを得なくなった。
進路が決まってから彼は、
「高校は行けなくなってもいい。寺を継ぐから…」
と言った。彼がなぜそう思うようになったのかわからないが、毎日父親と通った日々の中で、時には帰りにラーメンを食べて帰ることもあったようだ。父親との会話は、どんなものだったのだろうと、今にして思う。

高校へ入ればきっと行けるようになるという子が多い。しかし現実は厳しく、行けなくなった子もたくさん見てきた。
とりあえず進学できても、その後の不登校生をサポートしてくれるシステムは、今の社会では充実していない。まして発達障がいと言われた子どもたちは、どこで誰が関わってくれるのか？
適応教室は義務教育の間だけだ。たとえ高校に進学が決まっても、その後のことはわからないし、情報を得ることも難しい。
３年間のコロナ禍で、不登校はさらに増えた。今年３月に卒業を迎える中学生は、コロナ禍で入学し、コロナ対策の中で卒業していく。

つづく

フリースクールでの SW 実践を考える⑥

高名　祐美

２０２３年４月。こども基本法が施行され、こども家庭庁が設置される。「こどもまんなか社会」の実現に向けて国が本腰をあげている、と思いたい。が、現状はどんなふうに変わっていくのだろうか。

フリースクールでこどもたちと過ごしながら、今後の変化に思いをめぐらす。不登校のこどもは年々増加の一途をたどっている。私の勤務するフリースクールは現在５名の小学生が利用している。姉弟で利用している事例もある。ここで過ごす週２日の時間は、こどもにとってどんな意味があるのか。少ないスタッフと限られた空間では提供できるプログラムは限られてくる。５人それぞれの個性がぶつかりあって、うまくいかないことも多い。ひとりひとりのこどもが安心して過ごせる場所になっているのだろうか。自分の関わりをふりかえる。フリースクールの利用がきっかけとなって、こどもが自分らしく生きていく術をみつけることに少しだけ手をかすことができたらとも思う。

＜浩介くんのこと＞

浩介くんは小学校３年生。ADHD と診断されている。昨年１１月、お母さんが相談に来所した。家族はお父さん、お母さん、中学１年の姉との４人ぐらし。

【利用相談のインテーク面接】（一部抜粋して）

SW：ここ（フリースクール）は、どんなふうに知りましたか？

母　：インターネットで調べました。

SW：インターネットですか。当所のホームページですね。

母　：はい。学校以外でどこかいくところはないかと探していたんです。あちこち行ってはみるんです。でもどこもいきたがらなくなってきて。学校には５月の連休明けから週１日の登校になって、２学期からはいかなくなって。特別支援学級なんですけど。それでタブレットが学校から支給されて、オンライン授業なのですが、それもこの頃はうけません。「しんどい」っていうんです。

SW：「しんどい」って言うんですね。家ではどんなふうに過ごしていますか。

母　：プログラミング２時間、パソコンゲーム１時間半って決めています。そのほかは、私の手伝いをしてくれたりします。洗濯物をたたんだり、料理を手伝うこともあります。近

所には友だちがいないので、友だちと遊ぶのができなくて。「遊びたい」って思っているようです。

SW：「友だちと遊びたい」のですね。遊べる場所をということでしょうか。

母　：はい。勉強は正直そんなに望んでいません。元気に楽しく過ごせたらと。

SW：「元気に」。大切ですね。浩介くんの得意なことや苦手なことをお聞きしてもよいですか。

母　：好きなことはやっぱりパソコン関係ですね。プログラミングと YouTube でみる化学の実験、ダンボールで工作するのも好きです。苦手は国語。特に漢字です。字を書くのが嫌いなんです・・・

SW：なるべく浩介くんの好きなことができる時間をつくりたいと思います。そして今ここを利用している男の子と仲良くなれるといいですね。一緒にひるごはんをつくるのですが、料理はいかがですか。

母：　大丈夫です、料理は好きです。食べるのも好きなので。（笑）

SW：わかりました。なにかここで過ごすにあたって、気をつけることがあれば教えていただけますか。

母　：苦手なことやできないことに取り組めたら、「よく頑張ったね」と声掛けしてほしいです。あと予定を伝えてください。次に何をするかがわかっていると安心できるようです。

SW：わかりました。お母さんは、ここにどんなことを求めていますか。

母　：家に閉じこもって孤立しないで、家族以外の人とかかわりをもってもらいたい。学校にいけなくても、元気で過ごしてくれればそれでいいって思っています。いろんな人とかかわれたらって思います。とにかく元気でいてほしい。

浩介くんの校区にはフリースクールは存在していない。インターネット検索で自宅から一番近いフリースクールをみつけ、相談の電話をかけてきたお母さん。一番近いとはいえ、浩介くんの自宅からフリースクールまでは車で４０分ほどかかる。送迎について尋ねると、お母さんは「今は仕事をしていないので、私がします。」と。

私がお母さんと面接している間、浩介くんは別のスタッフが対応した。浩介くんは落ち着きなく、スタッフがいろいろ遊びを提案したが、集中することができなかった。

面接を終え、母と私は浩介くんの待つ部屋へ移動した。浩介くんはお母さんをみると、「帰ろう、疲れた。帰りたい」と部屋から出ようとする。母は入り口で立ち尽くしたまま、その場を動こうとしない。息子へ声もかけない。息子の動きを止めようともしない。「家にいてもゲームばかりして過ごすので。人と接してほしい。元気で楽しくしてくれればそれでいいんです。」と積極的に語ったお母さんとはまるで別人のようだった。「帰ろう」という息子になにも答えず、立ち尽くしている。こんなことが日常的なのだろうか。浩介くんの日々の暮

らしやこれまでの親子の歴史をもっと知りたいと思った。

利用は週１回、午後２時間から開始した。そこで浩介くんは同じ小学３年生のなおきくんと出会った。共通の好きなこと（カードゲーム）があった。パソコンのゲームやYouTubeについても話題にできる。会話がはずみ、一緒にカードゲームに取り組んで楽しんでいる。もうひとりの５年生のはるとくんとはレゴでロボットを作って時間を過ごすことができた。

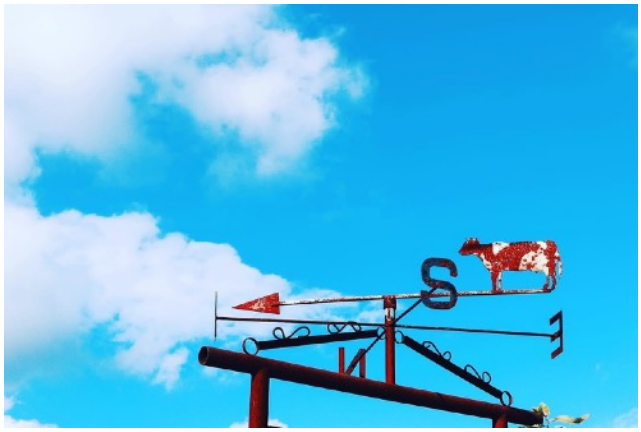
少し慣れてきた頃、『みんなでクレープをつくろう』のプログラムがあった。それに参加するために、午前中からの来所を提案した。「うん。わかった」と返事があり、当日もエプロン持参でやってきた。「僕は何をしたらいいですか。わからないから教えてください」としっかり伝えてくる。できないことはできないと伝えることができる。チャレンジしたことがうまくできないと、「手伝ってください」とヘルプを求めることもできた。またやったことのないことには「教えてください」と取り組む姿勢をみせてくる。求めてくることにしっかり向き合うことで、浩介くんは不得意なこともひとつずつできるようになっていった。

ある日。「今日のお昼はシチューだよ。」と伝えると、「シチュー大好き。ありがとう。」と誰よりも先に大きな声で返事をしてくれた。シチューが好きな浩介くん。「ありがとう」というその言葉に私も嬉しくなった。そして、「今日のお米とぎは誰がする？」と尋ねると、「今日は僕がする！」と一番に名乗りをあげてくれた。お米とぎ、浩介くんには難しい作業だけれど、仲間が手伝ってくれてなんとかできた。そして炊きあがったご飯、シチューと一緒に、誰よりもたくさんの量を浩介くんが食べた。

迎えにくるお母さんの表情にもまた変化がみられた。初回でみた、凍りついたような表情が消え、その日の様子を伝えると笑顔で言葉を返してくれる。「そんなにいっぱい食べたんですか。好きなものだから。ここにくるのは楽しいって言ってます。」。浩介くんの週１回の利用は週２回へ、そして時間も１０時から１５時までになった。

ソーシャルワーカーとしての役割を考えるとき、学校と情報を共有し連携することや、チームをつくることが必要だと考えてきた。しかし現実は、日々の個別の関わりから前にすすむことができず、私はもやもやしていた。「チームで関わらなければソーシャルワークと言えない」そんな思いがあったように思う。医療の現場で、チームで関わる退院支援を実践してきた長いMSWとしての経験が弊害になっていたのかもしれない。

浩介くんとお母さんには、短い時間でも「面接」を意識した会話をこころがけてきた。その結果、二人それぞれの変化を感じることができた。こどもやお母さんの個別ニーズをとらえ、課題解決にむけて取り組む。成長過程にある浩介くん。これからの人生、たっぷりと時間はある。ともにゆったりと過ごす時間が大切だと改めて感じている。浩介くんが家族以外の人と接する体験を重ねて、元気に、そして少しずつ確実に成長していってほしいと切に願う。



大阪弁について。北海道に来て最初の頃、相手が自虐で言っていると思った話に、アホやなあとツッコミで返したら、エッ！と言う顔をされ、大変やったね、となぐさめるのがこちらの常識と気づかされました。茶化されたと思われないよう、不用意にこちらからは突っ込まない。私の中で最初のルールになりました。関西より距離がある人付き合い、物足りなさは感じますが、平和です。ツッコミは少し毒っ気のあるところに面白さがあるけど、相手がその言葉にドキッ！とするようなら言わない方がいいし、私も言われないので、北海道で傷つくチャンスは全くなし。たまに大阪へ帰ると刺激的なツッコミを受けて、笑いとともにチクチクも。体感で違いを感じるようになりました。大阪のような会話のやりとりは難しい北海道ですが、自虐を披露してそれに自分でつっこむ漫談形式で、大阪の会話の雰囲気をわかってもらうことはでき、一人でしゃべっているような状況にはなりますが…時々やっています。北海道の方にも安心して笑ってもらえます。

大阪弁を使い分ける。敬語になると大阪弁が引っ込むので、普段は敬語でフラットに話し、ここぞという時、例えば…相手と仲良くなりたい時、本音を聞きたい時、状況を和やかにしたい時、生意気にも偉いさんに進言する時に、部分的に大阪弁で話します。やはりお国言葉は感情が乗り、想いが伝わる気がします。大阪弁特有の距離の近さも、部分使いでいい塩梅になります。牧場のスタッフさんにも、仕事の時はフラットに、仕事以外の雑談は大阪弁にする、オンとオフの使い分けも意識しています。時に、シリアスな注意をする場面では、あえて大阪弁で柔らかくすることもあります。イントネーションが穏やかなところを生かします。

大阪のおばちゃん力を活用する。我が家には牧場スタッフ専用のアパートがあり、一階のミーティングスペースでは季節行事のたびに食事会を開いています。スタッフの募集は道外の方にしたいと思い、移住してもらうには、安心して暮らせる快適な住宅が必要だと家族で話し合って建てました。現在は単身の女性のみなので、困り事や仕事上の悩みを話せる雰囲気づくりに重きを置いています。家族も友達もいない場所へ来て、へこむことや疲れ果てることもあるでしょうに、それを言わない、我慢するのが普通、という子が増えている気がします。北海道では馴れ馴れしすぎるかな、と思ってきた大阪弁を大活用→「あんた、大丈夫か？なんかあったらすぐいいや、おばちゃん聞いたるから」ってな具合で若い子にはコテコテでいきます。最初はびっくりしたような顔をしますが、慣れてくると「大丈夫です…」と笑顔を見せてくれるようになります。ちょっと呆れられてる気もしますが。私も若い頃、大阪のおばちゃん（友達のお母さんたち）に助けられた経験があり、その時を思い出してグイグイいきます。（本当は人見知りでそんなタイプではないのですが、大阪のおばちゃんキャラで行くのです）　私の母が亡くなった時、同級生のお母さんたちが家に来て声をかけてくれました。なんかあったら電話してきいや、と今も言ってくれます。実際、祖母の介護のこともおばちゃん達に相談し良きアドバイスをもらいました。アパートの子達についても、なんかあった時にふと頭に浮かぶおせっかいおばちゃんになれれば！と思います。大阪のおばちゃんは最強！私もそうありたい。

牛さんは大阪弁をどう思っているのか。大阪のゆったりしたイントネーションは気に入ってる様子です。言葉はわからないとしても、トーンや声色は敏感に察していると思います。例えば、猫なで声で言った時は、こちらの戦略がバレているのか？思った風に動いてくれない。蹴ってくるのをたしなめようと、お姉さんぽく怒ったら、再度小さく蹴ったけど、お母さんぽく怒った時は蹴るのをやめました。お母さんの、も～しゃ～ないなあ～あんたは！感＝懐の大きさ、安心感みたいなものは確実に伝わっている様です。

言葉は受け取る側がどう判断するか？によりけりで、こちらはコントロールしづらい面もありますが、トーン、声色は自分のもの、私はこうですよ、と真の気持ちを乗せて届けることができる。動物的伝達法を人間界でも活用してみるのも面白いですね。

筆者　　原田　希

1973年　大阪府吹田市生まれ

2006年　酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年　北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫ともに新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当

かけだ詩⑫ファイナル

そだちと臨床研究会
川畑（かわばた）　隆（たかし）

黒歴史

今になっても
消し去りたい
思い出したくもないのだから
人に喋れるはずがない

蓋をすればするほど
勝手に突(つつ)いて飛び出してくる
三つやそこらだけだと思っていたが
十も二十も顔を出す

すべてのことには意味がある
それがあってよかったねなんて
他人(ひと)にはそんなこと言ってるけれど
ただただ消え入りたいしごめんなさい

エマニエルにいちゃんず

最初に「フロイズⅡ」という名前をつけた自分が
いまだに恥ずかしい
それは改名された「エマニエルにいちゃんず」が
あまりに素晴らしい命名だったから

大学二年の頃だから五十年前
心理学科の呑み仲間の自主的クラブ
学内のソフトボール大会などに出まくった
その最初の申し込みのときに求められたクラブ名
心理学科の二年生だから「フロイズⅡ」
ああ恥ずかしい
何それ？　OくんもSくんもMくんもみんな
代案はないくせに不満顔
そこにDくんの魔法の杖がふられて登場したのが
「エマニエルにいちゃんず」
破顔一笑　即時決定

シルビア・クリステルの「エマニエル夫人」
当時一世を風靡した妖艶なフランス映画の主人公
私たちみんなが酔いしれた　♪・・・・・エマニエル♪
テーマのメロディが今でも口をついて出てくる

当時はまぶしいほどの「エマニエルにいちゃんず」
今でも輝いてるかな？「エマニエルじいちゃんず」

懸念のつぼみ

正しいことが拡がっていく
どんどんと言っていくらいに
あれもこれもこうあるべきと
至るべき目標が示される

正しいことへの懸念
それは反論しにくいこと
懸念を示すことさえも
正しくないと責められる

正しさを求められると
それを身につけようとする
でも身につかない自分はダメなんだと
おのれからも責められる

正しさに追いつけない
尻を叩かれて息が切れそうだ
正しさに追いつくために
無理を背負い込んでいる

正しいってホントに正しいんだろうか
正しいのだとしても
その横でそっと息をしている
懸念のつぼみに水をやりたい

長谷川平蔵

あの平蔵の笑い声と顔
親分肌で豪快で
親し気でやんちゃで
それを求めて再放送のビデオがたまる

中村吉右衛門が亡くなったことも
きっかけになったが
長く素通りしていた
鬼平犯科帳

火付盗賊改方（あらためかた）　長谷川平蔵である！
いつのまにか「である」が消えてしまったが
この決まり文句に込められていた
格式と威厳

そして初めて聴いたときにハッとした
時代劇には斬新な
エンディングテーマ「インスピレイション」
ギターがなんておしゃれなんだ

水戸黄門や大岡越前と同じ紋切り型でも
中村吉右衛門が　長谷川平蔵が
繰り返し映像に現れてくれるのが
ありがたい

そして誰もいなくならなかった

父がいなくなり　母もいなくなった
祖父母に引き取られた　二人とも亡くなった

彼氏の赤ん坊を産んだ　彼氏はいなくなった
十代のママの子育て　みんなが支えた

友だちと同じように　私も高校に行きたい
それはいいことだ　晴れて高校の門をくぐった

保育所に赤ん坊が来ていない　大騒ぎになった
友だち連中が面倒をみていた　危なっかしかった

施設に預ける話もあった　赤ん坊の間だけでもと
でもママもまわりも　預けたくなかった

大切な人が次々に　いなくなり続けたママ
赤ん坊はママと一緒に　友だちもママのまわりに

保育所に通わせながら　みんなで育てていこう
ママも友だちもうなずき　まわりも胸をなでおろした

居場所Ⅰ

実習先の先生から
カードを作る作業を頼まれた
作業用具は実習生の数だけ
そうなんだ　引率の私は実習生ではないんだ

私にも作業をさせてくださいよ
そう言いたくなった気持ちを実習生に問うてみる
彼らの反応は私の気持ちを後押しはしない
引率だけの教員でいたほうがやっぱりいいかな

気持ちは年を取ってはいないと自分で思う
でもやっぱり六十六歳の引率の教員を
実習生と同じように扱うわけには…
先生がたの立場での自己コントロール

実習生と同じように動くのはちょっとちがう
でも目障りな粗大ゴミはしんどい
引率の老人のちょうどよい「居り方」は？
誰も教えてはくれないか

居場所Ⅱ

よいように思われたい
わるいように思われたくない
よいかわるいかの二分法

期待にそうのがよいことで
そわないのは期待に背くこと
その期待は相手の事実か自分の想像か

期待されていないかもしれない
私の思わぬ期待なのかもしれない
あってもないかのようなものかもしれない

よいかわるいかではなく
期待も定かではないとしたら
そこそこに自分に正直で居るしかない

そんな当たり前のことに
小むずかしく根拠を求めたくなるほど
私はいまここに居なければならぬ

あっそうかそういうことか

孫*が祖父母に訴える
あなたたちは自分のことばっかり
自分の損得が基準で生きている
わたしたちは新しい時代を
生きていかなければならないの
地球のことも他の人たちのことも考えながら

祖父の祖母に隠れての投資の失敗
責める祖母に息子は
それは裏切りなんかじゃなくって
ヘマしたってことじゃないの
ヘマしただけの人間を
そんなに追い詰めるかなあ

真正面からきっぱりと
また軽やかに助け起こす
小むずかしい解説ではない
主張というよりは使命感
そして盛り過ぎない意味付け
そんなふうに言われたことはなかったような

あっそうかそういうことか
時代が変化していることは知っていたけれど

自分に向けられたこととして直に感じた
新しい時代はとってもいいものを含んでいる
そして年寄りにも時代をうまく繋いでゆく役割はある
視界を愚痴で曇らせたくはない

やさしいのは弱いのではない
みんなで生きていくやりかたの基本なのかもしれない
無関心に見えるのも
それぞれの生き方を見守っている結果なのかもしれない
その反作用をそれ見たことかと突き放さず
学びながら一緒に考えていけることはないか

若い人たちの考えから年寄りの考えを引き算せずに
年寄りの考えをどう足し算してもらえるか
愚痴ではなくどう手渡すか
受け取ってもらえる形でどう残すか
主張したいことはある
その主張のしかたを練り直そうと思う

＊二〇二二年五月から六月にかけてＮＨＫ・ＢＳプレミアムで放送された、風間杜夫・松坂慶子・藤田弓子・平田満らが出演のドラマ『今度生まれたら』の一場面。同じ時期に、ＡＩを用いた政治を十七歳の総理が担う実験都市を描いた『十七歳の帝国』も総合テレビで放送されました。そこでは若い世代も年寄りの世代も互いに影響し合い変化していました。

近況

お風呂で　頭を洗ったよ
お風呂で　頭を洗ったよな
お風呂で　頭を洗ったっけ
お風呂で　頭を…
洗おうかな

さようなら

言うのは　そうでもないけれど
書くときの　さようならは
ちょっとさびしくて　かなしい
だから　最近よく書くのは
次に会うときまで　さようなら
さようならだけど　また会える
次に会うことは　ないかもしれないけれど
さようならは　まだ先
そんなふうに　今のさようならから逃げている

⑫了　二〇二三年一月三一日

応援、母ちゃん！

－子育てしながら働く母親たち－

「ママ友がほしい」

12

たまむら　ふみ

玉村　文

はじめに

－ママ友がほしい－

子ども・若者支援の現場で、「友達がほしいんです」と訴える方と出会うことがあります。友達ができる保証はないけれどと、余暇活動やボランティア活動のプログラムへの参加を促したり、紹介することがあります。そこで言われる「友達」ってどんなイメージなのかを尋ねてみると、「なんでも話せる、相談できる」と話されます。自分のことを認めて受け入れてくれる存在を求めているのだろうなと理解できます。今回は、「友達がほしい」をテーマに、わたし自身に引きつけて「ママ友がほしい」思いを分析してみました。

1．ママ友との出会い

コロナ禍前に第一子を、コロナ禍真っ只中の 2021 年に第二子を出産しました。2 人を出産し育休を取得してみて、最も大きな違いは、ママ友との出会いや交流の機会の減少でした。コロナ禍前は、住んでいる自治体で「両親学級」が開催されたり、子育て支援拠点等でも親たちの交流やつながりを作るプログラムやコーディネートがあり

ました。自治体の職員や保健師、子育て支援スタッフたちは、むしろ積極的に子育て親のつながりを作ることで、子育てでの孤立や産後うつなどの予防をされていると感じていました。それが、コロナ禍では、親同士が直接出会える機会は減少し、密にならないような距離を取ることが推奨され、子育て親同士も心理的にソーシャルディスタンスが生まれた感覚が生まれました。わたし自身は、第一子のときと比べて、第二子のときに出会ったママ友は少数で、関係も浅い感覚があります。一方で、コロナ禍での育休期間は、オンラインを活用したママ友ネットワークができました。直接会ったこともないママ友が全国にできるとは、と驚くことにもなりました。

2．なぜ友達がほしいの？

では、なぜママ友がほしいのか、自己を振り返ってみると、子育てへの不安を共有したい、子育てに有益な情報がほしい、子ども同士一緒に遊ばせるような資源になってほしいという思いがあることに気づきます。ママ友とは、ママであるわたしと同じくママである人が、友達になるということだと思います。ママであるということと、友達になること。そもそも友達ってどうやって作るんだろう、なぜ必要なんだろうかと過去を振り返ってみました。

友達づくりについて振り返ると、学生時代は学校内の同級生が友達でした。ほぼ同じ年で多くの場合同性が友達だったと思います。社会人になると、友達ってなかなかできなくなりました。同僚や仕事相手の数が増えるとともに、友達の数は減少していくような感覚をもっていました。わたしは社会人になってから 1 年間休職し、ワーキングホリデーを使ってカナダ留学をしました。その年に入学していた語学学校やボランティア活動で出会った外国人を含めて友達になりました。年齢、性別、国籍、母語が違う方々との交流や友達づきあいは、わたしの社会性を育てて深めてくれました。そこで、自分と近い属性や考え方だけではなく違いを楽しめる相手も友達になるんだなと感じました。そこで出会った友達たちの考えや人生を知ることができることは純粋に楽しいし面白いのです。ある友達は、クリエイティブな発想をもたらせてくれます。ある友達は、友達と友達の間をつなげてくれる存在です。日本で事件や大きな出来事が起こるといち早く反応してメッセージをくれる友達もいます。カナダにいたのはちょうど 10 年前ですが、未だにそこで出会った友達たちと SNS を通じて交流しています。

わたしにとって友達とは、わたしを孤独にさせない、わたしの人生を豊かにしてくれる存在だと思います。子どもが生まれた今も、子どものためにだけではなく自分のために友達がほしいというのがわたしにとってのママ友が必要な理由なのだと思います。

3．最近のママ友付き合い

最近のママ友との関係は、第一子出産時

に出会ったママ友との交流の割合の方が大きいです。同じ地域に住んでいるママ友とは、時間を合わせて公園で一緒に遊ばせたり、いただきものをおすそ分けしたりというご近所付き合いです。ママ同士でランチに行くこともあります。一方で、コロナ禍ではオンラインツールを使ったご近所ではないママ友づきあいが広がりました。どうして直接会えなくてもママ友付き合いを保っていられるのか、最近の交流からの気づきをまとめます。

まず、第一子出産後からママ友づきあいをしている横浜に住んでいる Y さんとの交流です。わたし達一家が引っ越しをして遠距離になってしまい、オンラインでの付き合いが継続しているママ友です。最近、Y さんとは、お休みの午前中に ZOOM をつないでみました。そうすると、子どもが中心になって会話になります。例えば、「M ちゃんは、今どんなことが好きなの？」とこちらが尋ねると、「プリンセスが好き」と返答があり、M ちゃんがプリンセスグッズを取りに行っている間に、M ちゃんのママが、「だからこの前ディズニーに行ってきてね、そこでこんなことがあって」などと、子どもの話の補足と説明をするというスキマ時間を使ってママ同士の会話がなされました。それだけでは物足りなかったため、子どもを寝かしつけてから再度 ZOOM をつなぎ、お互いの近況や関心事、キャリアの話で盛り上がりとても楽しい夜でした。この体験から、子どもの遊び相手としての存在でもありつつ、ママ同士のつながりをもてることが、わたしにとってのママ友が必要で重要な理由なのだろうと感じます。

もう一つ、こちらは直接会ったことはー

度もない、しかしオンラインで交流を続けてきた5人のママ友達とLINE電話で交流しました。そのグループは、第二子と同じ年の子どもをもつママ友のグループで、わたし以外は初めての子育て、初めての保育園と仕事との両立をしているママばかりです。その交流会では、「保育園で知り合いの親がいない」「いまどんな病気が流行っているかわからなくて不安」「就学させる学区の情報がほしい」「習い事情報が入ってこない」などが、ママ友不在の困り事として話されました。このグループメンバーの小児科クリニックで看護師をしているママ友は、どんな病気が流行っているかは業務上の情報としてもっているけれど、習い事の情報交換をしたいのにできていないと話してくれました。また、首都圏で働いているメンバーのうちの一人は、自身の子育てへの不安を感じて、子どもを知育教室へ通わせているそうです。自分ひとりで子育てしているとこれでよいのかわからない、「週に１回プロにみてもらっていると安心」という感覚だそうです。

病気の流行や、習い事、地域事情などの情報と、不安に共感したり支え合う関係性は、これまではママ友ネットワークのなかで一般的に得られてきたものだと思います。それが、コロナ禍で、ママ友との出会いの場が変化したり、そもそもママ友になるまで関係が深まらない状況になっているよう思います。首都圏で働いているママ友は、近所付き合いも少なく、一人で子育てをしているような気持ちになり「プロに頼りたい」と思って地域教室に通わせているものの、近所にもママ友がほしいと話します。

おわりに

子育てへの不安や孤立に対応するために、地域では子育て支援員や子育て支援センターが誕生しました。また働く親に代わって保育園が、プロの保育を提供してくれます。子育ての専門家は増え、ネットにアクセスするとたくさんの専門知識にも出会えます。それなのに、ママ友がほしいと思うのはなぜなのでしょうか。子ども・若者支援の場でも聞かれる「友達がほしい」という訴えは、相談員が友達にはなれないことも含め支援の専門家が提供できないものです。わたしたちはきっと専門家とのつながりでは得られないものを、友達づきあいで得ているのだと思います。

HITOKOMART No.11

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

ロシアがウクライナに進攻して1年が経った。今もなお出口の見えない状況が続いている。一部の狂った政治家の感情のままに、一般市民の生活は破壊され、ごく当たり前の普通の生活が消えてしまった。そしてその一番の被害者は子どもたちである。無限の可能性に満ちていたはずの未来に、彼らは今、何を見ているのだろう。

禁じられた遊び

縛る男

昨年の秋にノルウェーの漫画家から漫画を1枚送ってくれないかというメールをもらった。『女性への差別や暴力に反対する』というテーマのもとに世界中の漫画家から作品を集めており、選ばれた作品はノルウェーの国立カートゥーン美術館で展示され、人々にそのメッセージを伝えるという事だった。

自分が本来テーマとして考えることの無かったものであり、締め切りの直前でもあったので、どうするか躊躇したのだが、先方の強い要請に応える形で三〇分ほどで描いて送ったのがこの作品である。

結果的に67か国、261人の漫画家から505点が集まり、30点が選ばれて展示された。日本からは私ともう一人、同じフェコジャパンの横田吉昭氏の二人だけが選ばれた。

この要請がなかったら多分描くことのなかった作品だが、昨今の社会状況を見直してみると、女性へのDV事象は日本でも珍しいものではない。

しかしこういうテーマで一コマ漫画を描いている男性の漫画家を私は知らないしましてやそんな漫画展は見たこともない。

自分の作品作りを含めていろんな事を見直さねばと思った展覧会だった。

腐ったスイカ

ウクライナに関する報道は毎日途切れる事はないがミャンマーに関するものを見る機会は限られている。

国軍によるクーデターから2年が過ぎた今でも人々の虐げられた状況は変わらず、日本国内では毎週のように各地で在日のミャンマーの人たちを中心にした抗議活動や支援の活動が行われているのにそれに触れる事も殆ど無いのが現状だ。

だからミャンマーの人たちの心の中にはこの状況は自分たちだけで解決しなければならないものだという諦めに近い思いが膨らんできているように思われる。

ミャンマーでは緑色は国軍、赤色は民主派を象徴する色だという。

だから表面が緑色で中が赤いスイカは、国軍の中にいるが意識は民主派という人たちの事を指すのだそうだ。

国軍の兵士たちの中には延々と続く国軍兵士の略奪や殺戮行為に耐えきれず、脱走して反政府活動に参加する者や国境を越える者も増えているらしい。

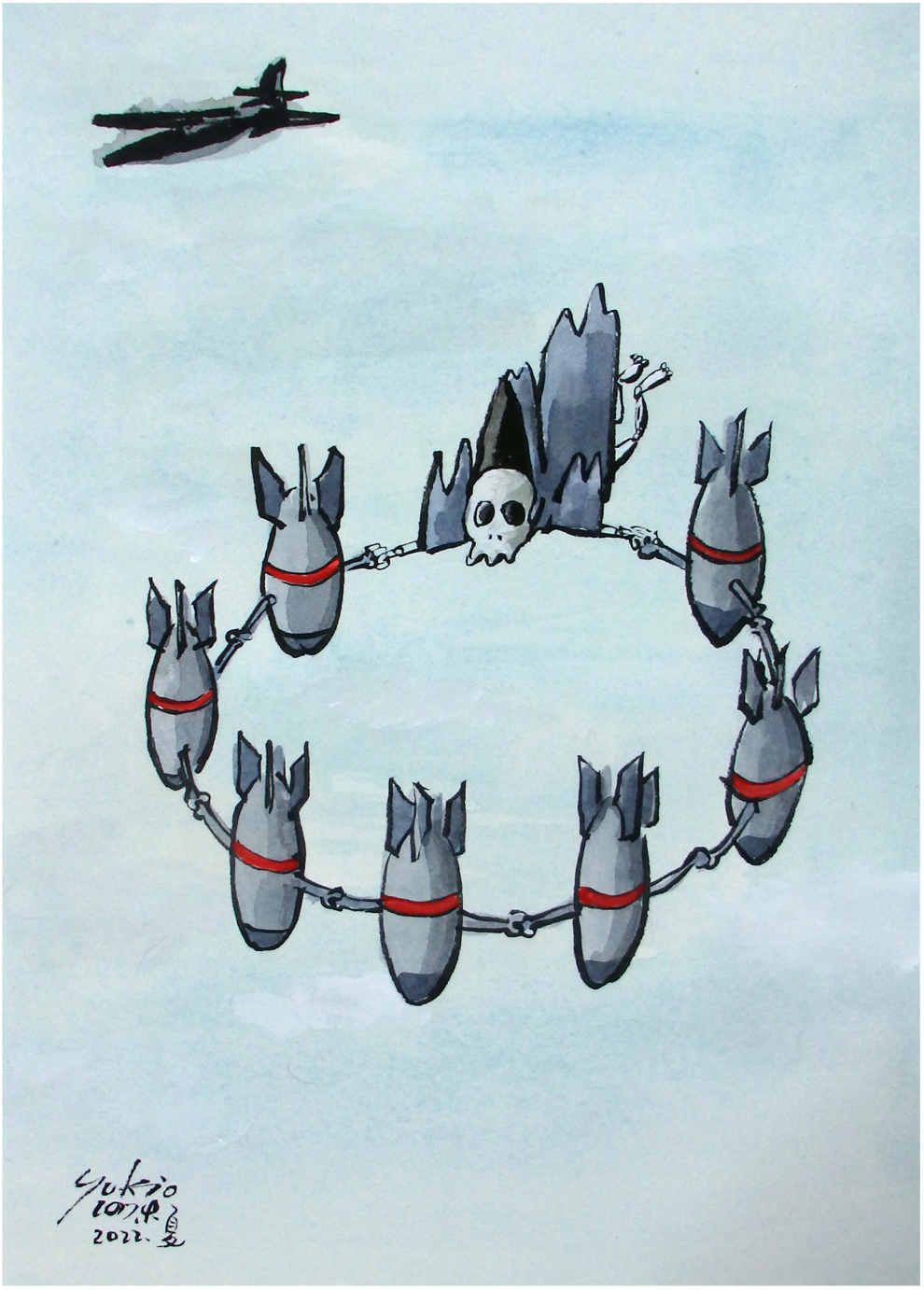
ここに描いたスイカの中は赤ではなく灰色に濁っている。

司令官の帽子をかぶった黒いスイカは骨の髄まで腐りきっている男を象徴している。

そしてみんな
眠くなって…

眠れない時には羊の数を数えるという行為は昔から海外のヒトコママンガの世界では定版の生活シーンとして描かれてきた。
私はいつでもどんな所でも眠れる人間なのでそういう風に羊を数えた事は無いが、世の中には眠れないで悩んでいる人もたくさんおられるから実際にそうされた人たちも多いだろう。
もともとは英語で『sheep』と『sleep』が似ている事が起源らしいから日本語で『ヒツジ』と発音しても効果は無いような気がする。
しかし不思議なことに子供の頃から眠れないときにはそうするものだと聞かされてきた多くの日本人は反射的にその魔法の呪文を唱えてしまうのである。
広々とした草原に散らばる羊たちの姿を目で追いながら、1人たたずむ少年の姿に自分をダブらせるのである。

眠り～ゴーランド



死　神

海外のヒトコマ漫画に描かれる死神は大きな黒いフード付きのマントを被った骸骨である。手には大きく鋭い鎌を持っている。いかにも残忍な殺し屋として描かれる事が多い。
反対に、日本の死神は白髪のヨボヨボの老人である。死装束に似た白い着物を着ている。武器は持っていない。
落語『死神』では決められた寿命に近づいた人間の枕元に座って、その時をじっと待っている姿が描かれている。
静かに命の終わりを見届ける役割のようだ。

家内が癌で亡くなる前、入院中の病室に死神の姿が見えたと言っていた。
霊感が強かった彼女にはそういうものを含めて病院内をウロウロする霊の姿も見えていたと言うのだが、それが病気のせいか夢なのか定かではない。
一度、病室に死神がいると聞いた次女が両手を振り回して「あっちへ行って！」と叫んだらどこかに行ったという事があったらしい。
その夜、隣の部屋の患者さんが亡くなったという話を聞いた時は鳥肌が立った。

もつれる

昔フライフィッシングにはまっていた。始めたのはブラットピットの映画がきっかけだった。
漫画家仲間に釣り名人がいて手ほどきを受けた。市販のフライ（毛鉤）では飽き足らず、自分で毎晩のようにオリジナルのフライを巻いていた。
遠のいたのは仕事との兼ね合いもあったが目の衰えが一番の原因だった。
水面の反射を防ぐ偏光サングラスをかけていても魚の動きが読み難くなった。
川の流れの中に立って釣り糸を結び直したり糸のもつれを解いたりする事にストレスを感じるようになった。
歳を取ったら人は気長になると言われるが、私の場合は生来のイラチは変わらなかった。時間が勿体ないと思うので糸はもつれたらさっさと切り取って捨てるかそっくり新しい物に交換した。
最近は人間関係のもつれもそういうのが一番かなと思っている。
わがままな生活が健康のもとである。

フランスのソーシャルワーク第 7 回

フランスの在宅教育支援ソーシャルワークについての漫画

安發明子

『ターラの夢に見た家族生活』という在宅教育支援の元エデュケーターが描いた漫画の日本語版出版を企画している。私が文章で書くよりもフランスの支援者の動き、言葉づかい、距離感などがわかり「子どもたちのために何ができるのか」議論するいい材料になるはずである。また、本の紹介をするなかで現場の実務者からのメールが週によっては 110 件も届くようになった。より良い福祉を目指す仲間に出会え、フランスの福祉ともつながることができるコミュニティづくりも始めた。

www.akikoawa.com

ソーシャルワークの素晴らしさを広く伝えたい

原作者パボ(PAVO)は広くソーシャルワークの仕事の素晴らしさと必要性を伝えたいと漫画を描くようになった。ASH というソーシャルワーク専門週刊誌は 35 万件定期購読があり、どの福祉事務所や児童保護機関の待合室や休憩所にも置いてあるものだが、その表紙の絵と、最後のページにターラの漫画を 1 ページずつ毎週連載している。

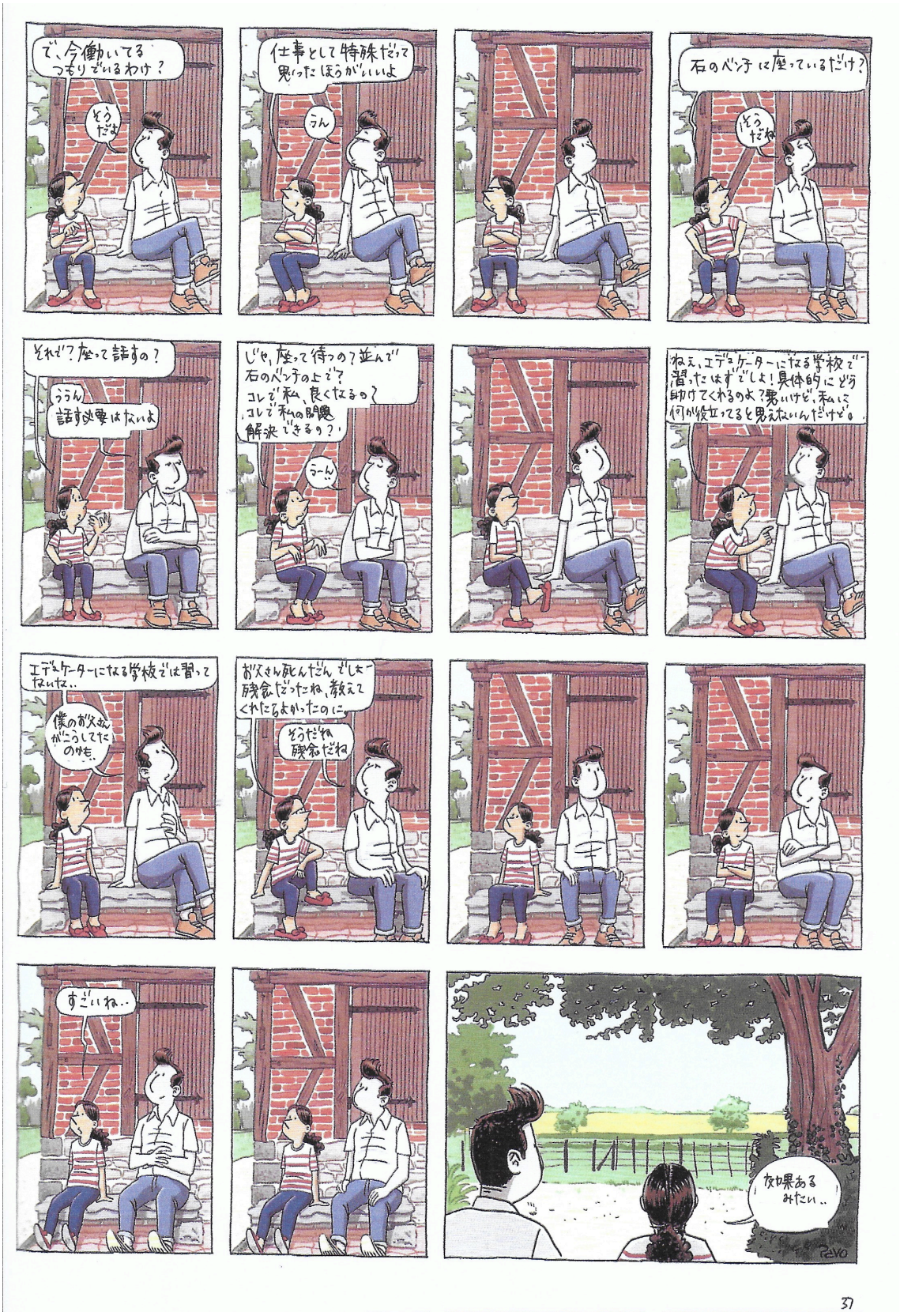
主人公は 8 歳のターラで、あまり頼りにできないお母さんとの 2 人暮らし。お母さんのことが心配になるときはパボに電話をかけ、パボとのお散歩やピクニックでお母さんとできない会話や時間を楽しみ、同じく在宅教育支援を受けている学校の仲間たちと家族のことを話し合ったりしながら、完璧からは遠い環境の中でも自分の人生を築こうとしている。希望したら施設で暮らせるがターラは気を落とす出来事が度々起こる中でもお母さんと家で暮らしたい。

下に紹介するのは夏休み、パボがターラとお母さんをキャンプに連れてきたシーンである。「教育的外出」という予算がつく児童保護分野の活動の一つ。親子の絆の補強、日頃お互い抱える葛藤をゆっくり話し合う機会、一緒に過ごす中でエデュケーターと家族の関係性を構築する機会、そして親が計画を立て旅行を実施できないときに家族で文化的活動をおこなう機会でもある。親としての役割としてできることをパボが母と話すシーンが度々出てくる。そして翌日、まだ昨日の出来事についてがっかりしているターラの隣に座る。支援者は言葉だけではないことを表したページだ。

エデュケーターについて国のガイドラインには「 エデュケーターの職業的姿勢は感情移入、傾聴と親身さを土台とする。相手に合わせるということは相手が必要なときに時間とエネルギーを割くことができるということである」と書いている。

Pavo, 2020, La vie rêvée de Tara Kabé より、安發翻訳[1]

[1] 出版の際はタイプで打った文章、スキャンではなく美しい原画をもとに作成する。今回は仮に手作りで作っている。



Pavo, 2020, La vie rêvée de Tara Kabé より、安發翻訳

親も子も支える福祉

在宅教育支援については前回詳しく具体例とともに書いたが[2]、主に学校から子どもの学習の遅れや問題行動など「心配」があるとされた子どものいる家庭に対し支援の提案と調査をおこない、継続的な家庭内での支援が必要である場合に実施される。7 割は子ども専門裁判官が決定し支援がおこなわれている。エデュケーターは児童保護、障害、成人の自立支援を学んできている国家資格である。パボは、家族の希望ではなく開始しても 1 年後の裁判においては家族の方から「もう一年お願いします」と言ってもらえることが多いと言う。多くは 1 年半から 3 年の間に子どもの心配がなくなり終了している。未成年人口の 1%が利用者であり、エデュケーターは月 5 時間から毎日、親子と過ごし、学校はじめ親子のケアのコーディネートもおこなう。月 5 時間の場合はエデュケーター一人あたり子ども 26 人十数家庭、毎日の場合は子ども 7 人を担当する。民間機関が県の児童保護の予算で運営し、例えば私が調査したパリ市の機関は 1 年間の合計で 1690 人の子どもを 134 人の専門職で支えている。

この漫画を日本で出版したい理由

仲間とともに戦うフランスの在宅教育支援の専門職たち

フランスでは学会や集会のときに笑わせてくれる人を雇い、休憩前や休憩後にみんなで笑う習慣がある。劇団員を呼ぶことが多く、彼らはそれまでの議論の内容をもとにみんなを大笑いさせる寸劇を披露して、参加者をいい気分で次の議論に臨ませてくれる。在宅教育支援の全国大会は毎年 3 日間かけて開催され、1200 人もの専門職たちが全国から集まる。例えば 1 つの支援チームが 12 人で構成されているとしたら、その中から大体毎年 2-3 人ずつが交代で参加する。もちろんそれは仕事の日数としてカウントされ、交通費や宿泊費、パーティー参加費に至るまで職場で予算が組まれている。大会中は、同じエコバッグに資料を入れ街を歩いているだけで誰にでも声をかけられる特別な期間だ。

「どこで働いているの？」「どんなことが課題？」と、すぐさま語り合える 1200 人と出会える。連絡先を交換し、「今度遊びに来てね！」「情報交換会しようね！」と言い合えるのだ。全国大会は毎年別の地域で開催するが、主催地域のワーカーたちは 1 年かけて自分たちで準備する。事務局を外注するわけではない。おもてなしのダンスで迎え、昼食は在宅教育支援の元利用者が経営しているケータリングで、現利用者の職業訓練中の子どもたちが食事を作る。元

[2] https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol51/51.pdf

ワーカーが次々と発表をおこない会場は熱気に包まれる。このワーカーたちの一体感で、みんなで在宅教育支援をもっといいものにしていこう、課題を乗り越えようという気持ちが湧きあがり、自分に仲間が長年いなかったことに気付かされる。仲間がいるからフランスのワーカーたちは戦い続けられるのだろう。

2022 年、この会場でみんなを笑わせていたのがパボだった。会場の入り口には元ワーカーが作った相互理解を進めるためのゲームや作品などが並び、その一角で『ターラの夢見た家族生活』をパボが山積みにしていて、サインを求める列には 30 人近くが休憩のたびに並んでいた。

「在宅教育支援を描いた漫画があるなんて..」その日は 1 冊だけ買って帰って読んだ。翌日も大会があるというのに結局夜中の 4 時まで、ページをめくるごとに笑ったり泣いたりした。ワーカーとしてできることよりできないことの方が多いこと、自分よりずっと賢くたくましい子どもたち、一生懸命やっていても笑われることの方が多いこと、けれど心が触れ合えたような瞬間がたまにあること。子どもと働く素敵な瞬間。ターラとパボの姿と思い出の子どもたちと心許ないワーカーとしての思い出が交錯する。翌日には出版されている残り 2 冊とデッサン集を、持ち金を全部使って買い集めた。

現場での挫折経験と自分にできる戦い方の模索

2000 年代、当時生活保護ワーカーをしていた私は、日本の生活保護現場でできることに満足がいかなかった。持てるものが少ない国だから成す術がないのではなく、持てるものが多い国なのに困っている人に提供できるものが少ないことが悔しかった。お金があればいくらでも治療法があるのに「あなたにできることはこれしかない」と伝えさせられているように感じていた。日本は国際協力に力を入れていたし、私の働いていた自治体はスポーツの国際大会開催にとてもたくさんのお金を使っていた。私はそれを横目で見ながら、道路に面したマンションの裏にある、陽の当たらない一軒家のわきのブロック道を進み、さらに裏にある、年中水溜りがなくなることのない泥道に囲まれた、外より虫が多く、壁一面カビが生えた家で、病気のお母さんが子どもたちと暮らす家を訪問していた。このような環境しか用意できないのに「元気になって働いてください」と言う福祉だった。

私は 20 代後半 4 年近くうつ病になり、精神科病棟に入院した。入院中は生活保護で担当していた利用者さんたちに「安發さん、あのお仕事は大変だよね、大変だったと思

うよ、つらかったね」と励まされた。いつも窓口に文句を言いに来て私に怒鳴っていた女性は、夜間それぞれの看護師が何回部屋の前を通ったか知っていて、皆のスリッパの音を聞き分けていた。しょっちゅう入院していてほとんど会う機会のなかった男性は病院での生活の方が長いという。「世界の車窓から」の時間にいつも「安發さん行ったことある場所かもしれないよ」と呼びに来て一緒に見るのを楽しみにしてくれ、退院のときには「ここも甘い思い出になりますように」とピーチネクターをプレゼントしてくれた。

生活保護ワーカーをやめた私は、これまでに会った子どもたちの生き方を多くの人に知らせることで「どんな子どもにも幸せになってほしい」と思ってもらえるのではないかと考え、日本とスイスの施設で暮らす子どもたちのライフヒストリーを本にした。しかし、それでも企業で働く友人たちには「でも、教育の機会があったんだから苦労も乗り越える努力をするべきだったよね」と言われてしまい、関心を集めるには至らなかった。「アフリカの子どもとかは純粋にかわいそうだと思えるけど、日本の困っている人の話は暗くなるから聞きたくないし、むしろ本人や親がどうにかできなかったのだろうかと思う」こんな反応さえも多くあった。フランスでは、生活保護の子どもたち、利用者さんたちに元気になってほしいという話は人を選ばずできるのに、なぜ日本では福祉の話でみんなと盛り上がれないのだろう、無関心な人に福祉に対する想いを伝えることがこんなにも難しいのだろう……。当時は疑問の答えは出なかった。

うつ病が治り元気が出て 2011 年に渡仏し、2 年かけて大学院に入り、児童保護施設に通うようになった。そこでパリの父や母のような人たちにたくさん出会った。彼らの児童保護や福祉に対する燃えるような情熱は 4 時間話しても尽きないほどだった。なにより子どもたちが元気になって目をキラキラさせていた。けれど、そのときの私はフランスの学校の仕組みもよくわからない、保健所も日本とはずいぶん役割が違うみたい、と全体の構造を理解するのに 3 年かかった。さらに、それぞれよりよく知るため毎年 100 を超える機関や人に会いに行くのに 2 年を要した。その後、やっとフランスの福祉についてわかってきたと、今度は日本語で発信を始めるが、理解していれば書けるわけではなかった。日本にない概念の説明に苦しんだり、思ってもいなかった解釈をされたり、4 年目になる今でもまだまだ四苦八苦している。フランスと比較して日本にとって有益なことを提言できるようになるにはまだ何年もかかるだろう。一方で、12 年余り通訳としてさまざまなプロジェクトの成功を影で支える中で、自分自身の成し遂げたいこともいつか成就させたい、このままでは死ぬに死ねないという決意も固まっていった。日本の全ての子どもが幸せな子ども時代を過ごしてほしい、そのヒントがフランスにはたくさんある。まるで求められているとは限らない商品を 1 人で開発し、生産し、探求するような時間が続いていた。

そんなときに出会ったこの漫画は実に衝撃的だった。きっと私が数ヶ月かけて書いてもうまく伝えられているとは限らない論文よりよほど、現場の哲学や理念や価値がつまった漫画を訳していった方が日本の後方支援になるだろう。

フランスの福祉だって 20 年 30 年前の話を聞くと「子どもの権利」という点では眉を顰めてしまうような話が出てくる。発展というよりも、失敗からの学びと言ってもいいくらいだ。だけど、いまではエデュケーター出身の映画監督、ラジオ DJ、ゲーム制作会社社長、そしてパボのような漫画家がいて、彼らが世の中にいろいろな手を使って子どもを守ることの素晴らしさを訴え続けている。(左の絵は学校帰りに迎えにきたパボとの放課後を楽しみにする子どもたち)

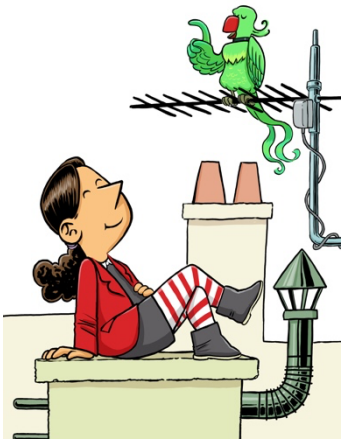
私にも戦う方法がある。日本の現場では利用者の力にほとんどなれないまま戦線離脱した。私には素質がないと思っていた。みんなができることが私にはできず病気になった。けれど、今思えば解決する方法を知らなかったし、解決するための仕組みも十分ではなかった。今の私は、本人の素質の問題ではないと知っている。

自分がワーカーのとき、子どもと隔週で会っても面談という形では十分相談してもらえないままだった。大人たちの車に乗せられるようになり、家には帰らなくなる少女たちもいた。パボがマジシャンなわけではないけど、ターラにとっては「パボがそばにいて、いつでも相談できる」というだけでターラを取り巻く世界は大きく違ってくる。パボは学校に迎えに行き、一緒にピクニックをして、ターラの人生の一部を一緒に歩いて支えている。

私が講演などで「信頼できる大人と成長していける仕組みがあれば、子どもの調子が良くなって、親とも協業することができる」と言っても日本の聴衆には「家族のことについて他人に口出しされるのは日本の文化に合わない」と返されることもしばしばだったが、漫画なら姿勢やしぐさ、言葉遣いなども読む人に感じてもらえる。

私はフランスの児童福祉の現場に通い、子どもたちが調子が良くなっていくのに勇気づけられているが、日本で出会った子どももこの制度があればもっと幸せに成長できたのにと、たくさんの子どもたちの顔が脳裏に浮かぶ。私自身もこんな大人がいる中で子ども時代を過ごしたかった。

パボは「人生はしたいことを全部するには短すぎる」と言う。私も夢の実現に一番近いことを常にしていたい。私がエンパワメントされたようにこの本は日本の子どもと働く人たちに力を与え、子どもたちをとりまく環境にきっといい風を迎えることになると信じている。私が元気づけられたように、今度は私がこの漫画を日本語翻訳し、皆さんを元気づける側に回りターラとパボの物語を多くの人に届けたいと思っている。



日本の仲間、戦友の皆さんへ　安發明子

www.akikoawa.com

川下の風景⑨
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【PLAN75】

早川千絵監督の映画『PLAN75』を唸りながら観た。少子高齢化社会、生産年齢人口の減少と共に、団塊の世代が後期高齢者である 75 歳以上に達し、医療・介護費用が膨れ上がり、高齢者世代だけでなく、若年層にも社会保障費の負担が重くのしかかる現代の日本社会を描く。そんな社会構造の苦しさを、当の高齢者に責任を押し付け「邪魔者」「社会の荷物」と扱われ、各地で高齢者の無差別暴行や殺人が行われるという冒頭の出足から、やまゆり園の事件をも彷彿とさせる。そして、政府は「PLAN75」なる施策を打ち出し、これが国会を通過。75 歳に達した高齢者は自ら死を選ぶことができる、という制度が動き出す。まるでワクチン接種やマスク着用のように、これが社会に貢献できる唯一の選択であるかのように行政広報が繰り広げられる様相に唸りがこぼれる。そして、この選択を選ばざるを得ない人々の多くは、家族関係が乏しく、経済的に困窮し、孤独で社会に行き場のない人々が選ばざるを得ない実態を目の当たりにすると、介護業界で長く働く人間にとっては、この映画の世界は比喩やフィクションではなく、医療・介護保険制度が突き進む社会に酷似しているからこそ、これを観ながら私は唸っている。

【行方不明高齢者】

まもなく 3 月になろうかという週末の深夜、アルツハイマー型認知症を患う 70 代女性が自宅を出たまま行方不明となっている。おそらく家族が気づいたのは朝方であろう。家を出てから 5 時間余り、自身の名前も言えない歩行能力の高い高齢者を探すのは並大抵のことではない。奇しくも、その日の夜半から急激に冷え込み、雪が降り始め明け方には積雪となった。当然、雪をしのごうと無人の軒先や藪の中に入る可能性が高く、そうなると人員を投入してもなかなか見つからない。以前、中学生が山の林道で高齢者を見つけて声を掛けて見つかった、というニュースも見かけるが、運のよいケースだと思う。残念ながら、家族がどれだけ願っても、必死に探したからと言っても、それで見つかるというものでは無く、まさに運の絡む話だと、いくつかケースを見ていて思う。

登山道の入り口に行方不明高齢者を探すラミネートされた張り紙を見ることもあるが、年月を確認すると数年前のもので、発見を待ちわびる家族や関係者の積年の願いや思いを感じる。何故こんなところに、と見つかったときには周囲がそう感じるケースも多い。今回のように冬季で冷え込んだ夜に道に迷うと、体力も気力も失われ、山岳遭難に見られるように幻覚・幻聴の中で山に入ってしまうケースもあるようだ。ひと昔前は、集落を上げて探しに出たり、少なくとも消防団や有志によって捜索隊が出ることもあったが、児童の行方不明とは異なり、マスコミもボランティアもそこまで大きく動くことがない。電車の遅延情報はニュース速報で流れるが、高齢者の行方不明は一部のメーリングリストや SNS で共有されるのみで、地域住民の多くはそのことを知らずに過ごしている。こうなってくると、そもそも地域見守りネットワークなるものが上手く機能していないと見るべきだが、なにせ認知症高齢者 700 万人時

代と言われる社会、あまり危機迫ったものが感じられない。都会であれ、田舎であれ、今後もこのような事件は増える。そうなると、家族では手に負えないから、認知症のある高齢者は施設や病院へとなる。私が介護業界に入ったときは、所謂、老人病院も多く見られたし、家族で介護出来ないケースの多くはそのような施設に入所していった。しかし、今は介護職員すら足りない時代である。介護に手間のかかる人は敬遠される。本当に介護が必要な人が入所できない。更に人手不足を補おうと、取り敢えずの採用を繰り返すと、十分な教育・研修が行われず、現場職員のモチベーションも維持で出来ない。結果、施設という閉ざされた空間で職員による稚拙な虐待や暴行事件が後を絶たない。

【自立を強要される高齢者たち】
自立支援プランというコンセプトにおいては、本人の「自立」だとか、意思決定を含む「自律」が必要だとか、専門職が集まって分かったような口ぶりでカンファレンスを繰り返す。しかし、そこに本人不在のことも多い。例え存在していても蚊帳の外で、そんな本人不在の自立議論をどんな気持ちで聞いているだろう。

その居室の扉を開けた時、目の前の高齢者が首を吊っている光景に見えなかった。床に膝立ちをして、何かの作業をしていると見誤った。しかし、彼はピクリとも動かない。首に食い込む紐を確認し、状況を理解したあと、119 番通報をした。救急隊が到着する間、電話越しに指示を仰いだ。最初の指示はもちろん、彼の身体を床に寝かせることだった。如何に高齢者と言え、男性の身体を持ち上げることができるのか。考える余裕もなく、後ろから身体を抱きしめて持ち上げた。まるで凍っていた身体が割れる音が私に伝わる。身体を持ち上げても、首に深く食い込んだ紐が外れない。後ろから身体を支えながら、「自死用」とラベルの貼られた紐をハサミで切った。そして、心臓マッサージを施す。スピーカー機能にした携帯からメトロノームのリズムが聞こえ、それに合わせて胸を押し込んだ。助かる、という確信は全くないままに救急隊到着まで続けた。
救急隊と共に駆け付けた警察から事情聴取を受けながら、彼の自死に至る理由を推し量った。
長年一人暮らしだったが、生活の自立度は高かった。それがあるきっかけで腰を痛め入院。そこから車椅子生活を余儀なくされた。長崎生まれ。原爆によって被爆した過去も話してくれた。戦後、長く工場に努め、定年後は子どもと同居していたが、家族関係が上手く行かず一人暮らしを選んだ。退院後のリハビリ、もう一度生活を再構成していこう、振り返れば私の支援が彼を追い詰めたかも知れないと思い悩んだ。理想と現実のギャップ。出来ない自分に対する絶望。先行きの不安。『PLAN75』で賠償千恵子が演じた役と重なり合う。

2024 年からいよいよ地域包括ケアシステムが本格稼働する。財務省が掲げる「選択」と「集中」のキーワードが社会保障にも適用される。軽度者よりも重度者へ。リハビリとケアの限られた資源は、必要な人へと選別される。そこからこぼれる高齢者が増える。そして、全国一律のケアシステムから地方への権限委譲という名の押しつけ。地域格差が開き、不平等が起こる。これが 2040 年までの現実だが、自分は現場に立ちながら何ができるだろうかと思っている。その大きな宿題を突きつけられた映画のラストシーンだった。

2023.2.24　米津達也

miho Hatanaka,

遥か昔。助産学生の頃、実習で実際に妊婦さんに保健指導を行うためにリーフレットやポスターを作ったことを思い出す。それほど年齢も変わらない“母親”たちは、想いだけは一丁前の未熟な“学生さん”を甘めにみて聴いてくれていたことだろう。
今回は、妊婦と家族のための保健指導教室の話と、そこで用いるスライドを。

【第９話　助産師のしごと；妊娠期保健指導《ウェルカムベビー教室》の話】

区役所の行う母子健康保健事業に携わって長くなる。厚生労働省の実施する乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）が始まった年から 10 年足らず、訪問員として活動した時期があり、並行して妊娠中の母親や父親を対象とした保健指導のクラスで講師として携わるようになって現在に至る。当初、平日の昼間に行われるクラスは《母親教室》と名付けられており、参加者も妊婦ひとりでの参加が多かった。何年かして《マタニティ教室》となり、さらに今年度からは《ウェルカムベビー教室》と名前が変わった。母子保健を担当する保健師のグループの人たちが熱心で、「母親だけではなく父親も、祖母など周囲の人たちも、みんなで赤ちゃんを迎え入れられるように」との思いから変更となった。
現在、参加者は実母を伴う妊婦のほか、パートナーも一緒に参加する組が毎回数組あり、多い時では全体の 3 分の 2 程度になることもある。その割合は特に COVID-19 禍を機に増加しており、「夫婦で子育てを」といった時代の流れだけではない要素がありそうだ。
一般に産院での出産準備教室などは開催されなくなり、妊婦同士が交流する場も激減し

て、「ふたりでお産を乗り越えなくては」という意識が少なからず働いていると思われる。しかしその「ふたりで」でさえも、パートナーの立ち会い出産ができなくなって久しい。《ウェルカムベビー教室》の実施後に書いてもらうアンケートには、「自分と同じ妊婦さんたちに会えてほっとしました」、「今は（保健指導を）どこでもやっていないのでこういう機会を作ってもらえるのはありがたい」といった内容が記され、孤立した妊婦の姿が浮かび上がってくる。インターネットを通じれば情報はいくらでも得ることができるが、自分以外の妊婦に出会う機会はそうそうあるものではない。日ごろから心細い思いをしている妊婦にとって、この場が必要とされ場として機能していることを実感する。

COVID-19 の流行前のこの教室の人気プログラムのひとつは、５～６人程度のグループによる妊婦同士の交流の時間であった。助産師等のスタッフは基本的には関わらず、パートナーについてのちょっとした愚痴や、食欲がどうしたといった他愛のない話に笑い声が上がり、短時間ではあるが盛り上がる。同じ妊婦同士という連帯感のなか、互いに連絡先を交換し、心配ごとがあるのは自分だけではないと安心して帰ってゆく姿を見ると指導とは別の必要性を感じる。COVID-19 による行動の制限は徐々に緩和されていくだろうが、感染に対して妊婦を守らなくてはいけないという点は変わらない。この《ウェルカムベビー教室》にまた、交流のための時間が安全な状況のもと再開される日が早く来てほしいと願う。

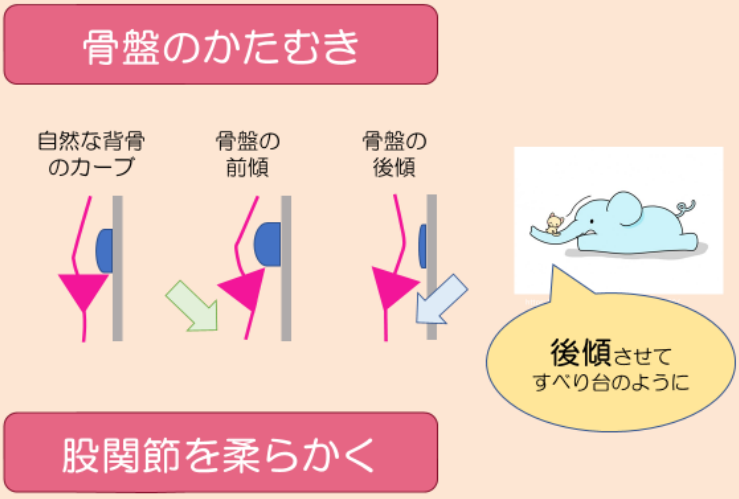
さてこの教室では、現在、講義のほかにヨーガを行っている。個々の妊婦の健康状態が把握できるわけではないので産院で行う同様のプログラムのようにはいかないが、不調を感じる者には見学を勧めてほとんどの妊婦が安全に行えるような内容で実施している。呼吸法やリラックス、お産の時の体の動きなどに関連した簡単な動きを中心に、主にお産にむかう心の準備としての意味合いを大切にしている。妊婦は日ごろ、お腹のなかの赤ちゃんには注意を払っているものの自分の体の感覚を丁寧に感じ取ることに疎くなりがちである。呼吸に合わせたヨーガのゆったりとした動きのなかで、体が緊張したり緩んだりする感覚を味わうことから体験する。体のどこでどのような感じがするか、体が緊張するとはどういう状態なのか、どこに力が入り、どのように緩めるのか、緩んだ時にどのように感じるのか。そういったことの延長線上に“これは自分の体なのだ”といった身体感覚が養われ、コントロール感を持つことからお産への主体的な関与へとつながることが理想である。参加した妊婦からは「久しぶりに体を動かした」、「凝り固まった体がほぐれて楽になった」、「とてもリラックスできて気持ちよかった」、「簡単なので家でも続けてやってみたい」等の感想が聴かれる。日常に採り入れ、お産に向かう気持ちの育みのひとつとして作用し得れば幸いである。また出産経験に主体性を感じられることは、出産後の子育てにも大きな自信として及ぶ。プログラムに参加したある母親は、出産後「お産は、全然怖くなかったんですよね。痛いのは痛いけど、ヨーガの時の話を思い出したら赤ちゃんと一緒にと思ってがんばれた」と順調に育っている子を横におおらかに話してくれた。保健指導は体裁上は“指導”であるが、同じ時間を過ごしながら私自身も若い母親たちと一緒に自分の体の感覚を味わい「どうぞ安全なお産を。そして豊かな子育ての時間を持てますように」と願う。人にも、自分にも。労わりの気持ちで過ごす、やさしい時間なのである。

◆マタニティ リラクセーション ヨーガ

＊ 体と心への効果
リラックスや前向きな気持ち

教室では、自分の体の内側に意識を向けることやお産に対して前向きな気持ちを持てるようにと言葉を選ぶ。自分を大切に感じられ、お産への自信を育めたらと願う。

“私のお産は私がする”。全くそのとおり！それはたとえ帝王切開の手術であっても。



「赤ちゃんがすべり台をするんとおりてこられるような感じに」。そのように言って体を動かす練習をする。イメージが描ければ、陣痛で我を見失いそうになってもふと思い出すことがあるかもしれない。このたとえを話す時、妊婦さんたちは少しうれしそうにみえる。

福祉教育への挑戦(9)

先生の想いに触れて

髙井裕二

私が非常勤先として勤務している専修学校では、常勤と非常勤の先生方で教科「福祉」を教えています。大学でも勤務している私の場合は、高等専修学校から自分が勤める大学に進学してくる生徒(学生)にも関わることができ、7 年間の付き合いになることもあります。高等専修学校での福祉の学びについて、大学に進学したある生徒の言葉が印象に残っています。

「あの時は、ただただ面倒にしか思わなかったけど、A先生の授業がどれだけ専門的だったのか・・・卒業してから気づいた。やっぱあの先生は凄いよ」

私の授業はどうだったのかと思わず訪ねたくなるようなセリフですが、A先生というのは長年、その高等専修学校に勤務している先生で介護職の実務経験もある方です。何度かアシスタント的に授業に入らせてもらったこともありますが、ベッドメイキングはもちろん、移乗・移動や体位変換などについて、しっかりと根拠を述べながら、わかりやすく伝えることができるので、「私には何年経ってもできそうにない」と思えるくらい介護系の知識の差を感じます。

生徒から A 先生の素敵なコメントをいただいたので、A先生にもそのことを伝えてみました。すると、A 先生は「卒業してからでも、そういう風に気づいてくれるのは、とても嬉しいこと。自分だって常に介護講習などに参加して、常に最新の介護技術を伝えようと頑張ってますから」と話されました。

そのような熱意が生徒にも伝わっているのでしょう。A先生はどの学年でも生徒たちから尊敬されています。この連載でもずっと抱えている「介護という領域での現場経験のない自分が授業をするということについて、どう考えているのか」を訪ねてみました。私という本人がいる前で本音は言いにくいとは思いますが、私の背中を押してくれるようなお返事でした。

「髙井先生、現場の職員が来て、この学校の生徒にいきなり教えられると思いますか？無理でしょう。生徒の特性を全く掴めないまま、現場のことを語る先生はいますが、みんな上手くいかずに辞めていきました。ただ『伝える、教える』だけはダメで、うちの生徒たちと関係を築けるか、ですよね。学校の授業という中で、試験問題も作成して評価もしないといけない。教員不足とはいえ、介護職の知り合いはいても、この学校の教員になれるとは思えないので、紹介しにくいんですよ」

私の意訳も入っていますが、概ねこのような内容をお話いただきました。短い言葉の中でも論点がいくつかありますね。この高等専修学校の生徒について理解すること、理解しようとすること。様々なニーズを持っている生徒たちに専門的な知識や技術を伝えるには、「何か」が必要である。そして、自分のやっていることを感覚ではなく、生徒に伝えることができる伝達力。そして教員として生徒の能力を伸ばし、どこまで到達することができているかを評価するための視点。科目ごとの性質はあるものの、生徒とは一定の関係は築くことができていますし、「自分の欠けているところを別で補えるかも」という今まで考えたことがない、自分の強みを活かすことができれば、それなりの教育効果をもたらすことができるのではないかと考えられるようにありました。

もちろん、欠けているところを正当化することではありませんので、絶えず努力をしていきますが、いわゆる「現場」経験がないことに悩まれている方は、他の先生方からどう映っているか、そして自分の魅力や強みとは何かを考えると良いかもしれません。

第 13 回：第 2 章-その 6-

無自覚な特権とチームの対話

著：神山　努
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

2021 年の対人援助学会年次大会において、渡辺修宏先生が企画された学会企画ワークショップ「対人援助実践をリブートするさらなる 1 冊」に私もお声がけ頂き、その際の発表をもとに本稿は執筆しています（ワークショップ等の詳細は対人援助マガジン内の渡辺先生の原稿を参照）。渡辺先生からは企画の際に、対人援助の実践や臨床で行き詰った際の脱却、リブートのきっかけとなった本を紹介してほしいとありました。1 冊の本「だけ」で自分がリブートされたことはないとおもうのですが、確かに自分が対人援助の中で悩んだ際に色々ともがいた中、ある一冊の本が最後のきっかけとなったり、そうでなくても自分に影響したりしたことは確かにあるなと思い、以下の２冊を取り上げました。

本題に入る前にどういう人間が本稿で書籍を紹介するか、少し説明した方が良いかもしれません。私は現在、大学教育学部で特別支援教育に関わる教員養成の教育を行っています。学生たちの学びをサポートすること、そのために様々な知見が提供できるよう教育臨床を中心に研究することが中心業務です。前職は国立特別支援教育総合研究所で特別支援教育の教育課程等の研究に関わっていました。全国の様々な学校、教師と関わる中で、特別支援教育が国内でも多様な現状にあると実感しました。さらにその前は障害者福祉施設の支援員をしており、重度の知的障害、自閉スペクトラム症がある子どもから大人、知的障害がない発達障害がある子どもから大人と、広い年齢範囲の人々の支援に関わりました（この頃に渡辺修宏先生とお会いし、対人援助学会の年次大会で望月昭先生とワークショップすることもありました。それから何年もやり取りが続いています）。この時に成人期以降の方々と関わる経験があったことで、今も子どもの支援を行う際にも成人後を視野に入れて検討できるようになったと思います。大学では、行動分析学に基づく、障害がある子どもとその保護者への支援について学びました。

学生の頃は障害がある子どもや保護者の方へのサポートが興味の中心でした。その後、成

人期以降の方々と関わることでライフステージ全般を見通した支援を考えるようになり、研究職となってからは、障害がある人々に直接支援することが減った代わりに、教員や学校をサポートするために何ができるのかを考えるようになりました。大学教員になってからは年数が浅いのですが、学生指導を中心に考えながら、自分の問題意識もまた変わるのだろうと思っています。そんな人が以下の書籍を紹介すると思って読んでいただけたらと思います。

無自覚な特権

ワークショップではまず、「真のダイバーシティをめざして―特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育」を紹介しました。本書の目的は、「特権を持つ集団（Privileged Group）」に対して、「社会的公正（Social Justice）」について教育するための理論、実践を提示することとされています。ここでの「教育」は、学校教育に限らず、学ぶ・学ばれるという行為や関係全般を指しています。そして「特権」とは、ある社会集団に属していることで労なくして得ることができる優位性とされています。また、人は複数の社会的アイデンティティを有しており、社会的文脈によって特権集団にも劣位集団にもなるとされています。

本書の問題提起の一つに、「人は一般的に特権に無自覚」という点が挙げられています。無自覚である理由として、人は特権を有している際に、社会的アイデンティティについて考える必要がないためとしています。そしてこれと関連して、人が特権に無自覚であることの問題点は、特権を有する人が自らの優位性を前提とした生活をすることが、特権を持たない人々に不都合をもたらすこととしています。さらに、特権を持たない人の不都合の解消が、時に特権がある人々の生活を脅かすと、特権を有する人と有さない人の衝突の可能性を指摘しています。

この特権について私自身に翻って考えると、男性であること、日本に生まれて日本語を話し日本で就職して戸籍を持ち生活していること、今時点では医療上の障害等は診断されていないこと、大学教員であること、などの社会的アイデンティティに付与される特権を有していると思います。一方で、本書で指摘されているように、社会的文脈によっては有していない特権も指摘できると思います。確かに自らのこうした特権を日常で自覚することは少なく、本書を読んで考えたり、あるいは年齢と共に自らのライフステージが変わったことでいくらか自覚しやすくなったように思います。例えば男性であることの特権は、私が娘の親の立場になったことで、それ以前よりも考えるようになったと思います。また少し話題が変わりますが、娘が 0－1 歳の頃、家族で思いついて外食しようとした際も、授乳や離乳食は可能か、ベビーカーで入りやすそうかなどを考えて、それ以前のように自由に店を選べないと思ったことがあります。これも自らの社会的アイデンティティが変わったことで、それ以前に有していた特権の一つを有さなくなったということかもしれません。確かに、有さない立場にならない限り、少なくとも私は自らが持つ特権を自覚すること、それにより不都合を被る人がいることを想像することは難しいのかもしれません。そうした特権を学ぶ、考える

機会が得られるという点で本書は貴重だと思います。

私が専門としている行動分析学では、人を含めた生体の行動の生起要因を環境との相互作用から明らかにしていきます。望月昭先生はこの行動分析学を対人援助に応用できること、個々の人々の生活の質の向上につながる行動が維持される環境設定を具体的に明らかにして検証していく必要を指摘されています（望月，2007）。

行動分析学で特権を考えると、ある人において維持されている行動とその環境設定の中に特権と言える行動があるということかもしれません。そしてその特権行動（あるいは環境設定）を維持するために、特権の維持のために障壁となる他者（多くの場合はその特権を有さない人）を攻撃することがあるのかもしれません。特権を有する人とそうでない人の双方において生活の質を高める行動が維持される環境設定の検討が求められているのかもしれません。

チームの対話とミッションの共有

私は体を動かすのは好きですが、スポーツ観戦やスポーツ漫画を積極的に観ることはあまりありません（自分でも理由は分かりませんが）。「GIANT KILLING」は一人の選手としてのヒーローが描かれるというより、チームが育っていくことが描かれているため読んだのかもしれません。Giant Killing は大番狂わせという意味で、弱いチームが強いチームに勝つなどを指すようです。「GIANT KILLING」はサッカーの漫画で、監督が主人公である弱小チームが育ちつつ勝ち上がっていく、Giant Killing を起こそうとする漫画です。監督が主人公であることが特徴で、時に監督がチームを強くしようと引っ張り上げるシーンもあれば、選手同士で話し合い衝突し、チームが育つシーンもあります。個人的に、チームが目指すものは何か、選手同士で話すところは特に面白く読みました。

私が普段関わっている特別支援教育においても、学校がチームアプローチで特別なニーズのある子どもへの教育を行っていくことの意義が指摘されています。また、私が専門としている行動分析学における障害がある子どもへの支援でも、従来は個別支援が中心でしたが、近年は学校全体で在籍全児童生徒の教育を変えていく学校規模ポジティブ行動支援（school-wide positive behavior support; SWPBS; 庭山，2020）の有効性が着目されつつあります。

こうしたチームアプローチや SWPBS を行うには、学校内で「チーム」を形成する必要があります。チームではミッションとビジョン、何を目指しそのために何を行っていくか、を明確に共有する必要があります（三田地・堀，2007）。特別なニーズのある子どもの教育でも、通常学級への適応を目指すのか、問題行動の低減を目指すのか、長期的な生活の質の向上を目指すのかなどによって、実際に行うことが変わってきます。

SWPBS のように学校規模で教育を変える際に、大きく問題となるのはこのミッション、何を目指すかの共有のように思います。上記のように目指すものが様々に考えられますが、時に個々の目指すもの、集団が目指すものが言語化されておらず、自覚されていないことも

あります。日々子どもへの指導に対応されている方からは効果的な指導法の具体化を求められますが、このミッションを明確にしないと何をもって効果的とするかは変わってきます。それには監督や管理職の大まかな方針提示も必要だとは思いますが、それを具現化するのは実際にプレイする人々なのでしょう。本書で描かれているような、「暑苦しい対話」がチームには時に求められるように思います。

引用

ダイアン・J・グッドマン著・出口真紀子監訳・田辺希久子訳（2017）真のダイバーシティをめざして―特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育．ぎょうせい

三田地真実著・堀公俊監修（2007）特別支援教育「連携づくり」ファシリテーション．金子書房

望月昭（2007）対人援助の心理学とは．望月昭（編）朝倉心理学講座 17　対人援助の心理学，朝倉出版，1-18.

庭山和貴（2020）学校規模ポジティブ行動支援（SWPBS）とは何か？―教育システムに対する行動分析学的アプローチの適用―．行動分析学研究，34，178-197.

ツジトモ著・綱本将也原案取材協力（2007～）GIANT KILLING．講談社

－つづく－

第 14 回：第 2 章−その 7−

対人援助実践における矛盾

著：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

前回まで、対人援助学会年次大会（2021）の学会企画ワークショップ「対人援助実践をリブートするさらなる 1 冊」において各登壇者がご紹介してくださった文献を、読者である皆様と共に、追ってまいりました。今回は、その過程を通して私が思ったこと、または、感じたことについて、いくつか述べさせていただきます。

まずは、本当に心から申し上げたいこととして、各登壇者のご理解とご協力への感謝があります。皆さん、本当にありがとうございました。実に大雑把で適当な依頼しかしていなかったにもかかわらず、快く応じてくださり、さらに、実に個性的なアイデアをお出しくださり、発表してくださり、とにかく感謝の一言です。立場やフィールドは異なれど、対人援助にかかわる「戦友」としての絆を、強く、感じさせていただきました。

「戦友」、といった表現を用いると、いかにも大げさだと思われるかもしれません。ですが、対人援助実戦（実践）にかかわって、あれこれうまくいかなくて、もがいた経験がある方ならば、いくばくかご共感いただけるのではないでしょうか。酸いも甘いも噛み分けて、対人援助と向き合った者たち同士の、不思議な縁というものがある気がいたします。

次に、各登壇者の皆様の文献紹介を経て、実に、いろいろな発見と気づきを頂きました。すでに私も読了済みであった文献をご紹介され、登壇者の話を聞くと、「ええ、そこに注目したの？」とか、「なるほど、そんな読み方があったのか！」といった驚きがあったわけです。そんな予想外な体験って、・・・妙にドキドキするものでして、非常に楽しかったわけであります。読書って、一人でするものではありませんね。

深い！

また、まったく知らなかった文献がでてきて、「・・・これは読まねば」と思わされるわけです。変なプレッシャーとなります。かといって、その文献をすぐに入手できるわけでなかったり、入手しても意外と、なかなか手が出なかったり・・・まさに積み本という罪にな

るわけです

これまた深い！

さて、そのような流れをかみしめつつ、今回は、渡辺が取り上げた、図書（2 冊のうちの 1 冊）について触れていきたいと思います。

矛盾

私が紹介させていただいた 1 冊は、物理学者、松原隆彦先生のご著書です。光文社から 2017 年に出版された、「目に見える世界は幻想か？物理学の思考法」という本になります。

いくら入門書とはいえ、物理学の専門書です。したがって、その領域に親しい方以外は、ちょっと眉をひそめたくなるような、あるいは、少し敷居の高さを感じるような印象を感じられるかもしれません。

しかしこの本は、ありがたいこと（？）に、物理学の専門書には必然かと思われる数式や難解な図表が、ほとんど用いられていないのです。ただシンプルに、「この世界がどのような仕組みが成り立っているのか」といった疑問や問題について物理学がどう答えるかを、気持ちよく読み進めることができます。

とはいっても、なぜ、対人援助実践と、物理学の本が関係するのでしょうか？

実はわたくしは、物理学におけるある「矛盾」に、「対人援助実践との共通点」を感じているのです。ええ、ここだけの話ですが。

・・・物理学における「矛盾」。

無知蒙昧な素人だからこそ、無責任に言い表せる指摘です。私がこれから述べることが、本当に「矛盾」といっていいかどうかは、正直、わかりません。

つまり、単なる素人の浅知識に基づく、ちょっとした疑問に過ぎないのです。よって、それが本当に矛盾であるのか、あるいは、そうでないのかという真偽については、本稿では言及しないこととします。よって、ご専門の方々は、どうか以降の内容をご一笑ください。

さて、渡辺が指摘した矛盾とは、ひらたくいうと次の通りです。

すなわち、長い歴史を経て、絶え間ない科学的探究の結果として明かになってきている様々な物理学における自然法則の説明が、更なる理論的追及の中で、その説明の理論的破綻をいくつか生起させている、ということです。

・・・なんだか、自分で書いていても、よくわからない説明ですよね。

またまた深い！

「ある研究で明らかにされた自然法則が、いくつかのエビデンスによって大いに支持されたものの、やがて、更なる研究によって、その法則が実は未完成であることが判明した。つまるところ、局在局所的なものでしかなかった」というのは、実はそう珍しいことではなく、まさに、科学の発展の中で、何度も示されてきた事象だと思うのです。その意味で、「もっともっと研究が進めば、そのような疑問はスッキリと解決する」と理解すればいいのかもしれません。ですが、光の性質の研究において、それが粒であって波でもあるという説が有力視されるようになったあたりから、そう単純にはいかなくなりつつあるように感じております。嗚呼、もちろん、あくまで個人的な感想です*。

すなわち、量子力学以降の物理学を学ぶとすると、「いくつか生起した矛盾は、さらなる研究によってやがて解決される」というより、「矛盾と指摘できる事象が発見されること自体が常態であって、それら矛盾を、（理論的不和としての）矛盾のままにしないことのほうが、実は不自然である」とすら感じてしまうようになったのです。

あくまでも、現時点における、そして「言葉足らず」の個人的感想です。

・・・ああ、それにしても、なんてわかりにくい説明だろう。私の記述は。

まさに不快！

話がより迷走する前に、もう説明することをあきらめて、言いたかったことに戻りたいと思います。

つまり、「よくよく学べば学ぶほど、なんだかすっきりしないこと、おかしなことがいっぱいみつかる」ということは、それは、物理学の世界だけの問題ではなくて、「対人援助実践」でも同じではないか、ということを言いたかったのです。

やっぱり深い！

その援助は本当に受益者のためのそれか？

そもそも対人援助というのは、その行為者のため、というより、受益者のために、ということが主眼となって組み立てられ、為されるものです。すくなくても現代社会では、概ね、そのように考えられているわけです。にもかかわらず、受益者に喜ばれるどころか、嫌がられたり、怪訝にされることも少なくないのが対人援助の実践であったりします。また、受益者から求められたり、あるいは喜ばれる援助こそ、実は中長期的にみて、受益者にとって、さらに行為者を含む社会全体にとって、ネガティブに影響することだって起こりえるのです。

ことはそんなに単純ではありませんが、これってある種の矛盾といっていいのではないでしょうか？

その援助を、どこで、誰が、どのようにみるのかによって、まったく異なる評価が次々と生じる世界がそこにあるのです。この世界の整合性を、誰かみつけたことはあるのでしょうか？

そんな人がいたら、ぜひご紹介ください！

そんな本があったら、ぜひご紹介ください！

となると、先に記した通り、「矛盾と指摘できる事象が発見されること自体が常態」ととらえ、それの解決というより、できる範囲での改善に努めていった方が、行為者にとっても、受益者にとっても良い気すらしてきます。つまり、「すっきりしないことをすっきりしよう」ではなく、「すっきりしないことはよくあることだ。でも、だからといって諦めるのではなく、もうちょっとだけすっきりできるよう、もうちょっとだけがんばろう」を、繰り返すということです。

うーむ、伝わりましたでしょうか？

矛盾という気づきを経て

ぐだぐだと、無責任で、好き勝手なことを語ってまいりました。

もしここに、宮城県ご出身の芸人さんがいらっしゃればきっと、「ちょっと何言っているかわからない」とつぶやくところなのでしょう。

別にいいのです、もし読み手である皆さんもまた、そうおっしゃったとしても。

「ちょっと何言っているかわからない」ということは、私が伝えようとしたことを理解しようとしてそう反応してくださったわけですから、私が伝えようとしたことを受け止めてくださった、という意味で、だいたい言いたいことをわかってくださったということなのでしょうから。

ちょっと何言っているかわからない、というのは、ちょっとは言っていることはわかるけど、という意味であって、そうであって、そうでない、のです。

そうであって、そうでない。これは矛盾？

そうであって、そうでない。これは常態？

そうであって、そうでない。深いのです。

そうでないから、そうである。

そうでないから、そうでもある。

－つづく－

*ちなみに、スイスの研究チームが 2015 年に、この、光が持つ「粒子」と「波」という二重の性質の可視化に成功しているようです（気になる人は自分で調べてみましょう！笑）。

中国のセクシャルマイノリティ支援　— Ⅳ

劉　強（リュウ　キョウ）
立命館大学大学院　　人間科学研究科

前回まで

前回は、中国のセクシャルマイノリティの支援団体である“Trueself”で行われている活動内容の一つであるホットラインについて紹介しました。

ホットラインはホームページまたは公式アカウントなどから見つけることができ、それを通して相談することができます。基本的にはセクシャルマイノリティの子どもを持つ親であるボランティアが相談を受け付けますが、必要に応じて若手のセクシャルマイノリティであるボランティアに代わってもらうこともあります。相談者の多くはセクシャルマイノリティ本人または彼らの親であるが、相談内容の多くはカミングアウトに関する質問だったり、自己受容に関する質問だったりします。

今回は、この団体が実際に家族へカミングアウトを行なっている、あるいはこれから家族にカミングアウトを行おうとする人たちを対象に発行したカミングアウトをスムーズにできるように推し進めるハンドブックを紹介したいと思います。

当該プロジェクトのきっかけ

プロジェクト始動のきっかけは、支援団体のスタッフが書いた文書の中に答えがある。COVID-19 の影響で、“Trueself”が以前から行なっているイベントやワークショップなどが全部中止することになり、支援の継続が難しくなっていました。そのような状況の中、専門家のアドバイスを受け、今までの実践で蓄積した経験をまとめることを決意したようです。

プロジェクトの進行

筆者は当該プロジェクトのスタッフの一人に詳しい話を伺ったところ、ハンドブックを作成すると決めたのが、2021 年の 1 月頃でした。実現できるまでおおよそ半年ぐらいかかりました。その間、大量な文献調査や報告書をまとめたとともに、インタビュー調査及び 1000 以上のアンケート調査を行い、テーマを絞り出しました。さらに前回に紹介していたホットライン支援で感じた課題及び今までの支援経験でまとめた知恵を加え、ハンドブックのアイディアを創出しました。実際に仕上げた後、何度もテストをし、フィードバックを受けて修正を行い、第一版を完成させました。発売後、さらに使

用者からのフィードバックに実際このハンドブックを使って家族へカミングアウトをした使用者へのインタビューを加えて修正し、第二版を完成させました。今回紹介するものは第一版のハンドブックです。

ハンドブックの内容

ハンドブックは手帳の形になっており、図のようなワンセットになっています。付随した形で、当該ハンドブックの使用説明書、レインボーカードというQ&Aの形式になっているカード、レインボーの絵柄のスティッカーがついています。

ハンドブックには、各種情報も詳細に記載されていますが、カミングアウトを無理に推奨するようなことは書かれていません。カミングアウトするかどうかは当事者の自由であり、それぞれ置かれている状況が違うためよくアセスメントしてからカミングアウトを行うと良いというのが書かれており、支援団体の慎重さ及びカミングアウトという行為への態度が表れています。

このハンドブックでは、カミングアウトという行為を⑴自己統一感を高める、⑵家族関係を促進する、⑶カミングアウトの経験を積む、⑷カミングアウトレターを用意する、⑸親の成長を見守る、という５つの段階で分け、３０日間日記の形でそれぞれの段階で達成する目標を書いています。３０日とはいえ必ずしも１ヶ月以内でカミングアウトしなければならないわけではなく、あくまで手順です。その中のいくつかを紹介します。例えば、1日目の場合、①なんで親にカミングアウトしたいのか、②カミングアウトの後の明るい未来についてイメージしたことがあるか、③その明るい未来のために努力する覚悟があるか、④今の心配事は何なのか、という４つの課題について考えるように促している。その下にメモを書く場所があり、考えたことを記入することができます。2日目では、自己統一感に関するセルフアセスメントになっており、簡単なアンケートが用意されています。解答後、自己採点できるため、自身の自己統一感がどの程度あるのかを確認できます。その下にQRコードがあり、スキャンすれば自己統一に関する内容の動画を閲覧できます。また、6日目ではカミングアウトできた友人へインタビューするように課題が課されており、インタビューの感想も書くように設定されています。このように、使用者の思考や行動を促すように課題と必要な知識を体系的に組み込まれており、カミングアウトする際の準備やその後の家族との付き合い方などを案内しています。

レインボーカード

レインボーカードは⑴自己統一、⑵交友、⑶パートナー、⑷家庭、⑸育児、⑹老後問題というセクシャルマイノリティ及びその家族が最も気になる話題の６つを網羅しています。カードはQ&A形式になっており、セクシャルマイノリティ本人向けのカードとセクシャルマイノリティの子を持つ親向けのカードと分けられています。５０枚のカードを全て紹介することができないが、例としてそのうちの一つを紹介します。⑸育児において親向けのカードでは、セクシャルマイノリティに育てられた子どもはセクシャルマイノリティになりますか、という質問に対し、研究結果を引用しながら、同性の親に育てられた子どもの同性愛者である確率は異性愛者に育てられた子どもより高くありません、とはっきりと回答をしています。このカードは一人でも使用できますが、二人の場合、意見交換しながら使用することも可能です。さらに、大人数が参加するイベントでは一つの質問に対し、多くの人の意見を尋ねることが可能ですので、コミュニティ内部でも活用されているようです。

次回から

今回は簡単にハンドブックを紹介しましたが、紹介したハンドブックは第一版であり、現在はすでに第二版まで発行されました。次回では第二版の最新内容を取り入れて上記で紹介したカミングアウトという行為の五段階では具体的にどのようなことをするか、またレインボーカードの六つの話題及びそれの関連内容などを紹介したいと思います。（続き）

島根の中山間地から Work as Life

第８回
「不登校」

野中 浩一

私は俗にいう「不登校」の子たちと 16 年間関わり続け、そのご縁もあり「フリースクール（兼、通学型の通信制高校キャンパス)」を 12 年間経営する中で、多少の経験を積み重ねてきた。

その過程で何冊もの不登校やその支援に関する著作を読んできたが、河合隼雄氏が著した「いじめと不登校」ほど、家族や性差や発達、そして時代背景や宗教観など不登校に紐づく数多の事象を網羅している本はないのではないかと感じている。今回はその著書の中の言葉をいくつか引用しながら、そこから連想した私の最近の出来事や生じた考えを紹介していきたい。

MAKE

『生きる力が育っていくための「土壌」として親や教師が存在する。このことを具体的に言うと、「安心して好きなことができる」環境ということになろう。』

私が運営するフリースクール（以下、スクール）では、高校生の年代の子たち 30 名強が日々通ってきている。2 月のこの時期は、学習課題もテストも終わり、皆が卒業式に向けて思い思いに活動している。

卒業式の後には文化祭的な生徒たちの発表の場を設けており、バンドやイラスト展示、お菓子づくりや動画づくりの活動が同時進行で行われ、たった 4 部屋のシームレスな空間は、話し声と笑い声で充満している。

話は多少さかのぼるが、こうした企画を考えるとき、まずは 30 名全員で集会を開き、私のファシリテーションでワークショップを開く。その集会の最中、1 人の男子生徒が「男子が女装をしてメイクする」という企画を表明した。女子何名かからメイクしたいと賛同の声があがった。

私はその男子生徒に「これまでも同じような企画が出ることがあったけれど、人にやらせようとするとだいたい失敗して、発起人が率先してやってもいいという覚悟があればだいたい成功すると思う。自分でやる気持ちはあるかい？」と聞いた。「やります」との答えが返ってきた。

こうして初めはごく少数でスタートしたファッション・メイクグループだったが、その練習回を重ねるごとにオブザーバーの生徒が増えている。

この原稿を書いているまさに今日は、メイクされる側の高校生男子 3 人、メイクする側の高校生女子 3 人で、1 人に 1 人が付いて顔と顔を近づけて 1 時間ほどの練習会が開かれていた。ついでに就職が決まったばかりの女子生徒も一緒にメイク。

する側の女子生徒たちの真剣な表情。される側の男子生徒たちの神妙な表情。興味・関心に基づくそこはかとない活気。あまりメイクに縁がない私でも、それが生徒たちにとって創造性が高い行為であり、真剣に取り組む価値のあることなのだと感じられた。

集う場

『「生きる力を育てる」というのは大変なことである。ハンパなことではできない。しかし、子どもたちに囲まれて、一所懸命に対応していると、自分の「生きる力」がだんだんと強くなってきているのに気づくことだろう。』

このスクールは、集う。
学年や年齢の垣根、男女の垣根はあまりない。

※写真は日常の学習の集いと、春のハイキングの集い。プライバシー保護の加工あり

そこに行きつくまでには、ある程度の時間の経過を要する。
年度の最初ほど、支援者としての私の思考と身体の回転速度は速く、後になるほどに落ち着いて見守れるようになる。大まかな流れは次のようなものだ。

新入生が加わる 4・5 月。学習や活動の時間よりも、お昼休憩やちょっとした隙間の非構成的な時間に注意を払う。こまめに声をかけ、1 人 1 人の感覚や今の状態を理解するよう動きまわる。

だんだん関係ができてくる 6・7 月。ちょっとした行き違いやトラブルが起こることも多い。何かが起こりそうなとき、関係する生徒たちと一緒になって今の気持ちや考えを言語化しながら、関係の間に立って通訳していく。

全体の関係がよく混ざり合う 8・9 月。多くのイベントを催して、関係の軸を増やす。
もはや大人を必要としなくなる 10・11 月以降。ただただ見守りながら、ときおり刺激の種を混ぜる。

そうしているうちに、自然とよく集う集団になる。
そうなるために最も大事にしていることは、1 人 1 人の感覚や考えを自然に表現してもらえる機会をつくることと、それをその場にいる全員で共有できる機会を設けること。

必ずしも生徒同士全員が直接接していなくても、相手の感覚や考えを知る機会があれば、自然と緊張がほどけ不安が和らぐ。

※写真はクリスマスの集いと、生徒・職員が入り混じった日常の勉強の教え合いの集い。
プライバシー保護の加工あり

不登校や不登校ぎみの子は「個別対応から始めないと駄目」だと考える人がいる。
うちの子は同年代が苦手、集団行動が苦手だから、「集団に入るのは無理」と考える人もいる。

大人として、その子の経験からくる傷つき、苦手意識に寄り添うことは大切なことである。それと同時に、その子がまだ気づいていない自身の可能性を体感させて本来持っている力を発揮できる場を提示することも、経験や智恵に勝る大人だからできることであろう。

思春期以降の子どもは、先生や授業以上に、友人関係の中で学び、自分を目覚ましく変化させていく。「不登校」や「人が苦手」といった訴えがある子でも、100 人中 95 人くらいは、すぐにでも大勢の集団

の中でそれなりにやっていける。

その子の力を心底信じることと、その子のその時々の感覚に寄り添うこと、そしてその場所やそこにいる人がその子を脅かさない（安全である）という合意形成さえできていれば。

※写真は授業風景（左上）、自由時間（左下）、こたつを囲んでの談話（右上）、卒業式の計画集会（右下）
　プライバシー保護の加工あり

正義に疎外される悪

『自分はいいほうにいて、悪いヤツを対策によってよくしてやろうというやり方は成功したためしがない。』

虐待、ＤＶ、暴行、性暴力、ハラスメント。
ニュースや記事でこうした暴力や性に関する言葉に触れるたび、これらの「言葉を使う側」のモラルが問われているように感じている。

魔が差したような案件であれ計画的で悪質な案件であれ、これら単純化された同じ言葉で表されることがある。被害の大小ではなく、人の関心を惹くものほど大きく取り上げられる傾向がある。

また、昨今は加害と被害を分けるうえで、被害者側の主観や精神的苦痛といった目に見えないものを根拠とする場合もある。

地震や豪雨であれば、危険度が数値によって明確に表されるため危険を共有しやすいが、主観による苦痛は明確に捉えることが難しく、それゆえ過剰に共感されてしまい、正義を自認する側による「悪」の製造と、悪への「攻撃」の正当化の両方を促しているように感じられる。

それこそ主観になるが、近年、暴力的で自己中心的な犯行が多発する一方で、こんなことでも逮捕されるのか、この件はここまで大々的に晒されなければならないのかと、報道に驚くことも多い。

レッテルを増やすと、悪者が増える。
しかし逮捕されても、その人が消滅するわけではない。
早晩、社会的な負債を抱えて戻ってくる。

こうした負債を抱える人を安易に増やすことは、中・長期的に見れば犯罪の増加や集団化、社会の不安定化や極端な思想の台頭を招きかねないと危惧せずにはいられない。人口減少で危機への対応力が減退し続ける日本にあってはなおさらである。

清き水を求めすぎたとき、そこにあった淀みや汚れはどこに行くのか。
その浄水にどれだけの魚が棲めるのだろうか。

「行きなさい」

『指導しない。言って聞かさない。何もしない。しかし、居るということ、これが出来たらもう最高なんです。』

この言葉は、「教育」の育の部分の大切さ、「育つ」をつぶさに見守ることが大事であることを表している。私も 2 人の子をもつ父として、このことは教師だけでなく、親にも当てはまることだと感じている。

高校卒業シーズン。生徒のお母さんからお礼の電話をいただいた。
これまでいろいろあった中で卒業が決まったことへの喜びの声だった。

人と話すのが好きで社交的な子。だからこそ頑張りすぎて疲れてしまうことがある。机上の勉強はそれほど得手ではないが、身体を動かして働くことにはやりがいを感じる。学校でみんなと同じように頑張りたいけれど、できなかったり気持ちが荒れたりで、勝手な行動をとる子とレッテルを貼る人もいる。これまでそんな子を何人か見てきた。

電話口で「お母さんの心からの後押しがあってのことですよ。特にここ最近は、難しい時期に何度も力強く押し出してもらっての卒業です」と伝えると、

「できるだけ『行きなさい』と言わないようにと言ってもらって、それで安心していられました」とのお返事。

3年前、この子は私のフリースクールを辞めると言って三者面談に臨んだ。

私はそこでお母さんに対して「来られない中で学校に行きなさいと言っても母子ともに苦しむだけで効果がないと思います。」と前置きしたうえで、

「言えば言うほど子どもはふさぎ込んでしまうし、かといってお母さんが言いたいのに我慢するのもよくない。だから言い過ぎはよくないけれど、本当に言いたくなったときは言ってください。」と伝えたように覚えている。

ここで大事なポイントは、面談での話の中身ではなく、この話を本人と母と私と一緒に共有して、一緒にこれからを模索したことだと感じている。

面談中、誰が誰を怒るでもなく責めるでもなく、（本人は不機嫌であったが）本心とは裏腹な感情や作為も秘めず、ただお互いを理解するためだけの結論のない時間が流れた。「学校を辞める」という子と、「辞めてほしくはないけど本人が行かないというなら仕方ない」という母と、そのことを確認する時間だけが流れた。結果的に、この子は続けることを選んだ。

子どもが不登校となり、親が子に「あなたのために言ってるの」とアドバイスするとき、親自身の不安やいら立ち、世間体が大きく加味されていることがある。ただもちろんそのときは親も必死で、本当に「あなたのため」と思いながら怒っている。日々の仕事や家事の忙しさもあり、思い通りにならない日々にストレスを募らせてつい言葉にトゲが出てしまうことは、良くないながらもごく自然なことである。

こうしたたくさんの挫折やイライラやもやもやを経ると、親子ともに変化が生じることがある。
わが子が学校に行ったり行かなかったりの日々が続く中、「行きなさい」と言って諍いが起きた過去を省みて、「この子は今どういう気持ちなんだろう」と理解しようとする気持ちが芽生える。どのタイミングで何を言ってあげたらこの子に届くのかと、わが子との会話や関係づくりを通じて模索する日々。加えて言っても聞かないだろうという諦めも少々。

あれから3年。順風満帆とはいかず、間で何度も浮き沈みがあった。
そんな日々の積み重ねの最中、お母さんが「今日は行かないといけない踏ん張りどきだ」と感じたとき、勢いよく発せられる渾身の「行きなさい」は、さぞ力強いことだっただろう。

この行きなさいは、子どもがふさぎこんだり、反抗したり、気分が萎えたりする説教言葉ではなく、元気と勇気をくれる「行きなさい」になる。

余談であるが、私がスクールカウンセラーとして勤務する学校の先生の中からも、このお母さんのように、ここぞという要所での温かく力強い言葉かけを聞くことがある。聞いているこちらも気持ちがよくなり、言葉をかけられた生徒もエネルギーが注入されて自然に身体が動くのを見ることがある。

偏人の援助論

『母親は「みんな一緒にやりましょう」「みんな同じに」ということを大事にします。これに対して、父性は「これとこれは違う」といった「個」の厳しさを持っている。』

手前の話で恐縮であるが、私についても少々触れたい。心理士がフリースクールを運営しているというと、優しい人が手厚く支援してくれるイメージを持たれることがある。

しかし私は、その子にとって必要最低限の支援はどこまでで、カットできそうな支援はどれか、常に生徒の成長や変化とともにケアやサポートを引き算していこうと見定めている。支援を差し引いていく、支援ケチな考え方の人間である。

加えて、私は自分がこうだと思ったことは基本的に曲げない。かなり以前に生徒が、「野中さんて普段大体のことは聞いてくれるけど、時々どんな武器で攻撃しても全然効かないダメージゼロのとき（頑として聞かないとき）がある」と、的確な比喩で私を表してくれた。

私は「仕事だから」子どもたちと関わっているという感覚はない。仕事だからこその責任を果たすことは当然であるが、やはり私はその子（およびその家族）と関わりたいから関わるのである。いやなことはいやだと言う。おかしいと思うことは生徒であれその家族であれおかしいと言う。自分の本心を後ろに置いて、他意や裏のある言葉を言ったりはしない。

とはいえ、いろいろな状態の子が頑張って再起を目指してスクールにやって来る以上、その子の成長の段階により、自分の出し方を変えている面もある。

1 年生のときは直接的かつ積極的に生徒を支える「補助輪」。2 年生のときはふと存在が忘れられることもある部屋の片隅の「観葉植物」。3 年生のときはできることも増え自立心が芽生えた生徒たちが外の世界に出ていくうえで突破すべき「壁」。生徒個々や集団の塩梅を見ながら、このように立ち位置を変化させているように感じている。

誰のための

（フリースクールのような自由な場にも）『いろいろな人がいて、集団というか、実際には小社会なわけで、好き勝手にやっていてうまくいくということはあまりない。お互い同士でぶつかりあうし、あんなヤツは嫌いだと思われますから、自分でも不愉快なことが生じてしまう。そんな試行錯誤のなかで、成長していきます。』

上記は、フリースクールのように自由な空間だと怠けたりダメになったりするのではないかという問題に対して、「いじめと不登校」の著書の中で河合隼雄氏と対談した、東京シューレ奥地代表の言葉である。

近年はコロナ禍の不登校急増に伴い、「不登校特例校」が脚光を浴びているように感じている。

一方で、同じく元不登校の子どもたちが多く通う「通信制高校（およびそのサポート校）」に対しての規制や管理の風当りは強くなる一方である。

不登校の子をサポートするためには、その子の根っこに付着する緊張や不安を和らげること、自由な風土の中で自分らしさを回復することが大切である。そうした子たちを支える組織や団体や職員が主体的に責任をもって仕事をするために、上からなにかに抑えつけられたり、必要以上に時間に追われたりせず、のびのびと生徒１人１人と関われる土壌づくりが肝要である。

対してここ数年の高等学校通信教育の質の確保・向上の取り組みは、少なくとも私の身辺の通信制高校や志ある先生たちを著しく疲弊させていると感じている。制度本来の意図を外れて「説明書類の確保・向上」と「人との関わりの劣化・衰退」を促してはいないか、今後の点検・整備を切に願うところである。

全国に広がる通信制サポート校は私塾的であることが多く、組織としての枠組みも多様（といえば聞こえはいいが実態は玉石混交）であり、利用者が多くなるほどに良くも悪くも世間の注目が集まりやすくなる。規制や管理の声が生じることは、ある意味で仕方のないことだろう。

一方で、その場所がなければ引きこもっていたかもしれない人、将来に希望を見出せなかったかもしれない人が、全国に数多く広がったサポート校のうちの 1 校によって、人との交流やそれに伴う刺激が得られたというだけでも貴重なことだと思うのだが、身内贔屓な考えであろうか。

社会学には「犯罪は公共的な健康の一要因であり、およそ健康な社会にとっての不可欠な一部分をなしている」(Durkheim1895)という捉え方がある。社会の中の不適切な行為は、社会の規則が正常に機能している証だという考え方である。これは犯罪に限らず、ルールの枠から外れるものごとの多くに当て

はまる。

「不登校」という事象自体がもともとの学校の制度設計にとってのイレギュラーである。そのイレギュラーを支える場に規則正しさや一様な基準を求めることは、〝誰得〟※1 で本末転倒な行為に思える。もちろん利用者等に対する著しい不利益事や不法行為があれば、個別かつ厳正に対応したり是正を促す必要はあるだろう。

一方、問題解決のためであれ、予防のためであれ、世論からの防衛のためであれ、一律の規制や管理を増やすことは、悪い部分を浮き彫りにし改善することもあるが、同時にもともとあった良さや人間的な温かみを著しく損なわせる危険性もあると感じている。さらにそうして損なわれたものが数値やデータで出てくることはほとんどない。規制や管理の副産物として失われたものは目に見えず、調査することも困難だからである。

人も組織も、社会の中で揉まれながら試行錯誤して成長する。その中で著しく害をなすものは自然と淘汰され、長く続くものはそれなりに社会に利するところがあると見なされる。それでよくはないだろうか。

大国を治むるは小鮮（しょうせん）を烹る（にる）がごとくす

語句注釈

※1 誰得（ダレトク）　ネット用語で「誰が得することなのか」を疑問視する言葉

引用・参考文献

河合隼雄（2009）「いじめと不登校」　新潮社
長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志（2007）「社会学（新版）」　有斐閣

かぞくのはなし
きむら　あきこ

第五話　天国からの年金

毎年、誕生日の頃に、年金特別便というはがきが届きます。その中には、自分が将来受け取ることのできる年金の額が記されています。老年期にはお金がどのくらいあれば生活できるのかが、しばしば話題になっていたようにも思います。老後の資金が準備できておらずに、将来を憂いてしまう人や、最終的には社会保障が整っているのだから心配ない、などと楽観的に捉えている人もいます。時折、年金事務の誤りによる未払い等のニュースも耳にすることがあります。

現在、老齢基礎年金は、保険料納付済期間と保険料免除期間などを合算した受給資格期間が 10 年以上ある場合に、６５歳から受け取ることができることになっています。逆を言うと、10 年未満では、年金を受給することができないのです。そんな年金ルールの中で、ある人の話を思い出しました。

その日暮らしの毎日の中で・・・

忠男さんは、3 人兄弟の末っ子でした。15 歳で中学を卒業すると、「金の卵」と言われた同じ年頃の子ども達と一緒に、都会の働き手として故郷を離れました。田舎の貧しい家では、両親と兄、姉が、末っ子の巣立ちを元気に見送りました。上京後の忠男さんは、社員寮で生活し、毎日仕事と寮の往復の単純な生活でしたが、あっという間に生活には慣れていきました。田舎で高校に進学した同級生が学生生活を送っている時期に、忠男さんは、仕事から帰宅すると、同僚や先輩たちと酒やタバコを嗜みながら、麻雀をするような生活を覚えていました。未成年者が酒やタバコを嗜むことを咎める大人もいないような当時の環境でした。

あっという間に月日は流れ、20 歳を迎えた頃には、すっかり大人びた風貌です。都会のあちらこちらを知るうちに、１５歳で仕事のために上京した時の、

勤労意欲はどことなく影を潜めていました。怠けることも、ちょっとしたずるがしこさも身についていました。

「金の卵」として入った勤め先を辞め、より多くの収入を目指しながら仕事を転々しているうちに、田舎の実家の両親や兄弟に対しての後ろめたさが、故郷に帰る足を遠のかせてしまっていました。気づけば忠男さんは 30 歳も半ばを過ぎていました。そんなある日、偶然出会った田舎の友人から父が亡くなっていたという知らせを聞きました。友人は、親の死に目にも会いに来なかった忠男さんのことをひどく中傷したものでした。父の死を知った忠男さんは、慌てて田舎に帰りました。母と兄、姉はそんな忠男さんを責めることもせず、音信不通からの再会に安堵した様子でした。

父を亡くした母の面倒を見ると言う理由で、20 年ぶりに田舎での生活を再開しました。母の面倒をみながら田舎での仕事を細々としていました。15 歳で都会生活を覚えた忠男さんにとって、田舎の暮らしは退屈なものでした。それが性分なのか、ある日ふらっと家を出てしまい、それっきり、忠男さんが実家に戻ることはありませんでした。

何故、家を出たか。忠男さん自身もよくは記憶していないそうです。再び、都会の雑踏の中で、その日暮らしが始まりました。都会では、手配師が紹介してくれた仕事先に行き、その日の収入を得ては、また翌日の仕事です。面倒になれば、そこらここらで夜を過ごし、自由気ままな放浪生活。そんな生活をしているうちに、いつしか都会のそこここが、忠男さんの「ホーム」となっていたのです。そこが、「ホーム」なのか、「ホームレス」なのか・・・５０歳を過ぎた頃には、健康懸念をされ手配師に仕事を紹介してもらうこともずいぶん減ってしまいました。それでも、なんとか食いつないだものです。

７０歳に迫ったある日、忠男さんは、仕事中に倒れてしまいました。持病の高血圧が悪さをしたようです。救急搬送された病院で、保険証の提示を求められたものの、健康保険などには当然加入していません。病院のソーシャルワーカーが、生活保護の手続きを支援しました。短期間の加療を経て、忠男さんは、生活保護の範囲内で賄えるアパートに暮らすことになりました。壁も屋根もあり、自分だけのスペース。何年ぶりだろうか。生活保護はやや窮屈な面もあったけれど、７０歳にもなった体を駆使して働くよりも、ひっそりと生活できることは悪くはない、とも感じていたのが正直な気持ちだったそうです。3 人きょうだいの末っ子だった自分。兄や姉は、どうしているだろう。母はきっと、この世にはいないだろう。天井を眺めながら思い出すのは、故郷の母ときょうだいのことです。

生活保護のケースワーカーが、定例訪問でもないのにやってきました。何か、重大なニュースをもってきた空気は感じたものの、それが良いニュースなのか、

悪いニュースなのかは検討もつきません。今更、良いニュースもないだろう、と思ったのも事実です。ケースワーカーは、申し訳なさそうな、それでもこれは忠男さんにとっては良いことなのだ、と前置きして言いました。

「忠男さん、あなたに支給されるべき年金がありました。」

なんのことかさっぱりわかりません。忠男さんは、20歳を過ぎた頃から定職についたことがなく、日雇い収入の毎日でした。年金制度が変わった以降も、何の手続きもせず、年金を収めたことなどありません。当然、年金受給の要件などは満たしていないことは自分が一番理解していました。ところが、生活保護を受給した後、役所の人が、事務手続きをしていくうちに、忠男さんには年金の受給資格があったことがわかったのです。年金を収めていたのは、一度故郷に戻り母と暮らしていた時期だと言うことがわかりました。およそ、10年と少しの間、忠男さん宛の年金の振り込み用紙で、母が納めていたのです。ある日、ふらっと姿を消してしまった息子宛に届く年金の振り込み用紙。母は生きている間、その用紙が届く間、せっせと振り込みを続けたのです。

忠男さんは驚きました。そして、６５歳以降の年金が遡って支給されることになったので、生活保護は停止になり、まるで母が天国から送ってくれたような年金で生活することになったのです。

15歳で貧しい親元を離れ、「金の卵」と言われ都会に旅立つ息子を送り出し、都会にもまれて故郷に戻った息子。そこには、しっくりくる居場所もないまま、何も言わずに出て行ってしまった息子を思いながら、母は年金の振込用紙をもって、律儀に年金を納め続けたのです。そんな母の姿を思い浮かべて、忠男さんは親孝行ができなかった自分を後悔しています。そして、毎日、母を思いながら故郷の空を思い浮かべているのでした。

母の思いが、時間差で届いたようなお話でした。

おわり

＊個人情報に配慮して、事実を加工しています。

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（4）

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことだと思います。技能と技術を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

ヨミトリ君は笑顔と共に

対人援助マガジン 49 号の「ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（1）」で、パーキンソン病の進行により意思疎通が困難となっていた A さんが意思伝達装置ヨミトリ君試作機の体験者第 1 号として、操作をやってみてくださった時のことを書きました。

> *“パーキンソン病の進行により四肢麻痺となっている A さんは、1 回目のテストにおいて、スイッチ部に手を置く位置や読み取り感度の何度かの調整の後、見事に操作に成功し、いくつかの質問に対する A さんのイエス・ノーの回答は、計測値を表示するパネルではっきりと確認できました。A さんが自らスイッチを操作した証しでした。“*

同 50 号では、遡って、友人のマギーがヨミトリ君開発者の岡田浩さんを紹介してくれたところから、スピード展開で試作機の完成を見て、いよいよ A さんに試していただくところまでの経過を書きました。

> *“いよいよヨミトリデバイス試作機のお試し開始です。ちょうどタイミング良く神経難病の A さんと交通外傷の B さんのところに続けて訪問できることになりました。A さん、B さん、よろしくお願いします！”*

A さんとBさん、それぞれにヨミトリ君初お試し時に見事操作に成功した時の感激はいまだに忘れることができません。でも驚いたのは、その翌日に岡田さんから受け取ったメールです。

「昨日はありがとうございました。
無事に動いてほっとしています。
押す強さで気持ちの入り方や興味の内容がわかったのは驚きです。
B さん宅でテーブルに置いたときに本体が滑りやすいと感じたことと
A さん宅でアクリルにそのまま乗せると手が滑るというのを感じたので
手を乗せる部分と台の下面にゴムシートを張ってみたいと思います。

また、荷重をかけるセンサ部分も手を乗せるのであればもう少し補強すべきと思いましたので次回までに再度加工しようと思います」

ヨミトリをなんとかデバイス化して、A さんや B さんが確かにわかっていて意思を表出していることを科学的に証明したい！という長年の悲願が一つの形になって実現したことに私は大喜びして、翌日も大喜びしたままの時に、岡田さんはもうヨミトリ君改良の作業に入られていて…。システムエンジニア恐るべし。私も負けてはいられません。とにかくヨミトリをがんばって、A さんや B さんの意見や希望をお聴きし、どうすればヨミトリ君をより使いやすくできるか、A さんや B さんの思いを活かさなければいけません。それからは、ずっと改良とヒアリングとディスカッション、そして実証試験の連続です。AさんやBさんに「自分で操作できることがとてもうれしい」と喜んでいただき、同時に、実証試験の協力者として大いに活躍していただけることが、私も本当にうれしい。

ヨミトリ君は、極低荷重の変動をキャッチして電気信号として出力し、PC へ荷重データを送信。その操作者の手の力の強弱により入力感度を調節できるのが特徴です。極低荷重です。先日も海外のTwitter発信で、同様の意思疎通支援装置で「5gの荷重さえもキャッチできた！」という大アピールがあったのですが、私は「ヨミトリ君もやってますけど」と一人鼻高々でした。最初にAさん、Bさんに試していただいたのは、一応「試作機」という名目だったのですが、今振り返ると、既に最初から一定の完成を見ていたなと。基本的にその素晴らしいコンセプトと機能は初めとまったく変わっていないです。ただ、Aさん、Bさんの手の形状、微小動作に応じてヨミトリ君の入力パネルへの手のセッティング、感度の調整、ヨミトリ君を使ってやりたいことのそれぞれの要望に応えるべく、ハード、ソフト共どんどん機能を拡張している状況です。

昨日よりさらに使いやすくなっているヨミトリ君
今日は操作するのがとっても楽しいヨミトリ君
明日はもっと期待できるヨミトリ君

ヨミトリ君はAさん、Bさんとずっとずっと進化し続けます！

Aさんのところは、一時、奥様がお忙しい介護の合間を縫ってヨミトリ君のパネルセッティングと電気信号受信部のM5Stackという機器の操作を練習されていました。でも、ご高齢で時代的にも元々IT機器のない暮らしを営まれてきたご夫妻です。奥様はスマホは見事に利用されていますが、やはりヨミトリ君は馴染みのない特殊な機器なので、岡田さんや私がいない時にお一人で練習するのは相当ハードルが高かったです。奥様に大変な思いをさせてしまい申し訳なかったですが、奥様のおかげで大切なことを学ぶことができました。それは「誰でも簡単にすぐ設定できます」と言ってはいけない。「はい、やってみてください」と気楽に促してはいけないということ。今思えば至極当然の事だったのですが、機器は馴染みがない、操作する人は四肢麻痺で意思疎通が難しいという状況で、パネルのセッティングを試みるご家族、支援者の方はまさに手探りの状

態。プレッシャーはこちらの想像をはるかに超える大きいもののはずです。

それからは、その後増えたヨミトリ君体験者のご家族には、なるべく段階的に、少しずつ少しずつ機器に馴染んでいっていただくように気をつけて…いるつもりなのですが、ここはまだ支援者の自覚と工夫が足りません。今後の一つの課題です。

でも、Aさんの奥様がすごく救いとなることを言ってくださいました。

「なかなか練習できなくて、お父さんのベッドの横にヨミトリ君置いているだけなんだけど、訪問医の先生がね、『これ何？』って。お父さんがこのパネルを押して、押した力がこの小さい四角の画面で数値でわかるんですって言うと、『押せるの？』って。押せますよ。手の動きほとんどわからないけど、数値でちゃんと出ますからって。ヘルパーさんも気が付く人は興味持つし。お父さん話せなくて表情も出せないから、わかってるのかなって思っちゃうみたいなんだけど、機械で出るのでって言うと、『Aさん、わかっておられるんですね』って。ヨミトリ君置いてあるだけでも効果満点なの（笑）」

わかっているのに、伝わらない。反応しているのだけれども人が普通に可視化できるレベルでない微小動作だと、つい人は自分の主観で「反応がない」と判断してしまいがちです。わかっているのに、意思を表出しているのにそれが伝わらないことは、生きる希望を減少させてしまいます。逆に、わかっていると気が付いて、信じられたら、自然と話しかけたり問いかけたりできるようになりますよね。自分がわかっているということが伝わると、当事者の方のモチベーションもアップするし、身体の機能にも改善が見られることがあります。

Aさんのお宅で素敵なことは、Aさんのお孫さん達がよく遊びに来ていて、みんな「じいちゃん大好き」で、いつもAさんの周りにいて、そこで遊んでいるのです。私たちも自然とお孫さん達とお話したりして、場はとても賑やかで和気あいあいです。小学生の男のお孫さんは、ヨミトリ君の入力パネルが気になって、何度も何度も押してしまいます。Aさんの手にパネルをセッティングする時、その日のAさんのお体の状態で設定が難航する時があるのですが、Aさんの手、調整する奥様の手、手伝う私の手の間からかわいい小さな手が伸びてきて、一緒懸命自分もやろうと手を動かして…からまる手、手、手に岡田さん、コーディネーターのイッシーも大笑い。

高校生のお孫さんは、岡田さん開発のゲームに興味津々で、操作をお試ししてくれます。さすがゲーム世代。けっこう難しいマリオ風のジャンピングゲームも、初めてでも楽々とこなしていくのでびっくりやら関心やら。

先日は、中学生のお孫さんが、「見学させてください」と横にいてくれました。せっかくなので、この際Aさんにもゲームに挑戦していただいたらどうか！ふと思いついて、お孫さんにアシストをお願いしました。意識障害の皆さんに大人気の妖怪撃退ゲームです。ヨミトリ君のパネルを押す

とハンマーが振り下ろされて近づいてくる妖怪をやっつけることができます。でも、妖怪が近づいてきたらタイミング良くハンマーを振り下ろさないと上手く当たりません。2 回撃ち損じるとゲーム終了です。

Aさんは病気の進行でまぶたが重くてなかなか目を開けることができません。また、白内障もあって「よくみえない」といつもおっしゃいます。そこでお孫さんの出番です。妖怪が近づいてきたらお孫さんが「撃って」とか「来るよ」とAさんに声をかけます。Aさんとお孫さんの連携は上手くいくか？！
最初はちょっととまどって声も小さかったお孫さんですが、おじいちゃんに聞こえるようにとがんばって声を出してくれます。「撃って！」「まだ！」「今撃って！」「来るよ、来るよ」
Aさんがお孫さんの声に合わせてパネルを押しました。やった！ハンマーが振り下ろされて見事妖怪を 1 匹退治しました！ 「やったー！」「すごい！」と奥様と私は黄色い歓声です。岡田さんは冷徹に「2 回やられたら終わりです」とボソッと言っていますが、お孫さん、奥様、私の女性陣の声にかき消されています。
Aさんはパネルを押して 2 匹の妖怪にハンマーを当てることができました。 ゲーム終了後にお孫さんに「声掛け上手でしたね」と言うと、お孫さんの言葉がまたふるっていて、「がんばりました。じいちゃんの孫ですから」。高木思わずじーんとしてしまいました。

Aさんは進行性の難病ですしご高齢でもあるので、体調が良い時ばかりではありません。でも、ヨミトリ君についても

よいとおもうことはなんでもやってみたい

と言ってくださいます。

前述の奥様のヨミトリ君操作の練習についていえば、やはり、「練習を一人でやるのは寂しい」のだそうです岡田さんや高木の訪問を待って、お孫さんも加わって、もちろんヨミトリ君の操作が上達することは大事ですが、みんながAさんの周りに集まって、Aさんに話しかけ、ヨミトリでAさんの言葉を聴き、一緒にパネル操作を練習して、ゲームをやって歓声が上がる。Aさんを中心にみんなが笑顔になる、このひと時が良いなーと、いつも思うのです。

現在ヨミトリ君プロジェクトは、7 名の意識障害の方々とヨミトリ君の体験や実証協力をしていただいています。A さんに限らず、皆さん「おもしろい」「たのしい」と言ってくださいます。ヨミトリ君の時はいつも笑い声、笑顔がいっぱいなのです。
実証協力をしてくださっているALS（筋萎縮性側索硬化症）患者のゆうさんは、「この年齢になって（50 代）、それにALSになってまさかゲームにはまると思わなかった」と言って笑います。ゆうさんには、意思疎通用のワープロ（文字盤と日常生活の頻出単語）の検証もしていただいているのですが、とにかくゲームが面白いと。レーシングゲームは、右と左への方向転換のために入力パ

ネル 2 枚のダブル入力が必要なのですが、ゲームが始まると、動かないはずの右手がリズムよく動き、方向転換の時は思わず上半身もそちらの方に傾け、声も無意識によく出ます。

わらいすぎて　はなみずでた

と文字盤で指差し。またまたみんなで大笑いです。病気の進行で、ゆうさんはもう自分では鼻水をふくことはできません。でも、ALSで動かなくなったはずの右手は、ヨミトリ君取り組みの回を重ねるごとに前回よりよく動くようになっています。まだ残存の機能があったのだけれども、それを使う必要の動作が日常生活の中になかっただけ。動かないとあきらめず、動くところを一緒に見つけよう。

ヨミトリ君のことは良く眼鏡にたとえて紹介します。たとえば近視の人が度が上手く合った眼鏡をかければ、近視を意識せず、普通にものを見ることができます。ヨミトリ君も、うまくパネルへのセッティングができて感度調整がうまくいったら、麻痺を意識せず軽い力で操作をすることができます。ヨミトリ君を体験した人は、皆さん、動かないはずの自分の手で自力で操作ができることに驚かれ、そしてうれしいと言ってくださいます。
ぜひ多くの方にヨミトリ君を試していただきたいです。ヨミトリ君で「必ず読み取れます。」「操作できます」とはいえません。でも、可能性はあります。

あなたがわかっていること 伝えたい。
そして、あなたの大切な人は絶対わかっていると信じているご家族、ご支援者の方に
ヨミトリ君プロジェクトが希望となりますように。

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！

*****
＜プロフィール＞
インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。コミュニケーション支援の任意団体「ご一緒しましょ」代表。脳卒中障害者のいきがいづくり「NPO 法人ドリーム」理事。「東海地区遷延性意識障害者と家族の会　ひまわり」会員・ひまわりヨミトリ君担当。第 52 回 NHK 障害福祉賞優秀賞。

ヨミトリ君プロジェクトHP　http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitol-kun-project/
ご一緒しましょHP　https://www.goisshoshimasho.com/
東海地区遷延性意識障害者と家族の会　ひまわり　http://site.wepage.com/himawari

先生のための 16 のことば

スクールアドバイザー
原田　孝

第３回　「保護者面談、伝えたいことは最後にする」

保護者さんが担任や学校教員の面談に来られるときは、すごく足が重いということを知っておいてください。定期的な懇談会でも、担任の先生からは普段の学校での生活などをよくきかされます。どんなにいい子と思っていても、ご自分のお子さんへの評価を聴くのは怖いものです。ましてや家では、保護者さんの言うことはきかず、反抗はする、夜に出歩く、夜更かしはするし、ゲーム三昧。そのようなお子さんをみていると、先生に何を指摘されるか、それは保護者さんとしては恐怖でありハードルの高い面談となります。

そこで保護者さんの信頼を得る面談とはどのようなものかを考えてみましょう。第一段階としては、学校での様子を一分程度話します。エネルギーの十分あるお子さんなら、「元気なお子さんですね。活発な様子ですよ。」くらいの表現にします。対人関係の苦手なお子さんなら、「落ち着いたお子さんで、周りの子さんをよく見てらっしゃいます。」などと表現します。机に向かって本をよく読んでいるお子さんなら、「読書がお好きなようですね。」などのプラス評価をしておきます。

次に、第二段階として、キーワードを言います。「おうちでのご様子はいかがでしょう」ほとんどの保護者さんは、「うちで、そんなことはないですよ。・・・・・・」と困りごとが次々と出てきます。その困りごとを受容的に聞いていると、家庭内での複雑な関係が見えてくることがあります。夫婦間の問題まで見え隠れすることがあります。そのような話まで聞けたら、保護者さんの担任の先生への印象は、「この先生は聞いてもらえた。不安や困難さを聴いてくれた。」という印象を持ってもらえ、同時に信頼も生まれます。

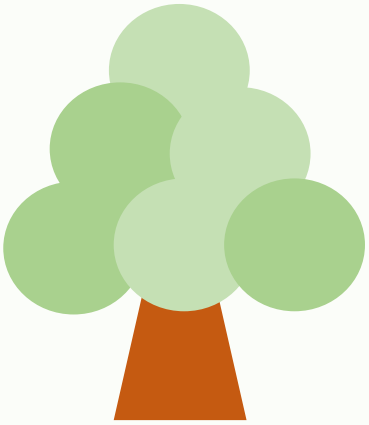
そこで第三段階です。共感と同時に面談で伝えなければならないことが、担任にはあります。成績であったり欠席や遅刻の状況です。成績に関しては、できているところから話をします。よくがんばってるところを話します。できていないところはこんな表現が良いではないでしょうか。「この教科は、まだ伸びしろがありますね。」など、できる限りマイナス評価に聞こえないような指摘をします。

欠席や遅刻は、多いとか少ないとか言わずに、欠席の理由、遅刻の理由を聞いてあげてください。「朝、なかなか起きられないんです。」というような答えなら、起きられない状況を聴きます。お母さんとバトルになるとか、ボーとしていて布団から出てこないとか、起きてきても動きがほとんどないとか、様々な状況が話されてくるでしょう。それら、一つひとつに丁寧に応えてあげることができれば、いいのですが、経験の浅い先生方は、起立性調節障害の疑いや思春期の反抗がベースにあることがうかがえるので、スクールカウンセラーを紹介された方がいいいかもしれません。

面談後に、保護者さんが「この先生は話を聴いてくれた。」「いいアドバイスをもらえた。」という印象を抱いてもらえれば成功です。信頼関係の構築が少し進んだということができます。

教育現場では様々な出来事が起こります。その際には保護者さんを無視して対応はできません。ご家庭での協力が得られると対応の効果は大きく進みます。そのためにも普段からの保護者さんとの信頼関係は必ず作っておくことが必要です。

「保護者面談、伝えたいことは最後にする」



こかげのにちじょう③

～どこで分かれてしまったのかなあ～

鳴海　明敏

２月某日

今年度は、高校三年生男児４名と中卒男児２名の合計６名が、年度末にかけて退所する。退所後は、障害者サービスのレールに乗って、グループホームや自立生活援助施設で生活しながら作業所に通うことになる。現在その方向で、相談支援事業所に入ってもらい話を進めている。複数の相談支援事業に入って貰っているが、うちで勤務経験のある相談支援専門員がいる事業所とは意思疎通がスムーズのように見える。

このほかに、小学校卒業を機に、次の施設への移し替えになる児童が男女各１名の合計２名と中学生男女合計３名も退所する予定。中１の男児は次の施設へ、中２の女児と中３の男児は、それぞれの自宅へと退所していく。

合計１１名の退所になるので、退所先の施設との調整や児相、保護者との調整など、これから来月にかけて、何かと忙しい。

そのせいなのかなあ、今年はまだお雛様が飾られていない。

２月某日

２年前に同時期に退所した女児２名から、相次いで電話があった。

一人は、関東圏で生活する父親に引き取られ、その地域で障害者サービスのレールに乗っていたはずだったが、今は、ホストの彼氏と付き合っていて、風俗で働いているという。１日６万ぐらいしか初めは稼げなかったけど、今は８０万～90 万もらうこともある。それをホストに使っているとのこと。

学園にいたころから、将来はキャバ嬢になると言っていた彼女だから、当然の成り行きとは思うものの、父親へ引き取らせてよかったのかなあと思う。

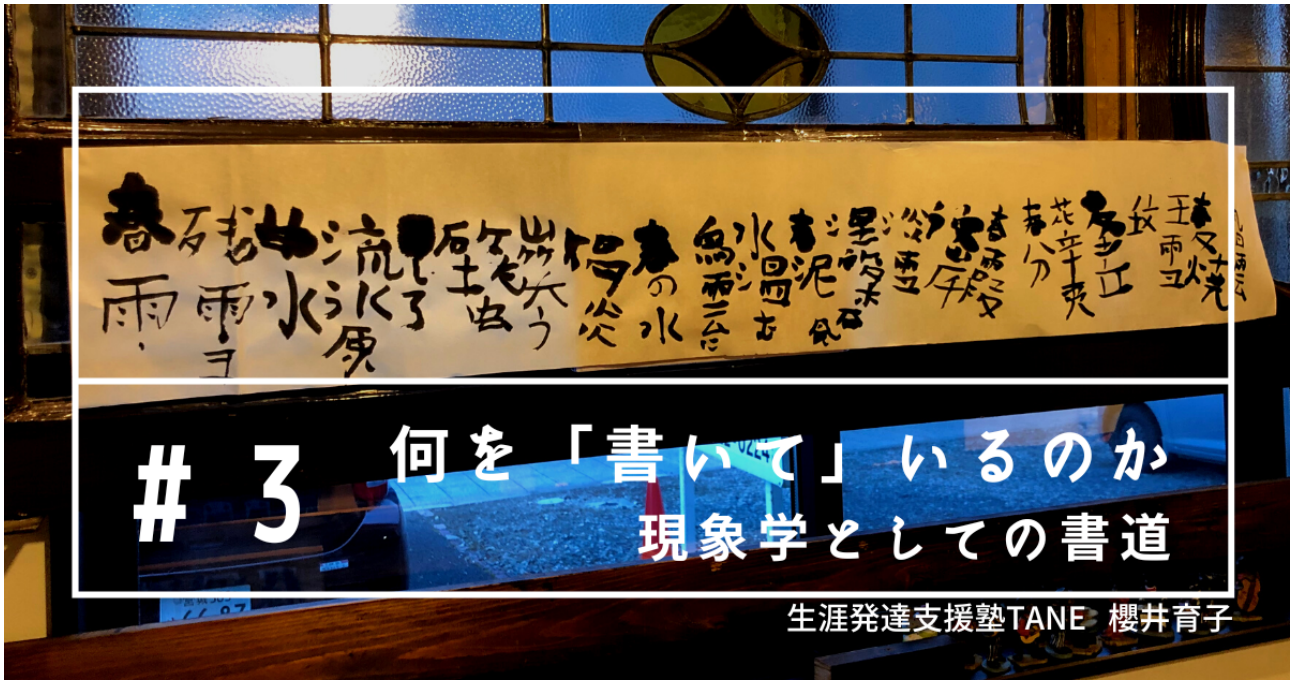
もう一人の彼女は、退所後、県内で障害者サービスのレールに乗って生活していて、何か

あればちょくちょく電話をしてきて、自分の気持ちを整理したり相談したりしていた。　現在は、2か所目のグループホームで生活し、作業所に通っている。新しい作業所では安心して過ごせているとのこと。

昔だったら嫌なことばかりに目がいっていたが、今は余裕が出来てきて、フラットに考えられるようになったとのこと。前の作業所にいた頃は大変だったが、それも必要な経験だった、と思えるようになったと話している。

同じ期間学園で生活し、同じ時期に退所した二人だが、いつの間にか、道が分かれてしまった。一体、どこで分かれてしまったのかなあ。

（了）



＃３　何を「書いて」いるのか
現象学としての書道

生涯発達支援塾TANE　櫻井育子

はじめに

「詩を書き始めようとする時、一枚の白い紙を前にして私はいつも途方に暮れます。何をどうやって書けばいいのか、見当もつかないのです。白い紙がまるで荒野のように思えます。私にできることと言えば、ただじっと待つことだけです。いったいなにを待つと言うのでしょうか。」谷川俊太郎さんはこう語る。「全世界と匹敵するものになった紙切れ一枚に、どのような世界を繰り広げるのか。いわば自分が創造主の立場に立たされたその畏れに、作者はおののくのです。」書道研究者の石川九楊さんはこう語る。どんなに鍛錬しても、真っ白い紙に向き合うとき、私たちの心に立ち現れる様々な感情がある。さまざまな人が書いている状態を見続けながら、それぞれが一体「何を書いているのか」ということについて考えてみたい。

書ける・書けない

前回、「すみあそび」の現場で起きていることとして、大人は「何を書いたの？」と問いがちだが、自由な彼らとともに書いているうちに「書く」という行為そのものを楽しんでいる自分に気がつくということを書いた。とはいえ、それでも「見本がないと書けない」という大人は多いし、自閉症と知的障害のあるSさんは、自分の名前や簡単な漢字は覚えられるが、複雑な漢字や言葉は書くことはできない。そもそも、「知らないから書けない」のであれば「見たら書ける」でいいわけである（もちろん見ても書けない場合もあるのでこれはまた別の機会に）。このとき、「書けないからわからない」ということではない。表現として「書けない」大人と、「読めないけど書ける」という人が並んで書いている。Sさんの内面の世界は幅広く、人との関わりはとても好きなのでよく話す。というより、話してみないと彼がそれほど情報を持っていることや、理解していると思われない。特別支援という名の下で、「わかること」を中心に教育が展開されていることに疑問を持っていたが、彼らの知的好奇心や知への欲求を阻害しているのはもしかしたら固定観念から外れることのできない我々ではないのかと思う。分断された学び（教科ごとに分けられ抽象化された学び）に対しては、発達段階が追いついていないことが多い。そうした課題の中で、特別支援は「生活単元学習」という名前で、教科を融合しながら生活の中でできるだけ具体化しながらさまざまな体験型学習を行っている。それは「手段」であり、「目的」ではなかったはずだ。ところがやはりそれがうまく伝わらないまま、体験そのものが目的になってしまう。すると、畑作りや調理が「目的」となり、本来の「学び」はそっちのけになる。国語は「名前が書

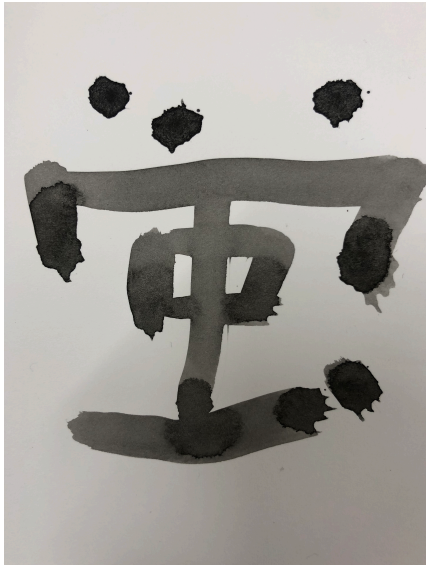
ければいい」となり、算数は「自動販売機にお金を入れること」になってしまう。だから少しでも「書きたい」という欲求が出たときには生活年齢がすでに高くなっている場合が多く、なんでもいいからたくさん書いてみたい！という本来の欲求は叶えられず、「役に立つもの」「使えるもの」として、「書く」はだいたい、名前と住所程度なのである。

Sさんが来たばかりのときはそれこそ「読める」漢字ばかりを本から探して書いていた。そして、知らない漢字があると、「むずかしい」と言って飛ばしていた。しかし最近では難しい漢字が並んでいる本を、あえて自分から持っていくようになり、驚くほど筆運びが軽やかに、いつのまにか書けるようになっている文字も増えた。以前だと、とにかく書いては見てもらう、の繰り返しだったのだが、「もっとこうしたい」「これを書いてみたい」という欲求が高まってきている。それは決して「読める」ものだけではない。それと同時に、話題の豊かさ、他者への関心、おそらくこれらはそもそも彼が持っていたものであり、それが表現として出せるようになったことは、本人が変化したのではなく、周囲が「こんな漢字も書けるのだ」「こんなに表現することができるのか」という、本人への評価が変わった、とも言える。このような活動をしていると、ほとんどの人たちが自分の思い込んでいる他者との関係の中だけで関わっているのかもしれない、と思う。

かかわる・かわる

Sさんの内面的成長は、だからといって通っている施設内で発揮されるかというとそういうことではない。と感じたのは、彼の通っている施設の方の前では、彼がこの体験を多くは語っていないようである。職員の方と少し話をしたときに、私たちとの関係の作り方とはどうやら違う形で関わっている様子があり、それは「支援者」と「利用者」という明確な区別の中で身についてしまったものなのだろうと思う。失敗をしたら怒られる、仕事をしないと注意をされる、という関係の中で萎縮してしまったものを外の関係でほぐすことには時間がかかる。

しかし、書いたものをひたすら褒められて調子に乗るということだけではなく、彼が自分の書いたものを「自分で見る」という行為、それに対して「ちがう（まちがえた）」という自己認識があり、「もう一度書く」というやり直しが可能で、その一連の自己判断は、おそらくかなりの成長である。私たちは大人になればなるほど、自分の失敗に気が付かないふりをしてごまかし、逃げ、無かったことにしようとする。書道は自分の納得がどこなのかを知る鍛錬にもなるので、表現したもの（つまり自分自身）に、どれくらいOKを出せるのか、という自分と向き合うためのツールでもあり、真っ白な紙に向き合うときの感覚を知ることは大事だと感じている。



空を飛んでいるようで素敵なSさんの蛍。

櫻 井 育 子（生涯発達支援塾TANE 代表）
宮城県在住，1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。
「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。
「つなぎめを学ぶ講座」，「旅する書道塾tane」も開催中。http://ikuko-sakurai.com

社会教育の周縁

（２）社会教育の終焉①

山本 竜司（社会教育主事／社会人大学院生）

本連載のタイトル、「社会教育の周縁」を見て、ニヤリとした人はかなり年かさのベテラン社会教育関係者であろう。「社会教育の周縁」とは、かつて議論を呼んだ、政治学者・松下圭一による「社会教育の終焉」論[1]をもじったものである。社会教育関係者にとっては、「社会教育の終焉」という直球の批判であるが、今日の市民社会の趨勢を予告していた内容でもあり、反論だけで済ませられるものではない。今回から３回にわたって、松下の主張を振り返ってみたい。

松下の教育観は次のようなものである。教育とは、教え育てる、つまり未成年への文化同化としての基礎教育を意味するのであり、成熟した市民は教育の対象ではありえない。国民の市民としての未熟を前提としてのみ社会教育行政は成立するのであり、都市型社会の成立、市民の成熟に伴って、社会教育行政は終わり、さらには学校教育も「市民型」に再編されていくであろう。このように、松下の社会教育批判は、「成熟した市民はオシエ・ソダテル対象ではありえない」という主張を土台としている。

しかし、「成熟した市民」とはなんだろうか。もちろん、戦後、民主主義が導入された当初から考えれば、民主主義の担い手としての市民の成熟は進んだと

いえるだろう。しかし、こういった成熟は何をもって測れるのだろうか。松下は、その尺度については具体的にふれていない。今日の社会状況を見て、成熟した市民によってなにもかもうまくいっている世の中が実現しているだろうか。

現在でも、すべての市民が十分に自己決定権を保障されて自由に学習を享受できているとは言い切れない。現実には、履修主義である現行の学校教育から取りこぼされる人々、新たに渡日してきた外国籍市民やその子どもたちなど、さまざまな事情により社会的に排除された位置に置かれた人々をめぐる課題がある。社会教育行政（公的社会教育）による支援や援助は、ますます求められているといえるのではないだろうか。

また、たとえ高等教育を受けた「成熟した市民」であっても、目まぐるしく変化し複雑化する現代社会を生きる上で、学習は自己完結するものではなく、社会的な問題解決のためには他者との協働が必要であり、社会教育における共同的な学習活動が重要になってくる。

未成年への文化同化としての基礎教育をベースとする松下の教育観は、市民の社会参画やコミュニティの成熟といった「社会的」な視点については弱いと言わざるをえない[2]。今日の社会教育は、戦前の教化や啓蒙の手段ではなく、「生涯学習」の文脈において「学習支援」という性格を強めている。社会教育行政（公的社会教育）がどのような役割を果たしていくことができるか／果たしていくべきか、これが私の積年の研究課題である。

---

[1] 松下圭一、1986、『社会教育の終焉』、筑摩書房。
なお、松下は、国民教化の手段としての社会教育行政を批判対象としているが、市民の学習活動（社会教育活動）については否定していない。

[2] 松下は、社会的な問題については「教育」で対応するのではなく、「政策」で対応するべきであるという立場を取っている

コソダテノシンリ（2）

中谷陽輔

連載第2回目です。初回は、タイトルに込めた思いや自己紹介、進化心理学的な観点から見た「コソダテノ シンリ」について述べたりしました。今回は、2回目にしてがらっと趣向を変え、昨今話題の“こども家庭庁”について書いてみたいと思います。

私は、子育てという営みは、それこそ生物-心理-社会（bio-psycho-social）な相互作用が絡み合って生じていると考えていますので、今後もいろんな視点から書いていくことになると思います。皆さんの興味・関心の範囲で、お付き合いいただければ幸いです。

“こども まんなか”の社会に向けて

2023 年1月23日、小倉将信 内閣府特命担当大臣（少子化対策・男女共同参画）が、2023 年 4 月1日に発足する“こども家庭庁”のロゴマークを発表しました。

そこには、“こどもまんなか こども家庭庁”という文字が、温かみのあるオレンジ色で描かれています。小倉担当相は、ロゴマークに描かれている “こどもまんなか”というキーワードについて、『常にこどもの視点に立ち、その最善の利益を第一に考え、こどもに関する取組・政策を我が国社会の真ん中に据えるという意味が込められております』と説明しています（内閣府,2023）。

そのような“こども まんなか”の社会に向け、こども家庭庁の発足後はまず、「こども基本法」（2022 年 6 月 22 日公布、2023 年 4 月1日施行）に基づき、こども政策の基本的な方針を定める「こども大綱」が策定されることになってます。

“こども家庭庁”は、子どもを身近に取り巻く「家庭」にも注目します。子どもと家庭を一体となって支援することから、単に“こども庁”ではなく、“こども家庭庁”の名称となっています。ただ、「家庭」というワードの必要性については、賛否両論あったようです。

2021 年 2 月 2 日、“子ども家庭庁（仮称）”の創設に向けた「Children First の子ども行政のあり方勉強会」が開始しました（Children First の子ども行政のあり方勉強会, 2022）。ただ同年 3 月 9 日の第6回勉強会にて、虐待サバイバーの風間暁氏が「家庭は地獄でした」と自身の経験の語りとともに「家庭」を名称からとるべきと主張。それ以来、同勉強会では、“こども庁”に名称変更して提言を行い、当時の菅義偉首相も“こども庁”の名称を使用していました。それが同年12月15日、自民党の会合で名称を“こども家庭庁”とする修正案が示され、政府は

“こども家庭庁”の創設を含む子ども政策の基本方針を 12 月 21 日に閣議決定しました（内閣官房, 2021）。

名称変更の是非を論じることは、本稿の範疇を超えるかもしれませんが、どうしても、当事者の声がなぜ・どこにいったのか、そもそもその議論はこどもファーストだったのか、とは考えてしまいます。

その結論はさておき、日本という国の社会福祉・保障が、どのような「福祉レジーム」に立脚しうるのか、を考えることがそれらの動きを理解する一助になります。日本における“子育て”が、どのような福祉システムとかかわっているのかを知る意味でも、いったん整理してみます。

日本の子育てをとりまく福祉システム・制度の特徴

デンマーク出身の社会政策学者であるイエスタ・エスピン-アンデルセン（Gøsta Esping-Andersen）は、『福祉が生産され、それが国家、市場、家族の間に配分される総合的なあり方』としての「福祉レジーム」の相違が福祉国家のタイプを決定する、というレジーム理論を提唱しました（Esping-Andersen, 1990, 2008）。

具体的に、「福祉レジーム」は次の3つにタイプ分けされています（cf. 厚生労働省, 2012）。

① 自由主義レジーム・・・福祉において「市場」の役割が大きく、アングロ・サクソン諸国（アメリカ、カナダ、オーストラリアなど）でみられる。
② 社会民主主義レジーム・・・福祉において「国家」の役割が大きく、北欧諸国（スウェーデン、デンマーク、ノルウェーなど）でみられる。
③ 保守主義レジーム・・・福祉において「家族」や職域の役割が大きく、大陸ヨーロッパ諸国（ドイツ、フランス、イタリアなど）でみられる。

日本はというと、①自由主義レジームと③保守主義レジームの要素が組み合わさった中間的な立場とされることが多いようですが、専門家の間でも、明確な結論は出ていないようです。なおエスピン-アンデルセンも、日本の福祉システムはまだ発展途上であり、独自のレジームを形成するかどうかも含めて、結論を保留しています。

一方で、落合（2015）がエスピン・アンデルセンの言葉を引用しつつ述べているように、現代福祉国家は、初期段階ではいずれも「家族主義」であるものの、その後の発展に伴い、「国家」あるいは「市場」を活用することにより家庭への福祉依存を少なくするという「脱家族化」が生じてきました。ただ、日本型福祉レジームでは、家族がそのメンバーの福祉に対して最大の責任をもつという「家族主義」が根強く残っているようです（落合, 2015）。

さらに、法律改正の流れからも、日本が子育てにおいて「家族主義」であることは、より明確になってきています。

2006 年に改正された教育基本法では、家庭教育に関する項目が新設され、親などの保護者が子どもの教育の第一義的責任をもつと記載されました（i.e.,『父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする（教基法§10）』）。

また、この教育基本法の規定に合わせて、2017 年に改正された児童福祉法でも、親などの保護者が子どもの健全育成、つまりは“子育て”の第一義的責任をもつことが明記されました（i.e.,『児童の保護者は、児童を心身ともに健やかに育成することについて第一義的責任を負う（児福法§2 の 2）』）。

ただ、これらの法律上の記載が“第”一義的責任となっていることは、意外と重要です。

単に、一義的責任という記載ならば、親や保護者“のみ”が責任を有することになりますが、“第”一義的責任となると、まず責任をもつのは親や保護者だとしても、親や保護者のみが責任を有するわけでは決してありません。

実際、改正児童福祉法でも、政府や自治体が、子どもの保護者とともに子どもの健全育成の責任をもつことが示されています（i.e.,『国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う（児福法§2 の 3）』。

要するに、日本は福祉において、「国家」の役割が大きいとは決していえない経緯があったものの、今後の“子育て”においては、子どもを中心に据えつつ、親など保護者がその子どもへの責任を果たせるような福祉制度やシステムが整備・構築されていく必然性があります。

まさに“こども家庭庁”を司令塔として、ということになりますね。

“こども まんなか”とした大人の、責任と支援

言うまでもなく、周囲の大人たちがどのような存在であるかは、子どもの発達を大いに左右します。しかしながら、何が子どもの最善の利益なのか、守られるべき子どもの権利とはどのようなものなのか。具体的にはさまざまなことが想定されるため、そもそも一概に決められるものではなかったりもします。

だからこそ、子どもの周りにいる大人たち、特に親や養育者は、悩みます。私も養育者の一人として、子どもの福祉や権利を守る責任があるとされる大人側も、学びや試行錯誤を続けて、ようやくそれらは成り立ちうるものなのかもしれないと、思ったりします。

・・・子どもの周りの養育者、そして家庭は、子どもとともに“支援”される存在なのか、社会とともに“責任”を果たすべく試行錯誤する存在なのか。

“こども家庭庁”の名称変更の報道を耳にした際、そんな思いが沸き上がりました。

私は、子育て支援・家庭支援を生業としている関係上、子どもと養育者の思いや利害が食い違う場面を、少なからず見てきました。大人の弱さや余裕のなさゆえに、その立場の強さを意識的・無意識的に使って、そのまま押し切ってしまう、なんてことも往々にしてあったりするでしょう。もちろん、私自身も含めて。

子どもだって、養育者だって、それぞれ等しく人間ですので、どちらも尊重されてしかるべきですが、相対的に立場の弱くなりやすい子どもを優先的に支援するべき、という考えが一般的になってきました。そのように子どもファーストに考えると、どうしても養育者や家庭に対する支援は、セカンド以降になります。

子どもファーストで支援する場合、家庭は社会とともに、その子どもを支援する側にまわることが必要だったとしても、子どもが一人ひとり違うように、家庭も一つひとつ違います。家庭が支援側にまわれるときもあれば、まわれないときだって十分にありえます。

そして家庭が支援側にまわれないときもありうると考えると、日本社会としてこども家庭庁は、子どもを直接的に支援することも辞さない、ということが必要だと考えられます。もし仮に、家庭にいつまでも無理を強いて現状を放置することがあるとすれば、それはこども家庭庁の理念からは外れるはずです。

さらに、家庭が支援的に機能しうるのはどんな場合か、と考えてみます。そうすると、親や養育者が孤立せず、ある程度の余裕をもちながら子育てできるとき。誰かとともに試行錯誤したり工夫したりしながら子育てできているとき。ひいては、社会とともに共同養育ができているという実感が持てるとき・・といったあたりが思い浮かびます。

こども庁に、「家庭」を付け加えた以上、“こども家庭庁”は、世の中の多様な家庭も一体的に関わるという重責を担うことになりました。

そんな“こども家庭庁”が、次の4月に発足します。是非ロゴマーク通り、“こども　まんなか”にした上で、適切に運営されてほしいと、切に願います。

私も引き続き、責任をもって、目の前の子どもや養育者を支援していこうと思っています。

【引用・参考文献】

- Children First の子ども行政のあり方勉強会（2022）. こども庁の創設に向けて：創設に向けた動き＜https://www.child-department.jp/movement＞（最終閲覧日2023年2月22日）
- Esping-Andersen, G.（1990）. *Three Worlds of Welfare Capitalism*. Princeton, NJ: Princeton University Press.（エスピン-アンデルセン, G. 岡沢憲芙・宮本太郎（監訳）（2001）. 福祉資本主義の三つの世界――比較福祉国家の理論と動態―― ミネルヴァ書房[原著 1990 年]）

・ Esping-Andersen, G. (2008). *Trois leçons sur l'état-providence*, Éditions du Seuil et al République des Idées. (エスピン-アンデルセン, G. 京極高宣(監修)・林 昌宏(訳) (2008). アンデルセン、福祉を語る――女性・子ども・高齢者―― NTT 出版)
・ 厚生労働省 (2012). 平成 24 年版厚生労働白書―社会保障を考える―(本文)<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/12/dl/1-04.pdf>(最終閲覧日2023年2月22日)
・ 内閣府 (2023). 小倉内閣府特命担当大臣記者会見要旨: 令和 5 年 1 月 23 日<https://www.cao.go.jp/minister/2208_m_ogura/kaiken/20230123kaiken.html>(最終閲覧日 2023 年 2 月 22 日)
・ 内閣官房 (2021). こども政策の新たな推進体制に関する基本方針<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodomo_seisaku/pdf/kihon_housin.pdf/https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodomo_seisaku/pdf/kihon_housin_gaiyou.pdf(概要版)>(最終閲覧日2023年2月22日)
・ 落合 恵美子 (2015).「日本型福祉レジーム」はなぜ家族主義のままなのか―4 報告へのコメント 家族社会学研究, 27(1), 61-68. <https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjoffamilysociology/27/1/27_61/_pdf>

＜プロフィール＞
児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。
大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、早 10 年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て＆子育て支援まみれの日々を送っている。プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。
(https://childcare-support.hatenablog.jp/)

対人援助マガジン　５２号

教室の窓から

令和 5年
(2023 年) 2 月
來須 真紀

学校の対人援助

学校現場に勤めて 20 年になろうとしています。この20年を通して、学校現場は、対人援助の場であるとつくづく思います。こんなことを現場でいうと、「ちょっと変わった先生だね。」と言われたり、「学校現場が対人援助の場？それは、福祉の分野でしょ？学校は教育の場だ。」と反論されたりすることも多くあります。しかし、学校ごとに定めている教育目標や目指す学校の姿は「子ども同士が思いやりをもち、関わりながら支えあう」とか「地域に開かれ、愛される学校」「子どもとともに成長し、子どもの気持ちをわかろうとする教員」という言葉が多く、学校現場は、対人援助の場であるということが、よく分かります。

誰に援助するの？

では、学校とは、だれに対して援助する場なのでしょうか。それは、もちろん子どもたちです。もっと言えば、授業の学習指導の中で子どもたちに対する援助をするのが学校の一番の役割ともいえるでしょう。ただ、学習を進めるにあたり、子どもたちの学習環境を整えるという意味で、保護者や地域、教職員への援助も必要になるので、学校現場での援助の対象は、子どものみならず保護者、地域、教職員を多岐に渡っているともいうことができます。また、私は、学校は、子どもたちに対人援助できる(または、援助を要請する)力を身に付けさせるところだと考えています。ただ、決して新しい何かを取り入れるということではなく、今までやってきたこと、受け継がれてきたことを対人援助という視点で見直していくということで、子どもたちに社会でよりよく生きていく力がつくのではないかと思っています。

ちょっとだけ自己紹介

先ほども書きましたが、小学校に勤めて20年くらいになります。対人援助という言葉とであったのは15年くらい前でしょうか？勤務先の先輩に半ば無理やり連れていかれた研修会での出会いが始まりでしたが、なんかピンときていや、ズコーんときて、ある尊敬するお二人の追っかけを初めて今に至ります。今では立派な「変わっている先生」です。(だと、思っています。でも誇りに思っています)今回から今まで思ってきたことや感じてきたことを書くことで、また自分がどのような変化をしていけるか楽しみにしています。

対人援助的授業の実際

【朝の会】

全員がわかるようになる授業。これは全教員の永遠のテーマであり、目標でもあります。ご存じの方も多いとは思いますが、公立学校での学習内容は、文部科学省が定めており、公立学校の教員は、学習指導要領をよりどころとして授業を作っていきます。(要するに学習内容は、法律で決められているという感じですかね。めちゃくちゃ平たく言えば)ですから、1 時間 1 時間の授業には、子どもたちが達成せねばらなぬ目標があり、教科書を使ったり教材を使ったりしてこの目標に向かって学習活動と授業構成を考えていきます。また、その過程で「子どもたち(特定の子どもという場合もある)は、どこでつまずくだろう。つまずいた場合どのような支援を必要とするだろうか。」ということを考えます。このプロセスが、まさに対人援助ではないかと思います。授業が終わって、目標が達成できなかった子どもに対しては、補充や追加課題という取り組みもします。(子どもにとっては全く迷惑な話ではあるのですが…)この点も対人援助といってもいいのではないかと思います。「目の前にいる子どもたちにマッチした授業づくり」この日々の取り組みこそ学校ならではの対人援助ではないでしょうか。

【1時間目　3年 算数 「時間と時刻」】

算数という教科は、答えが1つに決まっていることが多く、その1つ答えを導き出すためにたくさんの習ったことを使っていくため、苦手だと感じている子どもも少なくありません。また、日常生活と密接に結びついている領域もあるため、子どもたちの生活経験の差が出やすい教科とも言えます。今回は、生活経験や文化の違いの差が大きい子どもたちに時刻と時間の授業をした時のことを書きたいと思います。

3年生 「時間と時刻」
目標　秒について知り、時刻や時間の求め方を理解し、日常生活で用いることができる。

この単元を進めるにあたり、本校には外国籍の子どもが多数(半数以上)在籍し、一番困ったのは、「時刻」という概念がない子どもが、外国籍の子どもたちを中心にたくさんいたことです。特に外国籍の子どもは、時間も時刻もすべて「Time」で表すらしく(厳密にいえばあるのかもしれないが子どもたちの概念はここでとどまっていました)恥ずかしながら、私も初めて知ったことでした。しかも、今は、デジタル時代…。アナログの時計は学校でしか見ることがないという子どもたくさんおり、アナログの時計が読めないという頭を抱える実態からの出発でした。

　そこで、教室の時計を、アナログでも、より読みやすいと言われている右のようなものに低学年を中心に変えてもらいました。そして、この時計を見ながら、担任の先生に学校生活の中で、「今の時刻は？」や「給食までの時間はあと何分？」と質問をしてもらうようにしました。日本語の学習が必要な子どもに関しては、日本語担当の先生に個別の学習を進めてもらいました。 算数の授業では、図や、表を使うより時計の模型を使って、自分で時計の針を動かして、時間や時刻を求めていくという活動を取り入れました。本当に月並みな支援しかできなかったというのが悔やまれるところですが、他の先生方や子どもたちと一緒に試行錯誤、悪戦苦闘しながらなんとか単元を終えることができました。

「アナログの時計が家にあって読めるようになっている。」「世界中時刻と時間の区別ある。」ということを前提に学習計画を立てないほうがいい。そのようなことが、改めてよく分かった単元でした。

【帰りの会】

　私たちの周りにはたくさんの当たりまえがあるように思います。そして、その当たりまえが、通用しなかったとき、私たちは、戸惑ったり、不安になったり、その結果攻撃的になったりしてしまいがちです。学校は特に、その傾向があるように感じます。〇〇でなければならない。●●であるべきだ。そんな真面目な気持ちは、教員として持たなければならないかもしれませんし、大多数の当たり前の中にいれば確かに安心します。ただ、目の前にいる子どもたちにその当たりまえが当たりまえではない子どももたくさんいるということを忘れないようにしたいと思います。

【放課後】

　話は変わりますが、年度末です。この時期、教員が追われるのは、、、そう、成績です。先生方は、普段の子どもたちの頑張りを知っているがゆえに、それを数値化することが、とても苦しく、この時期が一番嫌いです(少なくとも私はそうです)

　中でも一番苦労するのが、あの通知表の隅に書いてある2～3行の「所見」です。実はあの所見、書く内容から書き方、使わなければならない漢字、カタカナ、表記が決められており、それに従って書いているのです。しかも書いた文章を何度も複数の教員でチェックし、管理職もチェックし、チェックからの直し、チェックからの直し、チェックからの直し。という汗と涙の結晶なんです。そんなんやめればいいのにという声が聞こえてきそうなのですが、それは、まあ、私のようなものには、なんとも。。。このお話は、別の回でさせていただくとして、みなさま、成績表の所見をご覧になることがあれば、どうぞあたたかい目で見ていただけると幸いです。

社会科の授業を対人援助学の視点から

2023年2月22日　内田一樹

0. はじめに

高校社会科の教員になって6年目が終わろうとしています。この間住む場所が埼玉に変わったり、コロナ禍で対応に追われたり、3年持ち上がりでの1周目として初担任になったりと色々ありました。勤務先は中高ある学園なのですが、今のところ高校のみ(高1・高2)、しかも歴史しか教えていません。

高校の社会科は、大きく地理歴史(地理・日本史・世界史)と公民(現代社会・倫理・政治経済)に分けられます。今年度から学習指導要領も変わって、新カリキュラムの「歴史総合」も担当しています。

同時に2022年度から、高校の選択講座で学校設定科目「東北と復興」(2単位)という東日本大震災と復興について学ぶ・考える講座を立ち上げました。

1. タイトルの意味と連載を始めたわけ

勤務先の高校は100もある選択講座が売りの一つですが、新選択講座「東北と復興」を立ち上げるにあたっては様々な会議や色々な人の援助なくしてはあり得ませんでした。立命館大学の東日本大震災復興支援プロジェクトの村本先生や石巻市へともに訪れているゼミの増田先生への相談もその一つです。その1年目が終わるにあたって、まとめと反省を残しておきたいと村本先生に相談したところ、対人援助学マガジンを勧めてもらったので、せっかくだからと始めることにしました。毎日が師走の日々ですが、時々立ち止まって改めて原点に立ち返って、あわよくば読んだ人から意見ももらえたらラッキーという思いで始めます。

連載するならこの内容で、というのはすぐに決まりました。それがこのタイトルです。

私は社会科の授業を作るときに対人援助学の視点から作りたいと考えています。

たとえば、歴史ではその時代の困っている人たちの声や時として声にならないうめき声を探してそれを取り上げて、生徒たちと一緒に考えます。フランス革命期における女性の人権宣言や第一次世界大戦・第二次世界大戦の戦争神経症(PTSD)などです。事実は事実として授業を行いながら、生徒と一緒に考えるところで現代社会にも通じるような問題をともに考えるというような形です。

しかし一方で、対人援助学というとやはりスキルや療法のようなものを想像してしまいます。私もそうです。すでに学校の中には対人援助学の視点が取り入れられています。ユニバーサルデザインや合理的配慮、あるいは担任面談やSC、SSWとの多職種連携などの形もあるいはその中で個別に発揮される職能も。だからこそ、それが果たして対人援助学としての社会科の授業なのか、そもそも教科教育に対人援助学の視点を持ち込むことができるかは分かりません。道徳の授業がやりたいわけではなく、あくまでも社会科の教材・単元・問いを通して対人援助への萌芽を生徒たち自身が持つようにしていきたいのです。教員が生徒を対人援助者に「する」社会科教育ではなく、生徒が自発的に対人援助者に「なる」ような、あるいはそのための視点やスキルを持つような社会科教育が可能なのか？

そこで対人援助学の視点から社会科の授業をつくることができるのかを考えていこうというのがこの連載の私の目的です。成功するにせよ、失敗するにせよ、その過程を記録していきたいと考えています。よろしくお願いします。

2.授業実践①「3.11 子ども甲状腺がん訴訟」を取り上げる

先述した通り、今回マガジンに連載しようと思ったきっかけになった授業実践の一つを書きます。今年度より開講した新選択講座「東北と復興」(2 単位、学校設定科目総合に充当)は、週に 1 回 90 分(2 時間続き)で授業を行っています。東日本大震災を取り上げるにあたって、前期は石巻市、後期は福島県を取り上げようと思っていました。石巻市がスタディツアーとして実際に現地を訪れるのが山とするなら、福島県についてはどうしようかと考えていました。福島県を扱うにあたって悩んだのが、原発推進か反原発かを教える授業になってしまうのではないか、ということ。社会科の授業は「政治的に中立でなければならない」という点、教育を行うにあたってどうしても私自身が偏りを気にしていました。

そこで何人かの方に相談をしたのですが、やはり中立にこだわるよりもむしろ「誰の声に耳を傾けるかだと思うよ」というところだと思いました。確かにと授業の方向性が決まった瞬間でした。

困っている人たちの声に耳を傾けるのは対人援助学の基本だと思います。そこで、すぐに連絡をとって返信を待ちました。幸いに返事が届き授業に弁護士の方を対面でお呼びし、原告の方のうちの 1 人も、zoom で言葉を子どもたちに届けてくださいました。子ども達は訴訟において「命」「生活」に値段をつけざるをおえなかったことや原告の方の思いに触れて深く考えていました。さらに福島における原発事故の救済を巡って、福島内でも「復興」の妨げになるから声を上げるなという空気があることは子どもたちに大きな問いを投げかけました。すなわち、その他大勢の人たちのために少数の意見が犠牲にされても良いのかということです。

震災直後、当時政府の復興構想会議の委員で民俗学者の赤坂憲雄氏は「東北はまだ植民地だったのか」というように言いました。齋藤幸平氏の『人新世の資本論』に次のような言葉があります。「先進国の人々は単に「転嫁」に対する「無知」を強制されるだけではない。自らの生活をより豊かにしてくれる、帝国的生活様式を望ましいものとして積極的に内面化するようになっていくのである。人々は無知の状態を欲望するようになり、真実を直視することを恐れる。「知らない」から「知りたくない」に変わっていくのだ。」これは東京と福島という関係の中で、震災の結果起こってきたことと重なります。齋藤幸平はさらに次のように書いています。「資本はさまざまな手段を使って、今後も、否定的帰結を絶えず周辺部へと転嫁していくに違いない。その結果、周辺部は二重の負担に直面することになる。つまり生態学的帝国主義の掠奪に苦しんだ後に、さらに、転嫁がもたらす破壊的作用を不平等な形で押し付けられるのである。」この言葉の意味を今回の「3.11 子ども甲状腺がん訴訟」の原告の方々が現在置かれている立場、そして訴訟に踏み切って裁判所で決着を付けざるを得なかった背景に感じずにはいられませんでした。

社会科教育において、政治的な主張やイデオロギーとはまた違う次元に対人援助という視点はあると考えています。すなわち「命」の尊さなどの普遍のものは、イデオロギーの対立のさらに上にあるものです。今回の「3.11 子ども甲状腺がん」が問いかけるものは何か。「命」「生活」の尊さを真に尊いものとすることができているのかだと思います。「復興」を難しくしているものは何なのか？経済的「復興」だけが「復興」の形であるのか。これは答えのない問いで、ともすれば考えることを止めてしまいそうになる問いです。

この原告の方たちが困っていることについて、教育は何か直接的な援助をすることはできません。しかし授業実践で取り上げることによって、その問題を「東北と復興」の 20 名＋αの小さなコミュニティでも話題にあげて、舞台にあげることができました。私たちは彼ら・彼女らによってさらに学びを深

めることができたという点で「援助された」と言えるでしょうし、一方でもしも私達がそこに関心を持って目を向け、耳を傾けたことで原告の方々の思いが少しでも軽くなったのならば、それも「援助をした」と言えるのではないかなと思いました。もちろんこの話を聞いている時点では、私も生徒も「援助してあげよう」という気持ちはなく、教えてもらいたいという立場であるので、「援助された」という意味が大きいように思います。

3.おわりに

先日、とある民間教育団体で「東北と復興」に関する実践報告をさせていただきました。この実践は一般の「日本史」や「世界史」といったくくりの中の一場面の実践ではなく、自分で作ってきたがゆえの発表の難しさを感じました。自分自身でまだまだ未完成であることが分かっているのに、それを言語化できないもどかしさ。「やる」という行動が先に立っていたからこそ、「感情」が先に動いたからこそ、言語化が追い付いていないモヤモヤ。それらを指摘されて、なんとか自己満足で終わらないよう、そのように振り返る場を継続する重要性も感じました。

今後、この対人援助学マガジンを一つの継続する場に自分自身していきたいと考えています。

もしも読んでいただいて、コメントやアドバイス等ありましたら、以下のアドレスまで送っていただけますと幸いです。

よろしくお願いします。

内田一樹

lkiuchida28@gmail.com

《特別連載》

家族面接の実践から里親家族支援を考える

その 2 座談会ダイジェスト

大谷 多加志

早樫 一男

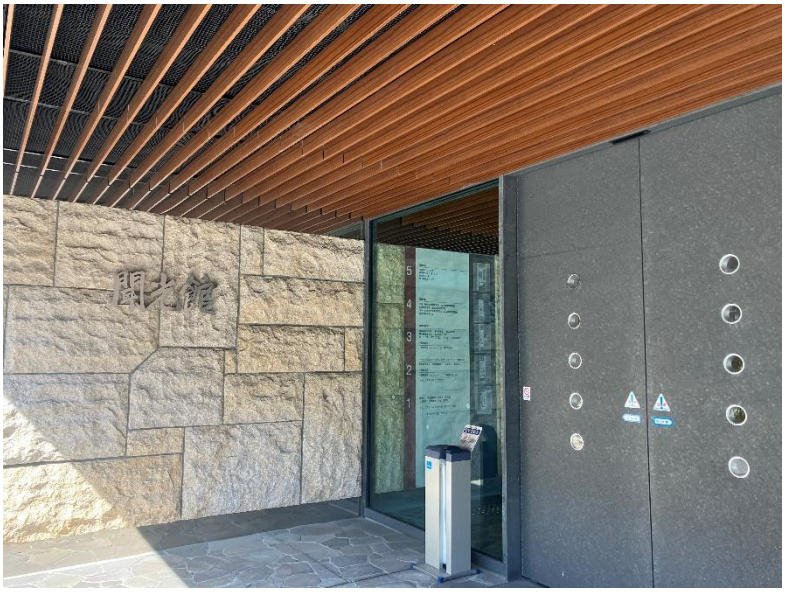
坂口 伊都

千葉 晃央

はじめに

前号からスタートした「家族面接の実践から里親家族支援を考える」ですが、この連載は昨年 9 月に行われた座談会をきっかけに始まりました。座談会の参加者はマガジン執筆者でもある、早樫さん、千葉さん、坂口さんで、いずれも社会的養護の現場との関わりがある、家族支援のスペシャリストであるお三方です。座談会の発起人は坂口さんですが、里親の現場に「家族理解」と「家族支援」の視点が必要であるという共通認識のもと、座談会が企画され、門外漢の立場から質問や進行を担う役割として大谷が同席することになりました。

参加した実感として、学ぶところが非常に多く、里親や社会的養護に関わる人だけでなく、これまでこの領域に関わりのなかった人にも広く知って頂きたいと思いました。今回は、このテーマへの導入として、里親制度を巡る現状を概観し、次に座談会の内容を要約して紹介します。



座談会会場
京都光華女子大学聞光館

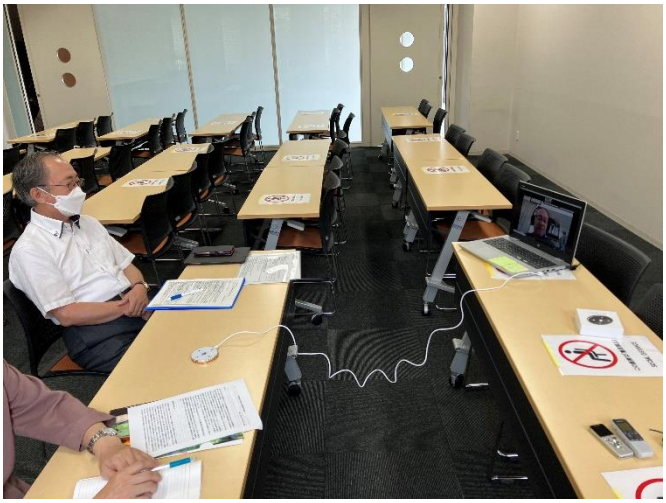
里親の今

本題に入る前に、まず里親をめぐる現状を確認しておきましょう。平成 28（2016）年の民法改正を受けて、平成 29 年に厚生労働省の専門部会から「新しい社会的養育ビジョン」が示されました。社会的養護には、児童養護施設や乳児院などにおける「施設養育」と、里親やファミリーホームにおける「家庭養育」がありますが、このビジョンの中では「家庭養育」の推進が強く打ち出されていました。

諸外国と比べて日本は施設養育の割合が高いという状況があるため、それを低減させたいという背景があったものと思われますが、平成 27（2015）年度末の里親委託率が 17.5%に留まっているにも関わらず、5－7 年以内に里親委託率 50－75%を目指すと謳われており（厚生労働省, 2017）、よく言えば「大胆かつ積極的な」目標設定、悪く言えばこれまで里親委託が進まなかった現状を踏まえていない「絵に描いた餅」のような目標設定と言えるかもしれません。

里親委託が推進される中、懸念されているのが「里親不調」の増加です。「里親不調」という表現もどうかと思いますが、具体的には里親と子どもの関係悪化によって、里親委託の解除に至ったケースのことを指し、2020 年度に里親委託解除になったケースのうち 18%（275 人）が里親不調による委託解除だったとされています（読売新聞デジタル 2022 年 2 月 24 日）。厚生労働省の HP によると、里親やファミリーホームで養育されている子どもは 2020 年度末で約 7700 名ですが、毎年数百人単位の里親不調が生じていることは、決して軽視はできないでしょう。実際、2021 年には全国里親会が厚生労働省に対して、里親不調が生じないように対策の強化を求める要望書を提出しています。

しかしながら、そのためには里親をどのように支援したらよいのでしょうか。現状で十分な知見や方向性が示されているとは言えないように思います。里親という実践自体がまだ少数ということもありますし、フォスタリングや里親支援という考え方もまだ日が浅く、蓄積が少ないのかもしれません。「里親家族支援に、家族理解と家族支援の視点を」というこの企画の趣旨は、この部分に光を当てられる可能性を秘めているように思います。ここからは座談会の内容について順に紹介します。



【座談会】

話者紹介

早樫一男：児童養護施設/乳児院「京都大和の家」統括施設長。京都府の児童相談所等で長年心理職として勤務し、同志社大学心理学科教授を経て、2014 年より現職。対人援助学マガジンでは「家族造形法の深度」「日本のジェノグラム」を連載。

坂口伊都：家族関係支援・相談支援 憩都（いと）主宰。大学教員、NPO 法人チャイルド・リソース・センター、スクールソーシャルワーカー等の経験を持ち、現在はフリーランスとして家族支援や専門職養成に関わる。対人援助学マガジンでは、自身の里親体験をもとにした「養育里親　―もうひとつの家族―」などを連載。

千葉晃央：京都光華女子大学健康科学部医療福祉学科社会福祉専攻講師。1999 年から京都国際社会福祉センター※1 で家族療法を学び実践。 同時に障害福祉領域の現場で長年の実践を行う。2020 年から 2021 年に里親支援に携わり、立命館大学が行うフォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座の運営にも関わる。

家庭に子どもを迎えるということ

大谷：今回は坂口さんの持ち込み企画ということですので、まず、坂口さんから企画趣旨をお願いします。

坂口：養育里親を始めることは、「家族の中に子どもが入ること」で、それは思っていた以上に難しかったです。いったん家族全体のバランスが崩れて、里子を含めて**家族のバランスを作り直していく**ことになりました。里子が思春期になった時期に、家を飛び出してしまうというようなことが増えて、この家庭だけで里子を守ることができないと感じ、離れることになりました。「ずっと一緒に暮らし続ける方法はなかったのか」、「たとえ離れるにしても里子の負担を少なくするような方法はなかったのか」という思いは、やはり残っています。これまで家族面接や親子関係支援に関わってきて、さらに最近になって本当に短い期間ですけど児童養護施設職員をさせてもらった中で見えてきたものがあったので、「里親家族支援」について具体的な提案をしたくて、どう思いますかと早樫さんと千葉さんに投げたというのが始まりです。

大谷：なるほど。早樫さん、千葉さんから、それぞれ思われたことを話して頂けたらと思いますが、どうでしょう。

早樫：里親家庭、あるいは家族の成長をどう考えるかという発想が対談の前提にあります。

乳児期の里子を受け入れる場合を除外して、坂口さんの経験のように、ある一定程度の年齢に達した子どもを里親家庭で受けて、そこに既に子育て中の実子がいるという場合、受け入れた里親家庭の家族構造がどんな風に、いかに変化していくか、そこにどんな困難があるかということを誰も言ってこなかったし、触れてこなかったということを改めて思いました。

これは離婚、再婚によって、義理の関係が生じる家族とも違う。坂口さんが言った「家族のバランスが崩れる」というのは、中途養育の里親家庭をケアしていくためには、とっても大事な視点だなとまず思いました。

それから、もう一つは「家族のバランスが崩れた」という視点自体を、里親支援の人たちは持っているのだろうか、ということも思いました。

大谷：ここまでのお話を踏まえて、千葉さんからもお願いします。

千葉：私は里親支援に 1 年関わり、それから立命館大学が行うフォスタリング・ソーシャルワークの講座※2 に関わって今が 3 年目です。里親を支援している人たちは、**家族システム**とか**家族の構造理論**※3 のような学びはしてきていない人が多いと感じています。

とにかく、業務が大変なんですよね。里親家族のことを扱って、里子のことを扱って、実家族のことを扱って、それぞれの家族のきょうだいや祖父母も扱って…。それ以外にも、法律的な手続きも考える必要があって、業務の中でこれほどまで広い役割が求められる援助職もあまりいないかなと感じます。一方で、大きな武器となる家族システムの視点は持たずに向かっている方も多くいます。

その時は『夫婦で話されたらどうですか？』と一瞬支援者が離れて、何を話すかきいてみたらいいなぁとか、おじいちゃんおばあちゃんとは距離を置いて（境界を引いて）…というようにするといいかもなぁと思うこともあります。

支援がうまくいっているケースでは、家族の構造理論の視点でみるとうまくいっている理由が納得できることもあるんです。親世代と子世代の境界は引いて、里親さんが実の親に対して、同じ親世代として広いサブシステムみたいなものを作っていることもあります。里親さんが実親さんのところに里子と一緒に行くとかもききます。同じ立場の経験がある親同士としてサポートできているケースもある。そういうことが見えてくるのは構造理論のおかげですし、役に立つと思っています。少し意識するだけでもだいぶ変わるんじゃないかなぁ。

大谷：皆さんの話を聞いていると里親支援の中に「家族システム」や「家族の構造」の視点を持って取り組むということは現状では少なくて、構造理論の観点からみてうまく対応しているケースでも意識的にそうしているわけではないので、知見の蓄積にはつながらなくて…という状況なのかなと思いました。

家族に新しいメンバーを受け入れるというのは、家族の構造をもう一度作り直すことなのかなと思いました。マガジン編集長の団先生が、結婚は異文化交流だとおっ

しゃっていたことが思い浮かびました。異なる文化を持つ人が出会って、新しい二人でのやり方や文化を作っていくような再構築の過程だと言われていたのを、話を聞きながら思い出しました。それが上手くいかなくて離婚する家庭もあるわけだから、それが大変なことだということがよくわかりますね。

家族の再構築が里親家庭に与える影響

早樫：子育てを既に経験した里親さんの場合、「子育ての器」が決まっていると思う。器が決まっているから、中途養育の場合は、その器に里子が適応することを求めることになる。実子の子育てが終わった里親家庭に里子への対応の変化を求めるのは難しいかもしれない。施設では子どもたちの行動を通して自分たちの関わりを振り返ることもあるし、支援職として専門性を求められるから、対応の変化につながることもある。

坂口さんの場合、里子の言動によって、子育て中の器がとっても揺れて大変だったという側面があると思う。

施設なら施設、家庭なら家庭のルールがある。児童養護施設でも生活を継続することが難しくて、結果的に子どもが他の施設に変わっていくこともある。施設職員にとっても後悔とか、振り返りとか、傷つきを伴うものになる。支援の継続が難しくなった場合、同じような心情が里親家庭でもあるのではないかと思っている。だからこそ、中途養育の支援をどうやっていくかということに私自身が惹きつけられたところがあります。

坂口：最初、長男が珍しく頑張ったんですね。お兄ちゃんなりに。でもそこに里子がうまく乗れないというか、甘えられない、仲良しの感じが出せない、となった時にたぶん長男は傷ついたのだと思います。傷ついて、里子から離れていったという感触がありました。本人に聞いたら「そんなの覚えてないわ」と言われそうですが、側で見て感じていた。

娘の方は、本当に家族の界面活性剤のようでした。家族を調整する役割、**里子にも里親にも救世主的な役割**を担っていた。周りの大人達も里親に聞くよりも聞きやすいから、娘に「里子さん、どう？」と質問され、娘はしんどかった。その場では元気そうにしていたのですけど、何年か後に里姉の立場で話してみるという機会をいただいて、外で打ち合わせをした時にボロボロと泣き出して、しんどかったのだなということが後からわかりました。

千葉：いわゆる「里親不調」という状況は、里親さんは本当に傷つきます。どんな**大ベテランの里親さんでも「傷つく」と**いう言葉で語っていたり、しばらく何もできない時期があったと聞いたりもします。「傷つきとか落ち込み」と「何もできない時期がある」みたいな話は里親さんにはセットになっていると感じています。必要な支えがない

からそういうことになるのかなと。そこに家族に関する知識とか、サポート、繋がりができて、“里親やっても大丈夫かな”と思う人が増えることにつながっていったらいいと思っています。

早樫：今、千葉さんが言っていたように、その部分の支援が必要という発想も弱いのではないかと思った。里親さんが、何らかの事情で里子の養育ができなくなった時、実は里親さんもとっても傷ついたり、落ち込んだりしている。そこへのケアが必要だという発想がないのではないかと思った。どうですか？

坂口：それこそ「次（の里子さん）どうですか？」とは尋ねられましたけど、ケアと言われるとピンとこないですね。

千葉：里親の普及を推進するという方針があるので、デメリットな要素はあまり取り上げられていないように思います。社会的な意義！やりがいがある！とか良い部分は良く取り上げられます。バランスの悪い情報提供のように思います。

家族の発達段階と親のエンパワメント

大谷：さっき早樫さんがおっしゃった「家族の発達段階」という発想が全然なかったので、そういう考え方があるのかと思いました。その辺りの「家族の発達段階」の話や、一定程度の年齢になっていて、既に自分なりの文化を持っている子を受け入れる難しさとは何なのかなど、少し整理していただけるとありがたいです。

坂口：まず里子は、**子どもが一人ポツンと入ってくる**というのがある。再婚家庭なら親子で入ることになるわけですが、里子の場合はひとりで、集団の中に入ってくるわけですよね。そこがさっきのお話の異文化交流、お互いに異文化っていうところがある。

　それに里親は、里子の小さい頃のかわいい時期を知らない。里子が思春期に入って、何やかんや言っても、「あの頃はかわいかったわ」と振り返れるものがない。里子は、ブラックボックスみたいなのもので、よりどころを探すのが難しい。

早樫：中途養育で里子を預かった場合、小さい頃の思い出がないという話が、とても新鮮で大事なポイントと思って聞いていた。「生意気なこと言っているけど、小さい頃こうやったやん」ということが、親のパワーになるのだなと思った。今の大変さが、マシになる。

ちょっと話がそれるかもしれないけど、家族面接では次回の相談までの間に「宿題」を出すことがあります。「ちょっとこういうことやってみませんか」とか、「こんなこと意識してくださいね」、「こんなことやってきてください」というような提案です。宿題を出す意図って、親をエンパワメントする、親を勇気づける種をまいていることになるのかなと思った。中途養育の場合、預かるまでの思い出や体験を共有したり、振り返ることができない、その種を見つけにくいから、それは大変だなと思った。

坂口：何が辛かったのかなとずっと思っていたんですけど、「次のこれしてみよう」というようなことがないのが辛かった。支援者の人も来てはくれる。「大変ですね」、「大丈

夫ですよ」とか言ってくれても、今の生活は何も変わらない。明日から私はどうしたらいい？というところだった。「次回までに、こういうことをしてみませんか」というような投げかけは、その家族の新たな一歩になる。そういうことが欲しかった。もちろん、やってみてどうなるかはわからないけど、何かを試してみたり、未来に向けて話そうよというようなことがなくて、辛さがどんどん膨らんでいったのかな。

ジェノグラムを利用した里親家族理解

早樫：ジェノグラムを使って、このジェノグラムからどんなことを思いついたり、発想したりするのだろうかとディスカッションすることがある。中途養育を考えるとか、里親支援を考えるという視点からも、ジェノグラムを使って考えてみるという方法があるなと思った。

千葉：そうですね。教材というか、残っていく形になると、気づいていくきっかけになりますよね。早樫さんが最初に言ってくれた「**里親家族の成長モデル**」の提示というか、そこを追求していく価値はすごくあるような気がして聞いていました。

大谷：「里親家族の成長モデル」を理解した上で、里親支援をしていけるようにするという感じですかね。

千葉：そうですね、それがないとケースバイケースですよねみたいになる。それは少し乱暴ではないかと。ライフステージごとによく起こる課題になることがある。この時期にはこういうことに向き合うことがあるとか、時期ごとにあると思うので、それをまとめるだけでも十分役に立つのではないか。

支援の土台作りとしての「家族面接」

大谷：最初の話題に戻りますが、今回の企画の出発点である坂口さんからの提案について教えてください。

坂口：支援者にも里親自身にも、家族の構造理論や家族システムを意識してもらうことが必要だと思う。その一つの取り組みとして「里親認定前研修」※4があるので、そこで自分たちの家族を家族システムで見る、まだ見ぬ里子を家族の中に迎え入れたらどんな風になるかイメージしてもらうような取り組みが有効ではないかと思う。

　里親家庭の中で問題が起きてから支援者が来るのではなく、最初から家族システムをイメージする土台を作っていく。その上で、マッチングの段階から、里子に焦点をあてて、子どもがどのような生い立ちか、どういう遍歴を経て目の前にいるのか一緒に考えていく。また、家族は別々の人間なので、里父と里母とであっても同じことを考えているという風にはならない。そこで第三者が介入することで、それぞれの思いを話し合える土壌を作っていく。これが、何かトラブルが起きた時に話し合いができる基盤になる。第三者が介入しての話し合いの場というのは、家族面接をイメージしている。これがザクっとした概要になります。

早樫：里親自身の育った家族（＝原家族）を話題にすることが、とっても大事と思う。里親登録申請の時点で、児童相談所が調査をする時にどれぐらい踏み込んで聞いている？

坂口：原家族については、聞かれるのは聞かれます。そこまで踏み込んで聞いていない印象です。調査の内容がいっぱいあるので、それをこなすだけでも時間がかかっていました。

アセスメント（査定）ではなく、理解と支援へ

千葉：書類がたくさんありますよね。

坂口：書類を作成していくという感じだった。どちらかというと、実子に親の印象を聞く方が丁寧だったかな。子どもに「お母さんってどんな人？」とか聞いている。それもすごく時間が長いわけではないけど、そちらの方が関心はあるのかなとは思った。後は物理的な部屋確保とかで、原家族は書類上に書かれている内容ぐらい。

早樫：申請時に里親の原家族のことを聞いていても、調査項目として聞いているのか、家族理解という視点を持って掘り下げて深入りするかどうかは、ワーカーによる。「登録前研修」など認定前の作業の段階で、夫婦が互いの原家族についてどれぐらい理解をしていたり、それを踏まえて子育てにどんな風にプラスマイナスの影響やつながりがあるのかというところまで想定して考えたりする姿勢があれば、調査ではなくてむしろ里親さんに対する理解と支援の入り口と感じていました。

　そのことを里親認定前に対応できるということでも家族の視点が必要。だけど、それがまだ普及してないということだなぁ。

千葉：もったいないです。原家族のことを掘り下げることに価値があると理解してもらえるか不安もあります。

大谷：里親研修の段階で里親家族の原家族を考えるというようなことを聞くと、それきっかけで「私無理かも」という人もいたりするのでしょうか。だとすると、里親を広めたい立場からすると「それは困る」という気持ちがあったりもするのかなと思ったりします。一方で、里親家族の立場からすると、調査の時に原家族のことを聞かれると、応え方によって「あなたには任せられません」と言われるのではないかと思って、サポートするために聞いてもらっているというのではなくて査定されているというような心情で「不合格出されないようにしなきゃ」というそっちの気持ちが働くのかなということを思いました。現状はどうなんでしょう。

千葉：そういうところまで手が届いていないのかもしれません。起こったことを早く収めるとか、書類を揃えるとか、何か起こったことに対応することで精一杯のような印象があります。

坂口：そうですね、査定されるのではないかという感覚が先に出てきます。支援者にその意図がなくても、そう感じてしまいます。支援よりも先に評価されるのではないかという恐怖は、あります。

　それこそ「子ども取られちゃうかも」と思ったら、しんどくても「うまくやっています」と言ってしまい、面接が終わってしまうというのはよく聞く話です。全ての所ではないですが、里親サロンも、児童相談所の人がいなくなってからが本当の始まりというようなことも聞きます。

大谷：決定権はもちろん行政側にあるから…。

坂口：そうですね、里子が委託されるかどうか児相の判断一つだし。さっきも話が出ていたけれど、援助者が書類作りに追われると声をかけにくくなるし、何か起こらないと対応しないことになると、査定されている感覚が起こるし、私自身がモヤモヤしていたのはそういうところかなと。なので、家族の方が強くなれば、ちょっと変わるんではないかということはすごく思っていて、自分たちで家族の絡まったものをある程度ほぐせるようになる。そして、やっぱりほぐせないよねってなった時には、トラブルが起きる前から関係ができている支援者であれば、話しかけやすいと思う。

里親家庭を中心とした支援の輪を形成するために

坂口：里子と里親の相性というのもあるけれど、そういうことも含めてどうやっていこうかというのが家族だから、先ほどの「子育ての器」の話とか、里子のブラックボックスで見えない部分、里子をかわいいと思えるところをどうみつけるかという方が大事かなと思う。

　私も学校の先生も「この子素直じゃないよね」、「こういう時、こうするよね」と言いながら、それでも先生が「ここでもこういうことするから、お母さん大変だよね」って言ってくれている時は、すごく頑張れました。でも、学校の先生と家庭の意見が全く合わなくなってしまった時に、結局その真ん中にいる里子の行動がおかしくなっていった。関わっている大人が足並み揃えて里子に関わっていけるとよいけれど、家ではダメと言われ学校では OK という状況になると里子が揺れて、どんどん試し行動みたいなものが出てくる。**周りとの調和や歩調が合わないこと**が、私はとてもしんどかった。

早樫：学校を含めて対応にズレが生じた時に、そこの調整ってどうしていたのかな。そこに児童相談所や里親支援センターが入るという感じ？

坂口：児童相談所が入っていました。ただ、それもスピーディにはできないので、時間が経つにつれ問題は増える。里子は楽な方に逃げていく感じになった。

千葉；本当に登場人物が多いですよね。家族だけでも多いのに、援助職である関係者を入れたら本当にたくさんになる。教科書的に言えば、里子や里親家庭を中心に同心円のように支援の輪が広がることがイメージされるかもしれません。でも里親支援はあちこちにいくつも同心円があるというイメージです。難しいですよね。

里親支援全体を考える時は、エコマップを含めないと扱えないと実感します。エコマップで整理してみると、支援に繋がっていない人が見つかることもある。例えば、里姉さんとか、里祖父母さんとか。ジェノグラムとエコマップを活用すると、そういう状況も明確になるかなぁ。

大谷：状況をもう少し俯瞰的に見るということが必要ということですね。

早樫：俯瞰的に見るって、その通りだなと思う。俯瞰的に見る時に、エコマップで支援者が共有できる。これはジェノグラムも同じで、まず状況を見える形にして、それぞれの支援者が共通認識を持つことが重要です。逆に、現状ではその共有ができていなくて、状況が俯瞰的に見えていない、つまりシステムとして見えていないのも大きな課題だと思う。

もう一つは、誰がトータルにコントロールというか、采配をするのかという問題もある。措置している児相になると言えばそうかもしれないけれど、先ほどから話に出ているように手続きの部分に手を取られて、十分に対応できていない状況もある。そういう面では、里親支援というけども、まだまだ曖昧な部分があるということも言えるのかな。

大谷：なるほど。ここまでのお話で、里親家族支援の課題や可能性について、とても理解が深まりました。貴重な機会を頂き、ありがとうございました。次回からは、今回の内容を受けて、①ジェノグラムから見た里親家族の理解、②求められる支援について、より詳細に教えて頂きたいです。引き続きよろしくお願いします。

【注釈】

※1 京都国際社会福祉センターは社会福祉法人京都国際社会福祉協力会を母体とし、1983年から対人援助職の現任者向けの研修会を多数行っており、ジョン・D・シメオン氏による家族療法の研修もそのひとつであった。対人援助学マガジン編集長の団士郎氏や、本連載の登壇者早樫一男氏も講座を受講し、現在は両氏が家族療法に関する講座を引き継いでいる。また、家族面接による相談も受け付けており、千葉晃央氏、坂口伊都氏も相談員として関わっている。

※2 立命館大学（人間科学研究所社会的養育プロジェクト）が日本財団の助成を受け、社会福祉、家族療法、心理臨床、社会病理などを統合した関連領域の知識と国内外の先進的な理念や実践を学び、人間理解力を身につけた思慮深く行動力のあるフォスタリングソーシャルワーカーを養成することを目的としている。日本初のフォスタリング・ソー

シャルワーク専門職講座で、対面とオンライン、オンデマンド学習に加え、様々な「当事者」も登壇します。フォローアップ講座ではジェノグラム、エコマップを用いた事例検討を里親支援の現場の方々と重ねています。オーストラリアへのスタディツアーもあり、長年フォスタリング・ソーシャルワークを実践している現地で多くの学びを得ている。

※3 家族のあり方について、「パワー」「境界」「サブシステム」などの概念を用いて整理・理解する考え方。ジェノグラム等と併せて、家族理解や家族支援にとても有用なツールである。次号以降で、実際のジェノグラムも用いながら活用の実際について述べる。

※4 里親認定前研修は、4日間行われ、座学が2日間、実習が2日間の日程で行われる。研修は、夫婦揃って受講する必要がある。その他、基礎研修がある。基礎研修は座学1日、実習1日程度と定められている。

【引用】

厚生労働省 （2017） 新しい社会的養育ビジョン https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000173888.pdf（2022 年 12 月 30 日閲覧）

◆第 5 回執筆者トークライブのご案内◆

対人援助学マガジン執筆者トークライブ（オンライン）を下記の要領にて開催いたします。執筆者トークライブは、執筆者と読者が顔を合わせる機会を作るとともに、執筆者の連載テーマについて書ききれない思いや余白について思い切りお話頂く機会を作れたらとの思いで企画しました。フロアとの意見交換も行いながら、“ライブ”での展開と交流を楽しみ、互いに学びを深める機会になればと思っています。

第 5 回執筆者トークライブの話者は鶴谷主一さんです。鶴谷さんはマガジン創刊からの執筆者で、「幼稚園の現場から」と題して、園長を務める原町幼稚園での活動や子どもたち・先生方とのやりとりなど、まさに幼稚園のリアルを伝える連載となっています。園内の写真や、園で配布しているプリントなど、ビジュアルな情報が多いことも特徴で、最近の連載ではついに動画まで埋め込まれており、ますます進化を遂げておられます。

最近、保育園における子どもへの虐待や園バスでの置き去りの問題など、保育や幼児教育における事件・事故が立て続けに報道されました。原因や背景について把握することももちろん重要ですが、一方で子どもたちが生きる力を育む場、それを支える場としての保育園や幼稚園に、もっと光をあてる必要があるのではないかとも感じます。安全・安心はもちろん重要ですが、それが単なるリスク回避にならないよう、子どもたちの中に本来的な意味での自主性や主体性を育むために私たち大人にできることとは何なのか、鶴谷さんのお話から一緒に考えていきたいと思っています。

皆様のご参加をお待ちしております。

期日：2023 年 5 月 25 日（木） 21 時から 23 時
場所：オンライン（参加申し込みをされた方に Zoom の情報をお送りします）
定員：50 名程度（先着順）

話者：鶴谷主一氏 連載「幼稚園の現場から」

申込方法：
お申込みは takashi_otani7929@yahoo.co.jp 宛に必要事項（お名前・ご所属・メールアドレス）を記入して送信してください。開催期日が近づきましたら、Zoom ミーティングに参加するために必要な情報をお知らせ致します。

編集部：大谷多加志

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

ずっと編集を担当していると、そのスケジュールに、時々の出来事が重なってくる。今回は発行直前の 3/10～12、オアフ島ホノルル・フェスティバルで、東北被災地で 10 年以上継続中の家族応援プロジェクトマンガ展を実施することになった。

そのため編集大詰め期にハワイにいることになった。ネット環境さえあれば、どこだろうと問題はないので大丈夫と思っているが、こういう一寸した変更がストレスになる。

空港でグローバル wifi のルーター？を借りて持参して、今、ワイキキビーチに近いホテルで、執筆者とページ入力についてやり取りしている。わざわざそんなことしなくてもいいようなものだが、ちょっとはしゃいでいるのだ。

まぁこんなこともきっかけに、少しずつ世代交代してゆけば良いとは思うが、まだしばらくは何とかやっていくのだろう。

＊＊

今号もまた、新規連載者が登場。実に順調に膨張を続けている。先日、仕事場に来訪した連載者の一人K君が、一冊だけプリントアウト・製本したマガジンを見て、「ごっついなぁー」と嘆息していた。A4 版300ページ超えの雑誌なんて、印刷したらとんでもない分厚さ。気になる記事だけお読みください。そしてマガジンのこと、誰かにも教えてあげてください。

＊＊

誰が読むのか知らないけど、今回の編集後記。まるで私のファンクラブ通信みたいになっている。二人の編集者は編集長が好きだなぁ・・・なんて届いたものを読んで笑ってしまった。でも、この顔ぶれで年 4 回の編集会議、だべりながら coco 壱のカレーを食べるのがそれは楽しい。

編集員（チバ　アキオ）

仕事に行く。ある程度めどをつけて、研修のための打ち合わせへ。いつもはオンラインか、自分の職場に来ていただくことがほとんど。この時期、少し外に出た方がいいかもしれないと、打ち合わせを先方の職場にしてもらった。…と言ってもそこは同じ京都市内。阪急電車と京阪電車を乗り継いで到着。はやめについたので、近くで昼食をして先方の職場へ。そこは京都市の深草。学生時代、友人が住んでいてよくウロウロした。自分が担当している学生も住んでいるし、数年前も龍谷大学の見学に息子ときた。そして 51 号短信の内容に続いて、また伏見である。今日、打ち合わせをしたケアマネさんは千葉の以前の勤務先横大路学園で、お世話になったプラントスタッフの方の娘さんだという。知らなかったし、先方もそれで私を知ったわけではなく、全くの偶然である。そして打ち合わせも終わり。今晩は対人援助学マガジンの編集会議。職場に戻っても 1 時間程度しかない。はやめに編集会議の会場近くに行って、あれこれ仕事をしよう。そして、最近よく行く上島珈琲へ。ウインナーコーヒーホットを頼み、席を探す。電源付きのいい席が空いている。ここにしよう。座ると向かいの席とは擦りガラス的なプラ衝立で仕切られてお互いに向かい合わせているが、顔は見えない。迎えの方も何やらプリントアウトをしたものと確認しながらパソコンの作業をしている。頼んだものを見るとウインナーコーヒーのホットのようだ。私と同じ？！少し衝立からはみ出ている姿を確認すると団士郎編集長だった！

こういう確率はどのくらいあるだろうか。まず、私が車を辞めたのが大きい。行動が公共の交通機関ベースになる。また、偶然この店を選んだ。ドトールに行って辞めて、スマート珈琲に行って辞めて、ここである。以前、車なしの生活をしている大先輩団編集長にきいたことがある。車以外の公共の交通機関を使っていると「こんなところでこんな人と出会うか？！」ということが起こると。「その偶然も面白いよ」と教えてもらった。確かにこういうことが起こる。そういえば、前日に訪れた本屋では知り合い二人に出会った。そのうちの一人は、数日前にその人のライブ配信を観ていた人である。こうした移動も公共の交通機関である。偶然という出来事は、それぞれにとっては日常の一コマが重なることであるが、それが一気に非日常になる。そして関係性にも作用する。

「車なし」という千葉の人生への編集作用は大きい。あんなにクルマ好きだったのに！20 年以上の知り合いからはそう言われた。1 年たって、平均歩数は増加し、健康診断の結果は数値が軒並み標準に戻った。何より歩くことが苦ではなくなった。こないだは電子レンジを載せるようなコマつきのキッチンワゴンをカップルで市バスに乗って運んでいる異国の方に出会った。ハートが強い！私も強くいきたい。けれども先日は気に入った椅子を買って、タクシーで帰った。それでも負担は知れている。何とかなるものである。ちょうどこの号が出る頃で、車なし実験が 1 年経過。車有の前年の 1 年の 1 日平均歩数は 4144 歩。車なしの 1 年は 1 日平均 6001 歩。暑い時期は歩数が落ち込み、体調崩して寝込むと落ち込み、それでも冬場は結構歩くことができることが分かった。

先日、海外に行くこともありクレジットカードでの買い物の環境も再度整えた。新幹線などの国内移動のためにICカードも

デビューした（失敗はあるが）。ついでに嵐電カードも。今まで現金生活だったので管理するモノが増えると、なくす可能性も必然的に高まる。それでもチャレンジしないと自分の変化はない。日常に飽きさせない自己編集能力も必要だろう。なんとかペイは未経験。メルカリは経験した…こうして自分の人生の編集は死ぬまで続く。マガジンの原稿はもちろん、短信からも見えてくる、マガジン執筆陣の方々の人生編集こぼれ話もいつも学びにつながっている。…編集長は作業に区切りをつけて颯爽に退店した。素早い！後で聞いたら、ウインナーコーヒーではなく黒糖入りミルク珈琲だったそう。こうして編集は後からでもできる。それが運命論からの解放とやっぱり豊かな可能性を秘めていることになるのではないか。

編集員(オオタニ　タカシ)

失敗や不正があっても誰も責任を取らずにツケを後回しにしていく。この姿を何度も見せていることが次世代の意思をいかにくじいてきたかを痛感するし、自分自身もこの社会を作ってきた一員であるから、この責任は他人事ではない。では、何をするべきか、と考えると、身近なところから自分にできるバックアップや応援をしていくことからと思う。そして、それは過去に私自身が大先輩の方々からしてもらったことであり、次の世代につなぐ責任があることであるとも気づかされた。

今号の編集よりひと月ほど前に、団編集長の「家族の練習問題9」の発刊を記念して行われた対談を視聴した。1 冊の本について著者と校正者のやりとりを目の当たりにするという稀な機会で、校正も対人援助も“何も起こらない”ことが最上の結果であるという団先生のコメントに感じ入るとともに、校正についての指摘に本気で悔しがる牟田さんの姿から、プロの仕事の何たるかを改めて考えさせられた。そんなこともあって、今号の目次編集はいつもよりチェック回数を増やし、確認事項も念入りになる自分が、少しわかりやすい過ぎて笑ってしまった。

対人援助学マガジン

通巻52号

第13巻　第4号

２０２３年３月１５日発行

http://humanservices.jp/

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第53号は2023年6月15日
発刊の予定です。
原稿締切2023年5月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。　現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021
大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

表紙の言葉

ヒトコマ漫画を描いていた頃、映画「タイタニック」が製作、大ヒットするずっと前から、タイタニック号遭難事故に関心があった。

大昔に製作された「タイタニック号」関連の映像も見ていた。「タイタニックを引き上げろ！」という大判の写真本も好きだった。

このイラストは大きなパネルマンガ作品の一部で、この背景には傾くタイタニック号が描かれている。やっと脱出できたと思った矢先、救命ボートに穴が空いていて浸水沈没の危機というだけの他愛ないものだ。

国際航路の大型船にはずいぶん昔一度だけ、ヘルシンキからストックホルムまで一晩乗ったことがある。

バルト海を航行するバイキングラインの大型フェリーはホテルのようで、船窓から見た夜明けの静かな海にはワクワクした。

団士郎　(2023/3/15)